
Moon at Tomb **【第三章鋭意製作中】**

膳条 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Moon at Tomb【第三章鋭意製作中】

【Nコード】

N9840A

【作者名】

臙条 司

【あらすじ】

魔法と科学の両立・共存する世界『スコリオン』。そのとある港町で、少年と少女は運命の出会いを果たす。彼らは互いが互いの内に己の希望を見出し、そして共に歩き始める。その先に待ち受ける”運命”とは……？（本作品は、一話あたりの文字数が多いです。携帯の方はご注意ください、ならびに、ご容赦下さいますよう、よろしくお願い致します。またPC閲覧の方で、何らかの興味を持って下さったなら、ネット小説ランキングへの投票をして貰えると嬉しいですよ。投票はTOP、目次ページ下から）

序章（前書き）

皆様を驚かせられるようなものが描ければ良いな、と思っています。ありきたりな設定かもしれませんが、もしよろしければ、お付き合ってください。

序章

これは古い古い言い伝え。

書き記されることはなく、人々の口承くわうじゆだけで語り継がれてきた、昔々の物語

昔々、あるところに一人の魔法使いがいました。

全ての魔法を極めた彼は、自分の魔法を皆のために役立てようと考えました。

渇きに苦しむ村に雨を呼んだり、魔物に怯える町を護ったり……それはとても険しく、厳しい道のり。それでも彼は、人々の笑顔のためにと、決して諦めませんでした。

そんな彼にも、彼の努力を心から認め、支えてくれる女性が現れました。

彼は、その女性と共に暮らすようになります。とてもとても、幸せな日々を。

しかし、それは訪れました。

突然の病で、彼女は命を落としてしまったのです。

彼は自分の無力さを痛感します。

どんな魔法をもつてしても、どうしても“それ”を払うことができなかつたのです。

全てを極めたはずの彼の魔法でも、どうしてもできないこと。

それは“あること”から、幸せを取り戻すこと。

あることとは、“死”。

死んでしまった彼女を、生き返らせようとしたのです。

でも、どんなに望んでも、それは不可能でした。

彼は絶望します。

所詮は人の力。神の定めし運命には逆らえないのか、と……

だから彼は、自分の全てを賭けて生み出したのです。

決して死することなく、命を永らえる不老不死の術 『永遠の秘法』を。

運命を、神を嘲笑うために

魔法 呪文などを用いて超自然的な力に強制的に働きかけ、代

償 大抵の場合は生命力 を払うことで、自身の願望の具現化など、世界法則を無視した行為も可能となる技術。

科学 自然に属する諸対象を扱い、その法則性を明らかにし、機械装置などを用いることでそれに働きかける技術。

それら魔法と科学が共存する世界、 『スコリオン』

『永遠の秘法』 伝説が人々の記憶から薄れ、ただのおとぎ話となりつつある時代。

この世界は近年、科学によって生み出された機械装置を魔力によって制御するという、独自の文明を築き上げていた。

科学は基本的に物理法則に従う必要があるが万人に扱いやすく、完成された機械装置さえあれば特に優れた技術を必要としない便利なものである。

一方、魔法は高い知識と技術を要するが、様々な“在り得ないこと”を起こすことができる。

物理法則や因果関係いんがくけんけいを無視することも不可能ではないが、その際にはより高い代償 場合によっては人としての生さえも失いかねない、という諸刃の剣でもあったため、自然法則に逆らうような使い方がされることはほとんど無かった。

また、どちらも“理論”に基づいて展開されるものであり、『高度に発達した科学は魔法と見分けがつかない』と言われるように、魔法と科学というものは相反するものではない。

つまり、“科学”と“魔法”には明確な境界が存在しないのである。

それ故に、双方の利点を掛け合わせた、欠点を補い合う文化が創られ、人々の生活を豊かにしてきたのである。

そんなある日、一人の魔導師が伝説の“永遠の秘法”を手にするという、世界中を震撼しんかんさせる事件が起きた。

これにより伝説はただの伝説ではなく、現実に実現可能なものだという事実が明らかにされたのである。

そしていつしか伝説は、それらを極めた者たちの求める“理想の姿”となった。

己の持つ、ありとあらゆる手段をもって、不老不死の身体を得る。人間の飽くなき探求と果てない欲求の、究極にして最後の形として。

“永遠の秘法”を手にしたものは、幻想の象徴たる“月”の覇者、“サームーン(Sir・Moon)”と呼ばれる……

「んっ…… はあ、着いたあ!!」
少女は船を降りると、空も掴めそうなくらいの大きな伸びを一つした。

久しぶりの地面の感触を確かめるように、コンコンと靴底を鳴らす。

「嬢ちゃん、お疲れさん!」

「あ、船長さん」

黒い丈長のワンピースに黒い帽子を被り、古い櫂の杖と、細い体躯には不釣り合いなほどの巨大な鞆を持った少女は、可愛い仕事でペコリとお辞儀をする。首から下げた指輪のペンダントが明るい日差しに小さく応えていた。

「色々とお世話になりました」

「何、良いつてことよ。これが仕事だしな」

そう言つて船長はガハハ、と豪快に笑つた。いかにも“海の男”といった気風である。

「にしても若い身空で、しかもあんたみたいな美人さんが一人旅たあ、たいしたもんだな」

「まあ色々と苦労もありますけど…… 世界中を見て回れるのは、とつても楽しいです」

少女は潮風に長く美しい栗色の髪をなびかせて、真紅の瞳で本当に楽しそうに微笑んだ。

「それに、こう見えて武術の心得もありますし、魔法だって使えるんですよ?」

エイっ、と言いながら杖を構えてみせる。強そう、というよりはやっぱりどこか可愛い。

そんなあどけない少女を見て、船長も楽しそうに笑った。

「あなた、魔導師さんなのかい！」

「まだ見習いなんですけどね」

ぺろつと小さく舌を出し、ほんの少しだけ頬を赤らめる。くどいようだが、やっぱり可愛らしい。

「そうかい。なあ嬢ちゃん、これから酒場に繰り出して、酒でも飲まねえかい？ 俺に魔法のこと、色々教えてくれよ」

「あ、それってナンパじゃないですか？ でも私、遠慮させてもらいますね。教えられるほど、魔法に詳しくないし」

「なるほど、すっかりしてらあ！ つハハハ！」

「さて、と…… それじゃあ私、行きますね」

「おう、気いつけてな」

もう一度、ペコリとお辞儀をして少女は歩き始める。

その背中に向けて、屈強な海の男が思い出したように大声で問い掛けた。

「お、そうだ嬢ちゃん、名前教えてくれねえか？」

少女は聖母のような微笑で、綺麗で朗らかな音色で答えた。

「私の名前は、『アリアム』です」

「ようやく着いたか」

町の入り口である石門を通りながら、少年は呟いた。

黒に程近い臙脂色のジャケットに黒のズボンを纏い、上から白いコートを羽織っている。左肩にかけられた赤い布が、潮風にはためいていた。

肩ぐらいまでの青紫の髪の内にある灰色の瞳からは、感情という

ものは見えにくい。

表情も変化に乏しく、どこかやる気の抜けたような、そんな印象を受ける少年だった。

「前の町を出てから三日、山歩きばかりだったツスねえ」

肩の上に乗っていた白猫が少年の声で言った。

それを咎めて、少年が反対の肩から掛けた荷物の上にちょこんと座り込む黒猫が言う。

「セレス、もう町に入るのでですよ。無闇に声を出してはいけませんわ」

「っと、すまねツス」

「まったく、もう少し場をわきまえて」

「ディアナ、お前もだ」

感情を交えない声で、少年がその猫たちのやり取りを制する。

黒猫ディアナと、白猫セレスはただの猫ではない。優れた魔導師である少年によって魔力を与えられ、人の言葉を解して魔法さえも繰ることができる、“使い魔”だった。

「失礼しました。マスター」

ディアナは姿勢を変えず、首だけを曲げて詫びた。

マスターと呼ばれた少年は小さな溜め息をしつつも、ゆっくりと町の中心を目指して歩く。

海に近いせいか、潮の香りがまとわりついてくる。だがそれにも、別段なんとも思わないらしい。

山歩きばかりだったにも関わらず、港町なのだから当然だ、とばかりに少年は無感動にただ歩く。

その代わりか、セレスが今度は声無き声　互いの間でのみやり取りする魔法で言った。

(いや)、それにしても海はイイツスね。なにより魚が美味いし)
(何かと思えば、食物の話……　もう少しマシな話題はないんですの?)

ディアナが呆れたように返す。こちらはマスター似のようだが、

やや不平が多いか。

「二人とも、いい加減にしてくれ」

再び溜め息をつきながら、少年が二匹に言った。もうだいたいぶ町の中心に近づいている。

（はい）

（……）

ようやく大人しくなった使い魔たちに目配せし、今度は**勞つよう**（アノク）に少年が語りかける。

「とりあえず、食事にでもしようか」

（やりい！）

（よろしいんですの、マイマスター、『ナタス』？）

少しだけ口元を曲げて、ナタスと呼ばれた少年は言った。

「この魚は美味いらしいからな」

港町“ミチカス”

奇しくも時同じくして、少年と少女はこの町を訪れた。

だが、彼らはまだ知らない。

これが全ての始まり。決して逃れることのできない運命の胎動。その歯車が、静かに回り出していたことを

序章（後書き）

いかがでしたでしょうか？

気が向いたら、コメント等をいただけると幸いです。

第一章『旅立ち』 第一話

「フンフンフン」

鼻歌を歌いながら、全身を黒で包んだ少女　アリアムは足取りも軽く、町を歩く。

黒の中にくつきりと浮かぶ緋色の瞳が、太陽の光で煌めくルビーのように輝いていた。

空は透き通るような晴天。黒ずくめの格好では少し暑そうに見えるが、潮風のおかげでそれはあまり感じない。

むしろその風に靡く自慢の栗色の長髪が、頬をくすぐって少し鬱陶しいくらいだった。

この町、“ミチカス”は比較的大きな町である。

海上に浮かぶようにして作られた　イメージには巨大な防波堤の上に建物が建っている　この町は、気候的にも地理的にも優れており、長距離船舶の中継港として、同時に豊かな漁場を持つ漁港として発展してきた。

また、最近では隣町に列車も乗り入れるようになり、ここで積荷を降ろして陸上輸送に切り替える、という工業港としての一面も持つようになった。

とはいえ、それも最近のこと。工業港特有の無機質な感覚はまだ見受けられない。

町中には海水を通じた水路が設けられており、交通を便利にすると共に、万が一、町に浸水した際の排水用誘導路としての能力も有していた。

そしてそれ以上に、キラキラと光る水面や水の流れる音が、何とはなしに心を和ませてくれるのである。

この町にはのどかな雰囲気広がっていた。

アリアムは歩く　ただそれだけの行為でも、初めて訪れるこの町では胸が踊るような思いがしていた。

見たことのない景色が目を、新しい発見が心を楽しませてくれる。これこそが、他ならぬ“旅の醍醐味”^{だいごみ}というものである。

「さて、宿屋さんを探さない」と

港から町へ出てきたアリアムは、町の中心　時計台の前で立ち止まった。

この時計塔は正午になると美しい鐘の音で時刻を知らせ、夜には天辺^{てうべん}に明かりが灯されて灯台の役割も果たす、町のシンボルである。その塔下^{とつか}で、アリアムは周りをキョロキョロと見回す。宿屋らしきものは見当たらなかった。

「どこにあるんでしょう？」
そう言っただけは足もとの鞆^{かばん}に目をやった。

冗談かと思えるほどに大きなハードケースの鞆は下に車輪を備えているため、持ち運びにはそれほど苦労しない。

が、それでも、少しでも身軽になりたいと思っるのが人間の心情というものだ。

「うーん、困りましたねえ……」
少女は道の真ん中で腕を組み、首を傾けて唸^{うな}りだす。

その眉根^{まゆね}を寄せきった表情は、普段の整った顔つきからは想像もできないほど面白く崩れていた。
イモムシがチョウチョに変わるくらいのも、驚くべき変化だ。ここまで大きく表情が変わる人間というのも珍しいだろう。

周囲の人たちがその少女の方を見て、一斉にギョツとした顔になったのはそんなときである。

カラカラカラ。

「じゃあ、今度はあっちの方を……って、あれ!？」
唸る少女の顔を見て、ではない。鞆を見て、である。
彼女が腕組みをする際に手放した大きな鞆が、風にあおられて坂道を独りで下りだしたのだ。

ゴロゴロ。

「ああー！ 待つてくださいー!!」
そう言いながらアリアムも追いかけるが、荷物は無論、待つてくれるはずもない。

車輪と、レンガを並べ合わせたような造りの路面との間で、列車のように大きな音を立て、時折小さく跳ねながら鞆は走る。

アリアムはもともと足が速いわけではない。鞆の速度は、もはや彼女に追いつけるようなものではなかった。

鞆の進行を妨げる物も既に無く、加速を得て坂道を一気に駆け下っていく。そんな独走の延長線上に、人影が見えた。

アリアムは必死に追うが、間に合うはずもなく……

「危ない!!」

ドゴーン!!!

「どこか食事のできそうな所は……」

町の中心まで来たナタスは、適当に選んだ坂道を下っていた。下りつつ、両脇の建物を横目で流す。目的の店を示す看板は、まだ見つかっていない。

町の中心、時計塔の周囲は大きな広場になっており、そこから伸びる道には、飲食店が立ち並ぶ道や、服飾店がメインの通りなど、それぞれの目的に応じてまとめられた、合理的な造りとなっていた。

（こんなところには無いと思うツスが）

「う……」

ナタスの選んだ道には、一般の人には無関係であろう“武器屋”、魔法の使用権や魔力をもって扱う道具を売っている“魔法屋”、面倒な仕事や危険な仕事ばかりを高額報酬で引き受ける、荒くれ者が集まる“ハンターズギルド”など、そんな店ばかりが軒のきを連ねていた。

確かにセレスの言う通り、“楽しい食事”に来るような場所とはほど遠い。どちらかと言えば、むさ苦しい上に胡散臭うさんくささまでが混じった通りであった。

「道を間違えたか……」

探し物をするときの勘はよく当たるんだがな、と心の中で自嘲じちやうする。

結論からいえば、このナタスの選択は色々な意味で“当たって”いたのだが、当の本人がこのとき、気付いているはずもなかった。

「仕方ない。時計塔のところまで引き返そう」

そう言っつて、ナタスが振り返ろうとしたとき、

「危ないー!!」

背中越しに叫び声が聞こえてきた。

（何事？）

ディアナが言うが早いか、ナタスは体ごと向き直る。その瞳に写ったものは……

コトコトコト

……!!

ものすごい轟音を立て、すさまじいスピードで迫る、バカみたいに巨大な鞆。それが、“降って”くる。

「う、おおお!?!」

ナタスは何とか身を翻ひるがえして、これをかわす。そのわずか数センチ先のところを、大質量が大音量で通り過ぎていった。

「あ、危なかった……」

(マスター、御無事で……っ!?)

すんでのところでは衝突を回避し、胸を撫で下ろしたナタスに、デアアナが声をかけようとして、止めた。

どころか、セレスさえも何かを見つけ、目を大きく開いて表情を歪める。

状況を理解できていなかったのは、ナタスだけであろう。周りにいた人間さえも、揃って坂の上の方を見ながら驚愕の叫びを上げている。

「フギヤー!」

と突然、二匹は“猫みたいな”声を出して左右に散った。

「な、何だ?」

どうしたと、ナタスは使い魔たちに問いかけようとして

「と……止まれませ〜ん!」

「なっ!?!」

理解した。

鞆を追ってきたであろう少女が、その報告通りに止まることなく、ナタス目掛けて突っ込んでくることに。

しかし中央に取り残されたナタスは、回避して崩れた体勢ではどうすることもできず、

ドゴーン!!!

運動エネルギーの塊となった少女と、正面から激突した。

ちょうどそのとき、彼らの“衝撃”的な出会いを彩るように、正午を告げる乾いた鐘の音が響き渡った。

「本当にごめんなざっ!?! い………」

少女は勢いよく頭を下げて、テーブルの角かどにおでこをぶつけた。

ナタスとアリアム（他二匹）は、町のレストランに来ていた。先程の一悶着ひとこぼれのお詫びに、とアリアムが提案したのである。

どこかで食事を、と考えていたナタスにとって、これは願ってもないことであった。

「いや、こつちこそ不注意で………」

おでこを擦りながら半べそをかいている少女に、ナタスは言った。表向きは平静な声をしているが、内心は不機嫌そのものである。

アリアムはそれを敏感に感じ取ったのか、しゅんと身を縮こませた。

しかしナタスが不機嫌な理由は、アリアムのことではなかった。

むしろ、ここまで真摯しんじに謝罪してくれることを、ナタスは嬉しくさえ思っていたのである。

では、何が彼を不機嫌な気持ちにさせていたのかと言うと

「………」

ナタスは無言でちらりと傍らの猫たちを見た。

彼らは少年と少女が激突する際、主人をほつたらかしにして一目散さんに逃げたのである。

ナタスはそのことに、機嫌を損ねていたのだ。

（マスタあ、ごめんなさいッス）

(あの、申し訳ありません……)

泣くようなセレスの言葉にも、不安げなディアナの言葉にも耳を貸さず、ナタスは考えを巡らせる。

どんなお仕置きをしてやろうか。そうだ、目の前で美味しい魚料理を食べて、こいつらには食事抜きにしてやろう、と。

「あの、」

考えにふけていたせいか、いつしか二人とも黙り込んでしまっていたのだろう。

そんな沈黙を破つたのは、アリウムだった。

「私、この町に来たばかりで、右も左もわからないんです。もしよろしければ、一緒に町を回って案内を……」

つてぶつかっておいてお願いなんて、勝手もいいところですよね……」

そう言つてまた、アリウムは小さくなる。

「俺も、旅をしていて、この町は初めてなんだ。だから案内は無理だが、一緒に回る、というのは不可能ではない」

そんな少女の姿を見て、安心させようとナタスは微笑んだ。あまり表情が変わらなかつたせいで、いささか歪な感じがするが。

しかしその言葉、その気遣い、その微笑に二匹の猫たちは密かに驚いていた。

常の主人ならば、こんな言葉をかけることはない。まして、初対面の人間に、である。

しかも微笑のおまけまで付いてくるとは、一体どういう風の吹き回しだろう、と心底から戸惑った。

だが混乱しているせいか、セレスたちは、主人に対する失礼な心境にナタス自身が気付き、憤りの視線を向けていたことにまでは気が回らなかつたようだ。

一方で、この提案を受けたアリウムは、

「ほ、本当ですか！？ 嬉しい！」

先程までの沈んだ表情とは打って変わって、ぱあっと明るく笑った。

太陽のような、と言う形容が最も相応しい表現だろう。

「あ、私、アリウムって言います。よろしく」

「俺はナタス。で、こっちの黒いのがディアナ、白いのがセレス」

使い魔たちの無礼に仕返しするかのような、『のが』を強調する、主人のちよつとだけ意地悪な紹介に、またしゅんとなったのは二匹の猫たちであった。

第一章『旅立ち』 第一話（後書き）

遅くなりました。

まだまだ又ルイ展開ですが、見捨てずにお付き合いください。
コメント等をいただけると、幸いです。

第二話（前書き）

今回は、この物語における”魔法”についての描写をいたします。
どうぞ、お楽しみ下さい。

第二話

時計の針が、一時を過ぎた。

時間を伝える、という仕事を今しがた終えた鐘は、先程の賑わいとは違って変わった静けさの中にいる。

“時”という概念を具現化するそれは、本来戻るはずのないところへと回帰し、この地に住まう人々にまた時の流れを告げるのだらう。

昼食はとても豪華なものになった。

彼らの入ったレストランの品々は漁師料理を基にしていたらしい。素朴ながらも絶妙の味付けで素材を存分に活かし、無駄な趣向も飾りもしない、豪快かつポリュームのある料理の数々がテーブルに並んだ。

アリアムのはからいで、ディアナとセレスも食事にありつくことができた。その満足感からか、舌でぺろりと口元を拭っている。

食した料理の感想に、二匹して曰く、最高！ だそうだ。

そして今、食事を済ませた彼らは時計台まで戻ってきて、町を回るということに関して簡単な議論をしていた。町の中心に戻ってきたのも移動がしやすいからだ。

「さて、どこへ行ってみようか」

この町には地魚以外にもいくつの特産品がある。真珠のネックレスのような高価な物から、美しい貝殻を用いた各種アクセサリー、色付けした砂と水を小ビンに詰めたミニチュアのアクアリウムなど

の工芸品がそれに当たる。

また、水路を持った独特の町並みは、巡るだけでも充分に楽しめ
そうである。

「うーん、そうですねえ…… あれ？」

そう言っつて首をかしげたアリアムは、頬に滴が落ちてくるのを感じ
じて、空を見上げた。

少しばかり雲が見受けられるようになったものの、天気は相変わ
らず良好。陽光はむしろ目に痛いくらいに眩しい。

それでも雨はぽつぽつと次第に強さを増して、すぐに明るい日差
しを受けた小さな滴が辺りを覆っていく。

太陽の光を受けた雨粒は空中で煌めいて、まるで町に無数の宝石
が散りばめられたようである。

「雨、ですね……」

美しい光景を眺めながら、それでもアリアムはぶうと頬を膨らま
せる。

これからあちこち行ってみようと思っていた、その出足を挫かれ
たためか、それとも降り始め特有の埃臭い匂いほこりのせいか、どこか不
機嫌そうだ。

そんな彼女をいじらしく思いつつも、ナタスは慰めの言葉ではな
く、とりあえずの打開策を持ちかける。

「仕方ない、先に宿に入ろう。“天気雨”ならば、長く降り続いた
りはしないだろう」

荷物も置けるし、と付け足してから、ナタスは宿屋の位置を思い
出す。たしかここへ来る途中の道にあったはずだ。

来た道を振り返り、宿屋を確認する。

「あそこだな。よし、濡れたくはないから、一気に行こう。掴まっ
ていってくれ」

走っていく、とでもいうのだろうか。それにしては、掴まれとい
うのはいささか妙な気がする。しかも、ナタス自身も走り出そうと
いう風には見えない。

アリウムはナタスが何を言っているのかよくわからなかったが、とりあえず指示通りに、彼のコートの端^{はし}を握った。

それを確認したナタスは、真っ直ぐ宿屋の方角を指差し、目を瞑^{つむ}って何かを呟き始める。

「座標面、指定。基準点、決定」

呪文か経文^{きょうもん}か、というように小さな声で。

「終着点、選定。中心線、確定」

何かをしているということだけがわかる言葉を。

「指定座標平面」

語尾に力が、言葉に魔力が籠^こめられる。

「歪曲！」

次の瞬間、アリウムは体が浮き上がるような、体中の血液が昇っていきような気持ちの悪い感覚に襲われて、思わず目を閉じた。

「もういいぞ。さあ早く入ろう」

その感覚が消えた頃、ナタスの声が聞こえてきた。声を受けてアリウムはそっと目を開く。

そして飛び込んできた光景を見て、驚いてしまった。

今までその直下にいたはずの時計台は遙か後ろに、場所も知らなかった宿屋はすぐ目の前に。

「すごい、瞬間移動……これって、魔法ですよね!？」

雨に濡れるのにも構わず、アリウムは両手を広げ体中で喜んでい。その姿には、本当に無邪気さというものが感じられた。

「ナタスさんも魔導師さんだったんですね!」

「まあ、な」

「あ、じゃあもしかして?」

そう言ってアリウムは白黒二匹の猫を見やる。

二匹は一瞬だけ彼らの主人の方に目を向けると、主人に了承を得て自己紹介を始めた。

「はじめまして、ディアナといますわ」

「オイラはセレス。ヨロシクツス」

「うわあ…… すごい、すごいです!!」

目をキラキラと輝かせながら、アリアムが飾らない驚きと賛辞の声を上げる。

だがそれには取り合わず、ナタスは・

「とにかく、早く宿に入ろう。これ以上濡れたくない」

自分の意見を端的に語った。語って、返事もろくに聞かずにスタスタと中に入ってしまった。

「さっきの魔法、どうやったんですか!?!」

二人は宿泊の手続きを済ませると、各々の部屋に案内された。

しかしアリアムは自分の部屋に行きもせず、荷物さえもそのままにナタスの部屋に入ってきて、この質問を繰り返していた。

当然、二部屋取ってはいるが、そんなことよりも彼女は先程の魔法の方が気になるのだろう。

もともと部屋はそれほど広くない。人が二人に猫二匹、それぞれの大きな荷物が入れば、瞬く間に狭くなる。

移動するのにも、いちいち足元を気にしなければいけない状態になっていた。

「魔導師など、今時珍しくもないだろう?」

ベッドに腰をおろしたナタスが、面倒くさそうに答えた。

「ナタスさんも魔導師だったんですね!」

大きな声で喋りながら、アリウムはチヨロチヨロと動き回って、ナタスの正面に迫る。あまりの近さにナタスが反対を向くと、やはりそれについてきて向かい合う。

二人は、そんな“いたちごっこ”を続けていた。

「それも、“使い魔”を連れてくるなんて、凄い魔導……ふいふあんなんえふれ??」

と突然、ナタスが言葉の途中でアリウムの口を塞いだ。

やや呆れながらも、小さな子供に言い聞かせるように言う。

「あまり大きな声で言うんじゃない」

「ふあんれれふあ?」

念のためにいうと、この訳のわからない文字列はアリウムの発言である。話し難いことこの上ないだろうに、彼女は何故かそれを振りほどこうとしない。

ちなみに翻訳すると、「何ですか?」になる。

「あいな、いいか……」

実のところ、魔法使いに嫌悪感を抱くものは少なくない。しかも近年、その傾向は特に強まりつつあった。

不死者“サームーン”となるために、手段を選ばない過激な輩が増えているのである。

何もそれは魔法使いに限ったことではないのだが、元々が超自然的な力を扱う者たち。ゆえに自身の力に溺れ、倫理や人道を無視した行動に出る者も、少なからず存在したのだ。

ディアナとセレスが町では声を出さないようにしているのも、そこに理由がある。

彼らのような“使い魔”と契約を交わすための魔法というのも、高い技術を持った者にしか扱えない。したがって、連れることができるのは優れた魔導師だけ、ということになる。

それらの理由から、ナタスたちは十分畏怖するに足る存在なのだ

った。

自分独りで生きているわけではない、ということを理解している
ナタスにとって、“町”という媒体をなくすことは、避けたい事態
なのである。

「……というわけだから、俺は自分が魔導師であることは伏せてい
るんだ」

「私も魔導師なんですよ！」

もはや常識ともいえるような事柄を、疲れたような表情で説明し
ていたナタスだったのだが、

「！？ 本当か……？」

彼女の“魔導師”という言葉には、さすがに反応してしまった。

先程魔法を使ったのは、この町の人間が、そしてアリアムが魔法
に対して偏見を持っていない、と判断したためである。

彼女がそこまで愚かな人間だとは思えなかったが、相手が魔導師
だとなると警戒しないわけにはいかない。

「はい。まだまだ未熟ですけど」

ナタスに不信感を向けられたことなどつゆ知らず、アリアムはえ
へへと照れ笑いをした。

しかし次の瞬間、彼女は急に真剣な眼差しになり、右手を顔の前
に差し出して、わずかに俯く。

窓から差し込む光に照らされるその姿はとても幻想的で、まるで
神に祈りを捧げる聖女のようなようだ。

そして、手を前に伸ばすと、ポン、という軽い音が響き、差し出
された手に一輪の小さな白い花が現れた。

「これは、スノードロップ？」

その名の通り、純白で雫のような形をした可憐な花。

二月から三月という真冬に開花するこの“スノードロップ”には、

かつて色の無かった“雪”に自分の色を分けてあげたと言う伝説が残っている。

この花のおかげで、雪は色を得ることができたのである。

そして、雪は今でもそれを感謝しているらしい。真冬にも関わらず、スノードロップが咲く場所だけは、雪が解けているのはそのためだ。

きつと、雪がスノードロップに“恩返し”をしているのだろう。

「はい。私の一番好きな花なんです。私にできる魔法はこれくらいです」

「そ、そうか……」

アリアムはどうぞ、と言ってナタスに花を手渡した。

この花を贈り物にするときには、とある理由から気を遣うべきなのだが、どうやら彼女はそのことを知らないようだ。

「魔法、ね」

ナタスが受け取った花を見ながら、安心したように言った。

「その様子だと、いろんな人に“魔法”を見せてきたと察するが……

なるほど、これならば問題はないな」

「へ？ どういう意味ですか？」

本当にわからない、と言う表情を見せる少女に、ディアナがやや意地悪に言う。

「同じ”magic”でも、これは“手品”と訳されるべきものですわね」

「ち、違います！ 魔法ですよ、ま・ほ・う！！」

認めたくないのか、それとも本当に魔法だと思っているのか、アリアムは顔を真っ赤にしながら反論する。

しかし、こういう愉快的人間はからかってやりたくなくなってしまっのがナタスらだった。

「手の中に仕掛けがあったのが、見えてたツスよ」

「どちらにしても、もう少し腕を上げるべきだな」

「ぶう……」

もはや何から何まで見抜かれていたアリウムには、頬を膨らませることが残された唯一、精一杯の抵抗だった。

第二話（後書き）

次話は、今回の魔法の理論（屁理屈）を説明いたします。
引き続き、お付き合い下さい。

第三話（前書き）

第2話の続きになっています。前話をお読みになっていない方は、どうぞそちらからお願いいたします。

第三話

「それよりも、さっきの魔法、どうやったんですか？」

ふと思いついたように、話が戻った。

上手く話題をすり替えられたらと思っていただけで、これは大きな誤算である。

「ねえ、ねえつてばねえ！！」

アリアムの発言、最後の「え」が裏返った。温度はかなり上がっているようだ。

「わ、わかった。わかったから落ち着いてくれ……」

随分興奮しているらしく、声も大きくなってきている。ベッドという座っていた場所も悪かった。彼女はものすごい勢いで迫ってきて、このままでは本当に押し倒されかねない。

大きな溜め息を一つ。彼女のこのしつこさに、とうとうナタスが折れることとなった。

「知りたいのはこの魔法の“理論”だな？」

現在、この世界における“魔法”は全て理論の上に成り立っている。

どこか一ヶ所に雨を降らせるとするならば、それを為すためには相応の理論が必要なのだ。

雨を降らせるには、当然、そこに“雨雲”があることが絶対条件になる。

ところが、その地域が高気圧に包まれていたり、あるいは元々乾燥気候帯であるならば、周囲から雨雲を集める、または海水などを気化させて雲を作らなければならぬ。

しかし、そんなことをすれば、世界の気象が崩れてしまうのは明

白である。

周囲から雲を集めれば、雨が降るのはその場所だけで、周囲には湯気が訪れる。新たに雲を作り出せば、高・低気圧のバランスが崩れ、異常気象が引き起こされる。

ある場所で干ばつを回避しても、別の場所がその犠牲になるのは本末転倒なのだ。

故に、絶妙のバランスの上にある世界に、できるだけ影響を与えないように、かつ目的だけを達するには熟考に熟考を重ねねばならない。

どんな魔法であろうと、簡単にいくはずがなかった。

「言っておくが、難しいぞ」

「う……」

『難しい』。その一言で一気に興奮から覚め、どころか怯んだ表情を見せたアリアムを、ナタスはクスリと笑った。

適当に答えることもできるだろうが、そんなことをしては益々（ますます）彼女の好奇心に火をつける結果になるだろう。ナタスは嘘偽りなく教えてやることにした。

雰囲気としては、できの悪い妹に優しく説明してやる、といった感じだろうか。

「空間を歪曲させたのさ」

「？」

「時計台から宿屋までの道は一本道。だからこれは平面と見なすことができる」

「??？」

「そして、その空間を曲げる事で距離を縮め
「マスター、わかってないみたいですよ……」

とそこで、割り込むようにディアナが言った。

なるほど、アリアムの瞳はぐるぐると渦巻きのように、頭はくら

くらとして定まらず、である。

「道は空間で…… ナタスさんを縮めて、時計が宿屋に曲がって…」

しかし、それでも何とか理解しようと考えているらしい。額ひたいに両の人差し指を当て、必死に思考を巡らせている。

上がりきった熱で、今にも頭の後ろ当りから煙を噴出しそうだ。

「わ、悪かった！ もっとわかりやすく説明しよう」

そう言うと、ナタスは鞆の中から長方形の紙を取り出した。

「いいか？ この紙を宿屋までの道と考える。で、この角を俺達が立っていた位置として、」

話しながらその紙の対角線上、反対の角かどを指差す。

「こつちの角を宿屋の位置としよう。では、これの最短距離とは？」
「対角線、じゃないんですか？」

「二次元だけで考えるとな。だがこれは、三次元上の二次元、すなわち“空間にある平面”だ」

「!?!」

アリアムが再びわからない、という顔になる。少しでも複雑な概念を入れると、この娘はオーバーヒートするようだ。

ナタスは考える間を与えないよう、すぐに次の説明に入る。

「こうすれば、距離はほぼゼロになるだろう？」

ナタスは紙を折って見せる。二つの角は見事に重なり合って、一つとなった。

「あ、本当だ……」

「要するに、道をこの紙のようにみなせば、それを折り曲げること
で距離が縮められる。これが先程の、“空間歪曲による距離短縮”
の魔法だ」

「すごいです！ こんな発想、普通の人じゃ思いつきませんよ」

アリアムは瞳を輝かせながら、まるで新しい発見に喜ぶ子供のよ

うにはしゃいでいた。

その純真さに、ナタスはなんとなく心が温かくなるような思いを感じつつ、言葉を続けていく。

「そうか？　だが欠点も多いぞ。」

第一に、基準点　今の場合は俺たちの立っていた場所だな。それと終着点　宿屋の位置が平面とみなせなければならぬ」

「えーと……」

「平面でなければ、折り曲げることはできないでしょう？」

三度思考モードに入ったアリアムに、ディアナができるだけわかりやすく補足した。

それを聞いたアリアムは、なるほど、と左掌を右拳で叩いて鳴らす。

「第二に、指定平面内に障害物、および“高さ”のある物が入らないこと」

「壁抜けはできないし、高さのある物が入ると、紙が折り曲げられないってことツスね」

と、続けて間髪居かんぱれずに要約したのはセレス。それを聞いてアリアムがふむふむと頷く。

「このように制約も多いわけだ。最近は『魔法は何でもできる』という風潮があるようだが、それは全くの間違いだと言える。魔法でも、不可能なものは不可能なんだ」

最後に、魔法に夢を見ている様子のある少女に向けて、釘を刺すように話を締めたナタスだったが、アリアムはまた思考を巡らせ始めた。

そして、わずかな沈黙の後に、こう切り出した。

「でも、“不老不死”は不可能じゃないんですよね……？」

「！」

彼女の明るい普段の声は、真剣さと事の大きさと深く、険しく変わった。

「実際に何らかの方法がある…… ナタスさんならどうやって
「知らん。そんなものに興味はないな」

ナタスは言葉の途中で遮るように答えた。顔を背けてはいるが、
あからさまに表情を厳しくして、怒りにも似た声を発している。

その豹変振りに驚いたアリアムが、何か悪い事をしてしまったの
かと不安げに聞く。

「ナタス、さん？」

「……」

二人の間に、長く思えるような一瞬の間が流れた。

そして、ナタスが急に、ふっ、と鼻で笑い、冗談めかして言う。

「そろそろ自分の部屋に行ってくれないか？ この状況を誰かに見
られたら、説明するのが大変だ」

「え？」

この状況 アリアムがベッド脇でナタスに迫っている、を理解
したアリアムは、その顔を真っ赤に染め上げた。

「ごっご、ごめんなさい〜！！」

「やれやれ……」

ナタスはものすごい勢いで部屋を出て行く その際に机の角に
足をぶつけていた アリアムを見送って、小さく笑いながら呟い
た。

この町にいる間は、どうやら暇をしないで済みそうだ。

窓の外、宿屋前の家の屋根に、一匹のカラスがとまっている。

(主、見つけました。久しぶりの獲物ですよ)

その真つ黒な瞳に一人の少年の姿を写し、己が主へと声を飛ばす。
(それも、かなりの上物のようです)

(よくやった。では、今夜決行としよう。お前は引き続き監視をし
ろ。逃すなよ……)

(かしこまりました)

いつしか日の傾き始めた空に漆黒の翼がはためいて、そのまま茜
色の中へと溶け込んでいった。

「ククク…… 貴様は、何を持っている？ 何を知っている？」

主と呼ばれた初老の男が、暗闇の中で呟く。狂喜と狂気に表情を
歪めながら。

第三話（後書き）

ここまでお付き合いくださって、ありがとうございました。いかがでしたでしょうか？

この物語における魔法には、このように何らかの屁理屈が付きま
す。

ちなみに今作中の『空間歪曲による距離短縮の魔法』は、俗に『
ワープ』と呼ばれる理論から考えた物です。

ツッコミどころも満載と思いますが、愛嬌ということでご容赦く
ださい。

第四話

不老不死

人にも獣にも、老衰ろうすいにも時流にも、そして、神の定めし運命にさえもその存在を犯されることなく生き続けること。

「全員、準備はできたか？」

この、かつておとぎ話と伝説の中のみ存在した技術を実現させてしまった魔導師が現れたことにより、世界は混乱の様相を見せ始めていた。

誰もがその“永遠の秘法”を求め始めたのである。

「はい、本隊は町を完全に囲んでいます。先遣隊もすでに宿の包囲を済ませておりますよう……」

しかし不死の技術はおるか、不死者“サームーン”となったのがどんな人物なのか、その存在すら明らかにされていないがために、そのアプローチ方法は人それぞれに異なっていた。

ある者は精霊、悪魔が存在するとして、それとの接触を試みた。また、ある者は植物の長寿に着目して、それとの同化に挑んだ。

呪文で、科学で、魔力で、薬品で。

祭壇で、墓地で、陣上で、台上で。

「よし。今宵は久しぶりの宴だ。皆、存分に楽しむが良い」

その末、かつて最も栄華を誇った国が滅びの道に堕ちていくこととなった。

初めて魔法と科学が混じり合った国家、最も文明の発達した国が不死への探求の結果として得たものは、枯れ果てた国土と倫理のない人道、ただそれだけだった。

その国末期の魔導師、科学者たちはどんな過激な手段も辞さなくなっていたのである。

生け贄、人体実験　。拳句の果てには他者の技術を奪つたため、潰すための技術の開発までが行われるようになった。

そして、それ故当然と言うべきか　その国の破滅は、一瞬だった。

「ただし、奴だけは殺すなよ。あれは貴重なモノだ」

その事態を重く受け止めた社会は、魔法と科学に対し厳しい姿勢を取るようになる。

人々に貢献する技術の発明は高く評価し、逆に個人の志向の凝り固まった技術は完膚なきまでに排斥される。

社会はおろか、世界からも消されてしまうのだ。

「それ以外は構わん。奪って奪って奪い尽くせ！」

だが、人の欲望に収束はない。一度目指した者たちが、あると知ってしまった者たちが不死への探求を止めることはなかった。

社会から、世界から追放されても、なお。

「その言葉、長らく聞きとうありました“黒の主”」

“方術盗賊”　己が野望、己が目的のために優れた魔導師や科学者を襲い、その技術を奪わんとする、盗賊たちの総称である。

その、不死を求める盗賊の勢力の一つ、ルバシユ盗賊団の首領たる“黒の主”と呼ばれた初老の男が、檄を飛ばす。

「さあ、始めよう！ 悲鳴を音楽に、絶望を快樂に、命¹⁰¹⁶尽を愉悅に、
略奪の宴だ！！」

ベッドの中、ナタスはごろりと寝返りを打った。

くそ……

町に入った頃からか。ナタスはずっと、不快感に襲われていた。言葉には表しにくい、しかし確かに嫌な、“見られている”という感覚。

はじめはその視線を、アリアムのものかと思っていた。魔法を見せたときのあの反応、考えられないこともない。

もしかしたら魔法が下手というのも演技で、今も何らかの方法で自分を監視しているのではないか。

しかし、あの感情に真つ直ぐな少女は、そのような隠し事には決定的に向いていない。

現に扉二枚向こうにいる少女の気配は、ぐっすりと眠り込んでいるように思える。

ならばこの感覚はなんだ。一体誰が

！？

ナタスはそう考えて、突如その嫌な予感が、直感に変わった。まずい、と。

その直後、天井が降ってきた。

「やれ、アルタイル!!」

アルタイルと呼ばれた、ずっと少年を監視していたカラスが主の命を受け、突如その姿を変貌させる。

身体は巨大に、翼は強大に、四肢は屈強に、嘴は頑健くちばしに、瞳は残酷に。

翼を羽ばたかせて巨体を宙に浮かせ、停滞すること一瞬、一気に降下して宿へと身体を打ち付ける。

その大重量による衝撃は、やすやすと屋根を打ち抜いた。

轟音を合図に、町を囲んでいた盗賊たちが一斉に攻撃を開始する。火砲で扉を破つて家屋に侵入し、金品を略奪、火を放って逃げ惑う人々を切り裂く。

瞬く間に、町は悲鳴と絶叫で溢れ返った。

「くっ!!」

ナタスはかけていた布団で頭を覆い、落下物に対処する。

が、天井の破片の中に巨大な獣の腕が混じっていることを認めて、ベッドから飛び出した。

その直後、ベッドは中央から二つに砕けた。

「マスター!!」

「平気だ!!」

使い魔たちに短く返答するその間にも、瞳には迫る第二撃が写し出されていた。

ナタスが横に大きく跳躍する。

爪はナタスの残像を裂いて通り抜け、そして窓がなくなった。

その“窓だった”ところからは、轟々と燃え上がる火の手が見え、悲痛な叫び声が多数聞こえてくる。

相手の数はかなり多いようだ。

「セレス、お前はアリアムのところへ！ できるだけこの場から離れるんだ。後で落ち合おう。」

ディアナは町の人たちの避難を誘導。可能ならば火災も食い止める！

場合によっては戦闘も止むを得ん。魔法の使用も許可する 行

け！！！」

「了解！！」

ナタスはまくし立てるように使い魔たちに指示を出すと、再三の攻撃を身を低くかがめながら躲かわして、壊れた壁から外へと飛び出した。

案の定、逃げ道を塞ぐため、外には多数の男がサーベルを構えて立っていた。

そして背後、空に羽ばたく魔獣、獅子の身体に鷲の翼と首を持つ“グリフォン”を見て、ナタスは敵の正体を看破した。

「方術盗賊か。どこから持って来たかは知らんが、合成獣まで使うとは」

方術盗賊が主として奪うのは、目標の持つ魔法の理論や科学の技術。

だとすれば目標は魔導師たる自分自身のはず。

それ以外の破壊も殺しも略奪も、“ついで”でしかない。

しかし、こいつらは人々の持つ幸福の日々が目的かのように、奪っていく。

ただ私欲を満たすためだけの暴力によって。

それを象徴するように、一ブロック向こうの家の前で、一人の男性が凶刃に倒れ伏す光景が見えた。

ナタスはそのことに激しい怒りを感じ、そしてその怒りを静かに燃え上がらせる。

「この代償、安くはないぞ……！」

そう呟くと、ナタスは空中で両手を左腰に添え、そのまま線をなぞるように斜めに空を切った。

同時に左腕にはめられた銀のブレスレットが輝きを放ち、なぞられた線が徐々に一つ形をなしてゆく。

それは、身の丈ほどもある長い銀の刃。

氷のように冷たく澄みきった光を放つ刀。

銘は“細雪”。ナタスの力を具現化した魔剣だった。

拵はいたって簡素。飾り気はなく、鏢もなければ柄巻もない。柄尻に結わえられた飾り紐だけが唯一それらしい飾りである。

しかし、それは瞬く間に見た者を魅了した。

それが輝きを感じる美しさからなのか、それとも冷たさがもたらす“死”の予感からなのか、どちらかは見当もつかない。

だが、たしかにそれは見た者の瞳を釘付けにする、妖艶な光沢を放っていた。

その刃が、落下点にいた一人の盗賊に向かっていく。

刹那、少年の着地と同時に紅蓮が花のように散った。

ナタスは凄まじいスピードで、両脇にいた男たちをも薙ぎ払う。音もなく、抵抗もなく、まるで男の身体を通り抜けるように銀の光が駆ける。

そして鈍い音と共に、盗賊たちは皆、崩れ落ちた。

ナタスはそのまま、立ち塞がる者を蹴散らしながら広場を目指して走り出す。
少しでも広いところへ出なければ、“アレ”による被害が広がってしまう。

ゴアアアア！！

見ると、“アレ” 魔獣は咆哮ほしゅうと共に上空から突進を開始していた。

「ちいっ！」

あの巨体の一撃を食らうわけにはいかない。

ナタスは横飛びにかわして地面に激突させんと試みる。

だが、魔獣もそこまで愚かではなかった。

地面にぶつかる直前、グリフォンはその大きな翼を一振り、豪風と共に下方への勢いはゼロになり、空へ飛翔した。

どうする！？

剣を地に立て、身を低くして風に耐えながら、ナタスは考える。

周囲にいた盗賊たちはその風に飲まれて吹き飛ばされたのか、または“とぼっちり”を恐れたのか、姿がなくなっていた。

おかげで周囲に気を配らないで済む。

しかし、ナタスが考えを巡らせる間に、魔獣は旋回を終えて再び突進してくる。

ナタスは転がるようにして爪を避け、すれ違いざまに腕に一撃入れた。

魔獣は叫びを上げるも、すぐに羽ばたいて中空に舞い上がる。

大したダメージにはならなかったようだ。

巨体というのは伊達ではないらしい。

大きい体はそれに見合うだけの生命力を持っている。あれを仕留

めるには確実に致命傷となる一撃を加えなくてはならない。

となると…… 腹か、首か……

必勝の狙いを定めるナタスの瞳に、魔獣の攻撃が迫る

その頃、アリアムとセレスは何とか宿屋からの脱出に成功していた。

幸い辺りに盗賊の姿は見えない。あの魔獣の攻撃に身の危険を感じて退避したのだろう。

アリアムたちもナタスの指示通り、できるだけ安全そうな場所を目指して走り出す。

「痛い…… 痛い」

そのとき、どこからか声が聞こえてきた。

「助けて……」

それは、苦しみに満ちた小さな、しかし何よりも大きく響く、助けを求める声。

「パパ…… ママ……」

その声のした方を見やると、宿屋の二つ隣、魔獣の突進による風を受けて崩れかけた家の壁に、少女が寄りかかるようにして蹲うつすくまっていた。

それを認めて、アリアムが少女の下へと駆け寄っていく。

「どうしたの？ どこが痛いなの？」

「つく、ひつく…… 痛いよ、助けて……」

ずっと一人で痛みに耐えていたのだろう。

アリウムが呼びかけると、少女は安心したように泣きじゃくりながら、ただただ助けを求めてきた。

もはや会話が成立するような状態ではない。

「もう大丈夫。大丈夫よ」

アリウムは少女の気持ちを落ち着けるために話しかけながら、少女の身体に視線を走らせる。

火傷と擦過傷さうかしょうが身体にいくつかあるが、その中でも右足に特に大きな傷が付いていた。

その足の傷の上に、そつと掌てのひらを添える。

「痛いのはすぐに直してあげる」

優しくそう言って、アリウムは祈るように瞑目めいもくする。

すると、掌がぼんやりと輝き、暖かな光を放ち始めた。

そして、その光に照らされた傷が、だんだんと塞がっていく。

これは、治癒魔法！？

セレスの驚きを他所に、アリウムは普通に魔法を使っている。

それも、扱いの難しい治癒の“魔法”を、だ。

治癒の魔法とは、外傷の周囲にある細胞を活性化させて再生能力を高める、というもののだが、人間の細胞は部位によって再生能力が違う。擦り傷などの皮膚の怪我はすぐに治っても、骨折が治り難いのはこのせいだ。

そのため、傷の治りにくい、身体の内側の組織から再生が進むように調節しなければならぬ。

これは昼間見せてもらった“手品”とはわけが違う。

彼女の言っていたことは嘘ではなかった。

アリウムは、本当に“魔法使い”だったのである。

そのことに驚きを隠せぬまま、セレスは少女に聞こえぬよう、小さな声で言う。

「アリウム、本当に魔法使えたンスね。昼間、それを見せてくれれば良かったのに」

「まあ、ね。これは小さい頃にお婆ちゃんに教えてもらったものな
んだけど、ちよつとした傷を治すくらいしかできないから恥ずかし
くて。」

それに、これじゃあダメなの。こんなの全然すごくなんかない…

…」

そう、この程度では駄目なのだ。

自分の望みを叶えるにはさらなる力を、自分の願いを得るために
は、さらなる高みを。

たとえそれが、神を冒瀆することになろうともかまわない。

アリアムは自分の手を見つめながら、力強く握り締めた。何かを
憂い、何かを渴望するように。

「？」

セレスはそんなアリアムを訝しく思い、尋ねようとしたが、その
問いを封じるようにアリアムは少女の方に向き直る。

「これでどうかな。立てる？」

「痛く、ない…… ありがとう、おねえちゃん」

「よかった」

先程の齒の奥を噛み締めるような表情は微塵もなく、アリアムは
少女に笑いかけた。

その慈愛に満ちた笑顔は、見る者に安らぎを与え、あらゆる憂慮
が取り除かれていくようである。

まさに、“聖母”の姿そのものだった。

……！！

セレスはその笑顔に思わず見惚れてしまっていた。

遠くに聞こえる怒号と悲鳴、火災と瓦礫による破壊の痕、それら
地獄のような光景も、まるでその場所にだけは全く関係がないとで
もいつかのように、穏やかな空気が流れている。

「さあ、ここは危ないッス。早く避難を！」

だが、セレスは頭をぶんぶん振って、「幻想だ」と自分に言い聞かせる。そして現実を直視し、アリウムにこの場から離れるよう促した。

彼の言う通り、現状は穏やかどころか危険以外の何物でもない。少しでも安全な場所に離れなければ、命さえも危ういだろう。

にも関わらず、アリウムは逃げるどころか町の中心に向かおうとする。

「だあつ！ 何やってるんスカ！ 早く逃げないと……」

「でも、皆、時計塔の方に逃げてる。このまま放って置いたら、皆が危ないじゃない！ 助けなきゃ……」

まるで他者の痛みを感じ取っているかのように、苦しそうに声を出す、アリウム。

いや、彼女のことだ。この光景は本当に苦しいのだろう。

アリウムは“心”というものに敏感である。たとえそれが他者のものであっても、自身のものとして受け取ってしまうのだ。

故にその言葉はセレスの心を揺さぶった。しかし、彼女のためにも主人の命令に忠実であろうと強く思う。

「それはそうツスけど、じゃあこの子はどうするンスか？ まずは……っ!？」

言葉の途中で突然、セレスの表情が険しくなった。鋭い目つきで前方を睨みつけている。

それを不審に思い、そして盗賊の残りがいたのかとアリウムも確認する。

すると、そこには初老の男が立っていた。

「おやおや、こんな夜更けに散歩ですか、お嬢さん？」

その風貌は盗賊のそれではない。真黒なフードで頭をすっぽりと包み込み、漆黒のマントの裏には奇怪な文字が刻まれている。

左眼には光を宿さない無機質な義眼が埋め込まれていた。

アリウムはその男を見た途端、体中が凍りつくような怖気に襲わ

れた。

足は動かず、地面に根を下ろした樹のように固まって、逃げることもかなわない。

「どうかしたのかな？ 顔色が悪いぞ」

初老の男はゆっくりと近づいてくる。

男が一步、歩み寄るたびに、その体が 存在が大きくなっていく。

意識が飲み込まれてしまいそうだ。

「セレス、」

アリアムは脇にいる白猫に小さく声をかけた。

今の自分にできる唯一の抵抗として。

「この子を連れて逃げて……」

あわよくば、これが打開策となるように。

せめて、被害が自分だけで済むように。

「…… わかったツス……」

そのアリアムの内心を察して、セレスは少女と共に脱兎のごとく駆け出した。

危険から逃げるためでなく、少女を、そしてアリアムを助けるために。

「フ、幼子を先に逃がすとは、随分とお優しいことだ」

男はぬっと手を伸ばし、嗤う。

感情の籠もらぬ左眼で。

「共に来てもらおう。君にも利用価値がありそうだ……」

必死に恐怖に抗うアリアムの瞳に、“黒の主”^{ホウシ}の腕が迫る

第四話（後書き）

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございました。

アリウムは魔法を使えるか、については最後まで迷ったのですが、
こういう形にしてみました。いかがでしたでしょうか？

今回は本格的な戦闘シーンを描きたいと思っております。
では、次回も宜しく願います。

第五話

空を駆けるように舞っていた獣が、その鷲の翼を獅子の胴に貼り付けるようにたたんだ。

鷲の首を^{かが}屈め、^{くちばし}嘴を伸ばして両足とともに前へと突き出す。

魔獣、突撃の体勢である。

一直線となつた魔獣は、落下の勢いと巨重を乗せた、流星のごとき槍と化する。

その威力は、おそらく山をも貫く程だろう。

しかし、その突撃の際には必ず“予備動作”が含まれるため、回避のタイミングを計るのは簡単だった。

距離を置いて魔獣の挙動を見ながら水路沿いの道を走り、翼がたたまれたのを確認したら道を折れて反対のブロックへ。

魔獣が再び突撃の体勢を整えたら、また別のブロックへ抜ける。

その中、魔獣が空へ戻る一瞬の隙について一気に走り、距離を離す。

そんな“いたちごっこ”を続けながら、ナタスは港を目指していた。

港にある、荷の積み下ろしを行う場所ならば、周囲への被害も少なくて済む上に広さも充分にあるはずだ。威力の大きい魔法を使うこともできるだろう。

ナタスはそこを決戦の地と定め、港へ向かう最後の水路に渡された橋を駆け抜ける。

そのわずか後を追いかけて、魔獣が巨体で橋を打ち砕いていった。

よし、ここならば！

埠頭ふしづに辿り着いたナタスは、開けた視界を見て確信する。

最近、工業化が進んだこの町の埠頭は想像通りに広く、周囲に倉庫がいくつもあるだけだった。

船が二隻ほど停泊しているが、ここならば被害を気にせず存分に戦える。

ナタスは埠頭の中央付近まで来ると、立ち止まって魔獣の方へ向き直った。

やや遅れて港上空に侵入してくる、魔獣。

再度突撃をかけるべく、嘴と手足と伸ばしてその身を槍へと変貌させる。

その鏃やじりの先端を真っ直ぐに睨み返しつつ、ナタスは考えていた。

ナタスは“跳ぶ”ことはできても“飛ぶ”ことはできない。相手が空にいる限り、絶対的に不利な立場にあるのだ。距離を保ったままの攻撃をかけられれば、それこそ打つ手がない。

にも関わらず、魔獣は炎を吐いたり、羽を矢のように飛ばしたりといった攻撃をする様子は一切なく、突進を繰り返してくる。

なぜ魔獣は先程からあの突進しか繰り返してこないのか。無論、それが彼の最大の攻撃であろうことは容易に想像できる。

だが、この攻撃には相手とすれ違う、すなわち相手の間合いに自ら飛び込まなければならぬ、という欠点がある。

それを押してなお、突撃を繰り返す理由

そこから導き出される結論は一つ。魔獣には突進以外の手段がない。

それは、つまり……

まだ勝機がある、ということ。

一瞬でも交錯する時間があるのなら、攻撃を加えることができる。

一撃で、決める！

狙うは全生物の急所の一つ、首。
機は突進をかわした直後、空へと舞い戻るために翼を打った瞬間。
それならば、相手の上昇のための力を利用できる。

ナタスは己の剣を握り直し、魔獣の突進を斬り返す、その機を探る。

だが、

「っは!？」

魔獣は突如、落下の途中で翼を広げ、急制動をかけた。

巨体が、空気を押し流す。

そして、押し出された空気は弾丸となって、ナタスに襲い掛かった。

「ぐ、あああ！」

身を砕くほどの、莫大な衝撃。

骨が軋む。

巨大な圧力をもろに受け、ナタスは紙のように吹き飛ばされた。

そのまま倉庫の壁に激突する。

それでもその圧力は減衰することなく全身を打ちつけ、壁を突き破った。

しまった、

肺を押し潰されるような痛み。

身体が酸素を求めて暴れまわる。

それでも頭は戦いのことを考える。

油断した！

魔獣は突撃しかできなかつたのではなかつた。

“突撃しかしていなかつた”のである。

戦いの中で起こる微妙なバランス。

それはたつた一度、虚を突いた攻撃でいとも簡単に崩れ去る。

かの魔獣は均衡を崩すため、自分の身を囮にしてまで、この一撃

を隠してきたのである。
その効果は言うまでもなく、絶大だった。

「見誤ったか……」
ナタスが粉塵ふんじんと瓦礫がれきに埋もれた身を起こしながら呟いた。
手の内を隠すなど、高い知能を持っている証拠に他ならない。
相手は“獣”。知能はそう高くないだろうと、知らずのうちに慢まん心しんしていたらしい。

それを思い知るには、これは少しばかり高い代償だ。
「肋骨ろっこつが何本かいったな」

自分の脇腹に手を当てて、傷の程度を確かめる。
それでも頭は戦いのことを考える。
どうやら、あの空気弾は十分な落下の勢いがなければ撃ち出せないのだろう。連射が利かないようだ。

そのおかげで、しばしとはいえ、ゆっくりと思考を巡らせる時間
ができた。

「やれやれ…… “この世” というのは、やはり苛酷きくだな……」
ぺっ、と吐き出した唾液は、紅くなっていた。
その鮮やかな紅をぼんやりと見ながら、思うこと。

また、君との約束を破ってしまうな。すまない……

久しぶりの血の味は、やはり慣れないものだった。

敵手が吹き飛ばす様を見下ろしながら、魔獣は内心で舌打ちしてい

た。

悪運の強いことですね……

あの空気の弾丸は、確かに痛恨の一撃となったことだろう。だが、あの程度で仕留め切れるような相手ではないだろうこともわかっていた。

だから魔獣はその攻撃で相手の体勢を崩し、その直後の本命駄目押し突進で追撃をかけ、止めを刺すつもりでいたのだ。

しかし、ここで彼にとって誤算が生じた。

まず、あの空気弾はできるだけ低い位置で発射して、ナタス自身に収束するように放つつもりでいた。

が、ここは港。周囲にあった船のマストが障害となり、彼はあまり低空まで落下できず、結果として威力が分散してしまった。

そしてもう一つ。

その中途半端に拡散した空気弾は、ナタスを吹き飛ばしたまでは良かったが、そのまま壁までも打ち抜いて、敵を屋内に隠した。

そのため彼は標的を見失い、追撃をかける機を逸してしまったのだ。

そう、ナタスは運が良かった。

ですが、無傷のはずもないでしょう

両者の均衡は崩された。

このまま出てこないつもりなら、

あとは完全に崩れ去るまで、攻撃を加え続けるだけだ。

もう一度、空気弾を撃って建物ごと…… いや、もっと確実に、

それだけで、自分は勝利できる。流れに乗るだけで、良い。

この爪で直接、引き裂いて差し上げましょう！

魔獣は翼を打って、再び空高く舞い上がる。

そして滞空すること数秒、翼をたたみ降下する。

巨体が裂く空気の層が、身体との間の摩擦で甲高い音かんを立てた。

まるで彼を鼓舞しているかのようである。

しかし、魔獣は気付いていない。
その音が、彼にとって警笛だったということに。

魔獣が倉庫の屋根を踏み抜いて、降りてくる。

屋内はあの巨体には狭くて、満身に翼を広げられなかったらしい。
着地の衝撃で大きな音を立てて、床が踏み砕かれた。

それでもやはり、奴は“魔”の獣。

圧倒的な威圧感は、それが“死”に直結していることを容易に想像させる。

しかし、ナタスの心は少しも揺らぐことはなく、どころか口惜しささえ気色に滲み出していた。

「まずは詫びておこう。見くびっていた
だが、と後を続ける。

「やはりお前も無理だ…… お前に俺は殺せない！」
そして、瞳を閉じて静かに口ずさむ。

We waited in darkness . We wanted
the light emits in an abyss .

(僕達は、不安の中を歩いてた。果てなく続く、暗い暗い深淵を。)
However, even I lost the sight
of myself because there is only
“ nothing ” .

(しかし、そこにあるのは暗闇だけで、自分さえも見失う。)
Then, You were struck with terror
frightened you .

(その時、君は怖いと言って、小さな肩を振るわせた。)

呪文。強力な魔法を発動させる際に詠唱される、“儀式”の一。魔法というのは、ある数式からは一つの解しか得られないのと同じように、使い手に応じて性能の増減があるわけではなく、それに定められた効力しか発揮しない。

つまりは誰が使おうとも、“同じ魔法”からは“同じ効果”しか得られないのである。

ただ、“呪文”だけが個々の魔導師によって変わってくる。

魔法を実行するには、魔力を周囲の外界に広げ、それを世界に作用させる必要がある。言うなれば“魔力”とは、およそ何にでも利用できる“エネルギー”であり、また“世界に作用させる”ので、自然現象に反するような効果を得られない、ということになる。

“呪文”というのは『自己は世界と一体である』という自己催眠に他ならない。

魔力を内から引き出してくるためのものなので、発現のための意味合いとキーワードさえ含まれていれば良いのだ。

そして、優れた魔導師ほど、その呪文の内容は詩的にさえなってくる。意味とキーワードを簡潔にまとめ、なおかつ自己を昂揚（うきよう）させるに足る内容を含んでいるもの。

このナタスの呪文こそが、まさにそれだった。

S O I w i l l b e c o m e l i g h t . L i k e
t h e m o o n l i g h t i n g u p d a r k n i g
h t s .

(ならば、僕が灯となろう。闇夜を照らす月のように。)

A n d I w i l l b e c o m e l i g h t . D o n ' t
b e a t a l o s s , a n d y o u c a n c a t

ch the sights .

(そして、僕は光となる。君が明日に迷わぬように。)

ナタスが片腕を鋭く振り上げた。

応えて渦巻くように、彼を中心とした強大な魔力の奔流ほんりゅうが巻き起こる。

何だ、これは!?

魔獣をさえ驚愕させるまでに膨れ上がった魔力は、ナタスの身体から噴水のように湧き上り、烈火のごとく燃え盛り、大気を震わせ、大地を揺るがす。

ナタスはゆっくりとその腕を下げ、顔の前で覆うように手を広げて、指と指の間から相手を強く睥睨へいげいする。

そして魔獣は気が付いた。

瞳の色が変わっていることに。

先程までの灰色ではない。やや蒼みがかった白色、しかし黄金にも似た輝きを放っている。

黄金の輝きは力強く、蒼白い光はどこまでも冷たい。

それはまるで 否、まさに“月”だった。

「さあ、幕だ。殺せないのならせめて、楽しませてくれ。この俺を、“サームーン”を……」

暗き闇に月二つ。

不死者 サームーンが蛇のように邪悪な瞳をギラつかせ、深く、深く、ほ吼えた。

第五話（後書き）

初の本格的なバトルシーンでしたが、いかがでしたでしょうか？
スピーディーな感じができるように注意して書いてみました。
皆様をドキドキさせるような展開になっていれば良いのですが……

ちなみに、英語の部分は間違いがあると思いますが、これも愛嬌
と言う事でお願ひしますw

第六話

闇の中で、二つの光点が輝いている。

蒼みがかつた白色で冷然^{れいぜん}、かつ黄金にも似た煌々とした輝き。

壁に阻まれ、明かりに乏しいはずの屋内を照らし出すそれは、まさに地上に輝く月。

双月を瞳に宿し、ナタスがゆっくりと立ち上がる。

「殺せないのならせめて、このサームーンを楽しませてくれ……」

何だ、これは……？

その姿をただ呆然と眺める魔獣には、相手に起きた事態、自分の置かれた状況を理解できないでいた。

一体、何が……

奴は自分のことを“不死者^{サームーン}”と言った。

だが、そんなことは、どうでもいい。

何らかの魔法で、強大な魔力を放っている。

そんなことも、どうでもいい。

起こったというのです！？

相手が不死だというなら、それでいい。

それを探してきたのだ。むしろ望むところ。

強くなったというのなら、それでいい。

戦いに生きる者として、嬉しいとさえ思う。

それでも、理解できない。

私は何故、

自分はどうしてしまったのか、が。

何故、震えている！？

彼が今抱いているものこそ、他ならぬ“恐怖”であった。

知らずの内に恐怖に吞まれた魔獣とは対照的に、ナタスは悠然と魔獣の前に立つ。

「どうした？ 黙っているだけではつまらない。早く闘^やろっ」

無形の位 特定の構えを取らず、全身の力を抜くように佇む“自然体”の少年が、瞳を冷たく輝かせ、歪に微笑んだ。

その姿に身じろぎした魔獣は、しかしそれでも認めない。

これは恐怖ではない。何かの間違いだ、と。

そうして魔獣は自身を奮い立たせる。

目の前にあるものを己の力で振り払い、ねじ伏せるために。

そして、静寂は嵐が訪れるがごとく破れ散った。

「そちらが来ないのならば、こちらから行くぞ！」

そう言つてナタスは、右足を前に踏み出して、魔獣に対し完全に横を向く姿勢になった。

右手を左胸に添えるように差し出し、輝度を増した瞳で魔獣を睨む。

ナタスは指を弾いて前へ突き出し、魔獣を指す。

するとその指先は火花を生じ、そのまま導火線を伝うようにバチバチと爆ぜながら、紅蓮の火線は魔獣目掛けて奔つてゆく。

火の魔法！？

魔獣は迫る火線を見ながらも、避けようとはしなかった。

炎の規模は大したことがない。

自分の大きな翼、その一振りで簡単に吹き飛ばせるだろう。

こんなもの、吹き散らして……っ！？

だが、炎をかき消そうと翼を振り上げたそのとき、眼前にまで迫っていた火が“線”から“面”に姿を変えた。

炎は魔獣を包み込むように広がっていく。

手の込んだことを！

魔獣は広げた翼を、包まるように自分の身体に巻き付けて、防御の体勢をとった。

吹き飛ばせないまでも、この程度の火で自分の毛皮が焼かれることはない。

一瞬の熱に耐えれば良いだけのことだ。

轟々と音を立てる、炎の壁。

魔獣を舐めるように通り過ぎていく。

焼け跡燻る、魔獣の体表。

若干の焼け焦げが付くものの、それは致命傷には程遠い、軽い火傷でしかない。

だが、少年にも当然、その程度のことは予想が付いていたのだろう。

炎の壁の後、その業炎の閃光に紛れて一気に距離を縮めてくる。

火の魔法は、間合いを詰めて斬撃を打ち込むための布石だったのである。

魔法は目眩ましでしたか！

ナタスが魔獣の目の前で剣を振りかぶった。

それを確と捉えた魔獣も自分の爪、五本が全て眼前の敵を引き裂くように、思い切り振り下ろす。

その直後、互いの武器が交錯した。

金属同士がぶつかり合うような特有の高音は、刹那のズレと高低差を持って“五重の和音”を響かせる。

防ぎましたか……しかし！

魔獣は回り込んでくる少年に、再度爪による一撃を加えるべく、腕を振り上げる。

だが、そこでふと、気付いた。

私の、爪が……

無い。

片腕の五本全てが、根元から両断されていた。

「バカな、まさか、たった一本の剣で!？」

いかに魔獣とて、戦慄せんりつしないはずがない。

五本の爪を一本の剣で全て防がれたのだから。

それも“避ける”のではなく、“剣で切り落とす”という絶技をもつて。

五つの爪の間にどれほどの時間差があるつか。

それを弾くとは、どれほどの速さであろうか。

っ!!!

だがナタスは魔獣に、驚きに表情を歪める間さえも与えない。

即座に刃を返し、さらに一步踏み込んで横一文字に薙ぎ払う。

魔獣もまた戦いの中を生き抜いてきた者として、むざむざそれを喰らうつもりはない。

自らの首を目掛けて迫る剣を、魔獣は顎を引いて嘴を盾にし、横に逸さばらして捌く。

そしてそのまま、首を前に突き出して、ガラ空きになった相手の背を嘴で貫いた。

直後、鮮血が噴き出し、霧のように飛び散る。

この攻防は時間にして、わずか数秒。

互いに勘と反射で行われたようなものであろう。

だからこそ、このような一撃が両者の戦いにどのような意味をもたらすのか、“戦士”ならばわかるはずだ。

しかし、ナタスは嗤った。

「ク……ハハハ!!!」

楽しくてたまらないというように。

何だ……!？」

魔獣は、再びの均衡がこの一撃で崩れただろう、自分の側に流れが傾いただろう、と思っていた。

それでもナタスは止まらなかった。

背に大きな傷を負いながら、どころか体勢を整え直して反攻の一撃を始動している。

とそのとき、魔獣はナタスの背中の傷が既に塞がっていることに気付いた。

ちいっ！！

反撃に辛うじて反応できた魔獣は、地面を蹴って跳び上がり、翼を打って空へと逃げる。

強引に打ち付けられた翼は狭い民家の壁を強く叩き、屋根を完全に崩していった。

魔獣は空の上、一瞬の攻防を経て、圧倒的な実力差というものを見せ付けられた気がしていた。痛みを訴える自分の手を見やると、否が応にも思い知らされてしまう。

だが同時に、その傷は魔獣に冷静さをもたらした。

身体の震えは痛みによって、頭を熱くさせた血の気は出血によって消えてくれたのである。

魔獣は上空から、ぼんやりと光を放つ敵を見下しながら、冷え切った頭で推察する。

よく見れば、^{かす}掠り傷もなくなっている…… 何故だ？
考えられるのは、先程彼が唱えていた呪文。

あの魔法には“治癒”の能力が備わっていた いや、もしかすると身体を永続的に治癒し続ける魔法なのかもしれない。

それならば、不死となる可能性もある。

しかしだとすると…… あなたの“不死”は、不完全だ
単なる永続治療では、“即死”の状況には対処できない。

治癒以前に、命をなくすことになるのだから、“死体”の傷を治癒しても、それは“生者”にはなり得ない。

魔獣は先程向けられた言葉を、皮肉を込めて反芻^{はんすう}する。

私にはあなたを殺せない、ですと？ 愚かな……

奴の不死は“^{まが}紛い物”。

それを真と思っっているのなら、それは木に登って背が高くなった
と思ひ込む猿と同じだ。

自分を本当に不死と思っっているのなら、この傷の礼として、そんな
ことはない、ときつちり教えてやるう。

相手の力量も把握できた。

悔しいが奴の力は自分の遙か上。

だから迂闊には近寄らない。確実性に乏しくとも、距離を取って
空気弾で攻め続ける。

己が空を駆けている限り、相手の攻撃は自分に当たらないのだから。
ら。

仕留めるまでは…… 何度でも！

そうして魔獣は空気弾を放つため、降下を始める。

だがそれは、勝利には程遠い消極策にすぎないことに、魔獣は気
付けなかった。

ナタスは月の輝きをそのままに、滞空する魔獣を見上げていた。

「また飛んだか……」

自身の内にある、堪え難い感情の昂ぶりをなんとか抑えつつ、呟
く。

「楽しませてくれと言ったのに、逃げてばかりではつまらない」

しかし、顔は喜悦に歪んでいた。

“サムーン” “永遠の秘法”を手に入れた人物を、人々は
畏敬の念を込めてこう呼んだ。人々にとって“不老不死”は憧れで
あると同時に、神への“背徳”の所業でもあるからだ。

そして自身が言ったように、ナタスはある手段を以って“不死”

となった人物である。世間的には隠匿されているのだが。実はそれは、身体に常時作用しているものであって、それ故に傷が一瞬で塞がった、瞳の色の变化などとは別物だった。この変化は、単に普段は押さえ込んである魔力の解放に過ぎない。いや、普段は抑えているのだから、こちらが本性なのかもしれない。

ナタスはおよそ人とは思えぬほどの魔力を生まれ持っていた。だから、なのだろう。

過ぎた力は人を惑わせる。彼も例外ではなかった。

己の持つ、凄まじいまでの力に、翻弄されるようになったのである。

自分には出来ないことなどない。思うままに、望むままに。そんな想いが彼の心に芽生えた。

そして抑えきれない想いは、やがて外部へと向けられる。

“破壊衝動”となつて

「まあいい。しばしの安堵に酔うがいいさ。だが、教えておいてやるわ」

ナタスは左足を引いて半身になり、剣で天駆ける獣を突くように脇に構える。

「いくら翼を持つとも……貴様は“月”には届かない！」

そして、力強く大地を蹴った。

直後、猛烈な風が巻き起こる。

魔獣目掛けて一直線、ナタスの身体は見る間に空へ昇っていく。

町中の火災で温められた空気が空に向かう、その上昇気流を一箇所 足元に集め、それを上着を帆のようにして受けることで舞い上がったのである。

な、バカな!!

攻撃の為に降下を始めていた魔獣は、咄嗟に止まろうと姿勢を上げる。

いや、“上げて”しまった。

後悔の暇はない。

少年は 少年の剣はもう目の前だ。

姿勢を上げる それは、全くの愚行。

自分で自分の弱点を曝し、相手の的を大きくする、という行為なのだから。

「はあああああ!!」

ナタスは、魔獣が見せた腹目掛けて、上昇の勢いを乗せた剣を突き出す。

そして、ドブツ、という鈍い音が響き、魔獣の腹に穴が開く。

ゴアアアア!!

雷鳴のごとき雄たけびが暗夜に木霊して、今度は魔獣の血が夜空を彩った。

し、しまった……

自惚れていた。

空を飛べるのは自分だけだと思っていた。

しかし、それは間違いだった。

そのままナタスは、魔獣の腹を切り裂きながら魔獣の頭上へと抜け、自分が使っていた気流を魔獣にぶつける。

風の煽りを受けて力を失いつつある巨体は、わずか、浮き上がった。

「覚えておけ。俺達は、“神”にはなれないんだ。如何に“空”を舞おうとも、“天”には程遠い」

夜空に穴を穿ったような真円の月を背に、ナタスは剣を天高く振り上げる。

コートの裾をマントのようににはためかせるその姿は、どこか翼を広げた天使のように神々しく見えた。

その白銀の刃を見据えながら、魔獣は虚ろになってゆく意識の中で想った。

ああ、そうか…… 私は、『井の中の蛙』だったのですね……
そして、己の“最期”を悟る。

魔獣の体が駆け寄ってゆく。

彼の“死”を携えた、男のもとへ。

上へと昇る力と、大地に引かれて落下していく勢い、双方を乗せた一撃が、始まった。

「まだだ」と、執念にも似た思いを抱くも、それはすぐに打ち払われた。

その首に迫るは魔剣。

しかもこれほどの使い手の、だ。首を落とすくらいの能力は有しているだろう。

仕留めるまで何度でも、という浅はかな考えは、ただ一撃で仕留める、という覚悟の前には及ばなかった。

もっと早く気付くべきだった、と魔獣は思う。

だがそれさえも、もう遅い。

翼を再び広げるよりも疾く、身を返して逃れるよりも鋭く、あの冷たい剣閃が瞬くのだろう。

そう、すでに勝負は決したのだ。

天に閃く、一条の銀。その輝きの中で、魔獣は空の高さを、天の

遠さを知った。

第六話（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。いかがでしたでしょうか？

なんだかテンポが悪いですね…… 無駄な事を書きすぎなのでしょうか？

何はともあれ、次回もよろしくお願いします。

第七話

銀の輝きが消える頃、首を失くした獅子の身体が唐突に崩れ始めた。

それはまるで乾いた砂の粒子のように潮風に舞い、澄んだ碎氷さいひょうのように煌きながら、高く高く立ち上っていく。

異生物同士を無理やりつなぎ合わせる後天的な合成獣は、身体にかかる負担が大きいため、その生命活動を停止するとすぐに朽ち始める。

かの魔獣も、例外ではなかった。

「死してなお、空を目指すのだな……」

自分を舞い上げる風を失ったナタスは、緩やかに落下しながら、天に昇る敵手を送る。

その表情に浮かぶのは、寂寞せきぼくのようにも恍惚こうこうのようにも見える。

「井の中の蛙、大海を知らず。されど空の深さを知る、か……」
虚ろな瞳を空に向けたまま、ナタスは大地へと降りていった。

再び風を集めて、ナタスがふわりと着地する。

「さて、」

頬に付いていた返り血を軽く払う。すると、すぐに水気を失って、また砂のように飛んでいった。

それを追いかけるように視線を流すと、ナタスは不意に暗がりに向かつて声を投げた。

「いつまでもそうしていないで、そろそろ姿を見せてくれてもいいんじゃないか？」

瞳は闇を照らそうとしているかのように、さらに輝きを増してい

る。新たな獲物を見つけた猛獣のような獰猛さを伴って。

「ふむ……まさかアルタイルを失う事になるとはな」

闇の奥、声だけが返ってくる。

鼓膜を引つ掻いていくような低くしゃがれた、無遠慮に頭に響いてくる声。その音の羅列だけで不快な気分になりそうである。

「しかし、とうとう見つけたぞ」

その声を追って、一人の男の姿が浮かび上がった。

同化していた闇が解けるように唐突に、ゆっくりと姿が形作られていく。

全うに歳を重ねているならば、四十後半辺りであろう。髭をたくわえた初老の男だった。

真黒なフードで頭をすっぽりと包み込み、漆黒のマントの裏には奇怪な文様が刻まれている。全身、闇をそのまま織り上げたかのような黒の装いである。

しかし、左眼に埋め込まれた光を宿さないはずの義眼だけが、なぜかぼんやりと光って見えた。

「伝説の不老不死の秘法を……」

「お前が黒幕だな？」

闇から出でた男の言った、『アルタイル』という言葉から、おそらくはあの魔獣のことだろう、と推察したナタスは否定を許さない鋭さで尋ねる。

「如何にも。我が名はファラヴァール。“コロラーレ”が幹部、“

黒の主”なり」

ファラヴァールと名乗った男は陰鬱な声で返す。

返された応えもまた、汚くざらついていた。

ナタスはそれを不快に感じつつ、しかしそれよりも、ファラヴァールの言ったことが気にかかった。

「コロラーレ、だと!？」

“コロラーレ” それは最高の知と技を持った魔導師集団。
“彩色” という意味を持つ彼らは、かつて人々の暮らしを豊かに
と知識を錬磨し、技術を開拓してきた名もない魔法使いたちの集ま
りだった。

しかしある日、彼らは一人の指導者の下に、歪んだ方向に進んで
いくようになった。自分たちの魔法は、神の創った世界を自在に曲
げる事ができる。それは神をも凌ぐ最高の力、それを操る魔導師は
最高の存在だと、自負するようになったのである。

ならば、この世界を人間の力で新たな色に染め上げよう。
“コロラーレ”の誕生である。

「世界三大勢力の一つと言われる程の魔導師集団が、盗賊に成り下
がったか。幹部自らがこのような……」

「それは少し違うな。奪うのはあくまで彼らだよ。私はそれに力を
貸しているに過ぎない。代わりに、魔法に関することだけをいただ
いている、というわけだ。実に合理的だろう？」

老獺ろうかいさを鼻に掛けるように、やや語調を上げてファラヴァールが
言った。この初老の男は、どこまでも人の神経を逆撫でるのが巧い。
「だから俺だけでなく、町の人たちをも襲ったのか」

ナタスの口調はいたって穏やかだが、そこには明らかな怒気が籠
もっている。

「盗賊どもの悦楽のために、力の無い人たちまでも巻き込むのか」

「犠牲は付き物だよ。月並みだが、それゆえに正しい言葉だ」

ファラヴァールも静かに、はつきりと答える。

「元来、“魔法使い”とはそういう生き物だろう？ 何かを得るた
めに、代償を払う。それが“魔法の理”だ」

そう言い切る男に対し、ナタスは反感を覚えた。

言っていることは自体は間違っていないだろう。確かに代償を
払うことで効果を得るのが魔法だ。

かといって、ファラヴァールの理屈は受け入れられるようなもの

ではなかった。

自分の信念と決定的に違っている部分が、一つだけ存在していたからだ。

「魔法の代償とは、『自分の持つ何か』を払うものだ。それを他者に強いるお前を、黙って見過ごすわけにはいかない。やはり、お前はここで討つ」

本当に視線で刺し貫けそうなくらいに、月の瞳で睨み付ける。

対してフラヴァールは余裕の笑みを浮かべながら、おもむろにマントを広げた。

「フフ、これを見ても同じ事が言えるかね？」

黒のマントの内に佇むは、同じく黒に身を包んだ、長い栗色の髪の毛、ルビーの瞳をした、少女。

「アリアム!？」

無事に逃げていたと思っていた少女の姿を認め、驚きからナタスが叫んだ。

しかし、様子がおかしい。

アリアムは呼びかけても返事をするどころか、何の反応も示さないのである。まるで、外界からの刺激を感じ取れない、あるいは感情を生み出す心を失くしてしまったかのようなようだ。

鮮やかに輝いていた瞳も、今はどこかくすんだように生気がない。

魔法で操られているのか……

ナタスは表情は変えずに、しかし内心で、「厄介なことになった」と舌打ちした。

そんなナタスに、さらに笑みを歪め、フラヴァールは言う。

「私も、本当はこんなことはしたくないのだがね。君があくまで暴れるというのなら……」

言いながらアリアムの首に、不気味な意匠のナイフを突きつけていた。

その穂先の鋭さから、おそらくは刺突することを主眼に置いて作

られたものと思われる。人の肌、肉ごときならば微塵の抵抗もなく通り抜けるだろう。

応えてナタスは剣を構えた。

「人質を取るには、人選を誤ったな」

冷たい言葉の裏側で少女を案じながら。

「そいつとは今日会ったばかりだ。どうなるうと知ったことじゃない」

当然、これは事態を打開するための嘘　黙って言いなりになるのは面白くない、という思いも含んでいるが　、挑発である。

だが、ファラヴァールもそれを字面通りじづてんに受け取ったりはしない。

「そうかね？　では、試してみるか」

ナイフを握る手に、わずかに力を込める。

その刃は徐々に食い込み、皮膚を破って、そしてアリアムの白い肌に一筋の紅を引いた。

それでも、アリアムは痛みにも苦しむことも、恐怖に抗うことも、死の影に脅えることもなく、全てをありのままに受け入れる人形のように動かない。

「く……　ああ、わかった。お前の勝ちだ」

ナタスが吐き捨てるように言って、持っていた剣を放り投げた。

安い挑発は、あまりにも無意味に過ぎた。これでは解決どころか、最悪の事態になりかねない。

『剣を捨てる』という、暗黙の意思表示　抵抗はしない　を

受けて、ファラヴァールは満足げに笑みを深める。

「うむ、素直なのが一番だ。なに、私は話を聞きたいだけ。大人しくしていてくれれば、危害を加えるのは止そう」

危害は加えない、というのは嘘だろう。欲しいものだけ得たら、後は簡単に捨てていくに決まっている。

とはいえ、下手に動くわけにもいかなかった。これ以上、自分のために犠牲を増やすわけにはいかないのだ。ナタスにとってそれは、

相手の言いなりになるよりも耐えがたいものなのだった。

故に、今は大人しくしていよう、と思う。
とにかく、この状況を切り抜ける方法を考えなければならぬ。

ナタスは打算を表に出さないように、ぶっきらぼうに尋ねた。

「で、俺に聞きたい事とは？」

「無論、君の持つ“永遠の秘法”について」

予想通り、にべもない応えが返ってきた。彼のような歪んだ魔法使いが求めるのは、それ以外にはあるまい。

「さあ、教えてくれ。君の不死の理論を！」

アラヴァールは嗤う。それはまるで、欲しくてたまらないものが手に入る時の子供のようなのだが、子供の純粹さとは違って、邪気に満ち満ちていた。

醜悪で、醜怪で、醜陋なそれぞれ、まさしく“悪魔”の形相。欲望の赴くままに進み続けた、人間のなれの果てだった。

ナタスは哀れむように、諦めるように、目を伏せる。

「俺の、不死の秘法の核たる理論……」

だが、次の瞬間には顔を上げて、悪魔を前にして臆することなく悠然と向かい合い、力強く語り始めた。

第七話（後書き）

そういえば、”火の魔法”についての記述をしませんね……
というところで、それについては、別のお話の中でさせてください。
次話は少々長いですが、もし宜しければお付き合いください。

第八話（前書き）

ここでは主人公、ナタスの至った”不老不死”の理論を説明しています。

小難しく、また矛盾もあると思われる理論ですが、お付き合いください。

第八話

ナタスは哀れむように、諦めるように、目を伏せる。

「俺の、不死の秘法の核たる理論……」

だが、次の瞬間には顔を上げて、悪魔を前にして臆することなく悠然と向かい合い、力強く語り始めた。

「それは、“時間の永続回帰”だ」

もはや迷いは無いというように、月の瞳がさらに激しく輝度を増して光を放つ。

その圧倒的な貫禄は、並みの者ならば睨むだけですくみあがり、動けなくなってしまうだろう。

目の当たりにした男、“黒の主”フラヴァールもそうだった。

すくみ上がったりこそしなかったものの、密かに気圧されて、気付かぬうちに後に下がってしまったていた。

彼にそうさせたのは他でもない、あらゆる生物の持つ“生存本能”である。

「時を戻す、と？」

本能的な恐怖というものは、理性を働かせることで払い去ることができる。

得体の知れないものを見た時、それは何か、と思考を巡らせて観察するのは、無意識のうちに感じてしまった恐怖を、無意識のうちに処理しようという、人間の防衛反応とも言える。

フラヴァールは今まさに、それを『無意識に』行っているのである。

恐怖の意識など、欠片も感じてはいないだろう。

そうして、彼は気を取り直す。長年探し求めてきた悲願がそこに

あるという思いと、現状の優勢さを盾に。

「ああ。揺れる振り子のように、また同じ円を描く時計板のように、一定の周期をもって元の位置に戻ってくる」

「ふざけているのかね？ 嘘をつくのは良くないな。時間とは常に不変・一定のもの、それが“摂理”。如何に魔法とはいえ、自然の摂理に逆らうことはできないと、君も知っているだろう。

時を操るといふのは、もはや人の為せる業ではないのだ。人の力を遙かに超えるもの、そのようなものを、われわれは“奇跡”と呼ぶ」

しかし、ナタスはファラヴァールの目を睨み付けたまま、挑戦的にも平然と答える。

「俺は、いたって真剣だよ。信じるか否かは、貴様の勝手だがな」

逆にファラヴァールの表情には怒りが顕わになっていた。自分が有利な立場にいるはずなのに、それが先程と入れ替わっているような気がして、面白くなかった。

そんなことは気にもかけず、ナタスは話を続ける。

「お前も聞いたことはあるだろう？ “相対性理論”というものを」

「……『慣性座標系において、全ての物理法則は同形で表される』という理論だな？」

「そうだ。わかりやすく言えば、特定の観測者から見た物理現象は、全て同じように数式で書き示せる、という理論だな。

そこには『光速度不変』という原理がある。その名の通り、観測者がどんな状態であっても、光速度は常に一定の値 c を持ち、なおかつそれが速度の上限である、という原理だ。ここに人間が体感できる程度の普通の考え方を持ち込むと、説明がつかなくなる事態が

起こる。

今、お前は列車に乗っていると仮定しよう。そしてその中から、外でランプを灯して立っている俺を見ている」

そう言っつてナタスは人差し指を立て、ランプに見立てて火を点けた。

「動く列車内からでも、お前にはランプの光　光線は前に進んでいくように見えるだろう。当然だ、普通は光速度の方が圧倒的に速いのだから、相対速度という奴からそう見える」

パチパチと音を立てる、線香花火のような淡色の火を見やりながら、ファラヴァールはやはりわからない、というように顔を顰めた。ナタスは説明しながら、指先の火をゆっくりと動かしていく。

「では、この列車が光速度で進むとしたらどうなるだろうか？　ランプの光と列車の速度は同じ、ならばその光線は果たして前に進んで見えるか……？」

答えは“NO”だ。ランプの光と列車の相対速度はゼロになってしまうからな。

だが、どのような状況でも光速度は常に一定　列車の中のお前にとっても、外で眺めている俺にとっても、ランプの光は“同じ光速度”で進むように見えなければいけない。だとするならば、光速度列車の中のお前が、『ランプの光が光速度で進んでいる』ように見えるときには、外にいる俺には相対速度の関係から、ランプの光は“光速度の2倍”に見えなければいけないことになるのだが、“光の2倍速”は在り得ない。

ほら、矛盾が生じるだろう？　光速度は常に一定、上限のはずなのに、この場合はランプが2倍速にでもならない限りは光が前に進むようには見えてくれないのだから」

ナタスは自分の顔の前で指先を立て、火をかざす。その明り向こうにあってなおギラギラと輝く瞳は、灯火の創り出す影によって、より不気味に光って見えた。

「その矛盾を無くすにはどうするか…… それこそが『時間は相対的なものである』という考えだ。
“距離・速度・時間”の関係から、物体の進む距離は“速度と時間の積”で表される。

光速で運動する列車内からも車外の光が光速 c で見え、かつ車外からも光線が光速 c に見える、つまり“光速度が不変”になるという事は、光の進む距離は常に一定、ということになる。

距離も等しく、速度も一定だというならば、変化するのは時間の値しかない、ということになるだろう？

こう考えれば、時間は可変である、と言える。だから、時間を操るのも不可能ではないのさ」

在り得ん……

突如として現れ、常識を覆していく“天才”が考え出す理論。

その理論に、ファラヴァールは愕然とする。

そんなことは、考えたこともなかった。

正確には、考えようとしなかった。

人というのは所詮、観測によってしか世界とのつながりを認識できない生き物だ。

その『人間が認識できる世界』の中では、いかなる場合であろうと変化することのない“時間”という概念は、絶対的なものである。そう信じてきた。

しかし、そう『思われる』だけで実際は違つと、『時間は絶対ではない』と、この男は言っているのである。

「信じられん……」

「さっきも言っただろう。信じるかどうかはお前の勝手だと」

「だが、しかし……！」

今まで信じていたものが崩れ去ったため、混乱しているのだろう。フラヴァールは虚ろに目を見開いている。

それにかまわずにナタスは続ける。

「時間とは、“川の流れ”のようなもの。局所ごとに見れば、時にうねって向きを変え、岩に当たれば二つに分かれ、崖に至れば滝と成って下に落ちる。だが大きな目で見れば、それは『海へと向かう流れ』と言える。

時流に関して、俺達人間は大きくしか捉えられないんだ。しかし、その中にも小さいながらに違う方向へと向かう流れは確実に存在している」

「時間とは、絶対のものだ！　それが真理だろう！？」

頭を振りながら決して認めようとしないうフラヴァールに、ナタスははつきりと言い切る。

「真理とは一つではない。人が存在すれば、その人の数だけ存在するものであり、また移り変わるものだ。

例えば、かつて“天動説”という理論があった。『太陽が空を動いている』というやつだな。当時の人々にとって、それは真理だった。だって、そうだろう？　『そう見える』のだから。

だがこれは、後の“地動説”に取って代えられる。そして俺達は今、これこそが真理だと信じている。

どうだ、真理というものが入れ替わっただろう？　人間にとって、“真理”と“常識”は同じなのさ……　信じ、望むことで世界は変

わる！」

これこそが、ナタスの心の根底にある、唯一絶対と“信じている”もの。

人には、世界を変えるほどの可能性がある、と彼は心から思っているのである。

在り得ん在り得ん……

それでもフアラヴァールは、“正しい”と思わされてしまう理論に、必死に抗おうとする。

「か、仮に、その理論で、時間が戻せたとしても、それがどうして、“不老不死”につながる？」

「では逆に問おう。“老い”とは何だ？ “死”とは何だ？ 何よりもまず、それを定義しなければ、それを避ける術など見つかるはずも無いだろう。原因がわかってこそ、解決の手段が導き出せるのだから」

ナタスの問いかけに、混乱した頭でフアラヴァールは考える。

“老い”とは、歳を取り、その結果『心身が衰えること』。

心は自身の在りようによって矯正・鍛錬もできるが、身体はそうはいかない。生物の個体・器官・細胞など、あらゆる面で生理的機能が低下する。脳の萎縮いしゆくや内臓の機能低下などが主な例であろう。

つまり“不老”とは、その身体機能の衰えを止めることになるはずである。

“死”とは、生物学的には生命活動が不可逆的に停止している状態を言う。哲学的には『新たな旅立ち』とでも言えばよいのか。肉

体は滅んでも、靈魂は変わらずにいる、という考えだ。

これは翻せば“肉体死”と“精神死”があると考えられるだろう。仮に肉体が滅びても、培ってきた記憶と経験さえ残されていれば、精神が消えない限り、それは“死”ではないとも言うことができる。つまり“不死”において守るべきは何よりも、“自身の精神”のはずである。

しかし、フラヴァールの得たこれらの結論は、いずれも“時間の回帰”とは遠いものであるように思えた。

「すまないがやはり、理解に苦しむな…… それで不老不死になれるとは、到底思えん」

では、とナタスがつなぐ。もはやナタスは議題をまとめる議長のように、その場を支配していた。

「順を追って話そうか。まず“老”についてだが、なぜ歳を取ると身体機能が低下するのか。

これは“ヒト”を構成する種々様々な『細胞』に原因があると言える。皮膚なら皮膚を、臓器なら臓器を成す細胞が寄り集まって“肉体”になっているのだが、これらはほぼ例外なく、とても脆弱だ。簡単なことで機能停止、すなわち“死”んでしまう。ところが、そうした欠落によってできた“穴”は、周りにある細胞が分裂することで埋めていく。だから傷を負っても治癒するのだな」

在り得ん在り得ん在り得ん……

そこで一息つくように、自分の火で遊び始める。

聞き手に理解の間を与え、また次にどう進めていくかを考える、話を円滑にするための、これは一種の話術だった。

若干の間をおいて、ナタスが再び告ぐ。

「しかし、ヒトの体細胞が一生のうちにできる分裂の回数は決まっているんだ。分裂できなくなる、ということは、欠落によって生じた穴を埋められなくなる、ということ。つまり、時が経てば経っただけ、自身を構成する材料が無くなって、スカスカになってしまう。それならば、機能が低下するのも当然というものだ。

だから俺は時を戻した。常に分裂する前の状態に戻せば、回数制限など無いも同然だからな」

ナタスはおもむろに、自分の指先の火を反対の腕にかざす。

火に当たった部分の皮膚は焼けて赤くなり、やがてただれてきたが、火を離すとそこは何事も無かったかのように元に戻っていた。

「元の状態が傷も病も無い万全の状態ならば、歳を取ることなく常に“健康体”でいられる、というわけだ。これは同時に、“肉体の死”を回避する手段でもある」

その現実を見せ付けられて、ファラヴァールは絶句するしかなかった。

もはや、ただ何かをぶつぶつと病的なまでに呟き続けるばかりである。

在り得ん在り得ん在り得ん在り得ん……

そんなことは気にもかけず、ナタスは話を続ける。

「さて、次は“死” 肉体死については今ので良いだろうから、ここでは“精神死”についてだな。

ところで“精神”というやつは、“心”というヤツはどこにある

と思う？ 俺は、実はそんなものは無いと思っている。いや、『この世界には無い』と言うべきだな。人それぞれが“精神世界” 『無意識中の意識』というものを持っていて、そこからそれぞれの自我を引き出してくる。

“夢”というのがその存在を示す良い例だ。人が眠るとき、身体は休止状態に入るため、精神が一時的に戻っているのさ。“精神世界”というのは、万人のためにあるのではなく、個人のためにあるものだから、見える形も時々に応じて、また個々人々によって違ってくる。“正夢”とか“予知夢”というのは、“精神世界”が“現実”に流れ出してしまった結果だろう。

また、妄想癖の……想像力の豊かな人間ほど、この世界との行き来が多く、巧い。考え事をしてしている時、周囲の音が耳に入りにくいのもこのせいだし、各々の世界を行き来するのは自由だ、ということになる。

では、“この世界”と“精神世界”をつなぐのは何か。俺はそれこそが“脳”だと考えている。形の無いものを形のあるものに変換できる、唯一のものだとな。だから“精神死”を避けるにおいて、もっとも守られるべきは“ここ”なんだ」

ナタスは言いながら、トントンと頭を指で叩いた。

その挙動は、『銃で撃ち抜いてみる』、という挑発に似ている。

在り得ん在り得ん在り得ンアリ得ンアリエン……

「ならば話は簡単だろう？ “精神の行き来”が自由できるならば、脳の損傷を避けることで“精神死”は避けられる。即ち、これも先の肉体死を防ぐ手段で避けることができる……」

「在り得ん在り得ん在り得ンアリ得ン在りエンあり得ん在りエン在りえんアリ得ん在りエンアリ得ン在りえんありえんありえンアリエ

んありエンありエンありエンありエン！！」

フアラヴァールに、今までの落ち着き払った余裕は無くなった。両腕を大きく広げて、目を血走らせながら奇声を発し続ける。

居もしない誰かに向かい答えを求めるように虚空を仰いでいる。

そして、いきなりバネ仕掛けの人形のように、カクンと前のめりに顔を突き出す。

「ソウか。あくまで詭弁ヲ続けルというノだなあ？ ならばもうイイ、貴様ノようナ小僧に期待シタ私が愚かだったヨ……！！」

『時を戻す』など、オコがましイにも程がある。時間と八型にはまツタ、型通りニしか在り得ないもの。立方体の容器に水を注イだとして、水が球形に八ならナイヨウになア……。ソナ理論、可・不可ヲ検証スル以前の問題。摂理ニ逆ライ、奇跡ヲ起コセルト言イ張るトは……。神ニデモナツタツモリカ、痴レ者メ！」

もはや、正気のそれではない。

彼の理性は、完全に壊れ去っていた。

彼は、既に『人にあらざるモノ』となっていた。

「信じるか否かは、貴様の勝手だと言っているだろう。だがしかし、そうして俺がここにいる、という現実はどうする？」

「私モ『モウイイ』ト言ツタ筈ダロウ。ソノヨウナ見工透イタ嘘ナド、必要ナイ！ 大方、コノ娘ヲ助ケル算段デモシテイタノダロウ？ ナラバ、ソナ心配ハ無用ノモノニシテクレル！」

叫びとともに、握るナイフに力を込める。

それは、アリアムの首の皮を破り、肉を裂き、骨を貫いていく、

はずだった

。

第八話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

理論について、次の”番外編”にて簡単な補足をさせていただきます。

そちらもぜひ、ご覧下さい。

番外（八話補足）（前書き）

ここでは、第八話中の”相対性理論”の簡単な補足をしています。
私、司なりの解釈の上なので、間違っているかもしれませんが…

…

番外（八話補足）

司（作者）

「突然ですが、ここからは作者の司と、ナタスの“ファミリア（使い魔）”、『セレス』と『ディアナ』でお送りいたしますー！」

セレス（以下セ）

「どもっス」

ディアナ（以下デ）

「なんで私が……？」

司

「いや、だってほら、君たち最近、ほとんど出番無いし……」

セ・デ

「「！！」「」

司

「ディアナにいたっては、多分魔獣よりも発言回数が少ないっていう……」

デ

「それはあなたのせいではありませんことー！？」

司

「うん。だから、こっついうのはあまりしない主義なんだけど、こっつでもしないと可哀想だなぁ、って」

デ

「ま、まあそういうことなら、協力しても宜しいですわよ?」

セ

「なんだかんだで、出番ゲットで喜んでるっスね……」

セ

「にしても、今回はいつもに増してくそ長い・読みにくい・わかりにくい文っスね……」

司

「ウンチクばかりだからねえ。間違いだらけだろうし、ツッコミどころ満載だし…… 僕、もう疲れたよう……」

デ

「ひとえにあなたの文章力の問題ですわ。土下座なさい」

司

「真に申し訳ございません!」

デ

「よろしい。では、私達が皆様に理解の手助けになることを願って、補足をさせてもらいますわ」

セ

「まずは『相対性理論』についてっスね。ここでは『特殊相対性理論』というのをを用いているっス」

デ

「辞書的な件は本文中ので良いとして、もう少しわかりやすい例を出しましょう。司、懐中電灯の光とかけっこしなさい」

司

「ムリです……」

デ

「使えないですわね……じゃあ、セレスとでいいわ」

司・セ

「了解」

デ

「普通、二人が常に同速ならば、引き分けになりますわよね？でも、光というのは『光の速さで動くものから見ても、光の速さに見える』のですわ。ここが想像しにくい部分。」

彼らの場合、司が10(km/時)で、セレスが20(km/時)で走っていると、司から見たセレスの速度は10(km/時)でも、これが光速だとすると、司から見てもセレスの速度は20(km/時)に見える事になります。

さらに止まっている私にも、セレスの速度は20(km/時)に見える、要するに、相対速度が適用されなくなる、というわけですね

司

「10(km/時)の僕にも、0(km/時)のダイアナにもセレスが20(km/時)って……じゃあセレスの速度は？」

デ

「20(km/時)よ」

司 「????」

デ 「これを別の視点で考えましょう。距離 L 、速度 V 、時間 T の関係は？」

司 「 $L = V \times T$ 」

デ 「そうね。誰から見ても $V = 20$ は固定、一時間走ったとしたら、 $L = 20$ (km)。」

「だけど、司もまた $V = 10$ で一時間走ったのだから、二人の距離差は 10 (km)でなければならないはず。司から見ても $V = 20$ は固定で、一時間走っているはずなのに……」

「とすれば、変動するのは時間 T の値しかない思いませんか？ 『私にとっての $T = 1$ 』が『司にとって $T = 1/2$ 』なら…… ほん、
辻褄が合うでしょう?」

司 「おお……って、僕はわかってなきゃいけないはずだよな……」

デ 「長くなりましたが、これでおわかりいただけでしょうか?」

司 「今回は物理・生物・(司流)哲学の観念という、ファンタジーと

は少し離れた、現実的な部分が内包されたお話でしたが、こういった事に興味を持てる方がいて下さると嬉しいですね」

デ

「それでは、また次回にお会いしましょう」

セ

「オイラはいつまで走ってればいいんすかあ……？」

第九話

正気が失われ、理性は壊れ去り、『人にあらざるモノ』となったアラヴァールは、叫びとともに、握るナイフに力を込める。

それは、アリアムの首の皮を破り、肉を裂き、骨を貫いていく、はずだった。

だが、力を込めたその先、アリアムの肌に触れているはずのナイフの先端が赤い光を放ちながら、消えていく。

そこに異界の入り口でもあるかのように、黒い穴に吸い込まれるように、銀が失せていくのである。

瞳の聞く余韻はまるで桜の花弁。風に踊るように薄紅色の粒子が舞い踊る。

そんな薄紅色の光と円形の闇の中、魔法で縛られ、催眠状態にあるはずのアリアムが、はつきりと自分の意志を示す。

「いい加減に、離してくれないかしら？」
声にも表情にも感情はこもらず、瞳の輝きもまた常の明るさを失ってややくすんで見える。

常を鮮明なルビーと喩えるならば、今はガーネットと言えるだろう。

そのガーネットの瞳をゆっくりと向けて、無表情のままもう一度命じるように告げる。

「離して、くれないかしら？」

声はあくまでも穏やか、されど全てを否定するように冷たい。

目の前で起きている事態は、今の彼女の感情を具現しているかのようにである。

「ナ、何ダ……？」

フララヴァールは駭然となった。

「コレハ……」

次第に消えていく刃を見据え、呟く。

今のフララヴァールにできることは、それ以外に無かった。

彼はもう、力を込めてさえいない。

それでも“それ”は、刃を勝手に飲み込み、消し去っていく。

魔導師としての性か、ともすれば命を落とすかもしれない状況の中でも、つい考えてしまう。消えていったものは、どこへいったのだろう、と。

もしこれが“化学変化”、あるいはそれに類するものならば、“質量保存の法則”という、“世界の摂理”が適用されるはずである。反応の前後で、質量は不変のはずなのだ。

だが目の前の“それ”は、法則を無視して飲み込み続けているのである。代わりの物体が生成されている様子も無い。

「消失シテイル、ノカ……？」

在り得ない　このわずかの時の間に、何度そう思わされたのだろうか。

これはもはや“現象”ではない、“奇跡”　いや、言葉を与えらることさえも無意味だろう。

名前を付ける、それはすなわち『人の認識のための定義』であり、理解の第一歩になるからだ。

それができない、故に、人に理解することなど、到底できはしない。

そんなものが存在するのかさえ、わからない。

“無い”、“ない”、“ナイ”……

あるのはただ、圧倒的なまでの、“無”。

「一体、何ダトイウノダ…… オマエハ!!」

解せぬ謎を身体から吐き出そうとするかのように、ファラヴァールが叫ぶ。

だが、如何にしたところで、既に理性を失くした彼には、理解できようはずは無かった。

同じく、何が起きたのかを理解しかねていた者がもう一人。

桜の光子が舞い散る中、その光景を見た少年　ナタスは、体中が震えているのを感じていた。

「こ、これは……」

彼の心を支配したのは、“恐怖”。

この圧倒的な虚無を前にすれば、誰もが感じることであろう。
「見つけた……」

だが同時に、彼の心を満たしたものがあつた。

それは、“歓喜”。

「これならば、終えられる……」

“永遠”を手に入れてからの長い年月の間、ずっと探し続けてきた“望み”が、自分の“生き甲斐”が、目の前に存在している。

そのことが、彼にとてつもなく大きな喜びを感じさせていた。

「俺の“永遠”が、終えられる……!!」

彼の望み。それは、“自らの死”。

永遠の命を得てしまったがために、永遠に失われてしまったもの。だから彼は、人としての“限りある生命”を、誰よりも望んでいたのだつた。

「やっと、死を迎えられる…… 君に、会いにいける……」

ナタスは薄紅色の光に照らされて、涙を流すように微笑む。
そして、その根源に向かい、己が願いを掴むために走り出した。

アリアムは、やはり抑揚の乏しい声でフラヴァールの叫びに答える。

「私は私。それ以外の何者でも無い。まあ、少しばかり事情があるのだけれど、今のあなたには理解できないし、させてもあげられない」

「ドウイウ、意味ダ……？」

「私の存在理由は一つだから。その中に“教える”ことは含まれていない。だから、できないのよ」

そう言いながら、アリアムはフラヴァールの腕を軽く払い、己の自由を確保する。

いつしか、首元に押し付けられていたナイフが完全に消え去ると共に、紅色の光子もその輝きを失っていた。

強張った身体をほぐすように、小さく伸びを一つして、言う。

「そう、私が存在する理由はただ一つ。あなたも見ていたでしょう？」

「先程ノ消滅ハ、貴様ノ魔法ダト言ウノカ!？」

表情を変えることはなく、しかし語気にはわずかに嘲りを含めて「どうかしらね。さっきも言ったけれど、私には“教える”ことはできない」

「信ジラレン…… オマエハ一体何ナノダ!!」

「何度も言わせないで。問いに答えることはできないの。それに、そんな事には意味も……いいえ、もういいわ。あなたにはどうせ、理解できないのだし。」

それとね、あなたはもう、終わっているの。だから……消えて」

「ッ!？」

次の瞬間、ファラヴァールの視界に飛び込んできたのは、新たな光。

細く、長く、しかし力強く、妖艶な、白銀の刃。

そして、金色にして蒼白の、真円の月を宿す瞳。

ナタスが、二人の間に割って入るように、剣を振りかぶりながら駆けて来る。

「グワアアア!！」

気付いた時には、銀の閃光がファラヴァールの左腕を通り抜けていた。

老衰を迎えつつある彼の腕は、何の抵抗もなくボトリと地に落ちる。

「アアアアアア!！」

異様な喪失感が彼を襲っている事だろう。

どうしたら良いかわからない、というように、『失くした腕』を振り上げて叫ぶ。

噴出す紅い液体は地面に着く前に血霞となって宙に漂っていた。

「散れ!！」

ナタスは絶叫する男、“黒の主”目掛けて、再度剣を振り下ろす。今度は腕ではなく、肩口から、脇腹までを銀光が通過するように。

「グ、ヌウア!！」

しかし、ファラヴァールとて幾度ももの戦いをくぐり抜けてきた戦闘術者だった。

すんでのところ冷静さを取り戻し、ナタスの必殺のはずだった剣の致命傷を避けて、その反攻として火の魔法を、残された右腕でナタスの腹に直接撃ち込む。

ドン、という炸裂音。それは、すでに“火”を超えて、“爆発”

になっていた。

その爆発に、ファラヴァールの右腕が吹き飛ばされた。

苦痛に表情を歪めつつも、その爆風に乗って、ファラヴァールは大きく距離を開けることに成功する。

右腕一本の犠牲で、ここまでの『命の距離』を稼げたのは、上出来と言えるだろう。

コンナ所デ、死ンデタマルモノカ……

一方、同じく直撃を受けたはずのナタスは、わずかにも揺らぐことなくその場に踏みとどまり、ファラヴァールを睨みつけている。

冷たい瞳から得るイメージは、“死”。“視線で殺す”とは、まさにこのことであろう。

その死の視線に抗うために、ファラヴァールは最後の力を振り絞る。

コンナ所デ、死ニタクナイ……

ファラヴァールの最後の力。人として在りたかったがための抵抗として、“最後まで隠していたかった力”。生き残るために、それを使う事を選択する。

「コンナ所デ、私ハ、貴様ラナドニ、殺サレタリハセン！」

叫びと共に、背中 of 衣服が裂けていく。そこに現れたのは、“二本の腕”と、“尾”だった。

腕は長く鋭い爪を持ち、丸太のように太い。骨が浮き出て見える程に瘦せた自身の身体とは、あまりにも対称的である。

尾は先端に鋭い棘がついた、“サソリの尾”だった。その部分にだけある甲殻は、骨と皮だけの身の装飾としては、歪に過ぎた。

「そうか、お前は“生体改造”のスペシャリスト……道理で合成し

た魔獣を使い魔に持っている訳だ。

それにしても、自身も“四本腕”だったとは。まあ戦いには、それくらい数があるほうが都合もいいか。“人間離れた戦い”にも対応できる」

ナタスが嘲るように言う。もちろん、ファラヴァールの陳腐なプライドを見抜いた上での発言である。

「ヤカマシイワ、化け物ドモガア！！」

ファラヴァールは『三本目と四本目』の腕を振り上げると、その掌の間で大きな火球を作り出す。

「燃工尽キロ！」

お辞儀をするような格好で腕を前に放り出し、火球をナタス目掛けて撃ち出す。

轟々と燃える灼熱の球は、さながら月を炒る“太陽”か。

「下がって」

だが、その太陽に対したのは、アリアムだった。小さく言うと、ナタスを庇うように前に出る。

「こんなものは、いらぬ。消えなさい！」

アリアムの命と共に再び桜の光子が舞い踊った。その黒い闇に吞まれて、太陽は即座に輝きを失い、月夜の世界となる。

まるで申し合わせていたかのような絶妙なコンビネーション、太陽が消えると共に今度はナタスが前に出る。

双月は瞬時に距離を詰め、更にその前、閃きを伴った一撃を降らせる。

だが、

「カカツタナ」

刃が脳天に直撃する寸前、ファラヴァールはその一撃を、背中の両腕で押えつけた。

「何だと!？」

握り込むように受け止められたナタスの刃はビクリとも動かない。筋肉を纏った太い腕は、虚仮威しではなかった。

アラヴァールは掌から血を流しながら、刃の向こうで、ニヤリと嗤う。

「捕マエタゾ」

「ほう、血はまだ紅いままなのだな」

ぎりぎり握る剣に力を込めて、ナタスは挑発する。

「ホザクナ! コレデ、終ワリダ!!」

アラヴァールの股下から、ナタスの胸目掛けてサソリの尾、その棘が向う。

「“消えなさい”」

しかし、その棘も、やはりナタスに届く事はなかった。

後ろを追走していたアリアムが、再び前に立ち、その尾に触れる。

「ナ……?」

すると、その尾は薄紅色の光の中で消えていった。

痛みもない。血も出ない。喪失感さえもない。

ただ、『消えた』。

「オノレ……オノレ!!」

アラヴァールは憎悪に満ちた表情で、悔恨を込めた声を上げた。

そのわずかな時間こそが、彼の命の刻限、残されたわずかな時間である事も知らずに。

「ああ、これで終わりだ……」

アリアムが後ろに飛び退いたのを確認して、ナタスが静かに告げる。

そして、彼は己が握る魔剣 細雪 に魔力を込める。

その主人の力を受けて、魔剣は白い輝きを放ち、その真なる能力を発揮した。

ナタスの最後の切り札 接触面を分子レベルで分解しながら切り裂く、それこそが、“細雪”の真なる能力だった。

それは舞い散る雪のように、フラヴァールの腕を、肩を、胸を、分解して切り裂いていく。

右腕を代償に開けた、”命の距離”。

それが失われた時点で、フラヴァールの命運は尽きていた。

「ギヤアアアアアアア！」

ぐしゃり。

独特のぬめりを帯びた湿り気と、柔らかくも重たいモノが地面に落ちる。

噴水のように噴出す鮮やかな紅い液体は、喉に絡みつくような匂いを鼻に突き刺してくる。

円形に広がった池は、赤い雛粟ひなげしの花にとてもよく似ていた。

「うっ……」

雛粟の中央で上がる、唸り声。

それに気が付いたナタスが、冷徹な瞳のまま、近づいていく。

「まだ、息があつたのか……」

フラヴァールがアリウムにそうしたように、ナタスが足元に転がる“黒の主”の首に剣を突きつける。

「私は、こんなものでは……死な、ない……」

今にも消え入りそうな、それを拒むために上げられた、フラヴァールの小さな声。

しかし、そんな彼の願いも、少年の携える絶対的な死の前には、虚しいだけだった。

「自身を改造していたために、生命力も強くなっていたか……」

最後に一つだけ聞かせる。貴様は本当に、あの魔法集団、“コロラーレ”の“黒の主”なのか？ 本当に彼らが、“永遠の秘法”を求めて動き出したのか？」

「そ、そうだと。魔法ならば、どんな事も可能になる。それこそ、神の領域でさえも、軽々と踏み越える事ができるのだ……」

我々は、必ず永遠の命を手に入れる…… この世界に、科学など要らぬ。魔法だけが唯一にして絶対の力だと、魔法こそが世界を支配するに相応しい力だと、知らしめるために！」

「そうか……残念だ」

ナタスは一瞬だけ淋しそうな顔をした。しかし、血を流しすぎたフララヴァールにはもはや、その姿は見えていないだろう。

フララヴァールは咳き込むように、身体にほとんど残されていないだろう血を吐き出した。

苦しみに喘ぐ姿に、ナタスが告げる。

「安心しろ、すぐに楽にしてやる……」

死を命じる 否、死を“約束”する言葉を。

「死ね……」

「!? い、嫌だ！」

フララヴァールは振りかざされた白銀の刃に、目を見開いて叫ぶ。「私はまだ……死にたくない!!」

それは“生命”あるものならば誰もが抱く、“死にたくない”という願い。

故に、“生命”あるものならば誰にも届く、“生きたい”という強い願い。

「死にたくない、か…… そう思うのが、普通なんだろうな……」

だが、唯一の例外たるナタスには、その願いが届く事はなかった。その想いを抱ける事を、羨むように、冷たく言い放つ。

「死ぬるだけ、幸福と思え……」
「嫌だ、嫌だああああ……！」

ぐしゃり。

その音を最期に、“黒の主”ファラヴァールの全てが、途絶えた。

断末の悲鳴は誰がためか。

それを境に、悲嘆の夜は、ようやくの静寂を迎えようとしていた。

第九話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

雰囲気豹変したアリアムと彼女の使う謎の魔法。

アリアムの新たな魅力となっていれば良いのですが……

第十話

着替えを済ませ、自分の鞆の中身をチェックする。

洗った替えの衣服が、数枚。店で買った三日分の携帯食料と水は、定位置に。

うん、大丈夫。　　そう一言呟き、帽子を被って歩き出す。

どこまでも広がる海が、今日も綺麗に輝いていた。

「う、ん……　まぶしい……」

アリウムがベッドの中で、太陽の光から逃げるようにモゾモゾと動き回る。

昨夜はどうやら、カーテンを開け放したままで眠ってしまったらしい。

頭上に据えられた窓から、陽の光が容赦なく降り注いでくる。

燦々と照る太陽は、『早く起きろ』と焚き付けてきているようだ。これは、ある意味、目覚し時計の騒音よりも効果的である。

「ふぁ……　もう、朝なんですな」

その太陽の波状攻撃に負けて、アリウムは布団から顔を出すことにした。

窓の外の、天辺だけが見える街路樹の緑で目を落ち着ける。

小鳥のさえずりと共に、活気に満ちた町の人たちの声が、窓の向こうから聞こえてきていた。

この町の空は、都会の、やや白をぼかし込んだような“青空”ではなく、まさに“青”たるを示している。

そして、その真ん中、字義通りの“天上”に高く高く、堂々と座る、太陽。

それを見て、アリアムはふと違和感を抱き、ベッドから飛び起きる。

「お日様が、“高い”……？」

日が高い　そのの意味するところ、すなわち、

「もう、お昼……なのぉ〜!？」

寝坊…朝、遅くまで寝ていること　彼女の、悪い癖の一つだった。

ふと眺めた町は、昨夜とは違う喧騒の中にある。

それは恐怖による悲鳴ではなく、力強く『生きよう』とする人達の、活気に満ち溢れた声。

そんな皆を励ますように、また祝福するように空に向かい、願いを込めて口笛を鳴らす。

幸福の日々が遠く、永久とわに続きますように、と

アリアムがベッドから跳ね起きたちようどその時、かちやりと音を立てて部屋の扉が開かれる。

そこから顔を見せたのは、灰色の瞳をした一人の少年　ナタスと、彼のファミリア（使い魔）の猫達だった。

「おはよう。随分と騒々しい寝起きなんだな」

開口一番、ナタスはアリアムをからかう。もちろん、彼女の元気な様子を認めた上で、であったが。

一方のアリアムは、からかわれた事に気付けなかった。思わぬ来客に少しだけぽかんとなり、しかしすぐに気を取り直して、条件反射のようにとりあえずの挨拶を交わす。

「あ、ナタスさん。おはようございます……って、ノックくらいし

「てくださいよお」

「ん？ ああ、すまない。昨夜からこの部屋にいさせてもらっていたんでつい、な」

「昨夜からって、何でナタスさんが私の部屋にいるんですか!？」
見れば、部屋の隅にはナタスが使っていたらう毛布が置かれていた。これはつまり、昨夜から彼はこの部屋にいた、ということのなによりの証拠であろう。

「勝手に女の子の部屋に入ってくるなんて、ルール違反ですよ！」
アリウムは一人の女性として至極当然の主張を、一人の男性たるナタスにぶつけた。だが、

「それを言うなら、“マナー違反”だろう……」

「あ……」

彼女の“主張”は一瞬にして一蹴された。苦笑しながら言うナタスの言葉を受けて、アリウムの頬が真っ赤に染まる。

確かに、“ルール違反”というのは、色んな意味で微妙な言い回しだ。

「と、とにかく、きちんと説明してください！ 何でナタスさんが私の部屋にいるんですか？ もしかして、看病していてくれた、とか？」

「どうしても、我慢できなくなってな……」

「へっ？」

ナタスはきりきり、首を鳴らしつつ答えた。（この時、密かに猫達が各々の情感でぴくりと反応していたことは、内緒である）

その解答に、アリウムが“更に”顔を真っ赤に染め上げる。窓から見える青空とのコントラストが、それはもう、素晴らしい。

「なっ、なななな!？」

絵に描いたように慌てふためくアリウムの姿を見て、ナタスがやや意地悪に笑った。

「くつく…… 君は本当に期待通りの反応をしてくれるな。見ていて飽きないよ。」

昨夜の一件で俺の部屋が半壊してしまっただけ。天井も窓も無い状態なので、寝るには潮風が寒くて我慢できなかったんだ。だから、悪いとは思ってたが、こっちの部屋に避難させてもらっていたんだよ」

アリウムはようやく“昨夜の一件”を思い出す。

朱に染まりゆく町と、幸せを奪われていく人々を。

巨大な魔獣を引き連れた、歪な心を持った魔導師を。

町ごと焼き払わんと、全てを奪い取らんと襲い来た、盗賊たちを。その場に居合わせながら、誰かを助けるどころか、何も出来なかった自分を。

そして、あまつさえ、逃げる事もかなわず、相手の魔導師の手に落ちてしまったことを。

身体を自由を奪われ、意識も朦朧とする中でなお聞こえてくる、悲鳴と慟哭と叫喚と哀号と……

「それに、君の看病もできるし、ちょうど良かったんだ」

「そう、だったんですか…… 心配させてしまって、ごめんなさい

……」

まさに地獄のようだった夜を思い出して、アリウムの心は暗く沈んでいく。

何も出来なかった自分を戒めるように、掌を握り締め、唇を堅く噛み締める。

けれども、これ以上彼を心配させてはならないと、少しだけ無理矢理に笑ってみせた。

「私は、大丈夫」

「アリウムうー!!」

「ふぐっ!?!」

とそこに、大きな声で叫びながら白猫がアリウムの胸に、もとい、鳩尾みぞおちに飛び込んできた。

しかもその勢いには一切の加減が無く、アリウムは鳩尾でその衝

撃を全て受けて、咳き込んでしまった。

だが、その白猫が涙を流していることを、そして、その理由を知って、そつと声をかける。

「……セレス、おはよう」

「よかった…… よかったツス……」

泣いていることを隠そうとしているのだろうか。ナタスの使い魔たる白猫セレスは、アリアムの胸に思いきり顔を押し当てていた。

これでは息苦しくないか、そんな心配もしながら、彼の心が安まるように、アリアムは優しく彼を抱きしめる。

「私は大丈夫。大丈夫だからね、セレス」

「アリアム、ごめん、ごめんツス…… オイラ……」

泣きながら許しを乞うセレスを宥めて^{なだ}いると、同じくベッドに黒猫がぴよんと飛び乗ってきた。

「セレス、いい加減になさい。男のくせに情けないですわよ」

ナタスが連れている使い魔のもう片方、ディアナである。

「アリアムさん、おはようございます。お気分はいかがですか？」

「ディアナ、おはよう。少し頭は痛いけど、気分は爽快よ！」

「よかった。なかなか強力な暗示を受けていたようでしたけど、大事無いようで安心しましたわ」

「ごめんね、心配かけて。それにしても、魔法ってやっぱり凄いな。あんなことも出来ちゃうんだから……」

そのアリアムの言葉を受けて、ナタスが真剣な表情で問い掛けた。

「一つ聞きたい事がある。魔法に関われば、多かれ少なかれ、昨日のようなことが起こる。それでも、君はそれでも“魔法使い”になることを望むか？」

「もちろんですよ」

「危険だぞ？」

「承知の上です…… どんなに危険でも、それが私の“夢”だから。だから、決して諦めません」

ナタスは力強く言い切ったアリウムを見やりながら、あの時出会った、“もう一人のアリウム”のことを思い出す。

彼女は確かに、こう言っていた。アリウムは“どんな事でも受け入れられる”と。

現にアリウムは催眠術をかけられて、身体の内どころか命の危険さえもあつたというのに、それを『凄い』と言って感心しているのだ。

それこそ彼女は、自分の命に直接関わること以外は受け入れてしまふようである。

そんな、あまりにも“素直すぎる”彼女を見てみると、確かに『危険だ』と感じてしまふ。見守つてあげなければならぬ、と。

ナタスはその気持ちと、“もう一人のアリウム”との約束、そして自分の願いを叶えるという打算を込めて、ずっと考えていた提案をする。

「その夢、俺が叶えてやろうか？ 魔法を教えてやろう」

「えっ！？ ほ、本当ですか、ナタスさん！？」

その提案に、アリウムはまず驚いて。

「ああ。ただし、魔導師というのは一朝一夕でなれるものではない。だから、当分は行動を共にしてもらおう」

「やったあ！ 私にもお師匠様が！..！」

次に、喜んで。

「絶対服従とまでは言わないが、出来得る限り、俺の言葉を守つてもらおうぞ。いいな？」

「はい、ありがとうございます、ナタスさん！」

そして、感動して。

こんな短い会話の中で、彼女は三度も表情を変えた。見事なまでの百面相である。これでは、“もう一人のアリウム”の表情が変わらないのも、仕方が無い。

だが、こうして見てみると、“もう一人のアリウム”というのも、

アリアムの一面、と言った方が良いのかもしれない……
ナタスはふと、そんな気がしていた。

旅の安全を願い、励ましの声を掛けてくれる人達。

そんな中、一人のおじさんが出来たばかりだという写真を手渡し
てくれた。

先日撮った、町の皆との写真。

“ミチカス”という名の楽しい思い出が、また一つ増えた。

この港町“ミチカス”を彩った悲鳴の夜は、全ての元凶 “黒
の主”ファラヴァールの最期の叫びによって、ようやく平穩の時を
迎えていた。

いつしか月はその輝きを失い、次第に東の空が白みを帯びてくる。
空は蒼さを取り戻し、世界に再び光が灯る。

もうすぐ、夜が明けそうだ。

「さて……」

血霞の晴れる頃、ナタスが少女の方へ向きを直した。

そして、わずか表情を険しくして、問い掛ける。

「いくつか聞かせてもらいたい事があるんだが……？」

「いいわよ。何かしら？」

それにアリアムは、どこか嬉しげな声で応えた。まるで、話が出
来ることを喜んでいるかのようである。

もつとも、表情は変化のないままであるが。

「君は、アリアムか？」

ナタスは、自分の知っている少女とは似ても似つかない、性格の豹変した少女に問うた。

やはり表情の険しいまま。

「あなたも同じ事を言うのね…… 私は私よ」

「そんな事を聞いているんじゃない」

「わかっている。でも、それ以上は言えないのよ。『言わない』のじやなくて、『言えない』の」

今度は、アリアムは少しだけ淋しそうな声になる。

彼女は感情を表情には出さないものの、声からはそれを理解することが出来るようだ。

つまりは感情が欠落しているのではなく、表現する術がそれ以外にない、ということなのだろう。

そう分析をしながら、ナタスが言う。

「さつきもそんなことを言っていたな…… 存在理由に含まれていない、と」

「ええ」

『存在理由は何か』という、暗に問い掛ける会話でも、やはり彼女はそれを言おうとしなかった。

ふむ、とナタスはわずか思索し、質問の仕方を変えてみることにした。

「先程の“消滅”の魔法は、君のものか？」

「ええ」

「では君の存在理由、それは、『消滅させる事』か？」

「いいえ…… ふふ、考えたわね」

アリアムは再び嬉しそうな声になる。

彼女は『教えられない』のであって、『答えられない』のではなかったのだ。

それを見越して、ナタスはわざとYES/NOで答えられるような質問を繰り返したのである。

「観察するのが癖だね。とはいえ、これでは得られる情報にも限りがあるか……」

「そうね。自発的な会話ならば保証されているけど、私にはやっぱり、“教える”ことはできない。そもそも、私が会話をしていることと自体がまず無いのだけれど……」

自分を理解してもらえ、そのことに満足しているように、そして同時に、どこか淋しげな感情を言葉に籠めて、アリウムが言った。ナタスはそんな彼女の心を汲み取るように、ゆっくりと言葉を選ぶ。

「それでも俺は、君のことが知りたい」

「……うそつき。あなたが知りたいのは“私”ではなくて、私の扱う“魔法”、でしょう?」

ナタスの言葉に、しかしアリウムは意地悪に応えた。アリウムもまたナタスの心を汲み取っていたのである。

本心を見透かされていた。その事に少しだけ不快感を抱きつつ、浅はかな自分を嘲りながらナタスが答えた。

「そう、だな」

「やっぱり…… まあいいわ。どちらにしても私のできることは一つだし、あの子はそれでも、あなたを“許容”する」

“許容” 何気なく発したのであるうアリウムのその言葉が、ナタスは妙に気になってしまった。

「あの子は疑うことを知らないから…… 誰にでもすぐに懐くと思わない?」

「確かに、人懐っこいところはあると思うが……」

言われてナタスは、彼女と出会ったばかりの時のことを思い出す。『坂道でぶつかる』、という文字通り“衝撃的”な出会いをして、

そのお詫びに、と食事に行つて以来すぐ、彼女とは親しくなつたと見えるだろう。

しかも必要以上の人付き合いをしない自分が、である。今も、彼女のために戦っていた、と言えなくもない。

さらに、アリウムが言葉を続ける。

「でもそれは、『どんな事でも受け入れられる』という長所であると同時に、危険な面でもある。

だからこそ、そのアンチテーゼである“私”が存在する」

「“許容”のアンチテーゼ。……まさか、君の存在理由は“拒絶”！？」

「……そう。“アリウム”の持つ“拒否”という感情のほとんどを私を持ち、残されたわずかな部分があの子に宿っている。そして、そのわずかな“拒絶”の意志があの子の心に現れた時、私がそれを具現する……」

その言葉を聞いて、ナタスは確信した。

“消滅の魔法”は間違いなく存在しているのだと。そして、彼女がそれを握っていると。

ナタスは逸り、猛る。

「教えてくれ、その“消滅の魔法”を！ それさえあれば、俺の願いが叶うんだ……！」

しかし、アリウムは首を振りつつ、こう言った。

「無理よ。尋ねられてしまったら、“教えられない”わ。あなたにしては珍しく、ドジを踏んだわね」

「あ……」

焦っていた。人は望みがすぐそこにあると思うと、こんなにも冷静さを欠くものなのか、とナタスは初めて感じていた。

無論、彼は気付いていない。それが、“感情の暴走”であったことに。

「な、ならば、その魔法を、俺に……」

「それも無理よ」

慌てているナタスを嗜めるように、アリアムがそつと言う。

「あの子は、あなたの事を拒絶していない。だから、あなたに対して魔法は発動できない。」

言ったでしょう？ 私とこうして話していること自体、奇跡に近いのよ。私の領分は“否定”なんだから」

「なら奴のように、君を殺そうとすれば……！」

「落ち着いて。そんな事をして、あなたの剣が消えるだけよ。それだけで、“死”は拒絶できる」

もはや、ナタスにはどうする事も出来なくなっていた。

ただ、立ち尽くすのみである。

そんなナタスに対し、アリアムは不意に背を向けた。その後を追うように、彼女の長い髪がふわりと宙に舞う。

まるで、彼女の周りだけ時の流れが遅くなったかと感じるほど、優雅に。

そしてアリアムは、わずかに空を仰いで、またどこか淋しげに語る。

「さて…… 私はそろそろ眠るわ。仕事は済んだし……」

「ま、待ってくれ！」

ナタスは去りゆく恋人を引き止めようとするかのように、手を前に差し出した。

しかし、

「嫌よ」

アリアムはそれを、“拒絶”した。

「私は否定するために存在している。だから、この子が受け入れているあなたとは、相容れないの。ごめんなさいね……」

絶望に打ちひしがれ、項垂れるナタス。

そんな彼に、最後に一言だけ、とアリアムは声をかける。

「お願いがあるの。あの子のこと、護ってくれないかしら？ “私

”が出てこなくてもいいように……”

そんな少女の願いに少しだけ、ほんの少しだけ考えて、ナタスは応える。

「護る事に関しては、良いだろう。だが、“君”が出てこなくてもいいように、というのは、断らせてもらおう。

俺の望みを叶えるには、君の魔法が必要だ」

そんな少年の答えに、わずか、ほんのわずか微笑んで、アリアムも応えた。

「君が必要だ」とは言ってくれないのね……」

「素直な気持ちの表現さ……」

「まあ、いいわ。“護ってくれる”って約束してくれたし……

それじゃあ、この子、の事、お願い、ね……?」

そう言って、少女はガーネットの瞳を閉じた。

そして、力なく倒れる少女の身体を、少年が優しく受け止めた。

それが、全ての始まり。

二人を紡ぐ幸福と、そして、終焉の

アーチ状に象^{かたど}られた、この町の門。この門をくぐりぬけたとき、また旅が始まる。

その“旅の始まり”に少しだけ早く進んだ仲間達が、見守るように先に立って待っていた。

けれども、もう少しだけ待って欲しい。お礼を言わなくちゃいけないから。

この、精一杯の気持ちを伝えるために。

「皆、準備はいいか？」

ナタスがアリアムの師となった日から二日後、ナタス達はとうとうこの町、“ミチカス”を発つことを決めた。

「これからはアリアムも一緒なんツスね〜！」

アリアムが体調を取り戻し、ナタスが旅の支度を整える頃には、町もほぼ完全に再建が終え、かつての賑わいが取り戻されていた。

「下心が丸見えですわ。みつともない……」

事件以来、“魔法使い”を警戒していた町人も、献身的に再建に協力していたナタス達を見て次第に心を開き、今では町を発つことを惜しんでさえくれている。

それ故か、当日には町の入り口である石門のところにまで町人達が見送りに大勢集まって、口々にお礼を述べ、名残を惜しみ、旅の安全と希望の成就を祈ってくれていた。

そんな喧騒の中、少年とその使い魔達が石門を出て、最後となった少女を振り返って待つ。

残された少女はほんの少しだけ躊躇って、しかしすぐに少年の後を追うように石門をくぐり抜けた。

そして同じく、振り返って丁寧に頭を下げ、笑顔を交わしながら、朗らかな、綺麗な声で、町の皆に告げる。

「皆ありがとう！ 行って来ます!!」

蒼穹はどこまでも蒼く、煌々と輝く太陽は彼方に虹を作り出す。

それは、希望を叶えた時にくぐることの許される、“夢のアーチ”。

彼らは虹の袂たもとを目指し、各々の夢を目指し、歩き出す。

さあ、行こう。新たな旅の始まりだ。

町の中心、シンボルたる時計台の鐘が、彼らの旅立ちを祝福する
かのように高く、乾いた音色を響かせた。

第十話（後書き）

いかがだったでしょうか？

これにて『Moon at Tomb』第一章終了です。
楽しんでいただけたなら良いのですが……

それにしても今回のお話及びこの物語、色々な事を詰め込みすぎて、よくわからなくなってますよね……申し訳ありません。

第二章以降は、もう少し整理しつつ書いていこうと思っています。
こんな作品ではありませんが、これからもお付き合いいただけると嬉しいです。

第二章『ココロ』 第一話（前書き）

第二章の始まりです。

この章ではアリアムをメインに描いていこうかなと考えています。
もしよろしければ、お付き合いください。

第二章『ココロ』 第一話

プスプスと炎の燻る音が響いてくる。

黒い地面に触れる背中が熱く、雨の濡らす頬はとても冷たい。

皮膚と脂肪の焼ける匂いが鼻を刺し、胃液の逆流したときのような酸を舌の上を感じる。

なんとか首だけを動かして、周囲を見た。

見慣れたあの教会は、あの子供たちは、あの笑顔は、もうここにはない。赤い、紅い、緋い炎の中に消えていつてしまった。

夢であつて欲しいと願いながら、それでも動くたびに体中を駆け巡る激痛は、その酸鼻を極める光景が現実であることを告げてくる。

「何故……?」

そして最後に、自分の信じてきた“神の偶像”を仰いだ。

天上から下界の様子を見守っている姿を象つたその像は、今は自分を見下しているようだった。

「何故、あの子たちなのです……」

純白だったはずの像はススにまみれ、深夜の闇を受けて黒ずんでいた。

落下物にぶつかったのだろうか。口元に出来た傷が、まるで悪魔のように禍々しい歪んだ笑みを作り出している。

「あの子たちはずっと苦しんできた…… その末に、ようやく得た安息の時間であつたはずなのに、たとえそれが永遠でないとしても

幸福であつたはずなのに…… それなのに何故、あの子たちだけがこんなにも苦しまなければならぬのですか？

……何故、何も応えないのです!？」

これが、自分の信じてきた神の“本当の姿”なのか。奴は人々に平安と幸福をもたらすのではなく、心痛と苦悩を与えるのだ。

だからこそ、あなたはあの子たちを奪つた？

自分から、世界から。

そう思ったとき、頬に暖かいものを感じた。それはそのまま頬を伝い、地面に落ちて儚く消えていった。

「ク、ククククククククククク……」

そしてそれが消えるとともに、身も心も冷たく、冷たくなってゆく。

「そうか、それがあなたの本性か……」

ならば私は、あなたに同じ思いを味わわせてくれよう。あなたからあなたを信じる者たちを、この手で奪い取ってくれる!

そして、あなたから奪い返してやる……我が、幸福の日々を!！」

もう何も感じない。

この雨の冷たさも、炎の熱さも。

もう何も見えない。

その胸の中の、深い憎しみ以外。

もう何も考えない。

あの日の幸福を、ただ祈るだけ。

深淵の闇の中、女はゆらりと立ち上がり、そしてゆっくりと歩き

出した。頬に光の筋を残したまま。

あの暖かさはなんだったのだろうか。

もう、彼女にはそれさえもわからなかった。

・・ン、・タン、カタン……

段々とはつきりとしていく音、次第に色付いていく景色。

信都へ向かう列車の中、それらを未だぼんやりする頭で受け止めて、アリアムは現^{まわ}へと戻ってきた。

「寝ちやった……？」

覚醒のための儀式であるかのように、両手で両目をごしごしと擦る。

何か夢を見ていたような気もするが、よく覚えていない。

「あゝあ、またやつちやった」

この“列車”という乗り物は、長い距離を短い時間で運んでくれるとても便利なものだが、同時に“睡魔”という、如何ともし難いものを送り届けてくれる。

アリアムとしては、ゆつたりと移ろいゆく景色を、のんびりと眺めていたいと思っているのだが、この睡魔を退けられた例は一度も無い。

確かに今朝はこの列車に乗るために朝早くの起床となったが、乗ってしまえば“ただ座っているだけ”で目的地まで運んでくれるのだ。

町から町へ野を越え、山を歩く、そういった徒歩での旅路に比べればずっと楽なはずなのだが、どうしてこう、列車の旅というのは

眠くなってしまうのだろう。

「あ……」

ふと見ると正面、向かい側に座っている少年　ナタスも、窓際の縁に頬杖をついて、こくりこくり、舟を漕いでいる。

また彼の、そして自分の膝の上にはナタスの使い魔たち　彼はファミリー
“家族”と呼ぶが　、黒猫ディアナと白猫セレスが、どちらも丸くなつて眠っていた。

アリアムはそんな三人（？）の姿を見て、なんだかちよつとだけ、ほつとする。

「列車に乗ると眠くなってしまうのは、私だけじゃないんですね……」

……

「う、ん……」

「！」

漏らしてしまった声が大きかったのだろう。ナタスを起こしてしまつたらしい。

「ん、寝てしまっていたか……」

「ごめんなさい。起こしてしまいましたか？」

今度はできるだけ小さな声で言つて、顔の前で手を合わせる。膝の上のセレスを起こさないよう、できるだけ動きを抑えて。

そのアリアムの気遣いを理解し、同様に小さな声、最小の動きでナタスも応える。

「いや、構わない。それより話し相手が“これ”では、退屈だったろう？」「

「え？」「

言われて、列車に乗ったばかりの頃を思い出す。

そういえば、列車は久しぶりだったので、乗り始めのときはかなりテンションが上がつて、ものすごい勢いで喋っていたような気がする。

だが、

ナタスさんも嫌な顔しないで、付き合ってくれていたのに……途中からの記憶が 無い。

自分で話すだけ話して、それに疲れて眠り込んでしまったのか。毎度の事ながら、ドジで間抜けな自分に、嫌気が差す。

「どうした？」

いつの間にかなっていた陰鬱な気持ちだが、表情に出してしまったのだろう。ナタスが問い掛けてくる。

「い、いえ！ 私も、寝ちゃってましたし…… あ、あはは……」

ナタスの眠った後から、ではなく、話の途中から、であるが。

「そうか。それならば良いんだが」

そんな陳腐な誤魔化してもきちんと受け取って、ナタスは微笑む。この聡い少年のことだ。アリアムが途中で眠ってしまったことも気付いているのだろう。

気付いて、その上で自分が先に眠ってしまった、と言ってくれているのだ。

これは、本当に申し訳ないと思う。

ナタスさん、ごめんなさい。だけど……

申し訳ないとは思いつつ、でもなんだか嬉しくて、アリアムはナタスの心遣いを甘んじて受けることにした。

膝上のセレスを見やる振りをして、わずかに頭を下げることで謝罪とする。この少年には、きっとそれで伝わるだろう。

「あ、そうだ、ナタスさん、」

ふと、アリアムはこの物知りな少年ならば、何かわかるかもしれない、と思い、尋ねてみることにした。

「どうして列車に乗っていると、眠くなっちゃうんでしょう？」

ふむ、と顎に手を当てて思索すること数秒、ナタスはこう答えた。

「この列車の心地良い揺れが、小さい頃の“ゆりかご”に似ているからじゃないか？」

カタン、カタン、カタン……

車輪のレールを踏む足音が、気持ちの良いリズムで響いている。

ああ、そうか、ゆりかごなのか。だとすれば、この音は、“母の子守唄”みたいなものなんだろう。

そんなことを思いながら、アリアムは流れる景色を瞳に移していた。

列車は子守唄を歌いながら、信都“ステファン”へ向かう。

第二章『ココロ』 第一話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は序盤と言う事もあって（言い訳ですが……）、かなり短いですよね…… 申し訳ありません。

諸事情につき、次回の投稿はかなり遅くなってしまうと思いますが、待っていてくださると嬉しいですよ。

それでは、また次回に。

第二話（前書き）

あまり推敲していないので、テンポとか滅茶苦茶だと思います。
ご容赦ください。

第二話

駅 乗客や貨物の積み下ろしなど行うための専用の設備を持った施設。

鉄道列車技術の確立・発達・普及によって、この施設を持つ町は重要な役割を担うようになった。

世界の主要都市はもちろん、大抵駅を備えるようになっていたし、駅のなかった町も鉄道の中継点として大いに発展していく。

乗客の乗り降りでの人の往来が多くなり、物資の交換によりその土地には無い多くの交易品を得られるからである。

たとえ山に囲まれた田舎であっても、駅を備えるだけで“都市”と呼ばれるくらいに発展したところさえ現れている。

今ではその土地にしかない、その町特産の味覚を折り込んだ“駅弁”なるものまでがブームになり、わざわざその駅弁を食しに行く人が出てくるほど、マニアが多い。

マニアといえば、列車そのものに感嘆を抱き、列車の写真や模型を集め、稼動する時の音を聴くだけでどんな車種かがわかるという、熱烈なファンさえも存在するのである。

“ブルステーション” この街のこの巨大な駅を、人々はこう呼んでいた。

これは列車を受け止める様が“雄牛”のようにたくましい、という喩えだけではない。

“ブル”とは、ダーツ板の中央にある円のこと。この駅は世界における交易、旅客、輸送の中心で、皆が想いを馳せて目指し行く、そういった意味も含まれているのである。

建物は左右両側と中央部分に据えられた塔を繋ぎ合わせたかのような“V”の字型をしている。

入り口は各塔に設けられていて、特に中央塔からはレールをまた

ぐように通路が渡ってあった。この通路を利用して、各路線のプラットホームへ降りていく、というわけだ。この通路も含めれば、“Y”の字という表現の方が正しいのかもしれない。

外壁はほぼ全てが赤いレンガで覆われており、頑健さの中に温かみも持ち合わせ、さらにはレンガ造り独特の“継ぎ目の美しさ”が際立っていた。

そんなブルステーションに、ゆっくりと列車が駅に到着した。乱れた呼吸を整えるように水蒸気を吐き出しながら。

その姿たるやまさに威風堂々。黒い車体のもつ圧倒的な力感と躍動感には畏敬にも、また憧憬にも似た感情を抱かずにはいられないだろう。

列車の各車両、前後に備えられた扉が開くと、乗客たちは列をなして続々とプラットホームへ降りていった。

黒い車体の熱気に当てられつつも、先を争うように改札を抜け、都市の中へ溶けていく。

その都市の名は信都“ステファン”。現在の世界の中枢たる都市である。

ステファンはかつて魔法と科学が争った戦争時に、『魔法と科学の融合』という。これは、かつて同様の考えを持った国家が凄惨な最期を遂げたことより、“未来の無い異端”として蔑まれていた思想の元に立った新勢力“教団”の興った街だった。

大戦に勝ち残った“教団”がその後、かの地を拠点として自分たちの思想を教え、広めるために交通網の整備や治安維持に努めたことで、どの国よりも発展した都市になったのである。

“信都”と呼ばれるのは、そういった『思想を信じる者』たちが造り、住む街、あるいは『新しい希望を信じる者』たちが目指す街、

という意味からである。

そういったことから、この駅が“ブルステーション”と呼ばれる理由も、この都市がいかに巨大なあるかも、容易に想像することができるだろう。

特に駅前はそのらの“町”とは比較にならないほど賑やかで広く、なによりも人が多い。道も複雑で、余程歩き慣れてでもない限り、大人でも簡単に迷ってしまう。

そんな迷子が一人、ここにいた。

「ナタスさん、どこですか？」　　「っていつか、ここドコですかあ……」

黒い丈長のワンピースに深紫色の外套を羽織り、黒い帽子を被った全身を黒で包み込む、しかし故にこそ長くしなやかな栗色の髪と燃えるようなルビーの瞳が印象的な少女　　アリウムである。

「まあ、落ち着くツスよ。オイラも今、探してるツスから」

彼女のバカみたいにでかい鞆の上に座って周囲を見回しながら、半べそをかいている彼女をなだめるように言ったのは、雪のように白く、優美な毛並の猫　　セレス。

アリウムの連れ　　彼女の師の“使い魔”で、人の言葉を理解し、魔法までも操ることができる彼は、今は主人の命令でアリウムのお目付け役をしていた。

「うう……　　ここには以前来たことがあったけど、やっぱり迷っちゃいました」

彼女が連れ添いとはぐれたのはわずか五分前。

ちよつと飲み物を買ってくるからと、すぐ目の前にある露店に行つたはずだったのだが、どういうわけか振り向くと見覚えの無い景色が広がっていたという、よくわからない迷子になってしまった。

列車から降りたばかりの乗客に飲まれてはぐれないように、移動は人波が少なくなつてから、との気遣いも台無しである。

「怒つてるだろうなあ、ナタスさん……」

「ん〜、そうでもないと思うツスよ」

不安そうに言うアリアムに対し、白猫はあっけらかんと答える。

「こうなることはある程度、予想の範囲内。まあせいぜい、少しばかり呆れているってところツスカね」

「予想通りなんですか。それってなんだか、面白くないなあ」

周囲をキョロキョロと見やりつつ、楽しそうに言ったセレスの言葉に思わず溜め息が漏れてしまった。

自分の失態を予想されて、楽しめる人間はいないだろう。しかしそれでも、悪いのは自分という現実が、アリアムを憂鬱な気分にする。

「私、いつもドジばかり……」

そう言つて俯き、再び溜め息をつく。

「どうかしましたか？」

そんな時、一人の女性が声をかけてきた。

「へ！？ あ、いえ。ちよつと、連れとはぐれてしまいました」

いきなりのことに驚いて、アリアムは水道の蛇口を捻つたときのような音を発して返答した。一体どこから出てきたのだろうと思つてしまつくらい、変な音である。

声や拳動に、その時々感情が表れてしまうのは、彼女のわかりやすい特徴である。だがそれ故に、ころころと変わる表情も相まつて、そこに親しみを感じずにはいられない。

「それは大変ですね……」

この女性もそうなのだろう。可愛らしい少女の拳動に、口元をほころばせながら答えた。

セレスは、「迷子になつたのはアリアムの方なんすけど」という突っ込みを入れたくて仕方なかつたのだが、他人の前では声に出し

て話をすることを控えているため、とりあえず置いておくことにした。

常の習慣として、見知らぬこの女に警戒の視線を向ける。幼げな容姿の割にとても大人びた雰囲気を見せる、白面瘦身の女性。

首の辺りで切り揃えられた髪は本当に輝いているかのような美しい金髪^{フロント}、その奥に空が広がっているのではないかと思う程、深い蒼の瞳。

襟元と袖口に純白の生地をあしらっている以外には飾りも意匠もない、質素にして簡素な黒に程近い紺色の服装で、左耳にだけ小さな紅いピアスをつけていた。

「ここでお会いしたのも何かの縁^{えん}。もしよろしければ、そのお連れの方を探すお手伝いを致しましょうか？」

女性は愛想の良い顔で笑う。

「い、いえ、そんなご迷惑をお掛けするわけには……」

そんな彼女の笑顔に、アリアムは申し訳なさそうに答えた。

だが女性は笑顔を崩すことなく、丁寧な口調で言う。

「遠慮は無用ですよ。お互い、困った時には助け合おう。それこそが

“人の道”だと思いませんか？」

困っていた自分の身を案じる女性の優しさを、アリアムは嬉しく思った。

だから、どのような形であれ、それに応えないのは失礼だろうと、アリアムは考える。

「ありがとうございます。私はアリアム。『アリアム』スクリッド』と言います」

「私の名前は『シルファ』ムルルム。お礼は、お連れの方が見つけた時で結構ですよ。

それで、その人はどんな方なのですか？」

「あ、はい。えっと……」

アリアムは連れの様相とその説明の仕方をほんの少しの間、逡巡する。

「背は私よりも少し高く、髪は青紫色で肩くらいまで、黒っぽいジャケットの上に白いコートを羽織はおった男の人です。あ、あと黒猫と一緒に連れていきます」

アリアムが自分の連れの少年　ナタスの特徴を端的に話すと、シルファは頷うなずいてしばし沈黙した。頭の中で大体の人物像を描いているのだろう。

「なるほど……　では近くを探しに行ってみましょうか」
数秒の間、シルファが提案する。

「そのご様子だと、先程の列車を使われたのでしょうか？　それならば、まだそんなに時間は経っていないはず。きっとその方もこの辺りであなただを捜していることでしょう」

「え？　どうして、列車で来たと？」

駅前にいる、ということとは列車を利用する可能性は高いだろう。しかし、それだけでは『列車から降りてきた』という証拠にはならないし、また駅前で待ち合わせをする事もよくあることである。にも関わらず、何故彼女はアリアムたちが今、この町に到着したばかりだとわかったのだろうか。

そんな当たり前とも言えるアリアムの質問に、シルファはくすくすと笑って答えた。

「だって、その荷物。これから殿方とのがたと逢引あいびきをしようというには、少しばかり大きすぎるでしょう？」

「あ……」
アリアムの顔が、傍はたから見ても恥ずかしがっているのわかるくらい、真っ赤になった。

以前、ナタスたちに自分の鞆はバカでかいたからかわれたことを思い出したのもあるが、何よりそのナタスと“逢引”している姿を想像して、恥ずかしくなってしまうたのである。

「いえ、私とナタスさんはそういう間柄あいたがらではなくて……！」

「ええ。そうですね」

慌てふためくアリアムの姿に、シルファはまたクスリと笑って相槌づちを打つ。

「うっ……」

自分は弄いじられる運命にあるらしい。わかりきっていたことではあるが、何とも腑ぶに落ちない。

そんなアリアムのいじけたような表情をいじらしく思いつつ、シルファが促して歩き出す。

「それでは、近くを探してみましょう」

「あ、はい」

だが、アリアムがその後を追おうとした時、突然頭の中からセレスの声が響いてきた。

（アリアム！）

驚いてセレスの方を見ると、彼は相変わらず鞆たもとの上に座り込んだまま、じつとアリアムの方を見つめて一声、にやあと鳴いた。

そしてそれを合図にするかのように、再びセレスの声が頭の中から聞こえてくる。

（アリアム、止めとこうッス）

特定の人物の間でのみ、やり取りができる魔法である。

（マスターには待つてるようになって言われたじゃないッスか。それに……上手く言えないけど、この人、何だか怪しいッスよ）

「そうかなあ。そんなことないと思うけど」

「何が、です？」

今度は耳のすぐ横から、シルファが不思議そうな声で言った。セレスの声は彼女には聞こえていないため、その声にまとも答えてしまえば不審に思っただけである。

「あ、いえ……」

しどろもどろに答えつつ、アリアムはちらりとセレスの方に目をやる。

セレスは今度は何も言わず、ただにやあと鳴き、フィと目線を逸

らした。それが『どうするにしろ、自己責任でどうぞ』という彼の
暗黙の意思表示だった。

「こ、こういう時は下手に動き回ると、かえってすれ違いになって
しまっくんじゃないかなあって……」

セレスの横顔を窺いながらおすおすおすと誤魔化す。

シルファはしかし、そのアリアムに、

「けれども、その方はきつと迷ってらっしやるでしょう。この辺り
の道はわかり難いですからね」

と、どこか楽しそうに話をする。彼女の性格は意外と“おしゃべ
りさん”のようである。あるいは“人間好き”なのかもしれない。

そんな彼女に「だから迷子になったのはアリアムの方ツスよ」と、
セレスは突っ込みたくて仕方なかったが、とりあえず置いておくこ
とにして警戒を続ける。

セレスの視線を気に留めることもなく、シルファは言葉を続ける。

「ここの様子を見ながら、近くを探していけばきつと大丈夫ですよ。
さあ、行きましよう？」

「はい……」

彼女の親切を無下に断ることもできず、アリアムはナタスに怒ら
れるのを覚悟し、先に進むシルファに付いていくことにした。

「やれやれ…… オイラは一応、注意したツスからね」

と、白猫がぼそりと呟いていたことには、誰も気付かなかった。

「どうです？ それらしい方はいらっしやいましたか？」

セントラルステーションが“V”

正確には“<”なのだが

の字をしているのには理由があった。施工の際に、とある文字
を象って造られたためである。

「うーん、いませんねえ……っていつか、ここどこですか……？」

その文字とは、ルーンの“ケン”。“松明の炎”を意味するこの文字は、『闇を払う』ということから、『明るい未来』や『希望の始まり』といった解釈がなされる文字である。

この街を訪れた者たちには、『明るい未来』が訪れるように、この街を離れる者たちには、『希望の始まり』であるように、との願いが込められているのである。

「駅のやや東側ですよ。待ち合わせの場所にはいらっしやいません？」

建物の構造としても、この形はなかなかよく出来ていると言える。“V”のくぼみの部分を正面とすれば、正面に立つことで駅舎の全景を見渡す事ができるし、駅舎の形を見れば、自分がどの方角を向いているのかがわかるようになっていたのだ。

「ええっと、いないみたいですね」

だが当然、問題も孕んでいた。それは、周辺にできる町並みが複雑になってしまうということだ。

“V”という特殊な形は周囲との整合性に欠けるため、そこから伸びる道は盤目状ばんもくじょうにしくくなり、自然と放射型となっていく。ただでさえ“駅前”というのは人が多く集まり、ごちゃごちゃしてしまいがちなため、これでは迷子になりやすく当然なのである。

「はあ……私、迷子にならない魔法とか、人捜しが簡単になる魔法の研究をしようかな……？」

アリアムが溜め息混じりに呟く。今シルファを見失えば、自分はまだ迷子になるに違いない。アリアムにはその絶対ぜったいに欲しくない自信があった。

だが何気なく言ったはずのアリアムのぼやきに、シルファはピクリと反応した。

「アリアムさんも魔法使いなんですか？」

「あ……、いえ、その……」

シルファの問いかけにアリアムは目を泳がせながら、どもってしまっただ。

魔法に嫌悪を抱く者や、その者の持つ魔法を奪おうとする輩せかいに対処するため、“自分が魔法使いであることは隠せ”と、自分の師たるナタスに耳がタコになる程に何度も言われていたのである。

それをバカ正直にも白状してしまったとあつては、また叱られるタネが増えるではないか、とアリアムはまた少しゲンナリしてしまっただ。

そんなアリアムの気持ちに気が付いたのか、シルファはにっこりと微笑み直し、応える。

「心配しなくても大丈夫ですよ。私も“教団”に身を置く者ですか？」

「そうですねですか!？」

“教団”には魔法使いが数多く籍を置き、そこで様々な研究がなされている。

“魔法”は今や複雑化しすぎて 魔法を扱うには、厳密に“理論”を構築し、結果をシミュレーションしなければならぬのだから、複雑になるのは当然なのだが、個人のみ力だけでは情報や資料の上でも、金銭の上でも限界になっているのである。

故に、優れた魔法使い達は、教団に籍を置き、情報や資料の共有金銭面の補助などを受けて研究を続けているのだ。

もちろん“教団”には科学者も数多く所属し、魔法使いたちは“魔法と科学の融合”の理念の元、彼らとの情報・資料の提供の他、協同で研究を行ってもある。

その中において、禁忌きんぎとされることがある。
一つは、“不死”の研究をすること。“不死”とは、神の定めた
“運命”に逆らうものとして、教団では堅く禁じられているのだ。
もう一つは、他者の研究を盗むこと。これは、“信”を第一とする
教団の基本理念によるものであり、また当然、不公平・不平等を
防ぐためでもあった。

そのため、教団に所属する人間には、ナタスの言うような危険性
は無いという事が出来た。

「ええ。これでも街外れの教会を預かっているんですよ」
シルファに言われ、アリアムは成程と思った。簡素な服装をして
いるのも、神職に携わるもの故なのだろうし、親切に声を掛け、
“道に迷った子羊”を導いてくれるのも納得がいく。

“迷った子羊”……
自分で自分のことをそう比喻しておきながら、アリアムはまたゲ
ンナリとなった。再び溜め息を漏れて、つい俯いてしまう。

「……」
しかしシルファは、今度は微笑むことはせず、クルリと向きを変
えてアリアムを牽ひくように、また前へ歩き出した。足取りは速く、
何かを思いつめているかのように無言で。

「あ、待って……」
アリアムはそんな彼女を見失わないよう、追いかけるだけで精一
杯だった。

でも何故だろうか。

彼女の背中がとても小さく、遠くに見えるような気がしていた。

第二話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

前書きにも書きましたが、テンポとか無茶苦茶ですね。女性二人の会話、どっちがどっちだがわかりにくくなりそうだし、ヌルイし

……

こつこついった日常のシーンももっと上手く書けるようになりたいです。

第三話

人の本質とは何か。

この解無き命題は、太古の昔より哲学者たちの間で論じられてきた。

ある者は、『悩むこと』だと言った。人は悩み、苦しみ、考えることで新しきものを得、次へ進むというのだ。

またある者は、『経験すること』だと言った。見たことのない、聞いたことのない、感じたことのないものに触れ、経験することが、“その人”を形づくっていくのだというのである。

しかし、この“駅前”という場所においては、また別の仮説を立てることが出来た。

それは、『笑うこと』。

友人と語らう者、シヨッピングを楽しむ者、旅行に向かう者、周囲にいる人間はほとんどが皆、笑っている。

そこには悩みのようなものは無く、もっとも、全く悩みがないはずがないので、これはとても失礼な言い方ではあるのだが、また、何かを経験しているようにも見えない。

人は笑う余裕があるからこそ、新しいものに触れて、新しいものを得て行けるのではないだろうか。

少なくとも、今のアリアムにはそう感じられた。今、自分自身に笑う余裕が無いからである。

笑顔が行き交う中、アリアムたちは神妙な面持ちで街を歩いていた。

前を歩く女性　シルファは、先程から背中を向け、黙ったまま
で歩き続けている。

その足は速く、アリアムは彼女を見失わないよう追いかけるだけで精一杯だった。

シルファも表情こそ見せないものの、笑っているようには感じられない。

自分は何か言っではいけないことを言ってしまったのだろうか。彼女を不快にさせてしまったのではないか。そんな不安だけが脳裏を過ぎる。だが、この状況では、声をかけて様子を窺う事もままならない。

とそこで、シルファが急に歩足を緩め、アリウムとの距離を縮めると、不意にこう切り出した。

「アリウムさんは、“神”を信じますか？」

「……遅い」

人の本質とは何か。この命題について、ここにも一人、一つの解に辿り着いた人物がいた。

腕を組み、不機嫌も頭あわなしかめっ面で、少年が誰に言うでもなく呟いた。アリウムの探している連れ ナクスである。

「どこへ行ったのやら。こんなにすぐに迷子になるとは、子供か、あいつは……」

彼にとつての人の本質とは、『待つこと』。

“待つ”という行為、それは“受け入れる体勢を整えている”ということであり、そういった状態であればこそ、人は新しい物事を経験していけるのである。

しかもこれは、受動的なものだけではない。何かを学ぼうと本を開いたり、誰かに知識を享受している者も、“受け入れる体勢を整えている”ことに違いはないので、“待つ”ていると言えるのだ。

だがこんな悟りを開いたところで、今のナクスにとつては何の意味もない。現状が打開される方が、よっぽどありがたいというものだ。

「やれやれ……」

「見当たりませんかね……」

ナタスの肩の上に座りながら言ったのは、彼の“使い魔”、黒猫のディアナ。言いつつも彼女は、すれ違う人々を一人一人確認している。

「アリウムさんのことを“過小評価”しすぎましたわね」

「ああ。皮肉をたっぷり込めて、本人にもそう言ってやろう」

アリウムが“ちょっとそこまで”行った後、いつの間にか見失ったから、もうかなりの時間が経っている。

ただ待っているのも、もはや苦痛の状態。さりとして、ここで待ち合わせている以上、探し回るわけにもいかず、なんとも煮え切らない鬱憤が溜まっていつていた。

右足で刻むリズムは、当初に比べてかなり早くなっている。

「あいつ”もまだ来ていないようだし…… 全く、俺の貴重な時間をどうしてくれるつもりなのか」

怒りもそこそこに、もはやそれ以上に“呆れ”、あるいは“諦め”のようなものがナタスの声の端に聞こえた。

彼は一時の感情にいつまでも頓着する性格ではない。はっきり言ってしまうえば、“冷めた人間”なのである。

「まあ、そう仰らずに。それに、マスターには時間はいくらでもあると思いますか？」

「お前は誰に似たのかな……」

「もちろん、マスターですわ」

ディアナが茶化すように嬉々として答える。

ディアナの言うように、彼女は主人であるナタスに似ているところがあった。同僚のセレスと比べるとずっと口数が少なく、冷静に物事を考え、そして常にその言動の一つ一つに何らかの意味を含めて諷することもある。

つまり、やはりどこか“冷めて”いるのである。

「『時間はいくらでも』、か…… 皮肉にしか聞こえないぞ」

鼻で笑いながら言うナタスだが、語気はやや強めだった。どうやら、勘気に触れてしまったらしい。

実はナタスは、相対性理論に基づいた“時間の永続回帰”を用い、肉体の老化・負傷・罹病りびょうなどを取り払った、“不老不死”の魔導師であった。これは、ごく一部の人間しか知らない、極秘事項である。

だが故にこそ、“永遠”に続く“生”を嫌悪し、“永遠”に訪れぬ“死”を “永遠を終わらせる”術を求め、旅をしているのである。

そんな彼にとって、“いくらでも時間がある”というのは皮肉以外の何物でもなかった。

「失礼致しました、マスター」

ナタスと共に同じだけの時間を生きてきたディアナにとっても、ナタスの心境はとてもよく理解でき、だからこそ彼女は彼に仕えているのだと言うことができた。

そのため、自分は少し言い過ぎてしまったと反省して、ディアナは素直に詫げる。

「やれやれ……」

ナタスは正直に謝罪する相手に対して、それ以上の憤りをぶつける気にはなれない。

完全に癖になってしまった嘆息とぼやきで、『この話はここまで』と言わんばかりに場を終結させる。

そしてその直後、空を見上げてまた嘆息と共に当面の問題についてぼやく。

「……遅い」

「アリウムさんは、“神”を信じますか？」

「へ？」

雑踏の中で、辛うじて聞き取れるくらいの小さな声でかけられた、

問い。そのあまりに突拍子もないシルファの問いかけに、アリアムはすぐに答えることができなかった。というより、答えを持ち合わせていなかった。

特別な思想に寄るでもなく過ごしてきたアリアムにとって、“神”とは都合の良い時にだけ現れるものだったからである。

苦しいときには助けを願い、わからないことがあったときにはその説明として“利用”していた、というのが彼女の中の“神”だった。

そんなことを、『教会を預かっている』というシルファに、言えるはずがない。

「いる、ような、いない、ような……」

だから、シルファの問いかけには、明確に答えることができなかった。

しかしシルファは、そんなアリアムの曖昧な生返事に構うことなく、こう言った。

「私はね、“神が存在する”ことは信じているんです。でもそれは、皆が思っているような人物ではありません。“信じていれば救ってくれる”とか、“いつか幸せを授けてくれる”とか、そういったことは決してない、と……」

アリアムとの微妙な距離を保ったまま、顔を向けることもせず、淡々と話す。

「人と同じですよ。自分の都合の良い者だけを救い、それ以外は切り捨てる…… そう、醜い人間と同じ……」

捨てるように言い放つシルファは、本当に神職を預かる者なのかと疑ってしまうくらい、冷たい声をしていた。

声をかけてくれた時の、優しい雰囲気はどこにもない。

「シルファ、さん……？」

アリアムは今までとは全く違う不安を感じ、思わずシルファの優しいはずの彼女の名前を呼んでいた。

するとシルファは、今度は急に足を止め、振り返ると、笑顔に変

えて言った。

「くす……ごめんなさい。変なことを言っただけでしたね。今まで神を信じてきたけれど、救われたと思ったことがなかったのですね、愚痴ってしまいました」

その笑顔に妙な“ぎこちなさ”を感じつつも、アリアムは笑顔で応える。

「いいえ。誰にだって、愚痴りたくなるときくらいありますよ。私はきつと、そんな時にそんな事を聞いてあげるくらいしか出来ないと思うけど……」

優しい彼女が戻ってきたことも感じて。

「……ありがとう。さあ、もう少し探してみても見当たらないようであれば、最初の場所に戻ってみましょうか」

「はい……」

返される笑顔はやはり、どこかぎこちないままだった。

彼女の笑顔に、次にかけるべき言葉が見つけれず、どこか強張っているのだろうと自覚しながらアリアムも笑顔を返す。

と、その視線の先、笑顔の向こうに、見覚えのある顔を見つけた。
「あ、ナタスさん！」

名前を呼ぶと共に、ぱつと明るい笑顔に変わって、ナタスの下へ走り出す。それが、居たたまれなくなった雰囲気からの逃避行であったことにも気付かずに。

「ナタスさ〜ん!!!」

荷物を引きながら 彼女の“バカでかい”鞆には車輪がついている、ナタスの胸に飛び込もうかというような勢いで、走り寄って行く。

「っ！……アリアム、どこまで行っていた？」

「わ、とと…… えへへ、“ちよつとそこまで”」

しかし、ナタスは身体が触れ合うよりも早く、身を翻してかわした。

アリウムは予想外だった行動に驚いて足を縛もつれさせたが、何とか転倒することだけは避けることができた。

転びそうになったことを隠すように照れ笑いをしながらも、心中では踏み止まって転ばなかったことに満足し、避けられたことを不満に思う。

そんなアリウムの意は介さず、ナタスは先の宣言通り、ややの皮肉をたれる。

「確か、飲み物を買に行くと言っていたな。それがこつも時間がかかるとは…… 君はそんなに優柔不断な人間だったか？ いやそれとも、しこたま飲んできたのかな？」

「むう…… そんな意地悪言わないで下さいよ」
頬を膨らませて抗議するアリウム。ナタスには、その様子は何だか紙風船のようで可愛らしく感じられた。

ただそれだけのことなのに、色々と文句を言ってやるうと考えていたのが、どうでも良くなってしまった。肩の力が抜けたような気がする。

「マスター、心配なさっていたんですのよ」

と、ディアナが逆に、自分の主人をからかいながら声をかけた。

「え、本当ですか？」

「そんなわけがあるか」

どこか嬉しそうなアリウムに答えながら、ナタスは恨みがましそうにディアナに視線を向けるが、今度は黒猫は謝罪することをしなかった。

「あ、はは…… ですよね」

「まあ今後は、待たされる身のことも考えるようにしてくれ。セレスも、ご苦労だったな」

「オイラは、別に」

いつの間にか、ナタスの声には穏やかさが戻ってきていた。

セレスはそんな主人の様子を見ながら 本当に心配してたのか

……と感じつつ、その時に出逢った、ある女性のことを話す

べきかどうかを考えていた。

「ところで、よく帰ってこれたな」

からかいでもなく、皮肉でもなく、ナタスが率直な感想を述べる。

「あ、はい。あの人と一緒に探してくれたんです」

と言って、アリアムが振り返った。

しかし、彼女の言う“あの人”は、まるで氷の溶けるように、すでにそこにはいなくなっていた。

「どの人だ？」

「あれ、おかしいな？　そこにいたはずなんですけど……　どこに行っちゃったんだろう」

首を振って周囲を見るが　おまけに上までも確認してみるが、やはり彼女の姿は見当たらなかった。

急に消えてしまった友人、その最後の笑顔のことを気にかけて、アリアムは不安げに俯く。

「せめて、お礼が言いたかったな……」

「そうだな。アリアムをここまで連れてくるなんて、並大抵のことじゃないだろうし……」

「もう、またそんな意地悪を言うんですから！」

そう言って再び、ぷっと頬を膨らませたアリアム。その姿を見て、多少なりとも元気を取り戻せただろうか、と案じながら、今度はナタスが促す。

「さあ、行くぞ。もう一人、待ち合わせしている奴がいるからな」

「はい」

歩き出すナタス。それを追うアリアム。

案内役に先導されて、その後についていくという構図は変わらない。い。

アリアムは、今度こそ先行く人を見失わないようにと、しっかりとした足取りで歩き始める。

と、その時、耳の奥で声が聞こえた。

「アリアムさん……」

他にもない、シルファの声が。

「アリアムさん、急にいなくなってしまうってごめんなさい。少し用事を思い出してしまっただけで」

アリアムはナタスの方を見るが、彼にはこの声は聞こえていないようだった。先程、セレスの使った魔法と同じものだろうと、推察する。

「でも、お連れの方が見つかったようで、良かったですね」

だが、声は聞こえてくるだけで応えることができず、とてももどかしくなってしまった。

だから、多少周囲に変な目で見られようとも構わないとアリアムは思い定め、今はどこにいるかわからない友人に向かって声をかけた。

「はい。シルファさんのおかげです。ありがとうございます」

いっばいの気持ちも笑顔に込めて。

そして、二人はまるで**図**^{はか}ったかのように、同じ言葉を、同じ気持ちで、同じタイミングで、口にする。

「「また、会いましょうね」「」

第三話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

そろそろナタスをださなきやなあとと思って、彼のシーンを入れたのですが…… 妙な構成になってしまいましたよね。反省。

さて、次回は少しだけお話が進みます。今しばらく又ルイシーンが続きますが、これからもよろしくお願いします。

第四話（前書き）

大変遅くなって申し訳ありません。

最近忙しかったもので、ようやく続きを投稿できました。それゆえ、
というのは言い訳になりますが、今回もボロボロだと思えます。

読みにくいことこの上ないと思いますが、どうぞご容赦ください。

第四話

「アリアム、何をしている？」

足を止め、わずか顔を上げて、にやにやと笑いながら佇む。ナタスの目にはそう映っていた。アリアムに、ナタスが声をかける。傍から見れば、やはりこれは彼女がバカのようにしか見えない状況ではあった。

「あ、はい」

だがアリアムは満足そうに微笑んで、とてとてと駆け出す。周りの目は、全く気にしていないようだ。

「これから、どうするんですか？」

ナタスの下まで駆け寄ると、これからどこか観光にでも行こうかというような期待に満ちた表情で問い掛ける。

「待つ」

「へ？」

だが、返ってきた答えは、彼女の予想の斜め上を行っていた。

無論、観光に来たわけではないことくらい、アリアムも理解していたが、それでも『待つ』という答えが返ってくるとは想像していなかったのである。

「えっと……誰を、ですか？」

「俺の知り合いが迎えにきてくれることになっているんだがな、まだ来ていないらしい。目立つからすぐわかるだろうと言っていたんだが……」

言いながらナタスはキョロキョロと辺りを見渡す。

アリアムもそれに倣うならように、周囲を見回して、目立ちそうなものを探してみた。

「目立つものといえば……人がいっぱいですよねえ……？」

「人探しには全く役に立たない目立ち方ツスね」

それに、すかさずセレスが突っ込みを入れる。

「んーと、色んなお店がありますね」

「待ち合わせの場所はここですわよ？」

続けてディアナまでもが突っ込む。

「じゃあじゃあ、アレは？ 馬のいない馬車！」

「アレは“自動車”。馬がいなくても走る、最新科学の産物だ」

と、今度はナタスが、やはり突っ込みを入れつつ、“物知らず”なアリアムに説明をしてやる。

この世界において、“自動車”というのは最近になってようやく実用に耐えるものが出始めた、最先端のものだった。

しかしそれ故に、未だコストパフォーマンスが著しく悪く、そのため軍部が、あるいはごく一部の金持ちだけが所有できる、大変希少なもの。一般の市民が持ち得るようなものではなかったのである。だから、アリアムが知らないのも、無理のないことではあった。

「ほへー…… 世の中進歩しているんですねえ」

「そうだな。だが確かに、あれは“目立つ”……」

何かを考え込むように、じっと自動車を見据えていたナタスだったが、そう呟くと急に自動車に向かって歩き始めた。

「あ、待ってください！」

アリアムの言葉を気にかけることもせず 実際、目指す車はすぐそこに見えているのだし、距離もたいしたことはないので、問題など起こるはずもないのだが ナタスはすたすたと歩いていくと、その自動車の前で足を止める。

丸みを帯びた小さめの車体。錆止め、あるいは塗料の剥離を防ぐために施された、コーティング剤の微妙な光沢を持つ黒塗りのそれは、“角のないカブトムシ”という表現が一番しっくりくるだろう。正面にはクリツとした大きな目のようなライトが付いていて、エンジンの冷却のために開けられた通気口は二ツと歯を見せて笑っているようにも見える。

なかなか愛らしい顔立ちである。

その愛らしいカブトムシの後部座席、その窓がナタスの到来とタ
イミングを共にして開かれる。

そして、中から一人の老人がひょっこりと顔を出した。

「ホ、遅かったの、ナタス」

その老人の言葉に対し、ナタスは鼻を鳴らしながらニヤリと笑う。
そして、敬う様子など欠片も見せずに返した。

「やはりお前だったか。自動車とは、ずいぶんと派手なのが好みにな
ったのだな」

「なんじゃ、久しぶりの再会だというのに、つれないの……手
紙もとんとよこさんし」

そう言つと老人は口を尖らせた。楽しげに会話を交わしていると
ころを見るに、彼らはかなり親しいようだ。

ナタスもまた、それに笑いながら応える。

「爺さんと文通する趣味は持ち合わせていないのでね。それより、
ピーマン嫌いは治つたのか？」

「風情の欠片もない……少しは再会を喜ばんか」

「それほど時が経つたわけでもないだろう。それに……」

「あ、あのー」

そんな二人の会話に、後ろから小走りで駆け寄つてきたアリアム
が手を上げながら入っていく。

彼らの邪魔をするのは無粋だとは思つたが、しかしこのままでは
置いてけぼりにされそうだ。

「ああ、すまん。こいつは『ゼピュロス』。俺の古い友人だ」

ナタスはアリアムの方に向き直つて、老人を親指で差しながら紹
介する。

老人もまた、アリアムが会話に入つて来易いようにと、微笑みな
がら語りかけてきた。

「ホ、はじめまして、お嬢さん。ゼピュロスと言いますじゃ」

白髪に白髭、顔には皺が目立つがそれでも肌は透き通るように白
い。

また服装も白で統一され、全身がまったくの白色である。しかし服の生地には濃淡様々な白が用いられており、それを組み合わせで作られているらしく、とてもセンスの良い格好である。

彼の雰囲気と合わせると、まるで雲のようにふわふわとして柔らかく、捉えどころのないような印象を受ける老人だった。

「君がアリウムさんかな？」

ゼピュロスと名乗った老人が、孫をあやすような優しい声で尋ねる。

「あ、はい」

「そうかそうか。話には聞いていたが、なるほど、ナタスをその気にさせただけあって、べつぴんさんじゃのう」

言いながらゼピュロスは、なんとも微妙な笑みを浮かべつつ、横目でちらりとナタスを見た。

それ対し、ナタスが叱責しっせきの声を上げる。

「おい、ゼピュ」

「妙な言い方をしないで欲しいツス！」

だが、ナタスが「ロス」と言い終わるよりも早く、セレスが不機嫌そうに言った。

「マスターは、そんなつもりでアリウムと一緒にいるわけじゃないツスよ」

「お、おお…… すまぬ」

無論、ゼピュロスは冗談のつもりだったのだが、セレスは思いの外、気分を悪くしてしまったらしい。

言い終わるや否や、表情を隠そうとしているかのように、彼はそっぽを向いてしまった。

「セレス、もういい。ありがとう」

そんなセレスの頭を優しく撫でながら、ナタスがセレスを宥なだめる。彼も当然、ゼピュロスの言動が冗談であることくらいわかっていたが、それに対するセレスの幼げな行為がなんだかいじらしく思えたのだ。

しかし、そんな主人とは逆にディアナが、こちらはからかうように声をかける。

「どうして貴方が機嫌を損ねるんですの？」

「だって……」

「これこれ、そこまでにしておくれ。この爺じいの戯言たわごとが悪かったんじやよ。

ともあれ、二人も元気そうで何よりじゃ」

微妙な照れがあるのか、劣勢にあるセレスを、まるで自分もその気持ちかわかるといふように、ゼピュロスが仲裁する。やはり優しいな笑みを湛たたえて。

彼の温和でフワリとした雰囲気は、こんな状況であっても一瞬にして人の心を穏やかにする力があるようだ。

かつて出遭った初老の男とは、似ても似つかない。人としての“器”のちがいであろう。

そして、こればかりはナタスも感服せざるを得ない部分だった

そんなことは、口が裂けても言う気はなかったが。

裏側に敬意を込めつつ、軽く言う。

「俺達はいつまで立ち話を続けなければいいんだ？」

「ホ、そうじゃった。ささ、少し狭いが皆乗りなさい。話は道すがらするでしょう」

「で、話というのは？ 何故、わざわざ俺をここに呼びつけた？」

大人を満載して走る狭い車の中で、肩を縮めながらナタスがゼピュロスに尋ねた。

ナタスたちがこの街を訪れたのは他でもない、ゼピュロスに『至急、来て欲しい』との知らせを受けたためである。理由なども一切知らされることなく、ただ『来て欲しい』とだけ。

古い友人の頼みだけあって、不審に思いつつもそれを無視することもできず、また事情が知らされないのは、何か重大な用件である

ことも理解できていた。

しかし、事情がわからないのでは行動のしようがないというのもまた、事実であった。

その事情について、ゼピュロスは表情をそれまでの笑みから真剣な眼差しに変えて、語り始めた。

「実はこのところ、テロと思われる行為が頻発している。この間も陸送物資の集配場で爆発事故があったところじゃ」

「それは聞き及んでますわ」

同じく狭そうにナタスの膝の上に座ったディアナが言う。

「荷物の中に爆発物が仕込まれていたらしい、と」

「うむ。以前にも似たようなことは起きていたし、たいした被害が出るわけでもなかったのじゃが…… つい先日、とうとう死者が出てしまった……」

「死者……！？」

その言葉に、それまで流れるように過ぎていく街並みを楽しそうに眺めていたアリアムが強く反応した。

「街外れにあった教会でな、夜遅くに火災が起きたんじゃ。そしてそこで働いていた者と、身を寄せていた孤児たち全員が犠牲になった……」

ゼピュロスが目元を抑えながら、祈るように目を閉じて頂垂つなたれて言った。

「原因も犯人もわかっておらん。じゃから“テロ”と断定することも出来んが……」

「ゼピュロス様はそうだと思っている、ってことツスね？」

「そうじゃ。むしろとしても調査は続けていくつもりじゃが、同時に何らかの結論も出さなければならぬ。公には“おおやけ事故”として発表する事になるじゃろう」

そう言っつてゼピュロスはナタスの方を見た。その視線を受けて、ナタスは彼の言わんとしていること全てを察する。

「その調査に加われ、ということか。それも、ひみつり秘密裏に」

「ホ、察しが良くて助かるわい」

さも愉快、というようにゼピュロスは笑顔で応えた。ほんの少しだけ憂いと謝罪の気持ちを込めて。

「手伝ってくれるか？」

「ああ、もちろんだ」

「ありがとう」

“友情” この世で最も尊重すべき人間の感情の一つであろう。それを具現したような二人の言葉のやり取りにアリアムはおろか、ディアナたちでさえも入り込める余地がないような、美しい雰囲気になっていた。

しかし、ナタスはニヤリと口元を歪め、雰囲気もぶち壊しの一言を発する。

「その代わり、調査の合間でいいから、教団の書庫を使わせてほしい」

車内にいた全員が揃って呆れの溜め息を漏らす。照れ隠しであるうことは誰もがわかってはいたが、それにしても脱力の一声だ。

ゼピュロスが首を振りつつ言う。

「かー、本当に風情のない男じゃのー…… まあ、いいわい。手伝ってもらっただけ、というわけにもいかんしの」

「よし、借りは作らせておくものだな。アリアム、君も何か要望があればしておくべきだぞ。今のコイツには断ることはできないからな」

「あ、あはは……」

その言葉がどこまで本気なのか、アリアムにはわからなくなってしまう。もはや苦笑するしかない。

「さて、それでは少しばかり頑張るとするか」

邪な笑みを浮かべた少年たちを乗せ、カブトムシが軽快に街を飛んでいった。

第四話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回はようやく話が進展していきます。

次回もいつ投稿できるかわかりませんが、きっとボロボロになってしまふと思いますが、これからもお付き合いいただけると嬉しいですよ。

第五話（前書き）

前話より大分間が開いてしまいましたが、第五話です。

一応前回は『ゼピュロスと会う 自動車で移動』ってところで終わっています。今回は、その後の夜、という時間設定です。

第五話

「ゼピュロスさんって、偉い人だったんですね……」

アリアムが並ぶ棚から本を抜き取り、開いては眉根を寄せてまた元の場所に戻す。そんなことを繰り返しながらぼそりと呟いた。

「話をするだけでは、ただの変な爺さんだからな。わからなくても無理はない」

それにナタスが、教団の書庫から借りてきた本のページを繰り返しながら答える。

ナタスたちはあれから、教団の本部に赴いて幹部達に簡単な挨拶をすることになった。アリアムがゼピュロスの地位を知ることになったのはその際である。

「またそんな失礼なことを……」

その時にゼピュロスに通されたのが、“教皇の間”だった。そして更に言うならば、教団最高権力者である“教皇”に挨拶をするようになったのである。

アリアムはここで、三つの事柄に驚嘆の念を抱くことになった。

一つ目は、ゼピュロスが“教皇”にお目通りを願えるほどの高位の人間であったこと。

二つ目は、本当にその“教皇”に謁見し、さらには自分が声をかけられた、ということ。

三つ目は、ナタスと“教皇”が、友人同士のように親しげな態度を取っていたということ。

「あれでかなりの権力者だというのはだから、信じられなくても当然だな」

ナタスがけろりとした顔で話す。実はアリアムが一番信じられないと感じているのが、ナタスのことであるとも知らずに。

「でも本当、ゼピュロスさんが“司祭”様だったなんて」

アリアムが教団について書かれた本を開き、中を眺めながら言った。

“教団”も組織であるがゆえ当然といふべきか、最高権力者である“クラス教皇”を筆頭に、“たいせい大聖”、“司祭”、“神父”……と続く“階級”が存在する。

つまり、ゼピュロスは教団の中でも三番目に高い地位にいる、ということなのである。

「今俺たちは、その“司祭”様のお屋敷に泊めていただいているんだぞ？」

ナタスが読んでいた本を閉じ、アリアムに向かって不敵な笑みを浮かべた。

彼の言うように、アリアムたちはゼピュロスの屋敷に来ている。

初めは教皇への挨拶の後、宿を探す予定だったが、ゼピュロスの勧めもあって、この街に滞在する間は彼の屋敷に厄介になることになった。

「今から宿を探すにはもう遅いし、遠いところからわざわざ来てもらったのだから疲れているだろう？」というゼピュロスの“鶴の一声”とも言える提案で、あっさりと決まってしまった事態である。アリアムにとって、それが本日四つ目の驚嘆の事実となった。

そして今、夕食までご馳走になった彼らは、ゼピュロス個人の書斎を借りて、本を開いているのである。

「そうなんですよねえ……」

はあ、と溜め息を漏らしながら、未だ信じられないという顔でアリアムが宙を仰ぐ。ちなみに、その動作と共に、読んでいたはずの本も閉じられていた。

「私も失礼な人間ですね。今でもやつぱりどこか、信じられてないです」

ナタスの言う“変な爺さん”に幾許か思つところがあつたことを思い返し、アリアムは苦笑する。

ゼピュロスの思慮深さは何とはなしに感じ取ることができる。が、かなりの老齡でありながら少年のようなやんちゃな言動を地で見ている、そのギャップが妙に可笑しく思えてならなかつたのだ。

彼の人となりを尋ねられたならば、“可愛いおじいちゃん”と説明するのが一番しっくりくるだろうと思う。

「で、ナタスさんは何をしてるんですか？」

アリアムは持つていた本を棚に戻し、ナタスの座る机へと歩いて行つた。興味深そうにナタスの開いていた本を覗き込むと、数秒の間も無く、また眉根を寄せてわずかに唸る。

ナタスは脇に置いた分厚い本をぺらぺらとめくりながら目を通している。そして、適当な場所で手を止めると、同じく脇に置いたノートに手早くメモを付けて本を閉じた。

「ん？ ああ。旅先で興味深い魔法を見かけたんでな。それを調べてるんだ」

「見かけたつて、調べてわかるようなものなんですか？」

メモを覗いて見ると、そこにはよくわからないが何らかの理論だと思われる名称とその追記、さらに『P四四七』と記されていた。ページ数と簡単な内容が走り書きしてあるらしい。

「さて、どうだろうな。その魔法自体の記述か、あるいはそれに類する理論が見つければ幸いだが」

そう言いながらナタスは、次の本を手に取りつて再びぺらぺらとめくり始める。これもまたアリアムには開くのも遠慮したくなるような、分厚い本だった。

そのため、今度は本の内容を見るのは“自粛”しておくことにした。

「どんな魔法だったんですか？」

ふむ、とナタスは鼻を鳴らし、椅子の背もたれに体を預けると、アリアムの方へ視線を流して答える。

「一を零にする魔法、かな？」

「一を零にする魔法？」

それを聞いたアリアムはいかにも不思議そうな顔をして、鸚鵡返しにナタスに尋ねる。

ナタスほどの魔導師が興味を持って調べている魔法だということだから、もっと複雑かつ靈妙なものだと思っていた。

“一を零にする”など調べるまでもない、子供でも簡単にわかるようなもの。にも関わらずナタスが、理解するどころか読むだけでも苦労しそうな難しい本を開いてまでその理論を調べていることが、アリアムには不思議でならなかったのである。

「そんなの、一を引けばいいじゃないですか」

アリアムがあたかもその魔法を知っているかのように、自慢気に答えた。アリアムにとっては、ただそれだけのことだったからだ。

しかし、そんな彼女の答えに、ナタスは首を振った。

「数式の上では、な」

「へ？」

数式の上で“真”ならば、それは正しい理論なのではないか、と思うアリアムだが、ナタスはそれを否定する。

アリアムが困惑の表情を浮かべる中で、ナタスは謎かけのようにアリアムに問うた。

「では聞くが、現実に『一を引いて零になる』というのはどういうことだ？」

問われてアリアムは、頭を捻る。しかし、即座にこう答えた。

「箱の中にケーキが一つあって、それを取り出したら零になるんじゃないですか？」

「零になるとは即ち、“無くなる”ということだ。その理論では、ケーキが無くなったわけではないだろう？」

確かにナタスの言うように、それは“ケーキという存在”が消え

たわけではない。箱の中に何も入っていない状況になったというだけで、ケーキは場所を変えて“在り続ける”のである。

「それじゃあ、食べちゃった、とかは……？」

「それは“形”が無くなっただけだ。ケーキの持っていた要素

例えばエネルギーとか、そういったものはやはり在り続ける。人間が生きていられるのも、そうやってエネルギーを摂取しているからだな。

これは、“情報”と言い換えることができる。物体そのものが持っている形、色、重さ、大きさ……俺が今調べている魔法というのは、そういった情報全てを“無に帰してしまう魔法”なんだよ」
そう説明をしながら、ナタスはメモを見返し、その走り書きにあるページを再び開いてじっくりと眺めだした。

「この世から“存在を消してしまう魔法”ってことですか……？」
すると、それまで興味津々に話を聞いていたアリアムが、途端に表情を変えた。

怒りか、それとも嘆きか。いずれにしろ、それは彼女には納得のいかないものであるらしかった。

いつにないほどに声を荒げ、強い口調で反論してくる。

「そんなものが、どうして必要なんですか？ この世に無用な存在なんて無いはずですよ！」

「……そうだな。だが便利だぞ？」

だがナタスは 初めはアリアムの変化にわずか驚きを見せたものの、やはりけろりと答えた。

「これが実現可能ならば、ゴミ問題は一挙に解決だ。旅の道中で出たゴミも気にする必要がなくなる」

「あ、あゝ！」

そのナタスの答えを受けて、アリアムは再び表情を一変、今度は得心の顔になる。「なるほどなるほど」と頷きながら、それ以外の使い道について、何やらぶつぶつと呟きまで漏らし始めた。

ナタスはそんなアリアムのわかりやすい 単純とも言えるが
変わり様に、微かに笑みを浮かべつつ、鼻を鳴らす。

やはり、気付いていないんだな……

そして、思う。

アリアムが『無用な存在は無い』と言いながら、ゴミという物を
“無用なもの”と扱っている、その矛盾を。何より、その絵空事を。
彼にとって、『無用なものは無い』等という考えは、甘い“理想
論”以外の何物でもない。少なからず、『無用なもの』が彼の中に
は存在しているのである。

しかし、ナタスはそれ以上言及することもせず、また少しだけ首
を振って、鼻を鳴らした。

「さて、」

それから数時間後、ナタスが読んでいた本を閉じて、不意に立ち
上がった。

「あらかた読み終えたので、これらを返しに行ってくる」

「ええ！？ こんな時間にですか？」

時計を見ると、針はもう深夜の一時を過ぎていた。

この屋敷でさえも、廊下とこの部屋に灯る明かりを除いて全てが
暗くなっている。街もきつと寝静まっていることだろう。

アリアムの眠気もピークを迎えつつあり、ナタスの横に座ってう
とうとしていたところだった。

「そんなの、明日でもいいじゃないですか」

「確かにそうだが、明日は朝から調査に出向くことになるだろうか
らな。今のうちに行っておく」

アリアムは困った顔をして、むー、と小さくカクカク囁くように声を出し
た。その姿を見たナタスが笑いながら言う。

「ついて来いとは言っていないぞ。眠いのなら、先に休んでいると
良い。セレスたちも、もう寝ていることだし」

ナタスは出口まで歩いていくと、扉を開けてアリアムを誘う。いそないずれにしろ、部屋を出ろ、ということだろう。

それを受けて、アリアムも　　ふらふらとした足取りで　　歩き始める。

しかし、次に口をついた言葉は、ナタスをいささか驚かせた。

「それじゃあ、私が行ってきますよ」

「おいおい、何時だと思っっているんだ？　さっきまでうとうととしていたくせに……大人しく寝ている」

「あれで仮眠を取りましたから。大丈夫です！」

ナタスにからかうようにたしなめられるアリアムだったが、それでも自分が行くと譲らない。

彼がこういう台詞を言う時は、自分の身を案じてくれている、そのことをアリアムはいつの間にか理解していた。

だから、いつも気をかけてくれるその優しさに少しでも報いたいと、アリアムは思っていたのである。

こんな遅い時間まで共に過ごしていたのも　もちろん、それ以外の理由はあるのだが　、何か役に立てる事はないかと考えていたからなのだ。

「私はナタスさんの“弟子”なんですから。お師匠様の雑用をこなすのは、弟子の仕事です」

「確かにそうではあるが……　わかった、頼んだぞ」

いまいち納得のいかない理屈ではあったが、ナタスにはアリアムを言い負かすだけの言葉が思いつかなかった。

疲れているのだろうか、そんなことを思いつつ、アリアムの頑固さに呆れるように溜め息をつく。

「くれぐれも、気を付けてな。用事を済ませたら、すぐに帰ってくるように」

「わかりました。それじゃあ行ってきます！」

パタン、と閉まる扉の音が、何故か無性に哀愁を感じさせた。

「…… セレスを起こしておくか」

コツ、コツ、コツ……

喧騒からやや離れた、暗い路地。

灯るはずかに虚ろに嗤う三日月と、カーテンの隙間から漏れる光のみ。吹き抜ける風は相変わらず冷たくて、身体の奥の感覚さえも奪われるようである。

その無常に響く足音が、闇と静寂を深めていく。

だが、それでいい。

あの日以来、ここを自分の生きる場所としたのだから。カーテンの向こうの楽しい世界とは、縁遠い所に留まると決めたのだから。そう、これでいい。

あの日の笑顔を、取り戻すまでは……

コツ、コツ、コツ……

肩から下げた大きな袋が、ズルリとわずか、蠢いた。

第五話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

五話だというのに、なかなか話が進みませんね……orz

次回はようやく、二章の根幹部分になる……はずです。御期待いただけると思います。

第六話

しんと静まり返る、夜の街。

道を照らす街灯はまばらにして、家々に灯る明かりもわずか。

その、暗闇に渡された光の浮き橋を、一つ一つ渡り歩いていく。

次第に冷たさを増す風が、冬の匂いを偲ばせながら肌に染みてる。

周囲には人はおろか、猫の子一匹見当たらず、動くは風に揺らめく枝葉のみ。

響く足音が自分の存在だけを主張しているようだった。

信都ステファンを縦断するように流れる大河“イニチオ”。

『はじまり』の意味を持つこの河は、その名の通りステファン正確には前身となった町　　が興るきっかけとなった河である。

その豊富な水量は飲用、農業用水として利用され、また多種多様な水産資源は日々の糧の一つとして大いに重宝されてきた。

そして、何よりも欠かせなかったものが、その流れが運んでくる肥沃な土。

人々はその土を使って田畑を耕し、また時に壁や陶器といった工業利用をしてきたのである。

しかし同時に、この河は脅威の存在でもあった。

この小さいながらも流れの急な川は、氾濫という名の水害でこの街に住まう人々の生命を数多く奪い、また脅かしてきたのである。

それを鎮めるために、ある男が立ち上がった。

彼は川の恩恵を絶やすことなく氾濫を治めるといふ難題に対し、

まず曲がりくねった軌跡を直線に直して、さらに川幅を広げることが思い立った。幅を広げることで流れを穏やかにし、増水に備えようと考えたのである。

また、大きな堤防を設けて、増加した水量でも氾濫しないように考慮した。

だがそこには、一つの問題が残されていた。上流から運ばれる肥沃な土が激減してしまったのだ。流れが穏やかになったがゆえに引き起こされた問題である。

その問題には彼はなんと、上流にある別の川と一つにまとめ、大河と成すという方法で対処した。水量を増加させることで水の流れに力を与え、土が流れてくるようにしたのだ。

これは、増水に備えようとした先の手段とは全く逆の発想で、人々を大いに驚かせた。そして実際、そのおかげで氾濫は治まり、人々は安心して生活を送れるようになったのである。その影で、もたらされる土が過剰にならないよう、綿密な計算が行われていたことを知る者は、ほとんどいない。

このとき彼が用いたのが、土木技術と魔法の両方だった。

そう、この男こそ、現在の教団。その思想を生み出した、最初の人物だったのである。

だから、彼らは“科学と魔法の両立が可能である”と考える。

そしてその象徴として、この大河は存在し、流れ続けている。ずっと昔から。今、この時。そして、遠い未来でも。“はじまり” 続けるのである。

「悠然たる、水の流れ」

その“はじまり”に目をやりつつ、堤防上の広い道を歩きながら、アリウムは呟いた。

「人々に恵みをもたらす、水の流れ」

冷たい風が、頬を撫でるように吹き抜けていく。

「ずっと変わらずに流れつづける、水の流れ」

ハードカバーの分厚い本を詰め込んだ、小脇に抱える鞆がずしりと重い。

「今も、昔も。そして、これからも」

大河はせせらくともなく、圧倒的な力感だけを伴って、ただ雄大に流れ続けていた。

「そう、まるで時の流れのように……」

難しい本を開いたせいだろうか。柄じゃないとは思いつつも、妙に哲学的な思考が頭を過ぎる。

「人はこの強大な力の中に、流されながら生きている。ならば、そこに留まるには……？」

流水の清らかさと、冷たい風の爽やかさが、頭をクリアにしている。

「“永遠”を手に入れるには……？」

キヤアア！！

そのとき、アリアムが辿り着きかけたその答えが悲鳴によって掻き消される。

「!?!」

ふと見ると、少し先に明かりが灯っていた。それは何から逃げるように、右に左に大きく揺らぐ。

アリアムがその明かりに向かって駆け寄っていくと、そこにあったのは二匹の野犬、そして松明を掲げるように構える金髪ブロードの女性シルファの姿だった。

「シルファさん!?!」

「その声は、アリアムさん!?!」

アリアムの声に反応して、野犬が一匹、こちらに向きを変える。それを見たシルファも、焦燥を顔に浮かべて声を上げた。額の汗

が松明に照らされ、わずかに輝いている。

「逃げてください、アリアムさん！」

野犬はアリアムを敵と認識したのだろう。白い牙を剥き、今にも跳びかかって来そうな勢いだった。

応じて、アリアムは杖を掲げる。

「平気です！ それよりシルファさんこそ……っ!?」

大丈夫ですか と声を掛けようとしたとき、それを合図にしたかのように野犬が向かって来た。

それを見たと同時にアリアムも杖を構えながら前に走り出す。

直後、ガツ、という鈍い音と共に、杖と牙が交錯した。

アリアムは開かれた顎に杖を差し入れるようにして牙を受け、互いの動きのままに牙を横に流して、そのままシルファのすぐ隣に着地、もう一度野犬と対峙する。

そして最後に、シルファを安心させるようにくすりと笑んて言った。

「大丈夫ですか？」

「アリアムさんって、結構すごかったんですね……」

その機敏かつ機転の利いた動きを見たシルファは、驚きの表情を浮かべていた。

「ひどいですよ、シルファさん」

普段のどこか間の抜けたようなアリアムの様子からは想像もつかないのだから無理もない。

しかしアリアムもまた、危険を伴う旅をずっと一人で続けてきた。それ故に、自分の身を守るくらいの武術の心得は持っているのである。

「私だって、このくらい……」

「そうですね、ごめんなさい。でも、私は大丈夫ですから。戦闘の経験もありますし」

そう言っ、今度はシルファがくすりと笑った。

戦いの常識として、また獣と相対するときの知識として、視線を

逸らして表情を見ることは出来なかったが、アリアムにもそれがわかった。

シルファが落ち着きを取り戻したことを確認して、杖の握りを直す。

「それじゃあ、協力してこの子達を追い払っちゃいましょう！」

「いえ、それではダメです」

だが、シルファはその意見に首を振る。

「ちゃんと供養してあげないと……」

「供養……？」

そのとき、アリアムはシルファの言った言葉を不可解に思った。

供養とは本来、死者の冥福を祈るはずの行為。目の前にいる野犬は生きて動いているにも関わらず、供養という言葉を用いることは不自然なのである。

では、追い払うだけでは駄目だというのだから、その生命を絶つてしまおうというのだろうか。だが、たとえ動物が相手だったとしても、仮にも神職者であるシルファがそのような言動をするとは思えない。

「!？」

その疑問を尋ねようとして、アリアムはふと気付く。

今まで、明かりの反対側にいたために、暗くてよくわからなかった事実。

野犬と思っていた二匹の動物 片方の耳がなく、足はあらぬ方向に折れ曲がっていて、支えとなっているのかどうかすら怪しい。

一方はさらに、片目が抜け落ちて、顔に奇異な穴を開けていた。

今、明かりの照らし出す先にいるものは、ただの野犬ではなかったのだ。

「シルファさん、この子達は……？」

「魔導師の生み出す狂気、とでも言うべきモノでしょうね」

シルファは視線を前に向けたまま、静かにゆっくりと語るように話す。

「彼らは、本当は死んでしまったはずの生命…… それに魔導師達が自身の魔力を注ぐことによって、まるで生きているかのように動かしているのです」

本当にそんなことが可能なのかという疑問と共に、しかし、アリアムはかつてナタスに教示されたことも思い出していた。

彼が言うには、魔力とは“生命エネルギー”のようなもの。人間が本来、生存するために用いる力を自分たちの生きる“世界”に浸透、作用させることによって、魔法はその力を発現させるというのである。

魔力が生命エネルギー、あるいはそれに準じるものだというのならば、死体に注ぐことによって擬似的に生者とすることは不可能ではないように感じられた。

さらに 考えたくないことではあるが 、死に落ちた後に残されるものは、ただの肉塊。意志も生命力もない“物体”を操作するのは、魔法ならば難しいことではないのである。

「そんな…… そんなことって……」

しかし、だからと言って納得できるようなものではない。仮に妥当な理論であり、実現可能なのだとしても、死者を、死を冒^{ほつとく}すするような行為は、感情が認めない。

奥歯を噛み締めるアリアムに、シルファはやはり穏やかな笑みで応える。

「そう…… だから、供養してあげなくては」

まさか動き出すとは予想外……

頭の奥で、声が響く。

けれどこれは、嬉しい誤算。まさか、ここまでうまくいったとは思わなかった……

闇に堕ちた、冷たい声が。

でもこれは、やっぱり失敗作……

心の中で、声が重なる。

“生”にすぐろうとするだけの、ただのモノ。望みはこんな不完全なものじゃない……

欲望と渴望の。

私が望むはただ一つ。あの子達の笑顔を、この手に……

それ以外を知る必要もなく、聞きこともせず、邁進する。ただそれだけを正義と信じ、しかしたからこそ、そこに矛盾があるとも気付かずに。

そう、だからこんなモノは早く処分してしまわないと……

歪んだ心のままに、歪に笑んだ。

第六話（後書き）

お久しぶりです。ようやく更新する事が出来ました。

今回の話はいかがだったでしょうか？

久しぶりに書いたので、どこかしっくりこない印象があるのですが

……？

忙しさも一段落したので、これからはかつてのようなペースで書いていけるように頑張ります。

第七話（前書老）

第七話

「どうして……」

アリアムは野犬たちから目を離さずに、しかしわずかに目を伏せる。睨むのではなく、見つめるように。

「あんなに、傷付いているのに……」

憤る思いに、身体が震えるのを感じる。

「とつても、痛かったよね…… 苦しかったよね……」

彼らを思うと、胸が痛い。

響く呻き声は、「痛い」と訴え続ける悲痛の叫びにさえ聞こえてくる。

「怖かったはずなのに…… それなのに…… どうして!」

アリアムは瞬間、息を飲み込むと、一気に彼らの前へと飛び出した。

一方に狙いを定め、本を納めた鞆を横から勢いよく薙ぐ。

その側頭を狙った一撃は、狙いすぎたのか打点が少し高かった。軀を下げるだけで、いとも簡単に野犬に回避されてしまう。

だが、アリアムの真の狙いはここからだった。薙ぎ払った鞆を重石に、くるりと一回転すると、同じ軌道の杖による第二撃を正面に振り抜いた第一撃をもう一方に繰り出し、二匹を同時に牽制する。

これにはたまらず、野犬たちも咄嗟に大きく飛び退いて回避した。それによって、二匹の距離が離される。

アリアムは 遠のいた一匹が、一跳びで攻勢に出られない距離に着地したことを確認すると 千切れそうになる腕に痛みを感じつつ、地面を蹴って、分たれたもう一匹へ向かっていく。

それに反応した野犬が、迫る敵を噛み砕かんと微かに黒ずんだ牙を見せて、大きく顎を開いた。

しかし、アリアムはその牙を、今度は受け流すことをしなかった。

大きく開いた顎の中に、左手に持った鞆を一気に押し込む。

ガアツ！！

突如、口の中に打ち込まれた異物に、野犬は思わずたじろぐ。無意識の内に異物を吐き出そうとしたのだろう。カツという小さな嗚咽えんが響き、唾液にまみれた鞆が地面に落ちた。

その隙を突いて、アリアムは腹部を杖で突き上げる。そして続けて、痛みに悶え、庇うようにして丸めた身体に、振り下ろす一撃を加えた。

そのまま勢いで地面に叩きつけられた野犬は、意識を失ったのか、横たわって動かなくなった。

その一部始終を見ていたもう一匹が、やや遅れてアリアムに襲い掛かる。同じ轍てつを踏まないように、という思慮があつたのかはわからないが、両の爪を大きく前に向け、駆け抜ける。

利き手の逆、死角からの攻撃に、アリアムの反応がわずかに遅れてしまった。そのわずかな時間差が、アリアムの左腕えぐを抉る。

「痛っ！」

痛みに表情を歪めるも一瞬、アリアムは後ろに大きく下がる。見れば、野犬は次の突撃のために肢を曲げ、力を溜めているところだった。すぐに反撃の体勢を整える。

が、その機先を火柱が阻んだ。

「させませんよ」

シルファが投げ、魔法によって火の勢いを増加させた松明たいまつだった。野犬は溜めた力を、アリアムに向けてではなく、その火炎から逃げるために使う。アリアムと野犬との距離は、炎を中心にして再び大きく開いた。

シルファは攻撃の手を緩めない。さらに、己の最も得意とする魔法を発動させていた。

見れば彼女の後ろで、河の水が渦を巻くようにしてうねっていた。それはまるで龍か蛇かのように埒くまを巻きながら、その頭を錐きりのように尖らせて、野犬に向かかっていく。

「お黙りなさい！」

シルファの声を号令に打ち出された水の錐は、しかし、寸前のところで飛び下がった野犬にかわされていた。代わりに、アスファルトの地面に深い穴が穿うがたれる。

「はあああ！」

そのかわした先、野犬の動きを読んでいたかのように、アリアムが飛び込んでいた。着地に合わせ、体勢を低くして振り抜いた杖が肢を払う。

唐突にその支えを失った野犬の躯が大地に打ち付けられる。そして気付いたときには、体勢を立て直す間も無く、ようやくもたげた首筋、その後ろに杖による打撃を受け、もう一匹の野犬も動きを止めた。

一瞬の攻防、ただそれだけで全ての事が静まった。

「はあ、はあ……」

アリアムは振り下ろした杖もそのままに、荒く肩を振るわせていた。やがて呼吸を整え終えたのか、立ち上がって残心を解く。

だが気丈に佇んだと思ったのもまた一瞬。数歩後ろ、横たわる野犬たちを視界に収める位置にまで下がると、不意に力が抜けたように、がくりと膝を落した。

「シルファさん」

片膝を付き、頭を垂れたままの姿勢でアリアムが小さな声を搾り

出す。

「……この子たちは何なんですか？」

泣いているのだろうか。それとも、彼らの苦痛を思い、安息を祈っているのだろうか。夜の闇も手伝って、その表情を窺い知ることができない。

「……」

シルファは無言のままアリアムの横を通り過ぎると、野犬を抱え上げ、棺に遺体を納めるように、その体を傍らに落ちていた大きな布の袋に入れた。袋の口を紐で強く縛る。

「アリアムさん、薪を集めるの、手伝って下さいませんか？」

シルファが言つとアリアムは黙って立ち上がり、やはり無言のまま、歩き出したシルファの後を追う。

これから行われるであろうことを思うと、また胸が痛くなるのを感じた。

シルファは河辺まで下りると、そこに落ちていた流木を拾い上げる。

「さつきも言つた通り、彼らは魔導師たちが自身の魔力を注ぐことによつて、生きていくかのように動かす人形……」

「……」

言いながら、木をアリアムに手渡す。アリアムも黙ってそれを受け取った。

季節柄、河の勢いが増しているのだろう。流木はあちこちに見つけることができた。すぐにその数はいっぱいになる。

「俗に“魔法生物”と呼ばれるもの。魔導師の意のままに操られる」「……」

着火剤に使うのか、次にシルファは葦の枯れ葉を刈り集め、束ねて抱える。手が泥で酷く汚れていた。

「でも、彼らは違つたみたいね。魔法生物は魔力が供給されなければ存続し得ないし、主たる魔導師が近くにいなければ自発的に動く

「ことはない」

「違う！」

と、不意にアリアムが大声を上げた。眉根を寄せ、奥歯を噛み締め、目には今にも零れそうこぼなほどの大粒の涙を浮かべていた。

「私が聞きたいのは…… 私が聞きたいのは」

その涙を隠そうとするように、アリアムはまた俯く。流木を抱えた腕に、力が込められているのがわかった。

そしてそのまま、再び黙り込んでしまう。

アリアムにはまだ心の整理がついていないのだろう。いつだって彼女は、生きることが喜びと感じてきたのだから。だからこの、一度死に伏した者を“再び”葬らなければならぬというあまりの現実の前に、ただただ憤り、困惑するしかないのである。

「どうしてこんな酷いひどことができるの……」

「そう、ね…… でも、きっと答えは簡単」

「……？」

アリアムは涙を浮かべたまま、シルファを見る。だがシルファはその視線から目を背けた。表情も変わらない。

「コレを作った魔導師にとって、コレはただの道具だったというだけのこと」

「道、具……？」

「ええ。あなたもそうでしょう？ 使い終わった“紙くず”はゴミ箱に捨てて燃やしてしまう…… それと一緒によ」

「そんな、でも、あの子たちは……！」

「一緒に」

反論しようとしたアリアムを、シルファが言葉で静止する。

それは優しくたしな窺めるような声ではなく、静かながらも強い怒気が込められている声であるのがわかった。

「一緒になの…… あなたにとっては、どうかわからないけれど」

シルファは対岸の河辺をじっと見据えていた。つられて、アリアムも対岸を見つめる。

彼女 シルファの、その睨みつけるような視線の先には、そしてその瞳には、何が映っているのだろうか。
何故かふと、そんな疑問が頭をかすめていった。

二人は炎を眺めていた。河縁で轟々と上がる、真つ赤な炎を。普段ならば心弾むような光景も、今のアリアムにとっては暗鬱なものでしかなかった。

これはキャンプファイアではない。

それを、“喜”あるいは“楽”の象徴とするならば、これは“怒”と“哀”の象徴だった。

そう、これは死者を火に葬して弔うための炎なのである。

あの後しばらくして、アリアムとシルファは集めた薪で櫓を作った。そして、櫓の中心に野犬を納めた袋を置いて火を点けた。

アリアムにはそれが、まるで棺を載せる輿のように思えて、胸が苦しくなった。

火葬を選んだのは、二度とこのような辱めを受けることがないように、との配慮であろう。利用される肉体が灰になってしまえば、いかに魔法でも操ることはできないからだ。

鎮魂の炎は高く煙を上げつつ、猛っている。

それを眺めて見ても、アリアムの心はこの炎のように力強くなることも、明るくなることもなかった。

あれ以来、二人は一つとして言葉を交わしていない。

だが、それもどうでもいいと感じていた。今はただ彼らのために祈ろうと思う。

ごめんね、私たち、“人間”のせいで
瞳を瞑り、

苦しい思いをさせて

膝をついて、

本当に、

手を組み合わせる。

ごめんなさい……

火照る頬をしてなお“暖かい”と感じるものが一筋、流れていた。

炎が、燃える。

どうしようもない、怒りを表すように。

白煙は、昇る。

不幸な魂魄を、連れて逝くかのように。

少女が、祈る。

こんな悲しみが、繰り返されぬように。

女は、誓う。

二度と同じ過ちを、繰り返さぬように。

時が経つにつれ、辺りを照らす光は薄らいでいった。

第七話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

迫力とスピード感のある戦闘シーンを目指しました。自分としてはイマイチ納得のいかない部分もあるのですが……

第八話

やがて、檜と共に炎の柱が崩れると、終わりの刻を迎えた炎が轟と煌めく。その一瞬の輝きを最後に、儂く散って、火の粉の舞と共に消えていった。

シルファはその光を見届けると、すつと立ち上がり、黒い炭と化した塊へと歩み寄る。残った薪の一本を手に、塊を崩す。

まるでその欠落を埋めるように、シルファの魔法　その水が、炭でできた穴を覆った。刹那に残る、しゅっという小さな音と共に、闇と静寂と寒さが帰ってくる。

「……」

アリアムはその間も、無言のまま、膝を抱えて座り込んでいた。瞳も一点をぼんやりと見つめて、動くことはない。

シルファもまた言葉を発することなく、火が完全に消えたことを確認すると、それに背を向けて歩き出す。足音だけが、やけに大きく響いて聞こえた。

そして、蹲るアリアムのところまで来ると、彼女は顔を合わせることもせず、ただ、ぼんと肩に手を添えて、そのまま夜の帳の向こうへ姿を消していった。

それから、どれくらいの時が過ぎただろうか。数秒か、数分か、もしかしたら数時間、そうしていたのかもしれない。

アリアムは急に思い出したかのように固く結んだ腕を解くと、手足を広げて寝転がる。地面に触れた背中が、とても冷たかった。見るでもなく見上げた空には、天を覆い尽くさんばかりの幾つもの星々が浮かんでいた。少し前に見上げた時とは形を変えて。

そういえば、『死んだ者は星になる』という逸話があったな、とアリアムは思い出す。

だとするならば、あの星には一体どれほどの哀しみかなが宿っているのだろうか。

今、悲しみの内に散っていった彼らも、この夜空のどこかで輝いているのだろうか。

悠久の時に比してあまりに短い生せいの時間、その中で幸福を感じる事ができたのだろうか。

人間の手前勝手な欲望に振り回されて、それでも何一つの悔いも残すことなく逝いけたのだろうか。

そんなことを思いながら、少女は静かにその瞳を閉じた。

「どうして、人は死んじゃうの？」

あの日、少女は尋ねた。

「それはね、“次”へ繋つなぐためよ」

それに、老婆が答えた。

今にしてみればなんてことはない、ただの興味本位からのものだったのだろう。深く考えることもせず、ただその答えに耳を傾けていた。

「次へ繋ぐ？」

再び、少女が尋ねる。

「そう、次へ繋ぐの」

また、老婆は答える。

「人というのはね、世界にとって大きすぎるものなの。『偉人』とか『英雄』の話、あなたも聞いたことがあるでしょう？」

「うん、おばあちゃんのことでしょ？」

瞳を輝かせて言った少女に微笑みながら、少しだけ困ったように老婆は返す。

「あらあら、ありがとう。でも、私はどうかしら……？」

「違うの？」

「私は“今”に生きているからね。英雄というのは“今”を失った者、“過去”になってしまった人を指すの。だから、私がそうであるかどうかは、後の“世界”が決めることなのよ」

ふん、と頷きつつも、少女は『よくわからない』といった表情を浮かべた。それを見た老婆も、くすくすと笑みを零す。

「これは難しいけれど、簡単なこと。例えばあなた、魔法使いになりたいのよね？」

うん！ と、今度は勢いよく少女が頷く。自らの意志を、夢を、希望を何一つ隠すことなく、強く。

その成長を見て、老婆は“時の流れ” “次”に思いを馳せる。「あなたが望めば望んだだけ、叶えれば叶えただけ、世界が広がっていく。過去の英雄たちは、そうやって“新しい世界”を築き上げてきた。そう……」

老婆は深呼吸をするように、一息置いた。「人は世界をも作り変えるほどの力を持っている。だから“人”は世界にとって大きすぎるの」

少女はやはりわからない、というように疑問を投げかける。

「どうして大きいとダメなの？」

「あなたにも我慢できることとできないことがあるでしょ？ それと同じ。大きな人が多くなると、世界が我慢できなくなってしまふ」老婆は諭すように、優しく語り掛ける。

「人が死なない、ということはその人がずっと存在し続けるということ。世界を変えてしまふほどの人が。そうなれば、世界は世界でいられなくなってしまう。 “次”へ向かうことができなくなってしまう」

たとえそれが理解されようと、理解されまいとも、自分で考えてもらえるように。

「だから世界は人が死ぬように定義したの。世界が世界でいられるように。でもね、それは人が生きようとするのと同じこと」

「じゃあ、“せかい”も生きようとしてるんだね」

その少女の答えに、老婆はとても嬉しそうに言った。

「ええ、そうね。やがては来る最期の時だけれど、その時まで精一杯生きようとしているのね。“生きるとは素晴らしいこと”だから」

「『生きることは素晴らしいこと』……」

少女は言葉を繰り返す。自分の心に、深く刻み込むように。

「だからアリアム、あなたも決して、生きることを諦めてはいけない。死を望んではいけない。人は世界を動かす力を持っている。生きていく限り、世界は広がっていくんだから」

少女は、満面の笑みでこう言った。

「うん。わかった、おばあちゃん」

老婆は、満面の笑みでそれに応えた。

ほんの少しだけ、“次”を憂いながら。

アリアムは瞳を閉じたまま、頭上の輝き。その一際強い光を放つ光に、小さな声で呼びかけた。

「お婆ちゃん……」

かつて、自分を悲しみの淵ふちから救ってくれた人を。亡き今も、尊敬と感謝の念を抱き続ける人を。

「私、やっぱり駄目だった」

あの老婆の微笑を、少女。幼い頃の自分は、はっきりと見ていなかったのだろうか。今も、あの笑顔を、何故か思い出せないでいる。

「また、見ていることしかできなかった……」

あれが、自分の尊敬する偉大な魔法使いの最後の教えであったことにも、気付くことなく。

ただ、ぼんやりと眺めてしかいなかったんだ。

「私が、こんなんだから、」
どうしてあの時、もっと深く考えようとしなかったのだろう。

「あの子は、苦しんで、傷付いて。それでも私は、何もできなくて
どうしてあの時、ただ微笑みを返す、それだけで答えとしたのだ
ろう。」

「だから、もう二度とあんなことが起こらないようにって、誓った
はずなのに」

どうしてあの時、愛する人たちの最後の笑顔を、真摯しんじに受け止め
なかったのだろう。

「一つでも多くの幸せが、この世界に灯るようになって、頑張ってた
はずなのに」

どうしてあの時、“次”があるものだと思えて疑わなかったのだ
ろう。

「私は、また何もできなかった…… 私はあの頃と何も変わらない
どうしてあの時、“終末”という存在に目を背けたのだろう。

「ずっと、無力なまま……」

瞳が、熱い。視界が、濡れる。

星は、声もなく、ただ煌めいていた。

このまま眠ってしまおうかと思ったその時、不意に耳元で声がし
た。

「アリアム…… 泣いてるツスカ？」

瞳を開くと、暗い夜空が真っ白に変わっていた。

そこにいたのは、一匹の猫だった。純白の毛並に長い尾。やあの
丸顔には、ぴんと立った耳と、不揃いの髭が伸びている。

その白猫が、心配そうに頬を舐めた。

「何か、あったんスか？」

ざらりとした彼の舌は、くすぐったくて、そして、温かった。

それで、それだけで、何故か救われたような気持ちになる。

「うん…… ちょっとだけ、ね」

アリアムは、もう一度だけ、と瞳を閉じた。

そうだ、私は、何もできない

かつて、老婆は自分に手を差し伸べてくれた。血の繋がらぬ身でありながら、時に厳しく接し、そして優しく微笑んで、共に歩んできた。

今は……

あの日、幼い男の子が静かに自分を見つめた。憔悴した顔で、それでも精一杯に笑いながら最後に一言、『ごめんなさい』とだけ、呟いた。

それなら、今は叶えるために努力しよう

それを糧として、それを罪として、自分は今までやってきた。どんなに辛くとも、どんなに苦しくとも、強く在らなければならぬ。そうすることが、生きる希望をくれた老婆への報恩であり、悲しませてしまった男の子への謝罪になるはずなのだから。

今は自分にできる精一杯をやるう

そして、その向こうで、灰色の瞳の少年が背を向けて歩いている。自分の進むべきその道を指すように、またあるべき姿を示すように。それでいて時々、少しだけ立ち止まって自分を見守ってくれる。変わらぬ表情の中に、ほんの少しだけしか見えないけれど、本当はた

くさんの優しさを伴って。

そうすれば、きっと……

少しでもその人に近づこう。少しでも自分の願いを叶えよう。それが、今の自分にできる最大限の努力であるはずなのだから。

アリウムは力強く、その瞳を開いた。

決意を新たに見上げた星は、とても綺麗に輝いて見えた。

「……」

彼女を黙って見守り続けていた白猫　セレスは、それから、こ
う声を掛けた。

「それじゃあ、帰ろうツス」

アリウムにはその響きが何よりも優しく、だから嬉しくて、思
わず声に、顔に、喜びが滲み出る。

「うん。帰ろう！」

暗い夜道。冷たい北風。

今はそれも、気持ちよかった。

第八話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

何だか構成がごちゃごちゃして、読み難いですよね……反省。

アリアムの信念のようなものが伝えられていると良いのですが…

…

第九話（前書き）

一部、ルビに見にくい部分があります。PCでの見た目を重視しているため、携帯の方には申し訳ないのですが、ご了承をお願い致します。

第九話

「これは一体、どういうことだ？」

翌朝、ナタスが自室にある椅子に腰掛けつつ、アリアムに問うた。脇の机の上には、泥にまみれ、汚れに汚れた鞆が置かれている。

「あつ……」

一方のアリアムは、そのナタスの正面で、緊張感も顕わに直立している。両手を前で組み合わせ、やや俯うつむきがちの伏し目を真っ赤にして、目尻には涙を溜めつつ、それでも背筋を伸ばして姿勢を正す。職員室で説教を受ける生徒のような状態だ。

「えっと、ですから……」

「……」

答えを待つ少年の瞳が、静かに持ち上がる。

それを正面から直視してしまつて、アリアムはビクリと肩を震わせて、また俯く。

ナタスは声を荒げるようなことはしない。むしろ怒りが深まるほど、穏やかな表情のまま、静かになっていく性格をしていた。

それが余計に怖い。アリアムはおずおずと弁明を続ける。

「野犬に、襲われて……」

「それは聞いた」

「あつ……」

平静な口調で即答されて、また肩が震えた。

「もう一度聞くぞ。一体、どういうことだ？」

と言つてナタスは、くいと親指で机上きじょうの鞆を指した。中身は勿論、昨日ナタスが教団の書庫から借りて、アリアムが返してきた “はずだった” 本である。

にも関わらず、どういうわけか昨日と同じ状態……もとい、昨日よりも遥かにボロボロの状態じょうたいでナタスの下へと戻ってきたのである。

「その、野犬、に……」

何度目かになる問いには、やはり何度目かになる答えが返された。
「やれやれ……」

「あつ……」

が、その何度目かの答えは、やはり最後まで説明が続くことはなかった。

先程からずっと、アリアムの返答の途中でナタスが言葉を発する、という行為が繰り返されていた。もっとも、恐怖の所為か、アリアムの歯切れが悪くなっているのが原因ではあるのだが。

「君だって、一人で旅をしていたのだろう？　野犬を追い払うくらい、さして問題とは思えないが……」

ナタスが呆れたように言う。少々頭痛を感じるようになった額を押さえながら。

これらの本が、ナタスたちの宿泊しているゼピュロス邸に届けられたのは、今朝早くのことだった。

今朝方、川沿いの防波堤を散歩していた人に発見されて教団に届けられ、借り主がゼピュロスだったこともあつて　借りたのはナタスだが、貸し出しの際の名義はゼピュロスになっていた　、職員が気を利かせてわざわざ届けてくれたらしい。

職員は大層迷惑そうな表情をしていたが、相手が司祭職のゼピュロスだったために強く出ることもできず、またゼピュロス自身もボケたふりをして責任を被ることで、穏便に事が済んだ。

つまり現状では、何も関与していないゼピュロスが“うっかり”やってしまったことになっているのである　当のゼピュロス自身は大して気にしている様子もなかったが　。

それ故にナタスは、罪を被ってくれた友人のためにも、また返却をアリアムに任せてしまった自分の責任としても、子細を尋ねないわけにはいかなかった。

「万が一にもこんなことにならないように、お前をやったというの

に、どうして“万が一”が起きるんだ？」

涙目であうあうと漏らすだけになってしまったアリアムに見切りをつけ、今度は同じく、彼女の横で屹立きつりつしている白猫　セレスにナタスが問い掛ける。

咎とがめられたセレスもまた、感電したように全身を一回、痙攣けいれんさせた。力んだ尻尾が天を衝つくようにピンと伸び上がっている。

「えと、オイラが着いた時には、もう鞆たもとを持ってなかったツスから、帰るところだったのかと、思ってた……」

「状況の把握、及び確認を怠った、ということですよわね」

その申し開きを、ナタスが肘をつく机の上に座っていた黒猫

ディアナが叩く。こちらはセレスとは違い、落ち着いたものである。ペロリと自分の尻尾を優雅に舐めてさえ見せていた。

その“余裕綽々よゆうしゃくしゃく”といった態度に、「他人事だと思って」と、セレスは心中で怒罵どばする。

「怠慢ですよわね」

床上と机上という位置関係が、まるで見下されているようで、ますます気に食わない。

「待って、セレスは悪くないの」

と、それを庇かばうように、アリアムがやや強い口調で言った。

「セレスが来てくれなかったら私、どうしていたか……」

そうしてまた、目を伏せる。

アリアムの言葉を聞いて、ナタスは彼女が混乱から醒さめたことを察しつつ、気にかかった言葉を繰り返す。

「“どうしていたか”、とは？」

「私、あの子たちに何もしてあげられなかったんです。彼らはずっと、苦しい、辛い、って言っていたのに。自分は無力なんだって思い知って、それで……」

「“あの子たち”とは、野犬のことか？」

「はい……」

ナタスは自分とアリアムとの間に、どこか食い違いがあることを

感じた。

アリアムが今、大した怪我もなく、ここにこうして立っているということは、何らかの方法で野犬を追い払っただろうことは、ナタスにも推察ができていた。その“何らかの方法”で、本が汚れてしまったことも。

それにしても“何もしてあげられなかった”というのは、いささか妙である。野犬が腹でも空かしていたのに、何も食べさせてやれなかった、とても言うのだろうか。

だがその疑問は、アリアムの次の一言が払った。

「あの子たちは、一度死んでしまったにも関わらず、私たち“人間”の身勝手で、また生き返らせられて、利用されて……」

「なるほど、そういうことか」

ナタスが机をトントンと指で鳴らしながら言った。アリアムの言葉には若干の語弊はあったが、事態を理解する。

「君を襲ったのは、どこぞの魔導師バカが作った、魔法生物だった、というわけか」

毒づきつつ、具合を改めるように座り直す。呆れか憤りか、深く息を一つ吐いて、

「もう少し詳しく聞かせてくれるか？」

問い掛け方が変わる。語気はいつものような、優しげなものに戻っていた。

それを感じ取ったのか、アリアムもいつの間にか、元の調子に戻る。目尻の涙は乾いていた。

「はい」

昨夜の様子を思い出しながら、一つ一つ説明していくアリアム。

その横で、密かに白猫の尻尾がぐにやりと曲がったことを、黒猫は見逃すことにした。

街外れの教会からやや離れた森の中、人の侵入を拒むかのように木々に覆われた岩山に、ぽっかりと口を開いた洞穴があった。

その岩穴の奥へと、一人の女が周囲を確認しながら入っていく。両手には、大きな紙袋を抱えていた。

「ただいま」

風除けのために仕切られた簡素な扉　　というよりも、開閉が可能なだけの木の板　　を開けると、小さな声で呟く。彼女の高い声が壁に天井に反響して、木霊していた。

そこはかつて、大戦時代に教会が作った、避難用の壕^{ほり}だった。万が一、市中が戦火に見舞われた際に、民衆が頼れる唯一の場所である。それ故に今も、水を溜めておく大きな瓶^{かめ}が数個と保存食、多量の毛布や薪^{まき}が備えられており、さらには調理が可能なスペースまで有していた。

だがこの場所も、時の流れの中で次第に人々から忘れ去られ、今やその存在を知る者はほとんどいない。

「ただいま、皆」

女は両手の紙袋を、これも簡素な作りの机の上に置くと、洞窟のさらに奥に入る。

その暗い室内には、一つの彫像が据えられていた。朽ちて崩れたのか、その像はすでに両腕がなく、また頭部には、顔だけが抉^{えく}り取られたような跡さえある。

と、その近くに、ロザリオを下げた小さな体が五つ、横たわっていた。

「遅くなってごめんね」

女は五人の子供たちに話し掛ける。しかし、返事は返ってこない。「ちよっとしたトラブルがあつて……」

女は構うことなく語り掛ける。それでもやはり、応えはなかった。「でも、もう少しだから」

言いながら、女は壁際に取り付けられた燭台しょくたいに火を灯していった。徐々に室内は明るさを取り戻していく。

するとそこに、“ロザリオを下げた小さな骨体”が五つ、横たわっていた。

「大丈夫だから」

女が幼子おとこをあやすように、頭骨を一つ一つ、優しく撫でていく。

「だから、安心して待っててね」

捻ねじれた瞳で、狂喜に笑みながら。

「必ず、生き返らせてあげるから……」

蠟燭ろうそくの光に照らされて、ロザリオがきらりと輝いていた。

洞窟の入り口、その少し奥の方に、まだ真新しい老人の死体が無造作に転がっていた。

「ふう、ん……」

ナタスが片肘で頬杖を突きつつ、息を漏らすように鼻を鳴らす。

視線は机の上に開かれた、件の本くだん、魔法生物に関する記述が記載されているページに注がれていた。

「付近にそれを操っているような魔導師はいなかったんだな？」

確認にと、変わらぬ姿勢と視線のまま、ナタスが問い掛けてくる窓から斜めに差し込む朝の陽射しが、白い光の帯を作って彼を照らし出していた。まるで太陽に祝福される賢者の姿のようだ。

「は、はい……」

その姿に、アリアムは思わず見惚れてしまっていた。不意に振られた質問に、慌てて返事をする。

自分も彼のように知的に振舞ってみたいと感じて、しかしすぐに自分の実情を思い、気分が沈んだ。

「とすると、何か特殊な“仕掛け”でも施されていたのかもしれないわね」

本のすぐ脇で、それを覗き込んでいたディアナも呟くように言った。

その本の“魔法生物”の項にも、シルファの言ったように『遠く離れた場所から、それを操ることはできない』という旨が記載がされていた。

「オイラがもう少し早く着いていたら、何か見つけられたかも知れないツスね……」

セレスが口惜しそうに言う。

「そうだな」

「そうですわね」

今更言っても仕方ないだろう、というような慰めを期待していたセレスだったが、彼の主人と同僚は全く容赦がなかった。ブーイングのように声を出すも、気にもとめられない。

ナタスたちは無論、セレスの心境には気付いている。気付いて、それでいて彼を“からかって”いるのである。

一方のセレスもそれを理解して、傍目にも明らかなほど不満そうな表情で、抗議の態度を示す。

彼らの絆の強さがわかる一瞬だ。

「もしかすると、」

相変わらず視線を本に落としたまま、ナタスが言う。

「関係があるかもしれないな」

「関係って…… 何とですか？」

「今回の事件と、さ」

「事件って…… 街外れの教会で起きた火事ですか？」

そつだという肯定として、ナタスは本を閉じて無言のまま頷く。

とはいえ、目的が全くわからないな……

心中でそう推理を巡らしながらも、テロという行為について、果たして他者がその意図、目的を理解することができるのかとも思う。いずれにしても、調べてみる価値はありそうだ。

「教会跡の方へ行くのは、河原を見てからにしよう」

「あ、そういえば調査をするんでしたよね」

忘れていたのか、アリアムが今更のように言う。

彼らはゼピュロスたつての頼みで、教会で起きた火災　ゼピュロスがテロではないかと睨んでいる　について、調査することになった。今日一日は、それに付きつきりになるはずだ。

それを思い出して、街を巡ってみたいと思っていたアリアムは少し残念に感じる。

「不満そうだな」

その思いが顔に出ってしまったらしい。ナタスがこちらを見やりながら、からかうように妙な笑みを浮かべていた。

相変わらず自分はわかりやすい性格なんだと、改めて感じさせられて、アリアムはつくづく自分に嫌気を感じる。

しかし、同時に、

昨日あんなことをした人たちを捕まえられるかもしれない……

そう考えると、無性にやる気が出てくる自分もそこにいた。

アリアムは力強く頷いて、はつきりと言いつ切る。

「私、頑張ってお手伝いします！」

二度とあのようなことが起こらないように。

今できることに、自分の全力を尽くすのみ。

昨夜の誓いを確かめるように、アリアムは朝日差し込む部屋の中で、もう一度力強く頷いた。

「それじゃあ、行ってきます」

アリウムたちはその後、遅めの朝食を取って、昼過ぎに家を出ることにした。

ゼピュロス邸の玄関先で、見送りに出てきてくれたゼピュロスと、その脇の数人のメイドたちに挨拶をする。

「いってらっしゃいませ」

メイドたちがナタスとアリウムに深々と礼をする。

「ホ、気を付けてな」

それに合わせるように、ゼピュロスも微笑みながら手を振った。

「ああ……」

対してナタスは、苦虫を噛み潰したような不愉快な表情を浮かべていた。

彼はどうやら、このように派手に見送られるのを苦手としているらしい。一瞬だけ深く頭を下げるメイドたちを見て、すぐに背中を向けてしまった。

言うまでもなく、それをわかっているゼピュロスの悪戯である。

「行ってくる」

それだけを言うと、ナタスは振り返りもせず、足早に家の門を潜る。

「あ、置いてかないてください」

アリウムも慌てて、小走りで彼の後を追いかけていった。

“シルファ＝ムルルーム”か…… はて、どこかで聞いた名前じゃのう……

二人を見送った後、ゼピュロスがふと思い出したように視線を上げた。

顎髭を擦りながら、聞き覚えのある名前を記憶の底から引っ張り出そうとする。

「調べてみるかの……」

ぼそりと吐き出した言葉は、
わずかに白く染まって流れていった。

第九話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なかなか話が進まなくて大変ですが、今後も頑張ります。

第十話

西の外れ、市街地から離れた場所にある林を抜けると、小高い丘陵が広がっている。

日の沈みゆくその丘は、夕暮れ時ともなれば、夕日と共に鮮やかな茜色あかねに染まり、周囲の林の深い緑色がそれを覆う、美しい姿を見せる。

そしてこの季節、夕日は丁度、丘の頂上と重なるように沈んでいくという。それは、まるで紅い土台あかに置かれたルビーのような、筆舌には尽くし難い、とても幻想的な光景なのだそうだ。

人々はその丘を“紅玉ひんぎょくの台座”と呼んで、この季節のわずか一時だけ見ることのできる光景を昔から尊とうとんできた。

そんな紅玉の台座の頂いただきより少し下、丘を挟はさんで街の反対に位置する側。

そこに、小さな教会があった。

街が大きく発展するよりもずっと昔、“教団”として成立するよりも少し前、信仰が広がり始めた丁度その頃、この教会は建てられた。

街の西側に位置するこの丘で、一日の終わり　太陽が沈むのを見届けるために。

そうしてまた太陽が昇ることを願い、夜の明けるように、人々に幸福が訪れることを、祈り続けてきたのである。

しかしある日、その歴史ある教会を、不幸が　突然の火災が襲った。

深夜遅くに起きたことに加え、この教会が山肌の向こうに建っていたために、市街地からの発見は大きく遅れ、消火と救助が訪れた頃には、すでに手の付けられない状態だったという。

焼け跡からは、一名の成人女性と五名の子供のものと思われる焼

死体が見つかった。教会を預かっていた聖女と、そこに身を寄せていた五人の孤児たちが炎に呑みこまれ、その尊い命を落としたものと見られている。

教団による調査の結果、教会の聖堂と繋がる、彼らが生活をしてきた小屋に備えられていた調理場付近の燃え方が最も酷かったことから、火災の原因は“火の不始末”によるものとされ、事故であると断定された。

なお、犠牲となった六名の遺体は、揃って神像の前で発見された。おそらく、逃げ場を失った彼らは、最期に神に助けを求めたのだろう。

「だ、そうだ」

「……」
街外れにある林の中、木に凭れ掛かりながら座っていたナタスが、手にしていた紙に書かれた最後の一行を読み終えて、そう締め括った。

彼らが調査しに行く事件、その公式発表の見解である。

「なお、この事故で犠牲になった六名は、有志が催した葬礼の儀において、丁寧に弔われたらしい」

「……」
静かに話を聞いていたアリウムは、虚ろな瞳で膝を抱えて座り込んでいた。

頭上から、くすんだ木の葉がひらひらと舞い落ちて、足元に広がる赤と黄と茶の色とりどりの絨毯に、また新しい模様を増やしていく。

「感想は？」

「……」
ナタスが「何か質問はないか」という意味を込めて、やや意地悪に尋ねる。

しかしアリウムは俯いたまま、何も話そうとしない。

「マスター」

と、そこに、セレスが咎めるように割って入った。落ちていた団栗ぐりに、じゃれついていた手を止め、恨みがましい瞳を主人に向けて叱責する。

その視線を受けて、ナタスが申し訳なさそうに詫びる。

「すまん。失言だった」

冗談も、時と場合を選ぶべきであろう。

六人もの犠牲が出たという事故の詳細を聞いて、明るい気持ちになるはずがない。人の痛みを、己の痛みのように感じ取ってしまうアリアムにとっては、尚更なおいっしょである。尋ねられるまでもないことだった。

“死”を侮辱するつもりは毛頭なかったが、どこか軽んじる節のある自分の愚かさを彼女に向けてしまったことを、ナタスは迂闊うかつだったと後悔する。

「いえ……」

アリアムは表情を下に向けたまま、小さく応えた。表情は相変わらず、暗いままである。

とそこに、今度はディアナが続きを促すように主人に尋ねた。

「それで、“次”は？」

「ああ……」

それを受けて、ナタスがポケットからも一つ一つの紙の束を取り出す。その影でアリアムの様子を窺うかがうが、すぐに視線を紙に戻して、「これは、ゼピュロスからもらった事件の調査報告書の写しだ」

先と同じように読み上げていく。そこにも、公式発表と“ほぼ”同様のことが書かれていた。

ただし、二点ほど、公式発表のものとは違う点があった。

「まず、火元とされた調理場以外にもう一箇所、神像の足元あたりの燃え方が激しかったらしい。もっとも、火の気のないところだったために、何か燃えやすいものが置いてあったのではないか、というのが大方の見解だ」

それともう一つ、とナタスが手にした紙からアリアムの方へと視線を改めて、続ける。

「発表では、遺体はその教会の聖女と孤児たちのものとされているが、実際は損傷が酷くて身元の確認ができていないそうだ」

「え、それじゃあ……」

それを聞いて、黙り込んでいたアリアムが顔を上げた。その表情は一縷の希望を見出したかのように、わずかに明るくなっている。

その肩に、鮮やかな紅葉もみじが一枚、はらりと落ちてきた。

「孤児たちじゃないという可能性も……？」

「なくはない。だが、その夜から彼らの行方がわからなくなっているらしくてな。それで、犠牲者を彼らとしたんだろう。だが、遺体があることには変わりないぞ」

しかしそれには、ナタスが戒めるように返す。

犠牲者が出ていることに変わりはないのに、表情を明るくするのは間違っているだろう。

アリアムもすぐに気が付いて、申し訳なさそうに謝罪する。

「あ、そうですね…… ごめんなさい」

「いや」

ナタスが紙に視線を戻しつつ、小さく応えた。

これで“おあいこ”という風に、調査の目的を語る。

「まず現場に着いたら、なぜ神像の足元の燃え方が酷かったのかを調べよう。その如何によっては、テロなのかどうかもわかるかもしれない」

「はい。それと私、その孤児たちの行方を調べたいんですけど…… いいですか？」

応えるアリアムの手は固く握り締められ、瞳には力強い意志が込められていた。

やたらと“孤児”にこだわりをみせるアリアムを多少、怪訝けげんに思いつた。いなながらも、ナタスは彼女の意思を感じて、無碍むげにしたりはしなかった。

「ああ。現場の調査を済ませたら、調べてみよう」

「ありがとうございます！」

明るい声で感謝を述べると、アリウムは立ち上がって、林の向こうの丘に目を向ける。

西の外れ、市街地から離れた場所にある林を抜けると、小高い丘陵が広がっている。

人々はその丘を“紅玉の台座”と呼び、この季節のわずか一時だけ見ることのできる光景を、昔から尊んできた。

そんな紅玉の台座の頂より少し下、丘を挟んで街の反対に位置する側。

そこに、小さな教会“跡”があった。

「フウ、ようやく一段落じゃ」

教団の一室、自分の部屋の机に腰掛けながら、ゼピュロスが息を漏らした。

管理職にある人間の宿命とでも言うべきか、机の上に積み上げられた大量の書類に目を通し、必要ならばその一つ一つにサインを入れていく、という単純な作業を一通り済ませ、ゼピュロスが凝り固まった肩を擦りながら椅子の背に体重を預ける。

「お疲れ様です」

そこに彼の秘書が熱いコーヒーを注いだカップを持って来た。真っ白で飾り気の少ない、ゼピュロスお気に入りのカップである。

「ホ、すまんの」

ゼピュロスは嬉しそうにカップを受け取ると、その中身を一口啜る。コーヒー独特の苦味の中の、わずかな甘さが疲れた体に染み渡っていく。

「砂糖を一つだけ入れておきました。お疲れのようでしたので」

「気が利くのお、お前さんは」

ありがとう、と秘書に礼を言い、また一口、コーヒーを口に運ぶ。ほのかな南国の花のような甘い香りと、大地のような優しい風味が、口の中に広がった。

その余韻を楽しみながら、ゼピュロスがふと世間話のように秘書官に尋ねた。

「お前さんは、“シルファームルルーム”という人物を知っておるか？」

「ええ、存じてますよ。教団ウチの人間の、ならば」

秘書が自分の机に戻りつつ、答えた。

その答えを聞いて、自慢の髭ひげを擦りながら、得心したようにゼピュロスが大きく頷くうなづ。

秘書は、不意の質問に加え、妙に真剣そつな表情で頷いている上司を不審に思つて尋ね返した。

「なんでまた、急に？」

「いやいや、どこぞで耳にしたんじゃが、誰だったかどうにも思い出せなくてな。いや歳を取ると、記憶の引き出しを開けるのにも苦勞するのよ」

それを聞いて秘書は、またこの老人の戯言たわごとだったか、と疑念を取り払う。このような道化ばかは、ゼピュロスにはよくあることだった。

だから大して気に留めることもせず、皮肉めかして言った。

「歳は取りたくないですね」

「お前さんも、油断しとるとすぐすに老いばれるぞい」

売り言葉に買い言葉、とでもいうように、ゼピュロスも笑つて返す。

秘書は今度はそれに取り合わず、手をひらひらと振つて自分の机に戻つていった。

そうして秘書が自分の仕事 机の上の書類に向かつてのを見て、ゼピュロスは思いを巡らせる。

そうか、教団の人間じゃったか…… ならば、資料室に行けば、

何かわかるじやろう

わざと音を立て、また熱いコーヒーを啜る。
カップの底はまだ見えない。

『KEEP OUT』。

立ち入り禁止と書かれた黄色いテープが、小さな鉄製のハードルのような仕切りの両端に結ばれて、これより先の道を塞いでいる。

人間とは兎角、^{とかく}“境”^{さかい}を設けるのが好きな生物である。国境や塀から、窓につけるカーテンに至るまで、様々な物を用いて、人間は自分の“領域”を作り出す。

しかし、この場に設けられた境界は、本来この土地に住んでいた人たちが作った境ではない。事故の後、それを調べるためにやってきた者たちが定めた領域である。

そんな、後からやってきた者たち”が誰の了承もなしに勝手に作った領域を、果たして“ここに居た人たち”はどう思っているのだろうか。喜んで迎え入れてくれるのか、あるいは『出て行け』と抵抗するのだろうか。

そんな思いが、アリアムの胸を激しく波打たせていた。

「ここから先、なんですね……」

黄色いテープを前にして、高鳴る胸を押さえつける。

自分たちの手で事件の真相が掴めるかもしれない、という期待とこれから“してはいけないこと”をしようとしている、という罪悪感にも似た思いが手伝って、それでも動悸は静まらない。

「覚悟はいいか？」

一方のナタスは、何食わぬ顔でスタスタと歩いている。彼は全くいつも通りの冷静なままだった。

「はづう…… ドキドキします」

アリアムは引き摺るように足を前に出し、何とかそれについていく。

本当に自分のものなのか、と思うほどに重さを感じる腕が小刻みに震え、血の気を無くしたようにとても冷たくなっていた。

それでも鼓動が『前に進め』と疼いて促して、激しく胸を叩き、気分を昂揚させる。

全くもって、“スリル”とは厄介な毒である。

「ここから用意しておくか……」

独り言のように呟くと、ナタスは境まで歩いていき、ポケットから赤いビー玉らしきものをいくつか取り出した。

「何ですか、それ？」

アリアムが尋ねると、ナタスはああ、と言って振り返る。

「これは“魔法石”。ある特殊な宝石に前もって魔力、あるいは使いたい魔法を込めておくことで、後々使用できるようになる代物だ。魔力電池とも言え、わかりやすいかな」

「へえ、便利な物があるんですね」

アリアムが手渡された小さな赤い、半透明の石を太陽に翳して、感心したように頷く。

「早く入ってくれ。魔法を発動させたい」

と、ナタスがアリアムに促した。

見れば彼はすでにテープを超えて、境の向こう側に立っていた。慌ててアリアムもテープを潜る。

「魔法って、何のですか？」

テープを潜りながらアリアムが問い掛ける。途中、帽子が引っかかり、髪が絡まったりと、細いテープを抜けるだけで四苦八苦していた。

その様子に、ナタスは苦笑を浮かべる。

「“隠れ身”の魔法ツスよ。何しろ、内緒で行動するツスからね」
主人に代わって、セレスが魔法の説明をした。

「かくれみ？」

それに反応して、アリアムが小首を傾げる。顔はハニワのような表情になっていた。

「特定の人物の存在を、人の“無意識”の内に隠してしまう魔法ですわ」

ディアナがわざと難しい方の説明の仕方をして、主人と共にアリアムの方を窺う。すると予想通り、アリアムは世にも奇妙な形のかめっ面に変わり、固まった。

相変わらず、からかうと面白い。

その予想通りの反応に、ナタスは必死に笑いを堪えながら、簡単な方の説明をする。

「街中で知り合いとすれ違っても、気付かないことがあったりするだろう？ それは、そこに“その人がいる”なんて思っていないからさ。注意して見ようとしないうちに、見逃してしまう。そんな風に隠れ身の魔法とは、そこには“誰もいない”という無意識の裏に身を隠してしまう魔法だ」

「なるほど」

アリアムは納得したのか、両手をぽんと合わせ、しかしすぐに慌てたように両手を下ろして仏頂面になった。自分の“わかりやすい”行動を見て、ナタスたちがまた笑いを堪えているのがわかったからだ。

せめてもの抗議、予想のできないような行動をしてやろうとしたのである。

「く、くく…… あははは！」

だが逆に、ナタスたちはアリアムのその仕草が、妙にコケティッシュに思えて、大笑いしてしまった。

それに大いに腹を立て、アリアムは膨れて顔を背ける。

「ぶう」

「ごめんなさい。気を悪くなさらないでくださいまし」

「ごめんツス、アリアム」

それを見て、猫たちが二匹して並びながら、微笑みを交えて詫びた。

「いや、すまん。まあ魔法を発動させたら、こんな風に大きな声を出したりはしないでくれ。声が聞こえれば“誰かいるのか”と注視されてしまう。そうなれば、隠れ身の魔法は台無しだ」

何とか笑いを押さえてナタスも謝罪し、ついでのように注意事項を付け加える。が、それでもアリアムは膨れたままで、目一杯の抗議を示す。

「ナタスさんたちがからかったりしなければ大丈夫ですよ」

「わかった、気をつけるよ。その魔法石は、ポケットにでも入れておいてくれ」

そう言うと、ナタスは持っていた石を握り締めて目を閉じた。続けてそのまま、アリアムの持っていた石を指す。すると、握られた手の中から小さな赤い光が広がり、二人と二匹の体を包んでいく。

そうするうちに、やがて光は何事もなかったように消えた。

「これでよし。以降は、できるだけ目立たないようにな」

それだけを言うと、急に静かになったナタスが踵を返し、それに倣うように二匹の猫も歩き出す。

何も変わった様子はないけど、隠れ身かあ…… やっぱりナタスさんはすごいな…… って、ああ！

しげしげと自分の身体を眺めていたアリアムは、自分が置いていかれそうになっていることに気付くまで、少しだけ時間がかかった。ちなみに、“隠れ身”の魔法を見たその時に、不機嫌さなど吹き飛んでしまっていたことには、アリアムは最後まで気付かなかった。

徐々に日が短くなっていくこの季節。太陽は、早くも傾き始めている。

「すまんが“シルファ・ムルルーム”という人物について知りたいのじゃが、資料はどこにあるかの？」

教団の資料室。

ゼピュロスが、教団に所属する人物の情報が集められているリストを開きながら、資料室の管理官に尋ねた。

彼は、今朝アリアムたちの話に出てきた“シルファ・ムルルーム”という女性について調べていた。

だが、リストを捲れども捲れども、“シルファ・ムルルーム”の情報は出てこない。否、抜き取られているようだった。その名前だけを残して。

「ああ、それでしたら、今朝処分しましたよ」

管理官の答えに、ゼピュロスは驚く。

「処分？ 何故じゃ」

それに返された答えは、ゼピュロスをもっと驚かせた。

「何故って、決まっているじゃないですか。先日の教会の火災で、亡くなったからですよ。あそこを預かっていたのは、彼女でしたからね」

「なん、じゃと……？」

その名前をどこかで聞いたことがある、しかしそれが思い出せなくて気になった、ただそれだけの、好奇心程度でしかなかった。

だがそれは思いの外、不可解な事実として浮かび上がり、不可思議な謎を呼び起こした。

「ですから、お亡くなりになったので処分しました」

知識、経験共に豊富なこの老人をして、事態が異常にして混乱を極めていることを、今更に気付かせる、謎。

「どついう、ことじゃ……？」

しばらく前のこと。街外れの教会に務めていた聖女が死んだ。

昨日の昼過ぎのこと。アリアムは駅前とある女性に出会った。

その聖女は葬礼の儀において、丁重に埋葬されたはずなのである。

しかし昨日の夜にも、アリアムは同じ女性に河原で再会したとい
う。

「死人が、動いているとでも言うのか……?」

その女の名は、どちらも“シルファ＝ムルルーム”
ずの、人間だった。 死んだは

第十話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ようやく話が佳境を迎えるに至りました。一章ではここが最終話だったのに、すごい時間掛かってますよね……
猛反省。

第十一話

林に一本通された道を進むと、やがて突然に視界が開けた。

眼前には、なだらかな丘陵が広がっており、傾きかけた陽射しを反射して、黄金色の輝きを放っている。

夏には緑が生い茂っていた草原も、今は枯れた土の匂いが溢れ、風に吹かれて乾いた音を響かせていた。

その片隅　まるでその一部分だけ色を失ったかのように、モノクロの世界が落ちていた。先日、業火に飲み込まれた教会、その跡である。

色鮮やかであったろう石の壁は、今は白一色に染まって、所々にススを湛えたグラデーションが彩るのみ。木製の扉は完全にその身を炭と化し、下側三分の一ほどを残して崩れ、形はおろか、その機能さえも失っていた。

それはむしろ、真っ白なキャンバスに木炭で描いた白と黒だけのデッサン画のようにすら感じられ、現実とは到底思えぬ光景だった。

ここ、が……

アリウムは息を呑む。

この教会を焼いたのは、色さえも奪ってしまうほどの炎。ならば、その炎の中に身を置いた人たちは、どれほどの苦しみだったのだろうか。

想像して、思わず呼吸を忘れ、卒倒しそうになる。

と、その肩に、ナタスが優しく触れた。彼が耳元で小さく囁いてくれる。

(行くぞ。大丈夫か?)

掌から伝わる温もりで正気を取り戻し、アリウムは弱々しくもはつきりと頷いて見せた。

ナタスもまた、それに頷いて返すと、扉の方へ向かって歩いていき、アリアムもそれに続く。

二人は跨またぐようにして“扉だったもの”　その内と外とを隔てる境界を越えた。

その先に広がっていた光景もまた色を失っていた。白と黒の二色だけを残して

置かれていたはずの椅子や机の数々は、廃材にすらなりそうになりほどに粉々になって大理石の床を覆い、磨き上げられた光沢は失われ、白い灰に塗まみれている。

柱は中ほどから折れて砕け、屋根もそのほとんどが地に伏して、欠片が粉塗れの床に淡い灰色の点を穿うがっていた。

とても教会だったとは思えない、見るも無惨な状況である。

（灰しかありませんわね……）

ディアナが溜め息まじりではそりと呟く。

（帰る頃には私、毛色が変わってそうですわ。セレスと見間違わないで下さいましね）

静寂が広がる中、それを払拭するように軽い口で冗談を一つ。一方のセレスは、それを皮肉と真に受けて、膨れっ面になった。ぶうと漏らした吐息で、灰が舞い上がる。

それは空気に溶け込んで、朝靄のようにぼんやりと白く視界を濁す。

（あれが、件の神像か……）

ナタスが口元を手で覆いながら小声で言う。

灰で視界が淀む中、唯一黒く染まった像が、歪いびつに口元を曲げてこちらを眺めていた。炎を受けて焼け焦げた神像は、ススを落としたのか、その足元をも黒く染め上げている。

まるで、悪魔が闇の領域を広げようとしているかのようである。

ナタスは神像の下まで歩いていくと、地面を見やった。

アリウムもその近くに屈み込み、そつと地面を指で撫でてみる。

よほど激しい熱を浴びたのか、床は表面を溶かして小さな凹凸を作っていた。ここに遺体があったというのなら、損傷が激しかったというのも頷ける。

(でも、)

アリウムが周囲を見回しながら言う。

(こんなところに、こんなになるほどに燃えるようなものがあつたとは考え難いですよね)

教会の聖堂にあつて燃えやすそうなものといえば、参列者が座る椅子か、神像を飾る蝋燭や花程度のものである。それにしても、石の床を溶かすほどの熱を発するとは思えない。だとするならば、

(魔法、なんでしょうか……?)

アリウムが自分の推測を口にする。様々な不思議を起こす魔法の力ならば、それも可能のように思えたからである。

(それが簡単にわかるなら、俺たちがここに来ることはなかったさ) それには、ナタスが思案を巡らせる姿勢のまま答えた。

魔法とは不思議を起こせるがゆえに、このような状況下では判別をつけ難い。まして自然現象に則つて働きかけるように考えられた現在の魔法ならば、尚更その痕を探し出すことは難しくなる。

原因の究明は、極めて困難なのである。

(アリウム)

不意にナタスが顎に手を当てたまま、問い掛けてきた。

(仮にこれがテロだったとして、君は何が目的だと思つ?)

(目的、ですか?)

(ああ。“テロ”というのは、自分たちの“正義”を示せて初めて意味を持つものだ。なのに、これはそれが全くわからないし、そもそもテロなのかどうかすら怪しい。君はここに、どんな正義があると思つ?)

アリウムも、うんと唸りながら、腕を組んで考える。

(恨みがあつたとか……)

(それではただの怨恨殺人だろう)

ああ、と空気を漏らすような声を出すアリウムは、今更ながらに理解する。確かに、復讐だけが目的なのであれば、それは“テロ”
とは言い難いかもしれない。

しかしながら、テロとは常人にはおよそ理解できないような思想の元に行われることが多々あるのも事実である。アリウムが理解できないのも当然のことだった。

(俺はな、)

ナタスが今なおこちらを見ている黒い神を見上げて言った。

(何らかの意図を持って、事件を引き起こした人物がいるんじゃないかと思っっている)

(どういう意味ですか?)

アリウムが立ち上がった、それに尋ね返す。

(テロならば、こんなに手の込んだことをする必要はない。怨恨殺人ならば、被害者が六人も出るのどうかと思う。だから、これは“何か別の目的を持った誰か”が引き起こしたんじゃないかと思うんだ)

勿論、六人全てに恨みを持っていたかもしれないし、誰か一人を殺すために他の五人を巻き添えにした可能性も否定はできないが、とナタスは付け足す。

(別の目的、ですか)

(もっとも、それが何かわからないのだから、結局は同じことなんだがな……)

そう言っつて、ナタスは肩を疎める。この場の状況証拠だけでは、彼でも人間の心理を知ることには難しいらしい。やれやれ、といつも
の口癖を漏らした。

コッ……

(しっ！ 静かに……)

とその時、ディアナが祭壇脇にある通路の方へ目を向けて言った。耳をピンと立てて、慎重に音を探っている。

(足音が聞こえますわ)

ナタスたちも息を潜めて通路に目を向ける。

コツ、コツ……

確かに、小さく聞こえてくる。それも、耳を清^すましていないと聞き逃してしまいそうなほどである。

だが、その小さな音は、次第に大きく、はっきりとしていく。やがて、一つの影がその姿を現した。

コツ、コツ、コツ……

暗がりの向こうから、やけに響く足音を引き連れて現れたのは一人の女性だった。

紅の夕空とは対照的な蒼の法衣。瘦身ながら端正な顔立ちには、首までの金髪^{フロンド}が朧^{おぼろ}に輝いて、その垣間に見える瞳にはアウインの光が宿っている。

あれは……

その姿を見たアリアムの脳裏に、まだ刻まれて間もない記憶が甦^{よみがえ}る。

この街で知り合った 人ごみの中で、道に迷った自分を導いてくれた 『また会おう』と約束した 深夜の河原で、共に人の生み出す“理不尽”に相對した 共に死者の魂を見送った 、ある一人の女性。

紛^{まぎ}れもない、シルファの姿だった。

「シルファさ……んぐっ!？」

「!？」

アリアムは友　　と思っている　　、シルファに声をかけようとして、しかし思いきり後ろから口を塞がれた。

突然の出来事に戸惑いつつも首を擦って何とか後ろを窺うと、声どころか動きさえも封じるように、ナタスが腕を絡めて押さえ付けてきていた。

(声を出すな……！)

出来得る限り小さな声で、懸命に息を殺し、身を潜める。

アリアムは首に絡んだ腕を　　音を出さないように　　ぼんぼんと叩き、謝罪の意味も込めて首を小さく縦に振る。

それでやつと、締め付けてくる腕の力が抜けた。

(じつとしている。今は気付かれるわけにはいかない)

そう言々とナタスは、我が子を庇う父親のようにアリアムを胸の内に隠す。その緊張からか、落ち着きを取り戻したはずのアリアムの心臓は、再び高鳴り始める。

そのまま口を塞がれた状態で、アリアムは乾いた舌を潤すように、ごくりと唾を呑み込んだ。呼びかけた声が、彼女に届かなかったことを念ずる。

「誰………？」

しかしその声は、すでに彼女の耳に入ってしまったようだった。女が小さくもはっきりと伝わる声で、見えぬこちらの姿に言葉を発する。

「誰かいるのでしょうか？」

視線だけを流して、一つ一つ確認するように慎重に探りを入れていく。それは仮面のように感情のないまま、されど声だけは冷たく言い放つ。

「いるのなら、出てきなさい」

彼女はこちらの居場所を正確に把握できていないらしい。そのおかげで、まだ見つかってこそいないが、これ以上探索を続けられては、人間の無意識の内に姿を隠すという、“隠れ身”が破られるのも時間の問題だろう。

残された時間はわずかしかない。それでも視線は徐々に、しかし着実に、近づいてくる。

どうしよう……このままじゃ……

アリアムは体中が氷のように冷たくなっていくのを感じた。呼吸は浅く、血液はすでに凍てついたように冷たい。

何とかしなくては、と必死に思考を巡らせるも、感じるのは頬を伝う汗の感触と、危機感からの焦燥感だけ。

それは、後ろで自分を隠すように覆って身を縮めるナタスにして同じで、その表情から、おそらく彼は“最悪の事態”も考えているのだろう。

もはや、見つからぬことを祈る他なかった。

「そこにいるのでしょうか？」

女の瞳が、ゆっくりとこちらを向く。

お願い、気付かないで……

アリアムは、ぎゅっと瞳を閉じた。

「さあ……出てきなさい」

「にゃあ」

万事休すかと思われたその時、セレスが女の足元に駆け寄って、鳴いた。

「あら？」

不意に女の瞳が下に逸れる。その先では、セレスが頬を女の足に摺り寄せていた。

でかした、セレス……

ナタスが深く息を吐く。

その吐息を耳に受け、アリアムは思わず声を出しそうになったが、未だナタスに口を塞がれていたおかげで、音にならずに済んだ。

眼前の女の方も、セレスの機転のおかげで、どうやらこちらの存在には気付いていない様子である。

しかし、ナタスは引き締めた面持ちで、呼吸を殺して女の様子を窺っていた。

「猫、か…… 白い毛並みだから、気付かなかったわ」

呟くと女は、肺の中の空気と共に肩の力を抜いて、しかし足元の猫を追い払うでもなく、しゃがんで愛でもなく、冷たい瞳のまま白猫を見つめる。

「悪いコね。立ち入り禁止の場所に入ってくるなんて…… ま、私もそうだけど」

直立不動の姿勢は変わらず、口元が一瞬だけ緩む。それを契機に女は緩慢にも、幼児や小動物を追い払うときのあの動作で掌を振り始めた。

「さ、もうお行きなさい。見逃してあげるから」

「にゃあ」

返事をするように一声鳴くと、セレスは聖堂の扉を跳び越えて外へと出て行った。

その姿を見送って、女はまた微笑を浮かべる。

「いいコね。それにひきかえ、こっちは……」

改めて周囲に視線を流し、独り言のようにごちる。

「ここに来れば見つかるかと思っただけ…… 一体どこにいったしまったのかしら」

そして、その蒼い瞳に黒衣の神像を映すと、最後に溜め息を小さく漏らして、もと来た場所へと向き直る。

「早く捜さないと、お爺様に叱られてしまっわ」

コッ、コッ、コッ、コッ……

暗がりの向こうへ、響く足音を引き連れて、女は去っていった。

「ぶはあ！」

重い雰囲気、締められていた首、その双方の解放感から、アリアムが大きく息を吸い込んだ。宙に舞った灰も同時に大きく吸って、思わず喉の奥が痒くなる。

咳を堪えてナタスの方を見ると、彼は通路に目を向けながら、難しい顔で何やら思索しているようだった。

ディアナも同じく、険しい表情で口を開く。

「あの女ひと シルファさんと仰おっしゃいましたか？ あの方も何かを探しているようでしたわね……」

「それに、隠れ身も使っていたみたいツスね」

慎重に辺りを窺いながら戻ってきたセレスが、付け足すように言う。

それを受けて、ナタスがアリアムに問い掛けた。

「何か思い当たることは？」

「そういえば……シルファさん、『街外れの教会を預かっている』って言っていましたね」

問われてアリアムはシルファと出逢った時のことを思い出す。

すっかり自分が魔法使いであることを漏らしてしまった際に、彼女も教団の人間である、と告げ、そして確かに、そう言っていた。

「本当か？」

「はい」

「だとすれば、何か関係があるかもしれないな……」

ふむ、と悩むことわずか、ナタスは決断を下す。

「後を尾けるぞ」

四人は頷き合つと、祭壇の脇にある通路の奥へと入っていった。

第十一話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

個人的には、もう少し緊迫感が出せれば良かったなと思うのですが、どうでしょう？

第十二話（前書き）

書き直しや、構成の変更を何度も行っていたため、遅くなってしまいました。（どれほどいるのかわかりませんが、）待っていて下さった方々、お待たせして大変申し訳ありませんでした。

第十二話

「酷い……」

アリウムが、詰まらせた喉から絞るように声を出した。瞳には、様々な“生活の跡”^{あと}が映し出されている。

先の、白灰の積もった聖堂とは反対に、ここは黒炭とススで溢れ^{あふ}ていた。

おそらくは、教会を預かる人間が生活していた居住空間だったのだろう。小屋のような箱状のスペースになっていたようだった。

『ようだった』というのも、そこもまた炎の中に焼け落ちて、今はその名残しか留めていなかったためである。

何かのオブジェにすら見えてくる、溶けてひしゃげた鍋。枯れたように倒れる椅子^{いす}。後は朽ちるだけのテーブル。

通路に対して反対側の壁はもはや無く、目の粗い鉄格子のように数本の支柱が立つのみで、剥き出しの屋内には冷たい風が吹き込んでいた。残された半分の壁も、家具や天井共々、真っ黒な炭に変わり果てている。

その、見るも無惨な光景はどれもが痛々しいほど、かつてここに人が暮らしていたことを物語っていた。

「報告書の通りツスね」

「確かにこれならば、ここを火元と見るのが自然ですわ……」

セレスとディアナが、状況を一つ一つ具^こに確認しながら、ゆっくりと歩み出した。

その確認作業を使い魔たちに任せ、ナタスは一足先に壁 たつたもの のところまで歩いていく。

「奴はどこだ？」

ナタスはわずかに残った柱の陰に隠れるようにしながら、慎重に外の様子を窺っている。

“奴”とは無論、今さつきここに入っていたはずの女 シルファのことである。彼女の後を追ってまだそれほど時間は経っていないはずだが、しかし、その姿は既がない。

そういえば、とアリアムも壁際に歩み寄る。

斜陽は西に沈み、辺りは宵闇に包まれ始めていた。

と、その闇の向こう、林の影に鮮やかな蒼の法衣が、ひらりと翻ひるがえるのが見えた。

「あ、あそこ！」

アリアムが陰から指を指す。

ナタスはその指された方へ顔を向けるが、どういうわけか彼には見えていないらしかった。目を細めて林の方を凝視している。

「どこだ？」

「あっち、林の中に入っていました」

ナタスは、改めてアリアムの示す方に目を凝らす、やはり見えないらしかった。見出すこと諦めたようにアリアムの方へ向き直り、顎に手を当てる。

「隠れ身の効果かな。俺にはよくわからないが…… アリアムにはわかるんだな？」

「はい」

「よし、急いで後を追うぞ。先導してくれ」

そう言ってナタスは後ろの猫たちに合図すると、アリアムを先頭に、再びシルファの後を尾けるべく、林の奥へと向かった。

無限とも思える、深い闇の世界へと。

資料室と自室を繋ぐ廊下を、険しい表情でゼピュロスが歩く。

(落ち着いて考える。“シルファ”ムルルーム”の遺体は出ておるのだ)

多くの人が行き交う中、小さな呟きは音になることなく雑踏に消えていく。

（とすると、昨夜アリウムさんが出逢ったという人物は……）
手には管理官から聞き出した、彼女の人物像を書いたメモと、もう一枚。

そのメモの方に目を通しながら、突如現れた霧きりの向こうを覗き出そうとする。

（彼女の名を語る他者ということに…… いや、）
しかし、どれほど思考を巡らせても、霧は晴れるどころか深まっていく一方だった。

歩きながらも、判然としない視界に苛立つようにゼピュロスは首を大きく横に振る。

（そもそも、身元の確認ができておらんだ。もしかしたら、遺体は別人のもので、本人と言う可能性も……っ！？）
そう推理するうちに、一つの仮説が浮かび上がった。

（もしか、それを隠すために遺体を焼いた……？ だとすれば、今回の不可解な事件にも納得がいく。彼女が生きているにしても、他者が摩り替わっているにしても…… だが、）
目的がわからない。

管理官に聞いたシルファ＝ムルルームという人物は、幼少の頃より教団に所属しており、教団の教えにも熱心だったという。また、その素行も慈愛に満ちた、誰からも好かれる優しい人物だったと教えられた。

そんな人間が、共に暮らしていた者たちを見捨て、自分の死体に見せかけるために他者を犠牲にするとは考え難い。

そもそも、そこまでして自身の生存を隠すのならば、シルファ＝ムルルームを名乗るのはおかしい。

（やはり、彼女の名を語る他者がいる、という線が濃い…… ア
リアムさんに、その者の容姿を尋ねて置けば良かったわい）
ゼピュロスは持っていたもう一方を眺める。それは、一枚の写真。

そこには、微笑みと共に佇む、薄い赤茶の髪の若い女性が写っていた。

脇に記された名は、“シルファームルルーム”。

神秘のヴェールに包まれた、女性のものである。

(シルファームルルーム…… お主は今、どこにおるのじゃ?)

自室までの道は、まだ遠い。

木々が来る者を拒むかの如く、不気味にざわめく。

冷風は枝を揺らして木の葉を鳴かせ、幹に刻まれた洞がこちらを見ながら嗤っている。腐食した落ち葉は泥となつて地面を隠し、あるいは所々苔むして、鼻の奥を淀ませるような腥い湿気を漂わせていた。

ここは、闇が支配する場所 “深遠の淵”、あるいは“冥府の底”とも言うべき、まさに“異界”だった。

その、叶うならば駆け抜けてしまいたい林 と呼ぶにはあまりに過ぎる鬱蒼とした茂み を、アリアムたちはゆっくりと進んでいた。

「見失いました……」

アリアムが小さな声で、後ろにいるナタスたちに呼びかけた。同時に周囲を探るように、また視線を走らせる。

遠くからは、ガラス瓶に息を吹き込んだような、ボウという低い唸り声が聞こえてくる。朽ち果てて表皮だけとなった老木が風に侵蝕されて、その身を震わせているのだろう。

この林に入ってから、もう随分経つ。

アリウムたちは慎重に周囲に気を配りながら歩いてきたにも関わらず、未だにシルファを見つけないことができないでいた。

彼女は忽然とその姿を消してしまったのである。

「そうか……」

林を吹き抜ける風鳴りに吐息を混ぜて、ナクスがそれに答えた。この先どう動くか、それを思索するように腕を組んで考え始める。

“林”という響きが、状況の認識を甘くさせたのだろう。加えてシルファが奥へと踏み込んでいった、というのも判断を誤らせる一因となっていた。

どんなに歩き慣れた人間でも、暗い夜の森に入る者はいない。だからここは、大した林ではないのだろう、と知らずの内に油断したのだ。

だが、ここはもはや、“森”という方が正しい場所だった。林と呼ぶにはあまりに深い。この鬱蒼と樹木の茂る中で、どこにいてもわからない先行く人を捜すことのみを意識を集中させてしまった。少し進んでは身を隠して辺りを窺い、また少し進んでは立ち止まって気配を探る。その繰り返し果てに、アリウムたちは遭難寸前のところまできている。

この闇の中に身を置くのも、もう限界に近い。

「ここまで追ってきたのは、失敗だったかもしれない……」

彼はぼそりと静かな声で呟くと、ゆっくりと辺りを見渡して、それから時計を見るかのように、首を上に向けた。

辺りを埋め尽くすのは、身体にまとわりついてくる霧のような薄闇と、闇に喰われてただ風にうねる漆黒。

街の明かりは遙か彼方、太陽は大地の影に眠り、星辰せいしん輝く空も今は木立の天蓋てんがいに覆われて、一筋の光さえも届かない。

いくらシルファが鮮やかな蒼の法衣を着いたとはいえ、こつも暗い茂みの中では、まして隠れ身まで使われていては、見失うのも仕方がないことだろう。

「……………」

アリウムは来た道を振り返り、眉をひそめる。
林の入り口、さつきまで自分が立っていた小さな“生活の場所”
は、とうの昔に見えなくなっていた。

なんて所なんだろう……

アリウムが警戒するように、改めて周囲に目をやる。

一切の光は遮られ、あるのはただ闇に吞まれて蠢く木々。

ここには“生”の気配がまるで感じられない。にも関わらず、
茂みの向こうから“何か”が出てくるのではないか、そんな不安ばかりが胸の奥から脈々と染み出してくる。

在るはずのない何か　まるで姿無き亡霊の影を追っている、あるいは追われているようで、気味が悪かった。

怖い……

理屈ではなく、そう感じる。

足に力を込めていなければ、立っていることもままならないくらい
の悪寒が全身を走り、風は息が白く濁るほどに冷たい。なのに、
肌にはねっとりとした汗が絡みついて、余計に寒さを感じさせていた。

そのくせ、身体の奥の方だけは何かに備えているかのように熱くなり、それがまた不快な汗を呼ぶ。

瞳の前では緑とも白ともつかない色の、夏の陽炎のようにゆらゆらしたものが踊って、眩暈を起こしたときのような感覚を呼び起す。

意識を保つことに神経を集中させていなければ、気が狂ってしまいそうだった。

だが、折角見つけた手掛かりを、このまま簡単に諦めてしまうわ

けにもいかない。

それを代弁するように、ナタスが口を開く。

「この辺りに来たことは、確かなはずだ。もう少し様子を見てみよう」

そう言ってナタスは足元の猫たちに、顎をしゃくって指示を出す。すると二匹は各々、別の木に登っていった。猫ならば人間よりは夜目が利くはずだ。高いところから周囲を探らせようというのだろう。そうして彼自身も近くを歩き、人影がないかを捜している。

アリアムは急にセレスたちの姿が見えなくなつて、また胸の奥の不安が膨らむのを感じた。

息が、苦しい……

瞳を閉じてしまいたくなる衝動を必死に押さえつけ、アリアムも別の場所を捜してみようとするが、それはナタスに半ば無理矢理に引き止められた。現状が現状だけに、あまり離れるな、ということだった。

「どこに行つたんでしょうか？」

アリアムは、はぐれないようにナタスのすぐ近くに身を寄せて、小さく声を出す。

「さあな。それより、何故教会にいたのか、何故こんなところに来たのか。俺にはそつちの方が気になるが……」

広がる闇は影を隠し、木々の慟哭なげなげが物音を掻き消している。朽ちた落ち葉の上では、足跡さえも残らない。

こんなところに、自分たち以外の何がいるというのだろうか。

もし、いるとするならば、それは……

そこまで考えて、アリアムは首をぶんぶん振った。脳裏を翳める嫌な幻想を、できるだけ現実味を帯びた明るい想像で消し去ろうとする。

長い髪が、揺れながら宙をさま迷った。

その時

迷いを許さぬように、冷たく鋭い風が空気を切り裂く。

「!? なんだ……?」

前方、ほんの少し向こうに、ぼんやりと光が浮かび上がる。それは薄い霧もやのように揺らめき、血のように鮮明な紅の明滅を繰り返しながら、一つ、二つと徐々にその数を増していく。

「マスター、あっちにも光が!」

「こつちでも光ってるツスよ!」

木の上から二匹が叫んだ。

はっとして周囲を見ると、光は彼らを囲むように灯っていた。それは大小、様々な明かりとなって辺りを照らし、次第に形を為していく。

皮の捲めくれた頭、ぶら下がる眼、腐食した臓物、肉の剥はがれた軀。

それは、狼　もしくは、猿　そして、カラス　“ だつたもの ” たち。

「つ!?!」

そしてその中に、一際大きな輝きを　異彩を放つ存在を認めて、アリアムが息を呑む。それは彼女の描く“ 理想の現実 ” を薙ぎ払い、吹き散らしていく。

ア……

そこには、一人の老人が立っていた。

力なく首を斜めに傾け、されど何かを求めるように腕を前に突き出し、人の良さそうな顔に生氣は無く、感情が宿らない瞳を虚ろに開けている。

ア、ア……

喉の奥を、吹き荒ぶ風に鳴らしながら現れたそれも 人間“だ
ったもの”。

あるべき姿を大きく崩し、他の意志で“動かされる”、ただの肉
塊 魔法生物ニンキョウへと変わり果てた“モノ”だった。

「馬鹿な…… 人間を、だと……？」

「そんな、そんな……」

信じられない、あるいは認めたくない光景を前に、二人は瞳を大
きく見開いた。戦慄せんりつ以外の全てを忘れ、全精力を理性に働かせても
なお、現実と捉えるにはあまりに難しい、現実。

だが、時は二人に理解の間を与えてはくれなかった。

ア、ア、ア……！

波打つように動き出す、それら。
屍人しびとの行進が、始まった。

第十二話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ドロドロした不気味な雰囲気を感じ取っていただけたなら、幸いです。

第十三話

じわり。

屍しかばねが一步、踏み出す。ぼんやりと赤い陽炎かげろうが、波のように揺らぐ。人型の屍を波頭なみがしらに、円は小波こさなみの如く、緩やかに穏やかにその半径を縮めていく。人型が一步前に出れば、それを追うようにオオカミとサルとカラスもわずか前に出て、また輪を狭せばめる。

その歩みに合わせるように、霧きりの如き氷雨が少しずつ密度を高め、屍の光を受けてぼんやりと視界を赤く濁らせていた。

血の滲むシルクのカーテンを思わせるそれは、身体に接しては瞬時に衣に張り付き、肌に触れてはすぐに気化して体温を奪っていく。

「アリアム」

「……はい」

この嵐の前兆と呼ぶに相応しい静けさの中、ナタスが問い掛けた。彼はほんのわずかな間を置いて、息を次ぐ。

「君のことだ、気は引けると思うが…… “覚悟” はいいな？」

“覚悟” それは目の前にいるのが、魔法生物マジキョウブツであるということ。

それに魂はなく、ただ他者に辱はづかしめられているだけであるということ。

それを死の冒瀟ぼうしょうから解放するには、強い衝撃を与える必要があること。

つまり、ナタスは「死体に鞭むちを打て」と言っているのである。いかに解放のためとはいえ、普通の人間ならばそこに背徳感を感じざるを得ない。

その“覚悟”の意味するところを悟り、アリアムは一瞬だけ、瞳を閉じる。

彼らは、もうこの世に亡ない。それなのに、彼らだったものが、他

者の“道具”とされている。それがもし、自分だったならば、自分の身体を、他人の意志で動かされるとしたならば、それは絶対に拒絶したい、そう思う。

だから

「はい！」

「よし」

アリウムは力強く頷き、ナタスがそれに応えた。

二人は顔を合わせることなく確認し合うと、ナタスは右足を半歩引き、アリウムは杖を前方に振りかざして、音もなく闘いに備える。

一陣の風が、吹き抜けた。

それを合図に、小波は怒涛うらたけとなって押し寄せる。

ギイト、鉄扉てつひの軋むような音を引き連れて、樹上から黒いカラスの群れがアリウムに襲い掛かった。

「てっ

」

その波の先端、腹に骨を見せるサルが二匹、突出してくるのを捉えると、アリウムは鋭く杖を突いて一匹を迎撃する。

姿勢そのまま上体を反らしつつ、カラスの波をかわして半回転、背中越しに杖を振る。手応えあり。

ボキリという音を立てて、群れから“羽付人形”カラスが一羽、地に落ちた。

「や！」

返す反動を利用して、アリウムは片足からもう一方へ体重を移し変える。腰を通して力を流し、そして己の非力さを重さで補う、全体重を乗せた一撃を斜め下に繰り出して、すぐ脇まで迫ってきていた二匹目のサルを穿つつ。

自分の何倍もの質量による圧力を杖の一端から受けて、サルは胸に一つの溝を開けながら、座り込むような姿勢で屍に戻っていった。

「シッ……！」

ナタスはアリアムとの距離を測りながら、最小の動きで嘴を回避する。その黒い槍袋やりぶすまが傍らかたわを過ぎるのを確かめつつ、灰色の瞳に“四足”の人形を映す。

牙を剥き、突進をかけるオオカミ。それが自分の間合いに入るタイミングに合わせて、ナタスは右足を大きく薙ぎ払った。

接触は一瞬。抵抗は皆無。

オオカミの下顎したあごは達磨落しだるまの洞の如く、真横に吹き飛ばされた。

留まることのない、流れるような澄んだ体技は紡がれ続ける。ナタスは振り抜いた足を地につけると、即座に蹴足と軸足を入れ替えて、続けざまに迫るオオカミ本体を後ろに回し蹴る。

人間の想像の瞳にだけ見える、美しい残像。その軌跡が優美な弧を描き切った頃、結わえられた糸に引かれるように、主に先立ちあゆ吹き飛ばされた顎を追って、オオカミの軀からだも弾け飛ぶ。

それは樹に激突すると、腐食した肉片を撒き散らしてボトリと落ちた。

「うわわわ！」

と、その崩れたオオカミが根元に横たわる樹の上で、叫び声が上がった。ばさばさと音を立てて、白黒の塊が落下してくる。

それは坂を転がるゴム鞣まりのように、白と黒の上下を目まぐるしく入れ替えていた。

やがてゴム鞣は黒い方を上向きにして動きを止めると、セレスが組み伏せられるようにサルと揉み合いながら倒れ込んで、喉下に迫る牙をもがいて避けている姿が視界に映り込んだ。

「セレス！」

「！」

その姿を見たアリアムは、脇目わきめも振らずにセレスの下へと駆け出した。彼女を囲むように、屍が群がる。

だがナタスがそれを許さない。彼はアリアムの後を追う、あるいは

は先駆けて、殺界に入ってくるモノたちを叩き落しながら、黒い群れを弾き飛ばし、アリアムの道を守る。

結界に守られるようにしてアリアムはセレスの下へ辿り着くと、両者の間に杖を差し入れて、振り上げるようにサルだけを投げ飛ばした。

それもやはり樹にぶつかると、電気を流したときのように一瞬だけビクンと跳ねて、すぐに動かなくなった。

「セレス、大丈夫？」

「うへえ…… 臭いツス……」

アリアムの呼びかけに、セレスは立ち上がりながら応える。

危機から脱したばかりにも関わらず、彼は眉を顰めながら冗談のように一言、それから、照れ臭そうに「ありがとう」と付け足した。どうやら心配はないようだ。

アリアムがほっと息を吐いた

「よかった…… って、わー!!」

のも束の間、つんざくような音を立ててカラスの怒涛が霧雨の帳を切り裂き、すぐ脇を通過していった。怖気を誘う無数の羽音を、セレスと共に地面に飛び込む格好でなんとか回避する。

そのまま身体を丸めて肩から着地、横向きのベクトルを縦の回転運動に変えて受身を取る。その途中で、頬に冷たさを感じて、さっと手で拭い取る。

雨で地面が泥と化していたのだろう。見るとセレスも、全身を泥で汚して真っ黒になっていた。後で洗ってあげなくちゃ、などと、我ながら暢気だなと思える感想が頭に浮ぶ。

「二人とも無事か!？」

ほんの少し離れた場所では、ナタスがオオカミを地に伏せていた。その腹に蹴りを加えて活動を停止させると、彼は叫びながらアリアムたちのところへ走ってくる。

滑空するカラスを振り払いつつ合流してきたナタスと背中を合わせ、アリアムは前を見据えたまま冗談を一つ、投げかけた。

心配は要らない、という意味を込めて、くすりと笑ってもみせる。「服、汚れちゃいますよ」

「この雨だ、どうせ帰ったら洗濯せざるを得なくなるさ。……思っただけより余裕そうだな。それなら、あと半分　いや三分の一ぐらいなら任せられるな」

「できるなら、逃げ出したいですが」

それを受けて、ナタスもくすりと笑んで応えた。やはり、背中越しに。

「そういうわけにもいかないだろう。こちら側は任せておけ。後ろは見なくていい」

そう言っつて、ナタスは左腕にはめられた銀の腕輪を握り、両手を左腰に添えた。すると腕輪は光を発し、細長い筋を彼の背後に伸ばす。

そして、ナタスはその“光の鞘”から白銀の剣を抜き放った。

“細雪”^{ホコユキ}　ナタスの持つ、唯一にして最強の魔剣。刀身は二メートルにもなるうかという、長い刀。拵えには飾り気がないのに、刃が異様なほどに妖艶かつ美麗な輝きを放っているため、それを感じさせることはない。

見る者の心を奪い、一瞬の閃光の内に命を屠る^{ほぐ}、死の魔剣。

しかし、この場には奪われてしまう心を、命を持った“モノ”など、存在しなかった。

機械じかけのように単調に、屍の人形は突撃する。少しずつ仲間が失われていくことも構いなしに、魔法生物^{マジキョウブ}たちはただ攻撃をしかける。

上空から、カラスが三羽。側面からオオカミが一頭。樹上からサウルが数匹。群れを為して少年に向かう。

が、その突撃の切っ先は、傍から見れば悠然とも思える、柔らかな動きの中に乱れ散った。

背中合わせのままの、しかし、まるで踊っているかのような、円を基調とした優雅な動き。

「っ！」

攻撃を察知して、回るようにナタスと身体を入れ替えるアリウム。その少女の振る杖が先頭の爪を横薙ぎに払った。

彼女の長くしなやかな髪が、穏やかに宙を舞う。

続けて袈裟に振られる一撃で左にいた一羽が落ち、上体を倒すようにして最後の嘴も回避され、それが少年の背中に届く前に、立ち上がる杖に胸を殴打されて、カラスは土に還る。

ナタスもそのアリウムの動きに合わせて身体を回転させると、刃ではなく柄で側面を穿った。後を追う直状の銀が、流星のように煌めく。

迫った牙はその流星に折られて空を舞い、オオカミは半ば放り投げられたように後退した。

「はあっ！！！」

ナタスはさらに返す刀で、サルを脳天から両断する。

二つに分かれた躯が、血の代わりに爛れた肉片を降らせ、パタパタと地を叩いて二人のダンスを囃していた。

くそ……

乾いた音を響かせる喝采の中、ナタスは胸中の苛立ちを唾液と共に吐き捨てる。どこか無差別な“殺し”をしているようで、腸が熱い。

その熱さを抱えたまま、二つで一つだった躯が泥に塗れるよりも速く、ナタスは大きく一步を踏み出す。剣を小さく振って滞空するカラスを二羽、切り払うと、群れに向かって腕を向け、指を鳴らす構えを取った。

「まとめて焼き払ってやる」

指を弾くことで 正確には爪を擦り合わせる際の摩擦熱で体内の燐りんに着火させ、同時に空気中の水分を分解して得た水素と酸素を燃料として爆発を起こす炎の魔法、その布石である。

だが、

「マスター！ いけませんわ、こんなところで炎の魔法を使ったらディアナの叫びによって、炎の顕現は阻まれた。

霧雨が降っているとはいえ、ここは枯れ葉の積もる森の中。朽ちて乾いた樹もそこかしこに立っている。こんな場所で炎を出せば、山火事になることは間違いない。

本当に“まとめて焼き払う”ことになってしまっただろう。そうなれば、自分たちの身も危うい。

「ち……」

ナタスは鳴らしかけた指を止め、代わりに舌を鳴らす。

それが彼にとつての一瞬の隙、あるいは油断となった。差し出された腕に向かい、オオカミが牙を剥いて飛び掛る。

開かれる顎。くすむ牙。吊るされた餌の肉に喰らいつくかのように、オオカミは一直線にナタスの腕に突進する。

「ちっ！ これなら」

しかし、ナタスは再度舌を打ち、構わず拳を入れて噛み付かせ、

「 どうだ！」

顎の中で指を弾いた。

パチンという軽い音。その後が続く、バガンという太い音。

さながら、明暗に輝く花火のようだ。

轟音と共に、オオカミの頭は跡形もなく消し飛ばされる。

消炭色の欠片あたまに混じり、霞のような銀朱ぎんしゅも周囲に飛び散っていた。

「 ナタスさん！」

ナタスが拳を噛まれ、出血しているのを見るや、アリアムはナタスに向かって駆け出す。

それを阻むようにカラスの群れ。杖を振りながらカラスに牽制をかける。

ギィ!

「っ……!?!」

と、その振っていた杖の上に突如サルが着地してきた。破れた喉の奥に風を響かせ、腕を振り上げる。

突然の、予期せぬ至近からの反撃に対応しきれず、アリアムは攻撃を受けることを覚悟する。

「させませんわ」

しかし、その爪の軌道は不意にアリアムの眼前で真横に逸れた。代わりに視界に入ってくる黒い猫。

見れば、ディアナはそのサルの片腕を、狩り取った獲物のように啜っていた。噛み付き、逆に千切り取っていたのである。

腕をもがれたサルは、ディアナの突進の勢いに耐え切れず、バランスを崩して杖から転げ落ちていた。倒れ込む軀に追撃をかけ、アリアムはサルを沈黙させる。

「怪我はありませんか、アリアムさん？」

ディアナが金色の目を輝かせながら、問い掛けてくる。その向こうではナタスが二羽、セレスが一羽のカラスを仕留めていた。

「ありがとう、大丈夫。それよりナタスさんが……」

「問題ない」

その声に応えるように、ナタスが刀を水平に構えて、脇をすれ違った。

鋭い刺突でアリアムの背後にいたカラスの腹をぶち抜いて、血振りをするように乱暴に刺さったモノを払う。重りがなくなると、刃を背負うように頭上で柄を握り直して、片手で斜め下に構えを直す。そうして空いた左手をアリアムに見せつけるように鋭く振ると、わずかな血が地面に飛んで、頭わになる掌には 傷がなかった。

「問題ない」

改めて言う。

確かに、問題はなさそうだ。だが、出血していたのに傷がない、
というのはどういうことだろうか。

アリラムはそう疑問を投げかけようとして、

「それより」

と、ナタスに制された。

「かなりの数が残っているが…… まだ大丈夫か？」

彼の睨みつけるような視線の先には、上下、緩急様々な行進を続ける魔法生物の群れ。その数は未だ多い。

そして、ひたすら大きく、ゆらりとした動きを続ける、人型の人形。弱々しく顎を開き、瞬くこともない濁った瞳でこちらを見ながらゆっくりと向かってくる。

それを見据えて、それでも、逃げようとは思わない。

「大丈夫です！」

「そうか。なら、もう少しだけ耐えてくれ」

「耐える？」

「ああ」

いささか以上に妙な言葉を連れてナタスは振り返り、にやりと笑んだ。

「まとめて、火葬してやるっ」

霧が、深まっていく。

第十三話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

迫力が出るように色々と試行錯誤して書いた戦闘シーンなのですが……見苦しい文ばかりですよね。申し訳ありません。

少しでも皆様の心に止めていただける様、より一層の努力を致します。

追伸：『ネット小説ランキング』様にも本作品の登録をさせていただきました。もしよろしければ、投票していただけると嬉しいです。

第十四話

魔法生物 まほうせいぶつ 動的な構造を持つ物体に魔力を注ぐことで、ある程度の遠隔 えんかく、自在操作を可能にする技術。俗 ぞく に“マリオネット”とも呼ばれる。

この魔法最大のアドバンテージは、術者が直接手を下すことなく同時に多数体をもって目的を実行することが可能になる点にあった。ただし、“操り人形”の俗称 ぞくしやうじやう が示す通り、操作には緻密 ちみつ な技術が必要とするため、操作中は他の魔法の使用ができなくなり、また習得自体も非常に困難で、自在に動かせるようになるには多大な訓練が必要になる。

素人 しろうと が、人形を『らしく動かす』ことができないのと同じである。さらに、最大の欠点として、『衝撃に弱い』ことが上げられる。

魔法生物は精密であるが故に弱く、脆 もろ い。簡単なことでその“操り糸”が途切れ、呪縛 じゆばく から解放たれてしまう。

そのため、戦闘に用いられることはほとんどないと言って良かった。

二本足 すなわち人間の魔法生物ともなれば、その特徴はことさら顕著 けんちやく だった。

二本足であるが故の、操作の難しさ。重心が高くなる故の、バランスの悪さ。

簡単に活動を停止してしまうことを考えれば、戦闘に用いることなど効率の悪いことこの上ない。

だが、目の前にあるのは、まごうことなき老人の姿をした二本足の人形 にんぎょう。

緩慢 かんまん ながらゆっくりと歩くその様は、少しばかり足腰を悪くしてしまったような老人のそれと、同じだと言っても過言ではなかった。もしアレが街中を歩いていたとしても、多くの人間は気付くこと

なく、ただすれ違うだろう。

無論、それも正体を隠せば、の話である。

正確には、正体と言うより肌 いや、“肉”か。

かの老人の死より、数日は経っているのだろう。彼の肉は腐り始め、異臭を放ち出していた。彼を構成する蛋白タンパクが変異を始めている証拠である。

それでも、まだ形がしつかりとしている分、周囲のオオカミやサルに比べればずっとマシだと言える。が、彼が卵白のように蕩とろけ出すのも、そう遠くないはずだ。

現に、老人の瞳は白目と黒目が混ぜ合わされて灰色に濁っている。そして、その瞳が夢想するように、こちらを指して進んでくる。

「まだ大丈夫か？」

剣を構えて佇むナタスが尋ねてくる。彼は人形を睨にらみつけたまま、それ以上は何も言わず、気配だけでアリアムの様子を窺うかがうように返事を待つ。

アリアムも人形たちを正面から見据え、“覚悟”を たとえ死人に鞭打むちつことになるうとも、それが彼らを解放する為だということとを、改めて噛み締めて、力強く頷く。

「大丈夫です！」

「そうか。なら、もう少しだけ耐えてくれ」

その言葉を聞いて、アリアムは不思議に思う。“もう少し”というのは、どういう意味なのだろうか。

もう少しの時があれば、カタをつけられるというのか。にしてはいささか以上に数が多い。いくらナタスとはいえ、“もう少し”であるの数をどうにかできるとは思えなかった。

そんな疑問に首をかしげて見せると、ナタスは振り返って、にやりと笑んだ。

「まとめて、火葬してやろう」

「ま、まとめて……？」

確かに以前、アリアムはシルファと共にそれを行った。できるのなら、そうしてあげたい。さらに言うなら、一頭いっとう々々、一匹いっぴき々々、一羽いちわ々々、丁重に埋葬してあげたいとも思う。

だがあの時は、格闘の末に彼らの動きを止めた上で、組木をして弔ったのである。今とは状況が違い過ぎだ。

とはいえ、それは自分たちが“火の魔法”を不得手ふえて といつか、自分は全く使えない シルファも水の魔法を使っていたから、多分苦手なんだろう と、勝手な想像 としていたためである。戦闘の手段として火の魔法を用いるナタスならば、それも可能なのかもしれない。

しかし、その火の魔法を先ほど使おうとして、ディアナに止められていたこともアリアムには聞こえていた。この山の中で炎を使用することは、危険である、と。

彼の性格から、戦闘に火の魔法を利用して、周囲に大きな被害を出さないような配慮があるはずだ。が、それでも止められた。するとやはり、この場で火を使うことは危険なのだろう。

だが、彼は確かに「火葬してやろう」と言った。ということは安全なのか。それでも

堂々巡りである。

「ええっと…… 大丈夫ですか？」

アリアムは混乱して、くらくらと回りだしそうになる頭を片手で支えつつ、かけてもらった言葉をまます。

そしてナタスも、少し前に返された応えをもって返す。

「大丈夫だ。もう少しばかり時間を稼げば、な」

ナタスは言つて頭上を見上げた。

周囲を覆う霧雨きりさめは密度を高めて肌を湿らせ、時折汗のように雫が流れる。それと同じものが、樹上の木の葉からも滴したたり、細かな粒子舞う中に大粒の雫が踊る、不思議な光景を作り出していた。

「あ……」

それを見て、ようやくアリアムも思い当たる。

自分の肌は濡れている。木の葉も濡れている。ならば樹の幹も、濡れているだろう。雨が“降って”いるのだから当然、落ち葉も。アリアムは瞳だけを向け、地面を慣らすように、足を這わせる。紙のような感触　紙、紙、ぬかるんだ泥、小石混じりのほそぼそした土。

枯葉の層は薄い。土も柔らかくなり始めている。

「このまま雨で森全体が湿ってくれば……」

炎の魔法を使っても、周囲への被害は少なくて済む。シルファのように水流を操る魔法を用いれば、泥に吸い込まれた水を使って消火活動もできるだろう。

だが、まだ足りない。まだ森全体は炎に耐えられるだけの水分を得ていない。この状況では“万全”とはいかないだろうが、それでも、決行するには不安が残る　ナタスはそう判断したのだ。

だから今しばらくは、枯葉や老木などへの引火防止、そして火災が起きてしまった際の対処、その双方のために、この森に水を溜めなくてはならない。

「そうだ。もう少し、時間を稼ぐぞ」

「はい！」

二人の円舞が、再開される。

クス……

思わず、笑みが零れた。

少し向こう、闇と木々と霧雨に隠された空間に、茫ぼんと浮かび、時に踊る赤い光。

自分の領域で騒トリトリーぐ輩バカがいるから、それが誰なのか見に来てみたが間違いない、“アレ”だ。

「クス……」

今度は息まで漏れた。

まさか、こんなすぐ傍そばにいたなんて。『灯台下暗し』とは、よく言ったものだ。自分が拠点としていた場所からさしたる距離もない。

手掛かりばかりを追って、自分の足元を見ていなかった。でも、

「見つけた……」

探していたモノを。

観察するべきモノを。

自分が、作ったモノを。

「ようやく、実験の結果が見られる……」

胸の鼓動が、歡喜に高鳴る。それに応えるように、風が吹いた。

口元が、裂けんばかりに釣り上がる。それに倣うように、木々がその身を蠢うごかした。

瞳が、大きく見開かれる。それに映し出されるように、月が空に

浮かんでいた。

「そして私は、一步近づく……あの人のところへと！」

蒼の法衣、金髪の女が、両腕を掲げて、月を拝はいする。

嗤わらい声は響くことなく、風に吞まれて掻き消えていった。

あれから、どのくらいこうしているのだろうか。

アリアムは右から疾駆してくるオオカミの爪を避け、足元のサルを蹴散らし、頭上のカラスを追い払う。

霧雨は相変わらず視界を濁らせたまま、わずかに粒を大きくして全周囲から降り注いでいた。風も勢いを増して、森に覆われた空がわずかに見え隠れする。それにあわせて地面は月の光に照らされ、点滅しているようにも見えた。

この“閉鎖されている”とでも言うような状況では、時間の感覚などあつという間になくなってしまふ。本当は十分足らずしか経っていないのだから、もう何時間もこうしているような気がする。

と、また脇からオオカミが牙を剥いた。

ナタスがそれを切り払い、セレスがカラスを捕らえて、ディアナが噛み付き、停止させ、アリアムがサルを打ち伏せる。

そしてすぐにアリアムは次に備え、杖を構え直すため、折った腰を立てようとして、

「っ!?」

気付いた。視界が、上下に揺れていることに。

違う、揺れているのは、視界じゃなくて私自身……

アリアムは自分でも知らないうちに、肩で息をしていた。身体が、重い。

それをナタスに気付かれないよう、できるだけ呼吸音を押さえながらゆっくりと姿勢を正して、半ば愚痴るように、心の中だけで咳いた。

体力には、それなりに自信、あつただけだな……

こんな時、“疲労”というものは唐突に現れる。何か一つの物事に集中しているときは感じることはなくとも、身体には着々と疲労が溜まっていくのだ。ふとしたきっかけでそれに気付いてしまうと、突然牙を剥いて襲い掛かってくるのである。

「すう
」

乱れた呼吸を整えるために、また全身に酸素を行き渡らせるために、アリアムは大きく息を吸い込む。その中で、思った。

自分たちは着実に追い詰められている、と。

もう何度も、何体も撃退しているはずなのに、魔法生物たちの作る包囲網は、いまだしっかりとした形を残している。

濡れる地面は、足元を全く安定させない、最悪の状態。“戦闘”

という、複雑な動きを臨機応変にとらなければならぬ状況では、それは文字通りの足枷あしかせとなる。時に落ち葉で滑り、時に泥に捕らえられ、要らぬ体力を浪費させる。その都度、体勢が崩れて攻撃への対応は遅くなり、常ならば感じ得ない、焦りを呼び起こす。

さらにはまとわりついていくような霧雨が、肌を服を濡らし、体温と共に体力を奪っていく。疲労しないはずがなかった。

だが、ここで諦めるわけにはいかない。

諦めることはすなわち、自分たちの死を意味する。

死とは“苦痛”。

それが一瞬のものなのか、永遠のもののかはわからない。

だが、その人が持っていたはずの“未来”さきは間違いなく失われてしまう。同時に、その人が望んでいた夢や希望も。そして、その人が感じていた幸せも。

だから人々は、その人の存在を“記憶”として未来に残し、意志を継ぐことで何も思い残さぬように願い、そして、幸福で、安らかであるように祈って、その身体を魂を、世界に帰す。

それが、“死”という苦痛からの解放。

それなのに、彼らを操る魔導師は、ことごとくそれを冒瀆する。

まるでその存在などなかったかのように、意志など無関係に、幸福からも安らぎからも遠く、眠ることさえも許さない。

それが、許せない。

「っは！」

アリアムは『もう少し』という言葉を自らに言い聞かせ、息を継いでまた杖を振るう。

彼らを苦しみから解き放ち、死を冒瀆する者の過ちを正すために。そうして、アリアムは大きく一步を踏み出した。

狙うは、正面の動きを止めている才オカミ。

採るのは、杖という長い間合いを利用して、動き出す前の相手を一撃で仕留め、即座にその場から離れる、まさに一撃離脱の戦法。相手の反応を許さぬ速さで接近し、回避をさせぬ速さで攻撃を加え、反撃を認めぬ速さで離脱するこの戦法に必要なものは、威力でも技術でもなく、ただ純粋なスピード。

その速度を得るために、アリアムは身を屈めて空気抵抗を減らし、膝を曲げて力を溜め、爪先ではなく足の平全体を使うように地面を蹴る。

「!?!」

だが、それは文字通り一歩、遅かった。

アリアムが地面を蹴ったその瞬間、オオカミが二頭、アリアムに向かって襲い掛かっていた。

それだけではない。

オオカミとわずかにタイミングを遅らせて、サルが枝伝いに両脇から迫り、カラスが上空に待機する。

しまった!

アリアムが心の中で叫ぶ。

このまま正面のオオカミを攻撃すれば、その隙に両脇のサルに反撃を受ける。仮に回避に成功したとしても、その攻撃の隙間を埋めるようにカラスが飛び掛ってくるだろう。

今までにはなかった、異種族間の同時攻撃における連携行動。

どうすれば……

だが、速度を得るために思い切り踏み込んだその勢いは、もはや止めること叶わない。

迷い、焦るアリアムに黄白の牙が 黒ずんだ爪が、迫る。

その瞬間、

パキン!

輪を維持するためには、彼らはその線を細くせざるを得なかったのだろう。追い詰められつつあったのは、彼らもまた、同じだったのである。

彼らの連携攻撃には驚かされたが、そのおかげで付近の人形を引きつけることになり、結果、包囲の輪を欠損させることになった。

そして、その欠けた部分に自分たちが立っている。

ここからならば、炎の魔法を使っても、自分たちが巻き込まれることはない。

「これまでだ！！」

ナタスが叫びながら腕を前に突き出す。

近くのカラスが慌てたようにそれを阻もつと飛び掛るが、もう遅い。

パチン！

それは終わりを告げる鐘のように、
静かな森に染み渡っていくように、
正円だけで描かれた絵画のように、
欠けた太陽が光を取り戻すように、

高く、軽く鳴り響いて、そして仄かな赤い光を飲み込んで、紅蓮の爆炎が打ち上がった。

第十四話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

本当はもう少し進めたかったんですけど、あまりに長くなりそうだったので今回はここまでとしました。

今しばらく続く第二章、果たして何話までいくかわからなくなってきましたが、これからもよろしくお願いします。

第十五話（前書き）

第十五話

爆^はぜる火山のように湧き上がる、火炎の柱。

一部だけをわずかに欠いた火柱は、炎を伴った竜巻のように轟々^{ごうごう}と熱風を撒^まいて空へ昇り、頭上を覆う木の葉の天蓋^{てんがい}、どころか雲さえも吹き散らす。

その姿、天を焼き尽くす火龍の如し。

そして、紅蓮の火龍に飲み込まれ消えていく、茫漠^{ぼうばく}とした赤い光。柱の中心にいるモノたちは巻く風に自由を奪われ、炎に身を焼かれながら酸素を奪われ、呼吸することさえも許されない。

これほどの業火^{しよくもつぱう}猛風の中では、残されるものなどありはしないだろう。

地面は抉^{えぐ}られたように穴を開け、葉は枝ごと旋風に散り、樹は根元のみを黒くして体の大半を失っている。

やがて炎の閃光が消え去った跡には、その魔法を発動させた者、発動を事前に知りえた者たち以外、何も残ってはいないと言ってしまった。

ただ、一つの例外を除いて

「ち……」

炎の魔法を発動させた者、ナタスが小さく舌を打つ。

彼はこの魔法で、全てに力タをつけるつもりでいた。

これほど強力な魔法を発動させたのは、多数の魔法生物を一度に殲滅^{せんめつ}するためだけではない。

周囲に炎が広がることを防ぐ、そのためでもあったのだ。

巨大な炎は周囲の空気を温め、空へ駆け上る気流を発生させる。

その気流に乗って空気が空へ昇ると、その欠如を埋めるように周囲から再び空気が流れ込む。

つまり、炎が鎮まるまでは周囲に炎が撒き散らされて広がるのではなく、周囲が炎に飲み込まれるように集まっていくのである。

さらに上空に行くほど酸素濃度は低くなり、すなわち火の勢いは弱まる。仮に巻き上げられた物体が炎に塗れていようと、空に上ることでその勢いを削がれ、落下と旋風の圧力で消え失せる。

万が一、未だその身に炎を宿していようと、落ちた先は雨に濡れる大地。燃えることはおろか、燻ることさえもありません。う。

そして、その竜巻の如き風が、全てを飲み込み吹き飛ばす。

あとに残るものは、炎どころか何も無いはずだった。

「あれでも残っているモノがあるとはな……」

彼の眼前には、月に照らされて光沢を見せる球形の闇。その周辺には乾いた土が散乱している。

まるで力カオパウダーの上に置かれた、巨大なチョコレートボールだ。

「あれは……泥!？」

アリウムが瞬時に看破する。

天蓋がなくなつて月明かりが届くようになったおかげか、辺りは良く見える。また、急激な上昇気流が発生したせいで、上空の雲もその力を失つたらしい。霧のような雨は晴れて、視界はすっきりとしていた。

だからこそ、くつきりと浮かび上がる球状の闇が、泥の塊であることが確と見て取れた。

「なるほど、泥で包んで炎から身を守つたのか。周りに土が散らばっているのは、炎を受け、泥が乾いて落ちたところだろうか……
それでもなお形が残るのだから、よほど大量の泥を操つたのだな」

ナタスがわずかに眉根を寄せて、泥球を見つめつつ吐き捨てる。
その様子は実に忌まわしそうだ。

あの魔法にはよほど自信があつたのだらう。実際、思い出すと身震いしてしまう。下手をすれば自分も巻き込まれていたのではないか。まあ、ナタスに限ってそんなことはないはずだとも思うがとさえ、アリアムは感じていた。

それほどまでに強力だったあの猛火の中で、全てを防いでこの泥の塊は存在し続けたのだ。

彼にとっては、敗北感にも等しい感情で胸の内が満たされているはずである。

「フン…… 一体、誰の芸当か」

あからさまに侮蔑ぶくつの視線を闇に向けるナタス。

その視線の向こう、漆黒の泥の塊が山鳴りのような唸りうなを上げている。その表面はゆっくりと渦巻いて、生物の体内の蠕動ぜんどうを連想させた。

「さて、中には何が入っているのかな」

そういう言葉とは裏腹に、ナタスは大した興味はなさそうだった。中身がなんであろうと関係ない、ということだらう。焦るでもなく逸はやるでもなく、悠と歩み寄っていく。

刀を上段に振りかぶり、そうしてチョコボールを真っ二つに分けようとして、

「!?!」

突如、その中から飛び出す棒状の何かに阻まれた。身を捻ることで、ナタスは辛うじてその刺突を回避する。

「くっ!」

続けてもう一本、ナタスの顔面目掛けて槍のように追撃が突き出される。それを大きく後ろに跳んでかわすと共にナタスは距離を離れた。

彼の頬に赤い筋が流れる。

「ナタスさん!」

「かすっただけだ。それより……」

と言って、頬を拭いながら泥を睨む。綺麗な球を為して流動して

いた塊はその流れを止め、角のように突き出た歪な棘によってその形を崩し始めていた。否、その何かの中から這い出そうと、うぞうぞ蠢いて泥を剥がしている。

「腕……」

どろどろと流れ落ちる球から突き出ている棒状のものは、紛れもなく人間の腕。

闇の向こうからこちらの世界をまさぐるように腕を動かし、表面の泥を溶かすその姿は、まるで卵から孵化しようとしている怪物だった。

いや、少なくともそれは、人間ではない。

「ごぼ、と鈍い音を立て、今まで球を為していた粘度の高い泥が、血の流れるように地面に円形に広がっていく。

その円の中心に立つは、一人の老人。

這い出ることに力を使い果たしたのか、背を曲げて力なく頭と両腕を下げている。

「やはり、コイツが隠れていたか……」

「……」

剣を握り直すナタス。杖をかざすアリラム。

それに反応したかのように、老人の体にぼんやりと赤い光が灯る。

オ、オ……

それは、吹く風に響く風鳴りか。

臭気を撒き散らしながら老人だった魔法生物が、ゆらりとその頭を上げた。

オオオオ！！

森を震わせるように魔法生物が戦慄く。

瞬間、ニンギョウは大きく弾け跳んだ。

月を背後に描かれる鮮やかな放物線。その落下先はナタスとアリ
アム、双方のちょうど中間　　！

「ち！」

「くっ……」

ナタスとアリアムは同時に、しかしまったくの逆方向へと飛び退く。

直後、轟音が鳴り響いた。巻き起こる突風、舞い上がる土煙。あの小柄な体格で、一体どうすればこれほどの威力を出せるものなのか。あろうことが、あの老人の魔法生物は落下の衝撃に乗せて両手両足を地に打ち付けることで、巨大な岩でも落下したかのような大きなクレーターを作り出していた。

にも関わらず、かのモノの動きは、わずかにも止まらない。

叩きつけた両手両足を支えに、魔法生物は即座に大地を打つ。その力は今度は穴を穿たず、自身の体を弾丸のように打ち出していた。向かう先は、未だ突風に髪を揺らす少女　アリアム。

「……」

アリアムはそれを視認するも、体が反応できなかった。今は突風に飛ばされぬよう体を支えるだけ。避けることはままならない。

ならばせめて直撃しないようにと、杖で防御の体勢を取るので手一杯だった。

オオオ！！

差し出される、汚れた片腕。

真つ直ぐに首下を指すそれを、アリアムは寸でのところで受け止めた。

杖を伝わる鈍い衝撃が、支えた両腕に麻酔のような痺れを残しながら全身を駆け巡る。

「くっ！」

その衝撃が踵まで達したとき、アリアムは大きく弾き飛ばされた。
いた。

宙を舞う感覚は一瞬。すぐに背中から墜落して、少女の体は地面

を滑るように走っていく。

ガリガリと背中を削る小石混じりの地面。肩を叩く木々の根。しかし、それらはいずれもすぐに砕けて、少女の体を後ろへと流していく。

炎の魔法によって周囲の木が軒並み高さや強度を失っていたのだろう。アリアムは木に激突するも、一度にその衝撃をゼロにする反動は受けず、徐々にその力を減衰させて、最後は幹に寄りかかるような姿勢で動きを止める。

「う……」

すぐに立ち上がるうとするアリアムだが、痺れた体は動かそうとする意思に反して、動いてはくれなかった。力が入らない腕は体を支えることができず、みじめに地面を転がる。

その無防備に寝転ぶアリアムに追撃をかけんと、魔法生物が地を蹴る。

が、その二人の間に割って入ったのは、今度はナタスだった。

「はああ！」

長刀を片手に魔法生物を迎え撃つナタス。老人も構わずに突進をかける。

刹那の交錯。切り上げられた肉塊。ナタスの銀光が老人の腕を捉えた。かに見えた。

「何!？」

しかし弾け跳んだのは腕の肉ではなく、どこから持ち出したのか骨の槍、その穂先だけだった。魔法生物はナタスの読みに反して、武器を扱うという能力を有していたのである。

突き出される槍は穂先を斬られてもなお速度を緩めず、真っ直ぐにナタス目掛けて走っていく。

繰り返される交錯。この間、わずか四半秒。

一瞬の内に攻めから守りに入らせられたナタスは、舌を打ちつつ槍を真横に弾く。

老人も更なる連撃を加えることはなく、弾かれるままに飛び退い

た。

「ニンギョウのくせに機転も利く……」

ナタスは離れた間合いを確認しつつ、憎らしげに評する。

「ナタスさん……」

そこに、わずかに足を引きながら合流するアリアム。ナタスの傍らで彼女もまた、魔法生物に対し、杖を構える。

「無事で何よりだ。まだ、いけるか？」

「はい。それにしても……」

答えてアリアムは、老人の姿をした魔法生物を見やった。

ナタスもアリアムも、魔法生物との戦闘 特に人間のニンギョウとの交戦経験はないに等しかったが、これほどまでに厄介だとは思っていなかった。

ただ牙や爪を武器に向かってくる動物のモノとはまるで違う。両手両足に加え、アレは武器も手にして攻撃をかけてくる。

その上、自身の体を傷つけるほどの反動をまるで省みない、まさに全身全霊の攻撃。厄介という他あるまい。

しかし、いかに“動かされるだけ”の人形とて、壊れてしまえば動けなくなることは必定である。自らを省みない攻撃を仕掛けるようでは、戦いが長引けば長引くほど、あちらにとって不利な状況になることは間違いない。

そもそも“魔法生物”とは、とかく衝撃に弱い構造をしているのだ。それが、あのような強力な一撃を放てるものなのだろうか。

使い捨てにされている可能性もはないが、アレを操る魔導師が今まで姿を現さなかったことから考えると、魔法生物を操作することだけに特化した魔導師なのだろう。それならばなおのこと、あれは逃走のための足止めに使われるはずだ。

しかし、あのニンギョウは徹底抗戦の様相を見せている。

とすれば、“遠く離れた場所からは操作できない”という制約があるために、この近くに自分たち以外の魔導師がいるということに

なる。

ううん……

そこまで思考を巡らせて、しかしアリアムは胸の内首を振る。本当はわかっていた。気付いていた。想像もできていた。これが、誰の手によるものなのか。

そつと俯いて、アリアムは顔も向けることなく囁くように話し掛けた。

闇の向こうにいる、あの人に。

「やっぱり、あなたなんですか？」

「ええ、そうです」

アリアムの静かな声に対してのは、高く柔らかな声。

駅で、河原で聞いた覚えのある、優しさを伴っていた“はず”の
声。

アリアムは思わず、ごくりと唾を飲む。

そんなはずはない。

そうであるはずがない。

そうであって欲しくない。

ずっと思ひ、願ってきたことは、しかし、やがて現れる一人の女性の姿によつて、無惨にも掻き消されてしまった。

「こんばんは、アリアムさん。またお会いしましたね」

ぬけるような白磁はくじの肌。輝く金髪フロント。空を思わせる蒼の瞳。

軽く触れただけで折れてしまいそうな瘦身そうしんに質素な濃紺の法衣を纏い、左耳だけに紅いピアスをつけた、どこか幼げでありながら大人らしさを持った若い女性。

そつ

「シルファ、さん……」

シルファムルルム、その人だった。

第十五話（後書き）

いかがだったでしょうか？

この展開、予想通りですよね……単純でスイマセン。

さて、ようやく終わりが見え始めてきた第二章。

これからも宜しくお願いします。

第十六話

「ゼピュロス様!!」

秘書が自室に飛び込んでくる。

解けぬ謎に頭を悩ませていたゼピュロスは、その慌てふためいた秘書の叫びで、何事かと我に返った。

「ホ、何じゃ一体…… そんなに大きな声を出さんでも、まだ耳は遠くなっておらんぞい」

あまりにも狼狽なやまひしていた秘書を落ち着かせようと、自らは努めて普段と変わらない素振りまへまじりで答えてみせた。が、秘書の面持ちは変わらない。

「あつち……あの教会がある方向に、巨大な火柱が！」

「何!？」

座っていた椅子を蹴り倒してしまいそうな勢いでゼピュロスは立ち上がり、秘書の指す方角を見る。

天を焦がすほどの業火ごうかは、一瞬だけ猛烈な紅い光を放って、すぐに消えていった。

あれは……!

考えるまでもない。ナタスたちに何かあったのは明白だ。

ならば、と思う間も刹那せつな、ゼピュロスの決断は迅速だった。

「すぐに兵を集めて調査隊を結成せよ。指揮はわしが執とる」

「は！」

号令一閃、秘書はぴしりと敬礼すると、すぐに駆け出していった。その姿を見送りつつ、ゼピュロスは思う。

これで彼らに何かあれば、それは自分の責任。

この時刻では人員も満足には集められないだろう。調査を極秘に頼んだこともあって、すぐに助けに行つてやることもできない。

ナタスに限つてよもや、とは思つが……

だが、その程度の時間、耐えられない友ではない。ナタスは簡単

に倒れる男ではないということ、よく知っているつもりだ。
そのはずなのに、何故か無性に嫌な予感がする。

ナタス、アリアムさん…… 無事でいてくれ……

言いようのない不安を押し止めるように、ゼピュロスは力を込めて奥歯を噛み締めていた。

「シルファ、さん……」

アリアムは喉を詰まらせながら、くぐもった声でようやくそれだけを言葉にする。

いや、それだけしかできなかった。

辛うじて抜け出る息は戻ること叶わず、激しさを増した胸の鼓動で体が震える。体は熱を帯びて仕方がないのに、流れる汗は氷水のように感じられた。

晴れたはずの霧が、再び自分の頭の中だけに現れたような感覚。思考は現実を追いつかず、故に理解は到底及ばない。

心の内を駆け巡るのは、“信じたくない”という^{すが}縊るような願いと、そして“認めなくてはならない”という使命感にも似た思い。

その中で、感情が『全てを“拒絶”しろ』と命じ始めていた。

「どつして……」

アリアムは、今にも崩れ落ちそうな膝に必死に力を込めて、問い掛ける。自分の言葉の後に続く問いがなんであるのかも、判然としないまま。

その求めに、蒼瞳の聖女はくすりと笑った後、

「己の、望みの為に」

何に躊躇うこともなく、確固とした意思の籠もった声で答えていた。

「己の望み……？」

「ええ。私の望みを現実のものとするために、彼らにはその代償となつてもらいました」

唇を噛み締めて尋ねるアリアムに対し、あくまでも穏やかにシルファは告げる。

足元に一つ落ちた、何かの骨など意にも介さず、微動だにすることも無い。ただ佇むだけの彼女はどこまでも無機質で、そして歪だつた。

確かに微笑を浮かべているはずなのに、人間らしさというものがひどく欠けている。

言うなればそれは、貼り付けられた仮面　いや、アレは本当に人間なのかという疑問さえ、アリアムは感じていた。

「昨夜の、河辺でのことも、シルファさんが……？」

何かに身を振るわせながらも、問いを重ねるアリアム。

その姿にシルファは何かを感じ取ったのか、今まで端的にしか語らなかつた言葉を連ね、縷々（るる）と語る。

或いはそれが彼女の感情の一表現なのかもしれないが、今のアリアムは、そのような考えに及ぶべくもないほどに、混乱させられていた。

努めて冷静であろうとする少女を、シルファはその蒼い瞳で見つめ続ける。

「そう。アレも実験の過程。もつとも、アレは完全な失敗作でしたけどね。どうやっても、私の思い通りにしか動いてくれない、ただの操り人形にすぎなかつた。だから川に流して捨ててしまおうと思つていたのですが、最期の最期で急に自分で動き出した。その時ですよ、貴方が現れたのは」

アレはアレで嬉しい誤算でもあつたのですが、と付け足す言葉に

も感情は籠もらない。眉まゆ一つ動かさず、淡々と語るその姿は、まさに人形のようにだった。

それが、アリアムを余計に困惑させる。

「思い通りに動く魔法生物が“失敗作”で、自分で動き出すのが“嬉しい誤算”……?」

その問い掛けに、今度はシルファは答えなかった。代わりに機械のように目を細め、口元を吊り上げて、“笑顔のような表情を造り”、その仮面の微笑を深める。

まるでアリアムが戸惑う姿を愉しむように。

っ!!

またアリアムは困惑に息を呑む。

シルファの見せるその姿は、かつて自分が出逢った彼女のそれは、遠くかけ離れたものだったのだ。

自分の知る彼女は、あのような歪な笑みを浮かべたりはしない。どこか儚げで、憂いに満ちたような笑顔だったが、そこには通じて優しさが籠もっていた。はずだ。

その笑顔が、今は霞んでいる。

だからなのだろうか。未だに彼女を拒絶することができず、あるうことか、今日の前にいるのは“自分の知っているシルファ”ではないとさえ信じなくなるのは。

そんなわずかな希望にすぎるように、アリアムはあえて主語をぼかして問い続ける。

「そこまでして、手に入れたい物があるというんですか、あなたは……?」

「ええ。そのために、私は実験を繰り返してきた。“輪廻転生”の実験を」

そう

あの獣の魔法生物ニンギョウは“死んだ者を生き返らせる”、その秘術を得

るための実験だったのだ。

“魔法生物”という魔法は、対象の物体に魔力を通すことで擬似的な生命体として操作を可能とする魔法である。

しかし、それはあくまでもモノを扱う術。“生きているよう”に見えるからといって、そこに“生”はない。言うなれば不完全な生であり、故に意志はなく、ただ誰かの言いなりになるだけの存在。しかし、彼女が求めるものは意志をも持った“完全な蘇生”なのである。

だから、彼女は試行錯誤を重ねた。

まず、治癒の魔法に救いを求めた。だが、死者の傷を癒したところで、生者に成り代わることはなかった。

次に、人体の細胞から同種の個体を生み出す“複製”^{クローン}技術に賭けようとした。しかし、如何に“同じ細胞”を持つ生体だからといっても、それは“同じもの”にはなり得ないと知って、絶望した。

そうして結局、行き着いたのは“魔法生物”だった。

魔法生物という技術が、不完全ながらも“生”であると言えるのなら、それを追求し続けることでやがて“完全な生”に近づけるはず。

今までに無かった手法、概念、機軸　　思いつく限りのことを試してみよう。

それがシルファの答えだった。

だが、それを為すためには、クリアしなければならない絶対の条件があった。

“蘇生”を為すための、絶対の条件　それは言うまでもなく、魔法を行使される対象が“死者”であるということ。

「あなたは　シルファさんは、そのために、これほどの、命を…
…?」

「そうすることで“生命の循環”を解することができるのならば、それは尊いことでしょうか？ 彼らの生命も決して無駄にはならない。その果てに生まれる世界が、誰もが“死”から解放される世界。死者を甦らせることができる世界になるのだから」

シルファは空を仰ぎながら、高々と宣言する。吹く風をその身で受け止めるように腕を広げて頭上にかざし、その向こう側にあるものを掴もうとするように拳を握る。恍惚こうこうに染まる表情。それは、人としての感情なのかさえ、もうわからない。ただうつとりと、三日月に並んだパーツを夜空に向けていた。

「　　そうして私は神の定めた“運命”という名の輪を排し、この身を神に近づけ、私の愛しい者たちを憎き神の下より取り戻す。それこそがこの私、シルファ＝ムルルムの望み！」

アリアムはかすかな望みが潰つぶえたことを悟って、瞳を伏せる。吹く風があまりにも冷たくて、それを避けるように身を縮め、何もできぬ己の無力さを噛み締めるように拳を握る。胸に迫る感情。それは、誰に対して、どのように抱いたものなのか、わからない。ただそのココロを、暴走だけはさせないようにと、目を伏せる。

「　　だったら、あなたは、どうして……」

心の奥から、声を漏らす。巧く言葉にならない。

ただ自分の胸の中だけで強く響いて、嗚咽おえつの中に埋もれていく。

それでも　たとえ胸の中だけであろうとも、アリアムは精一杯叫ぶ。

どうしてそ　が、　し　いる　う　と　付　い　？

必ず、届いてくれると信じて。

だが、それは、一瞬、一言、それだけで、脆く、易く、あっさりと、壊れて、散った。

「邪魔をするなら 殺します」

カチリ。

奥歯が鳴った。体の熱が別のものに変わっていく。
シルファの顔は、再びの無表情。その声は、無感情。蒼の双眸そうぼうには光を灯さず、どこまでも冷たい眼差しで見つめてくる。

それで、ココロは決まった。

「させない…… これ以上は」

アリアムは伏せていた顔を上げ、真っ向からシルファを睨み返す。もとより、このような行いを許せないと言ってここに来たのだ。たとえ目の前にいるのが誰であろうとも、それを裏切りだと悲しむのではなく、絶望に流されるのではなく、正面から向かい合おう。それが、“友”と呼び合えるものであるはずだから。

「わたしは、あなたを止めてみせる！」

胸の奥の、“拒絶”を命じる声は、大きくなっていた。

第十六話（後書き）

いかがだったでしょうか？

なんか何度も言っているような気がします。が、ようやく佳境です。

ここからは戦闘シーンが続いて、んでサクッとエンディング……

ってできればいいのですが…… 一体何話まで続くのかな……

第十七話（前書き）

本当に遅くなりました。

待っていて下さった方々、申し訳ありませんでした。

第十七話

『止めてみせる』。

そう言った少女の傍らで、少年はその言葉の意味を考えていた。相手を“止める”というのは、いかなる感情こころから生まれるものなのだろう。

相手を想う悲哀からか。それとも、相手を認めぬ憤怒からか。だが、それは考えるまでもないことだった。

少年は知っている。今の彼女は、相手を“否定”するという感情をほとんど持っていないということを。つまり、彼女は相手を認めない、などという考えには至らないのだ。

だから彼女は“止める”と言った。“相手”を否定するのではなく、相手の持つ、“その考え”を否定するために。

それは相手を想う悲哀であり、同時に“そうさせてしまった意志”への憤怒である。

そうであるが故に、彼女はまだ、彼女たりえている。

少女が己の意志を示すかのように、力強く大地を蹴った。

しかし、一人々々が持つ世界「ヒトロ」というものは、決して他者の入り込めるものではない。影響を受けることこそあれど、真にその世界を理解できるのはその世界を構築する人物。すなわち“自分”だけなのである。

だから相手の意志を否定することは、相手を否定することに等しい。相手を否定せず、考えだけを否定するなど、できようはずもないのだ。

少女はそれに気付いていない。いや、気付いているのに、そうでないフリをしているだけだ。

彼女はあんなにも辛そうな顔をしている。本当は気が付いていて、

それでも相手を信じたがっているのだろう。

だが、少女は　アリアムは、すぐに認めざるを得なくなる。
そんな都合のいいことはない、と。

そうして、“そんなことはない”とまたそれを否定して、結局、
アリアムは望まぬ世界を作り出す。

少女が自分の信じたがっている聖女に向かい、杖を振るった。

なんとという泥沼だろうか。

信じたいと思えば思うほど、アリアムはそれを否定しなければならなくなるのだ。『どんな事でも受け入れられる』が故に。自分が信じたいと願う理想をこそ。

それでも必死に噛み締めて、否定することを否定しようとして、
最後には　。

「……」

ナタスは思う。

もし、アリアムがそれら“全て”を許容できずに拒絶を求めれば、
その瞬間、彼女　“拒絶”が領分であるという、もう一人のアリ
アムが現れるだろう。

ナタスも彼女に会いたくないはずはない。彼女の持つ、全てを消
し去る魔法こそが自分の悲願への道なのだから、もう一度と言わず
何度でも合つて、あの魔法を見たい、知りたいと思う。

「だが……」

今のアリアムに全ての否定など、させるわけにはいかないのでは
ないか、とも思う。もし、もう一人のアリアムが現れるようなこと
があれば、彼女のココロは壊れてしまうのではないか。そんな気が
してならない。

ならない、が、しかし　。

繰り返される少女の打突は、しかし踊るような優雅な動きで完全

にかわされていた。

それでも、あの闘いはアリアムに任せなければならない。信じることも、否定することも、それは彼女の世界。^{ココロ}ならばその世界に、他者である自分が介入する余地がどこにあるうか。

どのような結果になるうとも、自分はそれを見届ける。他ならない、彼女が信じるもののために。

聖女の叫びに応え、魔法生物^{ニンギョウ}が動き出す。

そう思ったと同時に、少年　ナタスは一步を踏み出していた。考えてみれば珍しいことだ。いつも理屈ばかりが先行する自分が、ただ一つの思いで動き出すなど、思いもしなかった。

アリアムのように、“止める”などという考えはない。強いて言うならば、シルファの考え方が気に入らない、という程度。

それでも、否定していることに変わりはない。認められないなら、消してしまえばいい。それだけのことだ、と思っていた。

けれど、もし否定することなく場を収め、シルファを止めることができるのならば、その方がいいに決まっているだろう。

アリアムにとっても、シルファにとっても、ならばやるべきことは、一つ。

アリアムの闘い、その邪魔は誰にもさせない！

アリアムに向けて繰り出された魔法生物の腕を、ナタスは押し止めた。そうして、ニンギョウをアリアムから遠ざける。

「お前の相手は俺だ」

アリアムが自分の闘いにもみ集中できるように、アレは自分が任せよう、と剣を構える。

その中で、ふと思った。

こんなにも誰かを思うことは、いつ以来だっただろうか、と。

妙に懐かしい感覚は、同時にどこか切ない味がした。

「そうですか……」

シルファが視線を下げながらぼそりと呟いた。

月が翳る。

つい半刻前まで立ちこめていた死の匂いは、風に流れて消えていた。

闇を取り戻した森はどこまでも静かで、水中で膝を抱えて浮かんでいるような、そんな穏やかさすら覚える。

まるで胎児の頃に戻ったような感覚。

だが、冷たい風に吹かれると、その先に在るものは生の喜びではなく、死の恐怖であることがすぐに理解できる。

ここは確かに、温もりをくれる優しい母ではなく、冷厳な死神の降りた森なのだ。

その森、丸くくり貫かれたような広場に立つ、四つの人影。

四人は互いに二組に分かれ、円の端と端、直径の線に向かい合う。

その光景は、まさに争いの起こるうとしていて、“闘技場”^{コロシウム}だった。

「私は、止まりはしない…… “あの子たちを死の世界から取り戻し、再び笑顔を灯す” この望みを叶えるまで、絶対に立ち止まりはしない」

シルファが伏せていた顔を上げる。

アリアムの決意に答えるように、空色に輝く瞳。眼前の少女と同じく、その双眸に己の決意を秘めて、シルファはアリアムを睨みつ

けた。

身体は完全に真横を向く姿勢。顔だけを正面に向け、右腕を地面と平行に差し上げて心臓を抱くような構えをとる。

そして、最期に

「祈りなさい。せめて、安き眠りを迎えられるよう」

誰かの安息を願うように、十字を切った。

「！」

だん、と泥の地面にも力強く音を鳴らして、アリウムが駆け出す。まるで流星が尾を引くように、それを追って流れる長い髪。

杖を脇に掻い込んで、踏み込む姿勢は低く、疾く。

その速度たるや、まさに風の如し。

対する蒼の聖女は動かない。ただ視線だけで少女を追う。

少女の速度が突風のそれならば、彼女は緩やかな小川だった。ふわりとした姿勢で、ただ直立している。

圧倒的な速度で間合いを詰めるアリウムと、それをただ佇んで見つめるシルファ。その両者の動きは時間の流れが違うとしか思えなかった。

それでもシルファは動かない。

だが、アリウムも決して止まらない。もう躊躇^{ためら}わない。相手が止まっているのならば、それこそ好機といわんばかりにその速度を速める。

この間、三秒とかがついでまい。

一瞬の内に間合いを詰め、地に足を踏みしめて上体を伸び上げらせ、腕を前方へ突き出す。

足で、膝で、腰で、腕で、エネルギーを受け取り次へ流すその一

連の動作は、波のように少しずつ力の焦点を定めていく。

「はあっ!!」

そうして、その力が焦点　杖の先端に達する瞬間、アリアムは旋風の如き打突を繰り出した。

力を一点に集約したそれは、真っ直ぐに標的の中心を目指す。

それでも動かぬシルファに、その杖が命中する

「残念です」

「な!?!」

直前、シルファの身体が突如、滑るように横に流れた。

まるで掴もうとする指をすり抜ける、宙を舞った枯れ葉のように、彼女は何一つ体勢を変えることなく、ふわりと打突をかわしていた。

「貴方なら、わかってくれると思っていたのに……」

真横から聞こえてくる、冷たい声。

くっ

今まで感情を伴わなかったそこに、今度は明らかな敵意が混じっていることを感じて、アリアムは咄嗟とつさに構えを取ろうとする。

「あの子たちはずっと苦しんできた。その末に手にした幸福しあわせを神は一方的に奪い取り、あまつさえ死することまで彼らに強いた……

あの子たちは幸福にならなければならない。笑顔で生きる自由が与えられなければならない!　だというのに、何故“神”だということだけで、そんなにも不当に彼らの生命を奪うのか!

私は、あの子たちの笑顔が見たいだけ……　あの頃の幸福を取り戻したいだけ!　それなのに　」

きりきりと横を向く青い瞳に初めて“感情”という火を入れて、シルファはアリアムを強く睨みつけた。憎き敵かたきを見つけたように、ギラリとした眼光を叩きつける。

「それなのに　何故、それをわかってくれないの!!」

その叫びに呼応するように、傍に控えていた魔法生物マジックビーストが動き出す。

オオオ!!

突き出される黒い腕。

先程の、自身の打突の焼き直しかとも思えるそれに抗する術は、アリアムにはなかった。

防御のために構え直される杖と腕との隙間を通り抜けるように、死人の腕が伸びる。

が、それはアリアムに届く前に、横合いから現れたもう一本の腕に押さえられていた。

「間違えるなよ。お前の相手は俺だ」

ナタスが魔法生物の腕を掴んだまま、ちょっと人に道を尋ねるような気軽な声で言う。しかし、その瞳には溢れるほどの闘気が籠もっていた。

そして、ナタスはその闘気をぶつけるようにシルファへ視線を投げると、反対の手にした刀の切っ先をシルファに向けて、水平に構える。

「っ！」

シルファが咄嗟に距離を取る。

魔法生物も、ナタスの視線が自分から切れたその一瞬の隙を突いて掴まれた腕を払い、体勢を立て直すために大きく後方へ跳び下がった。

「よく動く人形だな……」

それを追撃せずに見送ったナタスは、ぼそりと溜め息を吐いた。

彼の視線の向く先は、向かって右側の魔法生物。左むこうに立つ、シルファのことなど眼中に無いとでもいうように、彼は老人だけをその瞳に映していた。

「アレは不愉快だ。これ以上は見るに耐えない。」

アリアム、俺は全力でアレを始末する。その間、あちらの女の相手ができなくなるが……？」

静かに言う。

口元だけを歪めたその横顔は、不気味なほどに不敵だった。

「！」

その笑みを見て、アリアムは直感する。

彼の言葉には、自分に向けた何か別の言葉が籠められている、と。あの魔法生物が不愉快だというのは本当なのだろう。彼の言葉の端には怒気が籠もっていたし、何より彼が静かになるのは怒りの現れであったからだ。

だが、おそらく彼の真意はそこではない、別の部分。
問うまでもない。彼はこう言っているのだ。

お前自身の手で、彼女と決着をつける　と。

その思いやりを噛み締めるように、アリアムは改めて杖を構え直す。

「わかりました。それなら、シルファさんの相手は私が引き受けます」

「よし。セレス、ディアナ、お前たちはアリアムの援護にまわれ。悪いが俺は手を貸せない。お前たちだけで何とかしろ」

「はい、ありがとうございます！」

その言葉を弾みに、アリアムは再び蒼瞳の聖女に向かって走り出していった。

振り返りもせず、脇目も振らず、ただ真っ直ぐ。

友の暴走を、止めるために。

「やれやれ……」

ナタスはまた、溜め息を漏らした。本当に面倒なことになった、と。

テロの犯人探しに来たはずなのに、逆に被害者と思われる人物と会うことになるのは、思ってもみなかったのだ。

しかし、考えてみれば妙でもある。

シルファの言動から察するに、彼女の言う“あの子たち”というのは、教会に引き取られていたという孤児たちであることは容易に想像がつく。

彼女が火災の被害者であるというならば、教会跡に姿を現したことも説明できる。

「それに」

ナタスは正面の腐りかけた老人を見る。

あれも、先程の動物たちの魔法生物も、シルファの作ったものだと、彼女自身が言っていた。

それも別に良い。

「だがしかし……」

被害者だというなら、何故教団に名乗り出ないのだろうか。

そして何より、

「あいつは何故、“子供たち”のことしか口にしない……？」

それが、妙で仕方がない。

発見された遺体は、五人の子供と、一人の成人女性。

明らかに、彼女はその女性のことを気に掛けていないのである。意図的に、なのか。それとも無意識に、か。あるいは、まさか。

とそこで、ナタスは軽く首を振った。

「まあいい。それは本人に訊くことにしよう」

一人呟きながら剣の握りを確かめて、かすかに切っ先を上げる。

すらりと伸びた銀の刃。

死出の旅路へ誘う、魔剣　細雪ほろゆき　その刀身には、旅へ赴くことになるだろう一人の老人が映し出されていた。

「全く……　どこの誰かは知らんが、お前には同情するよ。“死んでいるのに生きている”というのは苦しがる。俺も似たようなものだから、お前の気持ちはよくわかる」

剣の中の老人は、自分の腹を裂いて手を捻じ込むと、肋骨を一本、鷲掴みにして引き抜き、構えた。

そしてわずか腰を下げ、いつでも飛びかかれるように力を溜めて
いる。

「だから、終わらせてやろう…… この俺の手でな。そして叶うの
ならば、来世の姿で俺の前に立ち」

老人を剣に映したまま、ナタスは半歩前に踏み出す。しかし全身
はさらりと流水の如く、清らかに、穏やかに。

どんな状況、どんな体勢であろうとも対応できるよう、肩にも腕
にも力は入れず、自然に構える。

そうして、ナタスは戦闘態勢を整えた。

「お前の得た“死の概念”、“死の世界”を、いつの日か俺に教授
して欲しい」

再び、舞台に月影が降り注ぐ。

銀剣は妖艶に輝き、白骨が濁った粘液で光沢を放つ。

その二つの光はそれぞれの軌跡を描き、

「散れ」!

踊るように交差した。

第十七話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

この第二章、途中でプロットの変更などがあつた所為で、流れが滅茶苦茶になってしまっていますよね。

なんだかもう、いつそ書き直したいくらいです……

これからはこんなことがないように、綿密に計画を立てていこうと思います。ということ、見苦しいですがこの章、もう少しお付き合ひ下さい。お願いします。

第十八話（前書き）

まず前もってお詫びさせて下さい。

更新に時間をかけたにも関わらず、今回のお話はとても短いですが、続きは書いているには書いているのですが、一通りの戦闘シーンを書き終えた後に、まとめて投稿、という形にさせて下さい。

いつも読んで下さっている皆様方、本当に申し訳ありません。

第十八話

「準備、整いました」

整然と並び、教団の僧兵たち。その片端にゼピュロスの秘書も装備を整えて並び、それを最後に、調査隊が召集されたことを報告する。

「うむ」

ゼピュロスは短く答えた。

その様相は普段の“珍妙なお爺さん”ではなく、教団の司祭に相応しい、げんぜん厳然とした振る舞いだった。

「数は？」

「ゼピュロス様と私を含めて、九人です」

こんな時刻に、こんな短い時間で、よく集まったものだと思う。

しかも、起きた出来事、その詳細は秘さなければならぬ。それができる、信用に足る人物で、かつある程度の戦闘もこなせるような者だけを探したのだから、この人数は大したものだ。

足りない分は、自分が補えばいい。それだけのことである。

「現場に着いたら、まずは二名に入り口の封鎖をやってもらおう。わしの名を使つてかまわん、でき得る限り　たとえ教団の者であろうと、他者を入れるな。残りの者は二つに分ける。二人はわしと共に、あとは君が率いてくれ」

ゼピュロスが命じる。秘書はその命に、右の拳を胸の前に掲げる敬礼で応えた。

これは、『私の心臓を貴方に捧げます』という、教団特有の最高の礼である。

「連絡は密に。“調査”が目的だ。どんな小さなことでもかまわん、何かあればすぐに報告し、指示を仰げ！」

そう言つてゼピュロスは、眼前に並び兵士たちの顔を瞳に刻むように、順に見回した。

最高の礼をもって忠義を示す秘書を、急な召集に応じてくれた部下たちを、頼もしく思いつつも、しかしゼピュロスは態度に示さない。

あくまで指揮官として立ち、いかなる不測の事態に陥っても、命を賭して彼らを守る　そう誓うことで、彼らへの礼とする。

「よし」

そして、ゼピュロスは袂から、掌大の小さな、翠緑すいじりよくの本を取り出した。

“ファヴァニアス”　ゼピュロスが魔力行使をする際に用いる、

魔法具　魔法石と同じく、魔力をもって扱う道具　である。

温和な老人は、それを無骨に握り、号令をかける。

「出発する！」

第十八話（後書き）

いかがでしたでしょうか……も何もありませんね。ごめんなさい。続きは、前書きでも報告しました通り、一通り書き終えた後に、まとめて投稿させていただきたいと思います。

また遅くなってしまうですが、何卒、ご了承ください。

第十九話（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。

定期的に見に来て下さった方々、長くお待ち下さった方々、本当にありがとうございます。

随分間を開けてしまいましたが、ようやく続きを投稿いたします。なお、本文はどれも結構長いです。携帯の皆様方、醜いと思いますが、何卒ご了承ください。

第十九話

激突する光と光。

流れるように舞い乱れ、二度、三度と鋼の音を響かせる。

双方の剣は流れる水か、奔る風か。

それは、ぶつかり合つてなどいないかのように滑らかで、衝突したことさえ微塵も感じさせない。

軌跡は全く乱れずまま流れ、返され、再びすぐに標的を目指して駆けていく。

それらが互いに牽かれ合い、絡まり合いして、美しい楽曲ともとれる音色を奏でていた。

「っ！！」

「！！」

剣戟の証たる光の筋が、あちらこちらで交錯、収束し、蕾となつて膨らんでいく。

花開くは、鮮やかな橙赤色。しかし、それもまた、すぐにその身を花卉に変えて、刹那の内に散つていった。

交わり合つた二つの煌めきが、火花が散りきるよりも速く、再び別れて奔り出す。

長刀の一撃は、真横から半円を描くように。骨の槍のもう一撃は、地上から伸び上がり線を引くように。

その斬撃もまた、相手に届くことはなかったが。

逆巻く風　一撃。

爆ぜる火花　二撃。

揺らめく身体　三撃。

月の光を弾く汗　四撃。

「ふっ！」

「オ」

ナタスは斬り結ぶ中で、ふと思う。

この場面だけを切り取れば、優雅な踊りか、あるいはそれを描いた絵画と見間違みまちがうかもしれない。

血のような橙赤色の光を照明に、心音のように止まぬ刃音を拍に、踊り続ける二人の男。

互いに肉迫し、躍動する姿を写す、現実でありながら神秘的なこの光景は、しかし現存するどんな思想の絵画も敵うまい。

それほどまでに、今のこの闘いは美しかった。

「はっ！！」

「アア！！」

丹青たんせいの役者たちが正面から斬り付け合い、激突する。激しい衝撃は、空気を振動させ、木々を大地ごと揺るがした。

「ち！！」

「ウ」

その、あまりの斥力せきりょくに、踏み留まることをせず、二人は流れに乗って後ろに大きく弾け飛ぶ。

そして、彼らは引き絞られた弓のように、着地に縮めた身体を伸ばして大地を蹴ると、

「てえああ！！」

「ウウオオ！！」

奔る矢となり剣を交え、すれ違った。

美しいはずだ。

まさに互いの命を削った、一瞬の輝きを咲かせているのだから。

だが、こんな皮肉もあるまい。

死を望んで生きている自分と、死んだはずなのに生きている老人輝くほどの生命とは、およそ縁遠い二人が、それを示すようなやり取りをしているとは、何という“あてつけ”か。

死にたくないという、強い意志など持ち合わせていない。むしろ逆のことを願っている。

人の生命というのは、儂いものだ。喩えるならば春の桜、夏の花火、秋の夕日、冬の雪。

一瞬で消えゆくものだからこそ美しい。限りあるからこそ、価値がある。

その瞬美も価値も、自分は永遠の代償に失ってしまった。

いかなる苦しみの中にあっても、死に逃げることもできず、どこか人としての尊厳さえも有りはしない。

だから、自らの死を望むのだ。

もう、生という苦痛の大河に在り続けたくはないから。

この闘いに咲く花が美しいのは、それを生命の光と思うのは、一瞬の輝きであるが故。永遠の灰色を優美と感じる者はなく、曇った空を愛でる人間もない。

自分はそういう、光を失したハイイロの人間なのだ。不老不死という、妄想に憑かれ色を失くした人間なのだ。

いや、もはや人間などと名乗ることもおこがましい。

人間として自然の一部。その摂理から外れたモノが、何故人間などと言えるものか。

自分は消えなくてはならない。

白でもなく黒でもなく、ただ不透明に濁っているモノなど、セイジヨウな世界を汚すだけ。

廻り巡る世界に於いて、不変ではなく、普遍でなければならぬのだから。

そういう意味では、あの老人も同じだろう。

自我に基づいた、人間羸^{ひしき}肩の倫理や道徳を語る気は毛頭ない。

だがそれでも、正常な循環に戻りたいと願うのは、当たり前のこと。平穏安定を求めるのは、至極当然。

歪^{いびつ}に角^{かど}を持つなら円がいい。どうせ果てなく進むなら、輪がいい。それこそが、輪廻^{りんね}。真なる永遠とはそういうことではないか。

だから終わらせたい。ただ無為に進むだけの生命を。

だから終わらせよう。同じ苦しみを持つモノとして。

先にも増した大輪の花が咲く。それは、“火花”と称するにはあまりに雄壮で、しかし儂く消えていった。

「ふう……」

再び間が開く。

それで得た余裕を使い、ナタスはこれまで経験と直感だけで動かしていた身体に、思考という理知を挟ませる。

「このままでは睨み合いになってしまおう……」

距離は約七メートル。

一足で踏み込むにはやや遠く、二足踏んでは相手の間合いにも入ってしまう。

このまま睨み合いを続ける気はないが、老人の間合いにまで踏み込むつもりもない。

さりとて、これといって良い案が浮かんでいないのも実情だった。

「さて、どうするか」

手を探るように、ナタスは老人の武器を見やる。

相手^{ニソギョウ}の持つ武器は、自らの肋骨を利用した槍。

“槍”とはいえ骨である以上、大した長さはなく、穂先が研ぎ澄まされた針のように鋭いことを除けば、その形状は短い“曲刀”という方が正しかった。

故に、絶対に相手の間合いに入ってはならない。

いかに速さで誤魔化そうと、小回りの利かない長刀では懐に入られてしまえば、対応しきれなくなる。至近距離クロスレンジに持ち込まれては、不利どころか斬り負ける可能性すら有り得るのだ。

こちらの攻撃が届くギリギリの線に相手を留め、触れさせることなく仕留める。

それが理想、だが

「アレはそうさせてくれるほど、容易な相手ではない……」

ナタスはニンギョウに成り果てた老人に、敬意の念を抱く。

“生物”と銘を打ってはいいても、魔法生物とは所詮、操り人形だ。操作にどんなに技巧を凝らそうと、微細な動きなど到底できるはずもなく、結局は愚鈍で大雑把な動きにしかない。

にも関わらず、あの老人は“自分の意志で動いている”かのように、精密かつ正確な動きでナタスの攻撃をここまで防いだのである。

いや、長尺刀という圧倒的に間合いに勝る相手に、短剣のみでこれほどの攻防を繰り広げた。それだけでも、賞賛に値するだろう。

「生前は、一体どういう人物だったのか……」

見ればいつしか老人は、骨の短剣を両の手に握っていた。

そう、かの老人は、あの“骨”でナタスの攻撃を防いだのである。

いかに堅かろうと、所詮は“骨”。鋼の剣を打ち付けられれば、簡単に折れてしまうは当然のほうである。

が、老人は骨の持つ丸みを巧みに利用し、衝撃を分散させて自らの武器を砕くことなく、こちらの刃筋を寝かせて寸断させることなく、実に器用に捌いていく。

とても常人の技とは思えなかった。

「全く、興味深い、っ!？」

と、ナタスの感想を他所に、老人が鋭く一步を踏み出してくる。左手の短剣を大きく前に、右の短剣は後方に引き絞って水平に

左を盾に右で貫く、まさに双剣士の姿。

あの老人、かつては名を馳せた剣士か、殺し屋だったのではないか。

ちっ、長々と考えすぎか……

などと、この期に及んでまだ思考を働かせるナタスは、己の悠長な癖を胸中で罵り、すぐさま迎撃の体勢に入った。

二人の距離が半分ほどに縮まる。

開けた距離は、老人にとっても一歩では踏み込んでこれないものだったのだろう。二人の中間点付近で、一回目の着地をしていた。

ナタスは相手の二歩目に意識を集中させ、踏み出した瞬間に剣を振るって迎撃する

「その程度！」

と見せ、突如振りかぶった剣を身体の正面に立てるようにかざし、防御の姿勢を取った。

長い刃に軽い音が二つ、続けざまに響き渡る。

剣にぶつかり、足元に落下したのは、骨の短剣。老人は二歩目を蹴る直前　ナタスが迎撃に入るその瞬間を狙って両手の短剣を投擲していたのである。

だが、その程度、見切れぬナタスではない。

いとも簡単にいなし、逆に無防備となったニンギョウに、両手での打ち下ろしの斬撃を見舞おうと、ナタスはその構えを直す。

「っ！？」

しかし、老人は攻撃を躲され、武器を失ったにも関わらず、すでに二歩目を踏み込んでいた。

「まだ向かってくるか……　ならば！」

構わず迎撃の体勢を取るナタス。

もはや策らしい策があるとも思えない。

故に臆すことなく、次の一撃に渾身の力を込める。

「オ……」

だが、老人も浅はかではなかった。手にした武器を投げたのは、相手を仕留める一手ではない。これはあくまで、自分の距離に入るための布石。

防御のため剣を前にかざすという一動作を挟む少年が、改めて斬撃を放つには、幾許かの時間を要する。それが長刀ならば、なおさらだ。

時間にして数秒にも満たない、わずかな差。しかし、それが好機。その刹那に、自らの間合いに踏み込む。

もとより老人の狙いはそこだった。

傷を負わせられれば上々。避けられたとしても、あとは自身の間合いから逃がさぬよう追い続けていけばいい。

一度懐に飛び込んでしまえば、圧倒的優位になるのだから。

「オオ……」

老人は最後の一步を満身の力で踏み込み、さらに加速した。瞬く間に、間合いを侵略する。

そして、再び胸から引き抜いた骨を、両の逆手に携えた。

狙いは肩の筋肉と鎖骨の狭間。

ここからならば、脆い骨でも容易に貫くことができ、また肺や心臓を傷つける、致命傷に至らしめることができるだろう。

敵の守りの隙を突き、

「オオオオ！」

老人が短剣を振り下ろす。

駆ける。

自分の位置と相手の位置、双方を瞬時に見極め、その最短距離すなわち直線を描いて、

駆ける。

まわりのことなど気にしない。自分のことも後でいい。今はただ、相手が動くよりも速く、

駆ける。

今のアリアムにとって、できることはそれだけだった。攻撃のための魔法など、知らない。応用できそうなものもない。仮に知っていたとて、攻撃に使えるほど自分は器用ではないこともわかつている。

だからといって、小賢しく策を練るほどの頭はないし、隠しごとも根本的な部分から不得手。

伏線を張っても、どうせ気付かれてしまうのがオチだ。だから、

駆ける。

小難しいことは考えない。
今はただ、自分にできることをやる。
それだけだ。

「すつ」

アリアムは小さく息を吸い込んだ。腹に息を溜めること、四半秒、

「やつ!!」

気合と共に、高速の刺突を放つ。

ガキン、と金属音にも似た音を立てて止まる、杖の先。

また、防がれた。

「やれやれ、ですね……」

突如として現れ、アリアムの杖を阻んだ、半透明ながら黒く薄い壁の向こうで、シルファはどこかで聴いたような言葉と共に溜め息を吐いた。

「先程からずっと、真っ正直に突っ込んできての攻撃ばかり……
猪ですか、貴女は……」

説法のように皮肉をノタマうその笑みは、しかしあまりに無機質なものだった。

笑みの表す感情は、何かを痛めつけることを楽しんでいるものか、あるいはその果てを見ているのか。その瞳はあまりに遠すぎて、もはや思考を読み取ることはできない。

「全く、自身を止めることもできないクセに、私を止める、とは大きく出たものですね」

言いながら、シルファは腕を前に伸ばす。

すると、アリアムの杖を押さえていた薄い壁は、杖の穂先を止める部分だけをわずか残して、硝子の割れるように四方に散った。

「それとも、何かとっておきの秘策でもあるのでしょうか？ そのために私を油断させよう、と」

シルファは無造作に、開いた掌しごひらを握り締めた。

それを体現するように、周囲に散った黒硝子が一点、アリアムを中心に集まっていく。

「く……」

アリアムは泥の壁を突き放し、跳び退る。

刹那、前方の空間で鈍い音が連鎖的に響いた。それは硝子のような薄片が発するとは思えない、大質量の物体がぶつかり合う音。腹を叩く轟音は、まるで土砂崩れの中に身を置いているようで、寒気がする。

硝子片は互いにぶつかり合うと、また粘土のように膨れ上がって、一つの球体を作り出していく。

「もしそうなら、早く見せていただきたいものですね、その秘策とやらを」

抑揚なく声を紡ぐシルファ。

握った拳を後ろに引き、拳打を虚空に放つ。すると、アリアムの杖を防いでいた、わずか残されていた泥が渦を巻き、錐きりのように撃ち出された。

それは前方、泥の球を貫き、飲み込んでさらに増大、唸りを上げ

る。

「アリアム、左に跳んで！」

「！」

と、近くから、白猫セレスの音が響いた。

導かれるように、アリアムは力を込めて大地を蹴る。

足元を掠める風切音。つい先程までいた空間が、薙ぎ払われていく。後には、何かに引き摺ずられたような痕あとが地面に突き刺さっていた。

「さあ、見せてください」

シルファはさらに、突き出した拳を開いて横に振る。応じて、飛ぶ錐こが四散、向きを変えてアリアムを追う。

「貴女の力を、言葉を、想いを！」

「ぐつつー！！」

着地と同時に襲い来る、無数の弾丸と、耳を劈つく轟音。地を抉えり、風を裂き、樹を削り、肌を剥はぎ、服を挽ひき、髪を断つ。が、それでも。

泥が、雪崩ゆきなみてきた。

「もう、終わりですか？」

動く気配のなくなつた少女にシルファは言った。

しかし穏やかな声とは裏腹に、顔はいまだ緊張を解いていない。結果を確認するまでは、いつでも応戦できるようと、構えを直す。

「だとしたら、実にあつけないことです……」

臨戦体勢のまま、嘲あざわらむように溜め息を漏らす。

ぬかるんだ地面をして、なお濛も々と舞い上がる土煙。老木と枯葉の碎片を混ぜたそれが、パラパラと小さな音を立てている。

まだ、動く気配はない。

まさか、本当に今ので終わりなのか。あれだけの大口を叩いておいて、自分に触れる間もなく倒れてしまったというのか。

だとしたら、興醒めもいいところだ。

もう少し、頑張って欲しかったものですね……

『止めてみせる』、などと言っておきながら、何もできないとは情けない。

とはいえ、それもまた一つの運命。

どうにもならないことなど、この世にはいくらでもある。いかに足掻こうと、決して抗えないものが。

「貴女もまた、無力な人間でしたか……」

シルファはそう言っ腕を下ろした。そして、煙に向かって、一歩踏み出す。

「けれど、“無駄”にはしませんよ。貴女の遺体は、私が丁寧に埋葬して差し上げます」

口元を曲げ、歪に笑みながら、一步一步、近づいてゆく。

と、そのとき、

「アリアム、右前方、一時の方向ツス！」

白猫がまた声を上げた。

鎮まりかけていた煙が、再び流れ出す。

「!?!」

突如、片手で煙を振り払いながら飛び出してくる少女。

髪が風に乗る、踊る。

全身は汚れ、服は襤褸になっても、それでも瞳は微塵も揺るがず、力強い輝きを放ちながら前を見据えていた。

「まだですよ、シルファさん！」

アリアムは手にした杖を、脇に深く掻き込んだ。

迂闊にも悠々と近づいてきた聖女に、全身に溜めた力を、突進に乗せた勢いを、合わせて杖の先に込め、突き出す。

「くっ!!!」

対するシルファも、咄嗟に両手を前に突き出して、泥の盾を展開した。

激突の感覚は一瞬。

後を支配するのは力の奔流。

周囲を散らすほどの風が吹き荒れる。

激しい衝突は空気を震わせ、音となって過剰なエネルギーを放出する。

打った者と打たれた者、双方は等しく力の奔流に吞まれ、分かれるように弾き飛ばされた。

くるりと宙で一回転、アリアムは地面を擦りながら着地する。

びよん、と傍らに降り立ったセレスに、小さく一声、礼を言う。

「ありがとう、セレス」

「どういたしまして。でもアリアム、アイツじゃないけど、もう少しなんとかならないツスカ？ その、闘い方……」

「うーん、でも他に方法がわからないし……」

と、歯切れも悪く、とても言い辛そうに尋ねてきたセレスに対し、アリアムは全くの本心から、そう答えた。

「わたしの知ってる闘い方って、ほとんどが反撃中心のものなの。

要するに“護身術”。相手の出方に応じて動きを決め、相手を制する。だから、こっちから攻撃を仕掛けるようなこと自体、本当はおかしいんだけど……」

思わず、苦笑いを浮かべる。

もともと、体術は旅の道中、危険から身を守るために覚えたものだった。

旅は“安全第一”。こちらからやぶ藪をつついて、蛇を出すことはない。

自分は闘いに生きる戦士ではなく、ただの旅人なのだから、相手を殺すことを目的とした闘い方は知らないし、覚えようとも思っ

ことはなかった。

「でも、」

アリアムは継ぐ。

「シルファさんのあの魔法は、相手に近づかなくても攻撃できる。ということとは、ただ待っているだけじゃ駄目でしょ？」

言いながら、アリアムは前方、やや離れたシルファの方を見た。

彼女は攻撃してくる気配はなく、今はただこちらのやり取りを眺めていた。様子見か、あるいは余裕、なのだろうか。

おそらく、後者だろう。

その左右両脇と足元では、泥がゆつくりと、蟲の這うように蠢いている。

先程、魔法生物を泥で包んで炎から守っていたことから、彼女の魔法は、泥を扱うものであることは察しがついていた。

それが“泥” 自体を操るものなのか、それとも“流動” という現象を操るものなのかはわからない。が、いずれにしろ厄介であることに変わりはない。

自分から近づかなくても攻撃ができるということ。そして、おそらくは、この地の粘土質の土壌がそうさせているのだろう。攻撃だけでなく、防御にも転用が可能であるということ。

全く、不思議なものだ。

優しく触れれば何の抵抗も感じず、少しばかり粘りのある水程度でしかない泥が、しかし強く叩けばそれ以上の力をもって反発してくるのだから。

となれば、攻撃にも防御にも転用できるはずである。

通常は鞭むちのようにしなやかにうねりながら、衝突の瞬間のみ鋼鉄の如き高硬度を見せる。前方に膜状に広げれば、その質量をもって衝撃を防ぐ。

打撃を中心としたアリアムの戦闘法では、それを破る術はないだろう。

全く、厄介と言う他不い。

本当に、どうすれば……？

アリアムは息を呑む。

打撃は通じず、かといってそれ以外の攻め手に欠ける状態。体術で勝ろうと、間合いに大きく劣る。こちらの攻撃が届かない位置から攻撃され、それを掻い潜って捉えても、その頃には防御が完成している。

為す術がない。

せめてナタスさんみたいに、炎の魔法が使えたら……

シルファの左耳で光る、赤いピアスを見つめながら、ふと思った。蒼の双瞳と金の髪を燃やすように照らす、赤い光。

それはまるで、空。

日中の蒼天。黄金の朝焼け。そして茫ぼっと赤い夕暮れ。

それらを文字通り体現しつつ、操るのが泥と死人というのは、面白くもない冗談だ。

シルファさん……

感情を交えることなく、ただ佇むだけの墮シルファちた聖女。

“心ここに在らず” いや、“心在らず”とすら、思えてしま
う。

そのくらい、彼女の顔には、感情が見えなかった。

第十九話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は三本まとめて投稿いたします。

続きも、ぜひどうぞ。

第二十話

「そろそろ、良いでしょうか？」

とそのとき、突然シルファの口元がつり上がった。

同時に、ピアスの光が増す。

「アリウム、避けてツス！！」

「え！？」

条件反射のように即座に跳んで避けるアリウム。

先程までアリウムの立っていた場所に、泥の弾丸が突き刺さる。

「く…… これをどうにかしないと」

セレスと二人、ジグザグに走り回りながらアリウムは打開策を探す。

二人の後を追いつ、次々と地面に着弾していく弾丸。泥を巻き上げ、小さな粒となって服に、顔に、降りかかってくる。

このまま走り続けていても、どうにもならない。

アリウムは駄目元で、訊いてみた。

「セレス！ 炎の魔法ってどうやるの！？」

「は！？ アリウム、なに考えてるツスか？」

叫びながら返される答えに、やあのじれったさを感じて、アリウムは声を荒げる。

「決まってるじゃない。泥を吹き飛ばすの！」

「アリウムには無理ツスよ！ 出たところ勝負でできるような魔法じゃないツス！！」

「やってみなきゃわからないでしょー！」

ああもう、とアリウムが珍しく毒づいた。それほどまでに焦っているのだらう。

二人を追う泥の弾丸は、相変わらず雨あられと降り注いでいる。

そのうちの一つが目の前に落着し、セレスは驚きながらも咄嗟に跳んで、立ち止まることを避ける。

「やらなくてもわかるツスよ！ 炎の魔法っていうのは“空気中の水蒸気の分解”、“体内物質の生成”、“摩擦熱による発火”、“引火”の四つの行程を順に、短時間でやるんスよ？ そんな器用なこと、アリアムに……」

「できるわけないじゃない！！」

「だからそう言ってるツス！！」

二人して走り、時に跳ね、樹の後に隠れるなどして機関銃のように降る泥の弾丸を躲かわす。その中で、セレスは危機感を募らせていく。

このままじゃ罅らちが明かないツス……

アリアムは回避に精一杯、焦りも手伝って考えを巡らす暇もないだろう。自分にも、これをどうにかできるような打開策は。

いや、一つあった。

すっかり失念していたことを思い出し、セレスは今もその準備をしているであろう、もう一匹あいかたの猫に呼びかけた。

「ディアナ、まだツスか！？」

「五月蠅い、気が散りますわ！」

と、すかさず樹上から返される、苛立たしげな声。

やはり、まだ準備中だったようだ。

「もう少しですから、静かにお待ちなさい！」

「静かにつて……！？ アリアム！！！」

そりゃ無理ツス、と言いかけて、セレスはアリアムの死角となる位置から迫る泥を捉えた。すかさずアリアムに回避を促す。

「右に！」

「くっ……！」

間一髪、セレスの指示通り右に思い切り跳ぶことで、アリアムは避けることができた。

肩から着地、受身を取りつつ起き上がり、セレスにウインクを流すことで礼をする。

「鬱陶ふつとうしい猫……」

それが癩かんに障ったのか、シルファはそれまで気にもかけていなかった白猫を、初めて睨み付けた。

すっ、と腕を差し上げる。応じて、アリアムとセレス、二人を追っていた泥の弾丸が、一斉に白猫の方へとその向きを変えた。

「目障りだわ……」

呟くような一声で、泥の雨は滝の怒涛とつうに変わる。

空気を削る鑢やすじのような濁流が一直線、セレスへと向かっていく。

「うわ、うわわわ!」

フギヤー、と悲鳴を上げながらもそこは猫。セレスは的小ささと持ち前の身軽さで、降り注ぐ泥を躲し、滝壺から逃げるようにその圏外へ飛び出す。

「あまり手間をかけさせないで、おチビさん」

が、それも予想していたかのように、シルファは即座に滝の矛先、その向きを横に曲げた。

セレスは近くの樹によじ登ってこれを避け、枝から枝へ、飛び移ることで追撃も回避する。そして、叫んだ。

「アリアム、今ッス!」

「!?!」

シルファは白猫を追って上げていた視線を脇に逸らした。右から迫るアリアムの姿を瞳に映す。

そう　シルファがセレスに意識を集中させている隙を突き、アリアムは横から回り込んでいたのである。

つまり、今の一連の行動は、白猫による陽動だったということだ。

本当に、鬱陶しい。

「っ」

小さな呼吸音。

それはどちらのものだったか。

ほとんど体当たりの格好で突進したアリアム。迎え撃つシルファ。一際大きな打撃音が響き渡る。

「甘いですよ！」

まさに紙一重。

わずかに先を取ったのは、シルファだった。

アリアムの、杖を前にかざした突進を、シルファは直前で壁を展開、防御する。

そしてそのまま、壁にぶつかった少女を泥で包み、捕らえようとして、

「それはこっちの台詞です！」

少女の真の狙いがもう一手先にあることを悟る。

「な　！？」

アリアムが壁に打ちつけた杖を支点にくるりと反転、壁と身体との位置を入れ替えるように、内側へと滑り込んでくる。

この型は……

まさに、“相手の攻撃を受け流す”、護身術の動き。

アリアムは防御に展開した壁を、逆に相手の攻撃と見立て、それを捌くことで“防御を躲した”のである。

身を守る術しか知らぬが故の、身を守る術を応用した見事な体捌き。

防御を防御で流し、そして護身術の骨頂、“後の先”を取ってアリアムは攻撃を繰り出す。

「はっ
」

回転の勢いを乗せ、アリアムが杖を振りかぶる。

後は振り抜くのみ。

流れには逆らわない。

避けられても、次の動きは考えている。

否、これは避けられることが前提。

スピードはこちらが上。

距離を詰められた相手が防御に徹すれば、その分、攻撃が薄くなる。

薄くなれば、さらに距離を詰めることができる。
距離を詰めれば、さらに攻勢に回ることができる。
攻勢に転じれば、また守りに入らざるを得なくなる。
そうすれば、止められる。

スピードはこちらが上。

流れには逆らわない。

そう、後は、振り抜くのみ。

「ああああ!!」

一閃。

小さな泥の飛沫ごと薙ぎ払う。

それは、今までの何よりも速い、渾身の一撃。

だが、それを、

「くう」

シルファは無理矢理身を捻ることで、直撃を避けた。

杖は袖を掠め、袖口の白布が削り取られる。

シルファは即座に体勢を立て直し、距離を取るため、後方に跳び退る。

「まだまだ!!」

さらに追撃をかけるアリウム。

シルファが着地するよりも先に、その着地点を間合いに収める。

そしてその落下に合わせ、杖で足元を払おうとして、

「え……?」

アリウムは、不意の微笑を見た。

ガッ!

鈍い音が、低く響く。

それは、剣のぶつかる刃音であり、骨の軋む音であった。そして、少年の喘ぐ声であり、老人の悶える声であった。

真紅の血と、臙脂の血が噴き出す。

それは、少年の鮮血であり、老人の血汁であった。

そして、白刃を黒く曇らせ、枯骨を紅く塗り潰す。

あまりにみすばらしく、また異様なまでに生々しい、“殺し合い”の華。

鮮血と古血、風合いの違う二色の赤が、入り乱れて咲き乱れる。

老人が短剣を振り下ろした瞬間、ナタスは防御の姿勢のまま、刀ごと体当たりをかけることで迎撃した。

その、無謀とも思える行動は、老人にとっては全くの想定外だったのだろう。斬撃に向かってくるなど、愚行としか思えない。まして、当たれば致命傷となる攻撃に、だ。

が、結果としてそれは、効果的だった。

老人の虚ろな瞳に、自分の懐に入り込む少年の姿が映し出される。

「が、ふ……」

少年が喀血する。その肩には大きな穴が開き、血飛沫が散っていた。

それでも、少年は未だ立っている。剣を握っている。

おそらく、傷が心臓に達することはなかったのだろう。

ナタスが体当たりをかけようと自ら踏み込んできたことで、老人の剣が当たった場所は、当初の狙いよりわずかにずれてしまっていたのである。

しかし、少年の吐血量からして、肺を傷つけたことは確かである。それにより肺内部には血潮が溜まり、溢れ返った血液は気管を圧迫して、呼吸困難を引き起こすはずである。

これ以上の戦闘続行は不可能。

それでも、少年は未だ立っている。剣を握っている。

いや、それどころか、

「フ……」

ナタスは紅に染まる口元を歪め、嗤った。

「オ!？」

老人は密着状態からの斬撃、その初動を感じ取り、咄嗟に飛び下がろうとする。

だが、しかし

本当に、それで良いのか。

後退するということは、ようやく詰めた間合いを 自分の距離を放棄することである。

自分が手に入れたこの間合いは、疑いようのない、“必勝の機”と等価のもの。今、この機を逃せば、“次”を得られることは、もうないかもしれない。

しかして、今まさに敵の攻撃が始まろうとしている 否、始まっている。

それを受けても、果たして自分には敵を仕留めるに足るだけの力が残るのだろうか。自分がこれを“必勝の機”としたように、少年もまたそうとしていたならば。

「はあっ!」

ナタスは迷いも憂いも躊躇も一切なく、刃を滑らせるように一斬斜めに引き抜く。

「ガアッ!」

老人は機を逃すとしても、この攻撃は避けるべきと判断し、大きく後方に飛び退く。

しかし、その一瞬の差が仇^{あだ}となった。

「ゴガアアア！！！！」

老人の身体が、刀の軌跡そのままに斬り裂かれた。一文字に裂かれた胸から、粘度の増した血液が流れ落ちる。

それでも、後方に下がったのは正しい判断だった。胸を大きく斜めに斬られはしたものの、身体を“両断”までされることはなかったのである。

ただし、左腕は犠牲となった。

老人の肩から先は、もはや腕が付いていたのかすらわからない。ただ、汚^{けが}れで黒ずんだ血液が、だらりと下げた腕のように、どろどろと流れ出していた。

「オ、オオオオ…… オオオオオ！！」

老人が慟^{どうく}哭する。

腕を失った痛み^{いたみ}に叫び、怒りを示す。

その全てを破壊せんとするような敵意が、周囲に満ちていく。

しかし、ナタスはその中で、

「やれやれ……」

呆れたように余裕の笑みを浮かべ、平然と立っていた。

両肩から吹き上げていた出血も、口から吐き出していた鮮血も、もはや止まっている。どころか、傷は完全に癒^いえていた。

「また服を汚してしまった……いくら傷がすぐに癒^いえるとはいえ、こつも簡単にお気^きに入り^いる駄目^{だめ}にしてしまうのは、やはり気分がよくないな」

そう、これが彼の身体に常時作用している魔法　時間回帰による“不老不死”である。

常に一定の周期で、身体に流れる時間を“ある特定の時間域”にまで回帰させる。故に歳を取ることはもちろん、傷を負った事実さえも、“起こらなかつた”ことにできるのである。

「全く、やってくれたものだ。死にはしないといても、癒えるまでの間、呼吸ができなければ俺だって苦しいんだぞ？」

ナタスは老人の敵意を軽くいなしながら、飄々と言った。こきこきと首を鳴らして、体の調子を確かめる。

「オオオ!!!」

そんな彼の姿を、老人は挑発と捉えたのか。

さらなる激しい叫びと共に、腕を失ったことなど 胸の傷の痛みなど関係ないともいうかのように、体中を血に濡らしたまま、強く踏み出す。

「やれやれ……」

やはり、ナタスは平然と溜め息を付いてみせた。

しかし今度は、余裕故にはない。

傷を負ってなお、全く意に介さないかのように攻撃をかけてくるその姿を、皮肉に感じてしまったがためだった。

「どんな手傷を負わせても向かってくる…… こんなに厄介なことだとは思わなかつたな」

死に瀕するような重症だろうと、活動に支障をきたさない。

それがかくも醜いものだと、思ってもみなかった。自分を卑下せずにはいられない。

「ああ、本当に……」

ナタスが、咳く。

「早く終わりにしたいものだな……」

手にした剣は、闘気に応じるように、淡く、冷たく、一層の輝きを見せた。

盛り上がる泥の大地。
シルファの着地先は、彼女たちが最初に攻防を繰り広げた場所。
もつとも多く、泥が溜まっている場所。

く！

不用意だったと悔やむ間も四半秒。

アリアムは、せめてとばかりにさらに一步、踏み込む。

そしてシルファの着地を払う、その瞬間、

「ええ、まだまだ、ですね……」

シルファの足元の泥が急激に隆起、着地点が“上にずれる”。

同時にアリアムの足元も、鋭い棘とげのように突出した。

それを受け止めようと、杖をかざしたアリアムに対し、

「!?!」

棘は突き刺さる瞬間、五指に分かれた。

逃げ場が失われる。受けることもできない。

ならばとアリアムは、その棘に刺さらぬよう咄嗟に身体を反らす。
しかし、代わりに五指の付け根、鋭角を失った鈍器さびに身を晒さらして
しまう。

「く、あ……」

浮遊感と嘔吐感おうとかん。

全身に電流が走ったかのように身体が痺れる。息は詰まり、呼吸
ができない。

そのまま宙に押し上げられたアリアムはどうすることもできず、
地面に墜落した。

「アリアムー!!!」

駆け寄る白猫を尻目に、シルファはさらなる追撃をかける。

「少しばかり驚かされましたが…… まだまだ甘いですよ、アリアムさん。その程度で私を止めようなどと、よく言えたものです!」

振り上げられる腕。
打ち下ろされる泥。
雪崩れ込む滝の雨。
嵐に晒される身体。

「うああああ!!」

全身を引き裂く、無数の弾丸。

その怒涛の中に身を置いたアリウムは、躲すこともできなかった。

あ……ま、ずい……意識が……

だが、どうすることもできない。

風に吹かれる木の葉のように、アリウムの身体が跳ねる。

今は、ただ、この嵐が止むのを待つしかない。

それまで、意識が、生命が、保っていらればいいのだが。

不意にころりと、ポケットの中から、何かが転がり出た。

「アリウムー!!」

白猫の叫びに、少女の応えは返らない。

やがて嵐は止み、舞い上がる土煙も晴れる。

すると、そこには汚れた人形のように横たわる、少女の姿があった。

「アリウム! アリウム!! しっかりするツス!!」

やはり、返事はない。

それに“満足”したように、シルファが泥の盛り上がった丘を下り始めた。

「クス…… 終わりですね」

階段のように整形された泥の丘は、まるでシルファの踏みしめている部分だけは石の如き強度を持っているかのように、“面”の堅さを見せていた。

対してその周囲は、まさに泥。流動する粘度の高い液体にしか見えぬ。

だが、その流動する泥の上でも、彼女はあたかも大地のようにしっかりと踏みしめて、ゆっくりと歩みを寄せてくる。

「ダイラタンシー……」

そう呟いたセレスに、シルファは意外そうな瞳を向けた。歩みを止めることなく、静かに語る。

「物知りなのね、白猫さん。私もその名を知ったのは最近でしたのに……」

そう、“ダイラタンシー” 水と微細粒子の混合物に、外部から力をかけると粒子間隔が広がり、その隙間に水が入り込んでいくため、擬似的に表面が乾いたようになる、粘性異常

「普段は流れる液体、けれど力を加えることで固体の硬度を発揮する…… 攻防に使えるわけッスね」

「液体でもあり固体でもあるこの泥は、一見矛盾していそうでありながら、しかし純然たる自然界の物質。如何に足掻こうと、摂理には逆らえませんよ……」

泥の台地を下りきると、シルファは改めて眺めるようにセレスたちを見た。

アリアムはまだ、立ち上がっていない。

立ち上がる気配もない。

それを確認すると、シルファは抑揚よくようのついた声で言った。

「さあ、おどきなさい、猫さん。邪魔をしないのなら、貴方は見逃して差し上げます。残念ですが、さすがにもう、立ち上がるのは無理でしょう。彼女はよくやりましたが、これまでです」

そして、笑う。

ほとんど感情を示さない彼女は、その一端、“愉悦”^{ゆえつ}を笑みに浮かべ、楽しそうに呟いた。

「でも大丈夫。アリアムさんは私が生き返らせてあげる。だから、その身体を私に」

そうして、ゆっくりと手を伸ばしてきたシルファに、

「頂戴！」

「それは、嫌です」

こちらにも、どこか暢気な風に、声を返した。

ドツ、という鈍い音。

アリアムは倒れたまま、シルファに杖を突き出していた。

泥による防御が間に合わなかったシルファの左腕に、穂先がめり込む。

「ぐ……」

咄嗟に距離を取るシルファ。

まさか、まだ動けたとは。

「……決め手とはならなかったのですか。不覚でした」

シルファは、どこるか立ち上がってさえ見せたアリアムを眺め、呟いた。

彼女の腰元、左側がわずかに赤くなっている。

しかし、血ではない。

「そう、“隠れ身”を籠めた魔法石を……見事です」

シルファは素直な賛辞を述べる。

魔法石 魔力または魔法を籠めることで、特別な行程を踏まずとも時間を置いて行使が可能になり、また魔法の使えない者にも扱えるようになる魔法具。

それは教会に来る際に、ナタスから受け取っていた、“隠れ身”を籠めた魔法石の光だった。

“隠れ身”とは、“そこに人はいない”という無意識的な思い込みを利用して身を隠す魔法である。

それを応用し、アリアムは“倒れて動けない”という事象を、シルファに“思い込ませ”て、シルファの油断を誘ったのだ。

先程の、私の泥を躲した技術といい、この人は応用が劇的なまでに巧い……

ですが、とシルファは思う。

赤い光は消えた。すなわち、魔法石がその力を失った、ということ。隠れ身はもう使えまい。

加えて、あの重傷だ。

致命傷ではないようだが、いずれにしろ、これ以上の闘いは不可能

と思考を巡らし、しかし、シルファはその考えが浅慮せんりょだったことを思い知る。

な、馬鹿な!?

アリアムの胸に添えられた掌が淡い白色の光を放っていた。

傷が、癒えていく……? まさか、治癒魔法!

シルファは心の内です愕する。

魔法など、全くできないと思っていた。

だが、使えないのではなく、使わなかっただけだったのだ。

当然である。

無傷ならば使う意味はないし、掠り傷かすりきずごときにも必要はない。

こういった、重傷に使ってこそ効果がある。

く、これは厄介ですね……

シルファは、アリアムたちが感じていたのと同じ想いを抱いた。

これでは傷を負わせても、また回復される可能性がある。いくら攻撃を加えても堪えないというのは、攻撃する側にとっては脅威という他ない。

ならば回復させる間もなく、攻撃を加えれば良い、のだが、

この腕では、難しい……

シルファの左腕は、先の攻撃の際に負傷していた。明らかに動き

が悪い。

だが幸いにも、そのことは気取けとられていないようだ。

「そんな魔法ものを持っていたなんて、知りませんでした。まあいいですけどね。蘇生の魔法じゃなし、回復する前に仕留めれば良いだけのこと」

そう言い、シルファは右腕を上げる。

そして、アリアムの傷が完治する前に、再び攻撃を加えんと泥を動かす。

と、そのとき、突如、視界が揺らいだ。

「準備ができましたよ！ お待たせいたしましたわね！」

頭上から聞こえる、黒猫の声。

一体、どうしたというのか。

あろうことが夜の森に蝶が飛び、小鳥が囀ひびくり、花の香りが届き、暖かい風がそよぐ。

これは……？

「さあ、セレス！」

「おっけー、ディアナ！」

二匹の猫が、共に叫んだ。

「反撃開始！！」

第二十話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回、シルファの魔法として登場した『ダイラタンシー』現象。

某科学の先生のおかげで、すっかり有名になっちゃいましたね……

もう少し早く登場させればよかったかな……？

水と片栗粉のできるので、ぜひ試してみてください。楽しいです

よw

第二十一話

「はあああつ！」

闇を裂く轟音が、地を削る擦過音が鳴り響く。轟音は火花と共に弾け、擦過音は粘液の飛沫と共に地に落ちる。

ナタスと老人は闘いの舞台を少しずつつ移しながら、くるり、くるりと目まぐるしく位置を入れ替えつつ攻防を繰り返していた。

優雅にして華麗な攻防を。

幾何学模様を描く複雑なステップ、右に左に。

波のように揺らめき、しかし時として滑るように流れる身体、前に後ろに。

服の裾がふわり、浮かぶように舞い上がった。

対して、動きは徐々に激しさを増していく。

円を描いて舞う刃、捻って避ける身のこなし、鋭い踏み込み、それと同時に鏡合わせの後退、振り上げられる腕、大きく反らされる身体。

攻撃すれば頬を掠めるほどの紙一重で躲し、踏み込まれば踏み込まれた分だけ身体を下げて距離を取る。

どんなに激しい動きであろうとも、しかし二人の距離は全く変わらない。

互いに、腕を伸ばせば背中にも触れられるほどの距離を保ちながら揺らめき、斬り結ぶ刃音を拍にして、二人の男は“踊り狂う”。

ナタスが先を取って攻撃を仕掛ければ、老人はそれを躲して反攻の一撃を繰り返し出し、ナタスも難なく避けて、また攻めに転じる。

その、繰り返しだった。

「オオオオ!!!」

「はああ!!」

老人が、右から左へ斬り上げを見舞う。

それを眼前で避けるナタス。上半身の力を抜くと、両手を垂らす仁王立ちのような姿勢となり、剣の重さを使って足元を薙ぐ。

それら二人の放つ二条の光は、わずかな時間差こそあるものの、ほぼ同時といって良い。

だが、何よりも驚愕すべきはナタスの動きであろう。彼は攻撃と回避、その二つの動きを一つの動作の内にやってのけるのだ。

完全なる攻防一体。

攻撃と回避を別々にしか行えない者にとって、これほどの脅威はあるまい。

老人はすぐに踏み込んだ足を下げるが間に合わず、ナタスの剣が臍の真ん中を掠めた。

「ウツ…… オオ！」

小さい唸り、腹を叩く咆哮。

老人は痛みを感じるのか、わずか表情を歪めると、それを掻き消すように吼えながら胴を斬りつけてきた。

頭上で回すように刀を振り戻していたナタスは腰を引いてこれを逃れつつ、即座に垂直の切り上げで反撃する。

老人の右肩を掠める剣閃。

光の帯と共に黒ずんだ赤い糸を宙に引いていった。

「ふっ！」

長刀はさらに加速し、風を巻く。

動きをわずか鈍らせる老人に対し、ナタスは振った勢いのまま刀を後ろに回して、鋭い踏み込みと共に突きかかった。

しかし、慌てずこれを目視した老人は、短剣で刃を押さえつけ、左肩を先行させるように横に小さく跳躍する。

トン、トンと軽やかに紡がれるステップ。

脇を流れていく老人の身体。

ナタスはそれを見送りながら踏み込んだ足を接地、身体を回転させ老人を正面に映す。後を追うように青白い、雪のような光の筋が奔った。

「ウガアアア！！」

今までにない、獣のような叫びを上げる、老人。よろめく身体を、“強引に”踏み止まらせる。

その足元には“靴”が、脱ぎ揃えられているように、置かれていた。

否 それは靴ではなく、斬り落とされた、足首。

それまで地にあつた足首から下が、ナタスの斬撃によって裂かれ、そこに遺されたのである。

だがそれでも、老人は立った。

骨の剥き出しとなった足を、棒のように地面に“突き立て”て、強引に。

バカな……

ナタスが驚愕する。

完全に、動きは止めたと思った。

が、老人の執念とでもいうべきものは、その想像を遥かに凌駕していた。

いや、それでは駄目なのだ……

足先がないという、動くどころか立つことさえも困難極まる状態で、老人は戦意を緩めない。

ただただ、感服するのみである。

足先がなくなっただくらいでは、死ねないから……

他者の思念に囚われ、亡者と成り果て、操られるだけの道具になりながら、それでも老人は猛る。

生きている証を、求めて。

果ての己の死を、望んで。

老人の姿に、ナタスは心の内で呟く。

そうだ

“死”があるからこそ、“生”は意味を持つ。

“死”をもつてこそ、“生”の証となる。

“死”を侮辱するな、“死”は尊べ。

ああ、そうだ

“生”の意味を探るならば、また“死”の意味も知れ。

“生”と“死”は表裏一体。

生きるが故の死であり、死するが故の生である。

“生”を十分に謳歌したならば、“死”をもつてその“生”に意味をもたらしめることは、間違いではない。

“生”の証として死を求めるならば、

この剣が、それに応えよう！

ナタスは相手の体を中心に十字を描くように、左下から右上へ一撃、刃を返して右下から左上へ二撃と、連続で斬り付けた。

老人はこれを短剣で受け流し、後ろに回り込むように足を運んで第二撃も躲す。

再びそれを追って首を狙う、強烈な刺突。

頭をずらし、体勢を低くすることで何とかこれも回避する。

それでも少年の攻撃は止まない。すれ違いつつ、踏み込んだ足を捻ることで半回転、今度は振り向きざまに相手の首元を薙ぎ払った。

「アア！」

相手の刺突を利用して体を入れ替えていた老人も、これには短剣を盾にせざるを得なかった。顔のすぐ横で、激しい打撃音が響く。

小さな亀裂が一つ、走った。

その衝撃全てを受け止めてはならない。

正面から受け合えば、容易く折れるは必定。故に老人は足の力を抜いて大地との摩擦を減らし、身体ごと後ろに下がる。

だが、地に刺さった足がそれを許さなかった。

転びそうになる身体。

倒れるわけにはいかない。

倒れれば、それで終わってしまうのだ。

故に

「っは！」

老人が倒れる。

そこへ止めといわんばかりに剣を流す。

これまでだ。

その棒となつた足では、即座に立ち直ることはできまい。

これで、決着

「む！？」

だが、老人は倒れなかった 否、倒れたのは、膝から上。

なんと老人は、上体だけを後ろに倒すことで、勢いを逸らしたのである。

老人は地に手をつき、身体を捻って斬撃を躲す。

そして、両足を抜きつつ、ついた手に力を込め、跳ね上げる。

まるで投擲（な）された槍のように、老人の身体が飛んだ。

「ちいつー！！」

確かに仕留めたと思った斬撃は予想に反して空を切り、ナタスは思わず踏躡（たたら）を踏む。そこにすかさず飛び込んでくる、槍の穂先（けりあし）。

「オオオ！！」

「舐めるな！」

だが、ナタスはそれを、あえて空足のまま大きく前に踏み出すことで、あっさりと避けてみせた。続く連撃、反対の足による膝蹴り

を、袈裟けさに振って受け流す。

刀の軌跡はそのまま地に流れ、刃が地面の石をカン、と叩いた。老人が、わずか向こうに着地する。

「せあ！」

大地の反動を利用して、ナタスは刀を素早く持ち上げ、横一文字に斬り付ける。

老人も引き戻した短剣の丸みで、先と同じようにそれを逸らす。両足を無くしてなお、寸分違わぬ精密さ。先と劣らぬ正確さ。

少年の攻防一体が絶技ならば、全ての攻撃を無効化するこの完璧な守りは神技であろう。

微細な動きに誘導された力は、そのベクトルをあらぬ方に曲げられる。

己の意図しない向きに、振った勢いそのまま流されては、姿勢は乱れ、判断も反応も鈍る。

これほどの長刀ならば、重さに振り回されるは道理。その隙に反撃

しようとして、しかしナタスがぐるりと一回転、再び同じ軌道で剣を振るってくるのを老人は捉えた。堪らず剣をぶつけ合う。

小さな亀裂がまた、一つ。

だが、その遠心力を乗せた一撃は、受け流すことすら許さない。

守りを力で弾き上げると、ナタスはさらに一回転、切っ先をカラカラと地面に擦らしながら、またも同じ軌跡で刀を振り抜いた。

首を狙う横薙ぎは、防がねば頭を落とされる。

老人は弾き上げられた短剣を強引に引き戻し、全力をもってナタスの刃に打ち付けた。

骨の短剣が、ボキリと折れる。

「オ
」

だが、そうすることで、老人はようやくナタスの動きをわずか鈍らせることができた。敵の足元に叩きつけるように折れた短剣を捨て、即座に胸から新しいものを、三本まとめて引き抜く。

戦闘に使えるそんなものの残りは、これを含めてあと二本。

もはや猶予はなく、故に決着は近い。

ナタスは折れた短剣を小さく跳んで避けた。そして、再度引き抜かれた何本目かの短剣を、身体を退きながら躲しつつ、牽制けんせいに小さく斬り上げる。

斬撃を振った勢いのまま、老人は右足を前に出し、ナタスの牽制を背中越しに躲すと、短剣を胸の前まで引き寄せ、首を突く。

「フ……」

すると、短剣の先端が触れた瞬間、ナタスの首が、おもむろに後ろに下がった。

切っ先に押し込まれる、紙のようだ。

そして唐突に、ぴたりと止まる。

短剣も、首も。

老人の剣は、なんと先端を首に触れさせながらも、すれすれの位置まで下がることで、回避されてしまったのである。

どこるか引いた足で地面を蹴って踏み込みつつ刃を横薙ぎ、打ち下ろしと、十文字に奔らせる反攻の斬撃を許してしまった。

オオ……

老人は横薙ぎを何とか逸らすも、即座に迫る打ち下ろしを捌くことができず、ついに、その最悪の事態に動きを止める。

なんとかしても避けたかった、最悪の事態。

それは 罅つはせ迫り合い。

単純な力と力のせめぎ合い。

それ以上に、これは純粹な武器と武器の競い合いなのである。

力で劣れば押し負け、武器の強度で劣れば断ち切られる。

自分の剣が圧倒的に強度に劣るのは明白だ。

力で押しのけても、このまま押さえ続けていても、いずれ、砕かれるだろう。

だが、どうすれば。

ギリギリと鳴る刃。

いや、鳴っているのは“相手の”剣だけだ。

自分の短剣は、ミシミシと音を立てている。

受け止められたのは、三本を重ねて握っているから。

そうでなければ既に剣は折られ、この身も両断されていたことだろう。

だが時間はない。

こちらは片腕、しかも足は棒。そう長くは保たせられない

さりとて、どうする。

退くことはできない。

眼前に光る剣は長刀。この足で下がれる程度の距離では、その間合いから逃れることなど叶わない。

押すこともできない。

これ以上力を加えれば、こちらの剣が折れる。押して突き放すなど、言語道断だ。

退けば斬られる、押せば折られる。

どうする。

考える、考える、考える

「ッ!？」

そのとき、老人は気が付いた。

“考える”

そう、自分は、考えている。

ただ操られるだけの人形だったはずの自分は、いつの間にか自分の意志を持って、動いていた。

相変わらず声は出ない。痛みも、どころか全身の感覚すらなく、本当に身体があるのかどうかもわからない。

それでも、我がココロはここに在る。

「オ、オオ……」

不意に漏れた声は、嗚咽にも聞こえた。

感謝せねばなるまい。

死して道具と成り果てたこの身に、今一度、己の心を取り戻させてくれた、少年に。

炎の魔法をもって問答無用に焼き払うことをせず、剣で打ち合っ
てくれた、少年に。

ならば

もはや賭ける命はないが、せめて戦士として、この戦いに全力を注ぐことで応えねばなるまい。

「オオオオ!!」

力を込める。反応するように、赤い光が全身を包んだ。

老人は強引に剣を流し、そして退いた。

「っは!!」

即座に後を追う、刃。

まさに疾風。

巻き起こる風が、轟と鳴る。

だが老人は、その風の中に、

「ウ、」

今度は、“踏み込んだ”。

まるで、ほんの少し前　自分が片腕を斬り落とされたときの再現。
現。

そう、これは再現なのだ。

違うのは、攻守の立場。

真に攻めるのは、こちら。

刀とは、切っ先にいくほど切れ味を増す。つまりその逆、
” いくにつれ、切れ味は鈍くなるのだ。 “ 鏢元^{つばもと}

所詮、この身は死体。

筋肉など、ガチガチに固まっている。それを無理に動かしていた
に過ぎない。

故に、鏢元での一撃ならば、耐えられよう。

それに、今さら剣を受けたところで、どつとということはない。
もう、死んでいるのだから。

文字通り、肉を切らせて骨を断つ。いや、骨を断たせても良い
ただ、その隙に、一撃に、賭ける。

狙いは、今一度、肩筋と鎖骨の間。

先程は狙いが逸れたが、今度こそは心臓を貫き受ける。

「オオオオ」

足を地に深く突き立てる。

腕を大きく振り上げる。

もはやこれを最後と決めたのだ。後のことなど後でいい。
今はただ、この闘いに決着を

「オオオオオオ　！！！」

脇腹に刃が突き刺さる。

場所は狙い通り、相手の指にも触れられるほどの、鏢元。

全身の力を、今この瞬間にだけ、腹に集める。

筋肉が、さらに固まる。

「な、に……？」

それで、刃は止まった。

「ヴアアアアアアアアアアアアアア！！！」

振り下ろされる一撃。

狙いは違う。

これで、確実に息の根を止める。

勝った。

そう思った。

「……」

そのときだった。

一瞬、ほんの一瞬だけ、少年の瞳が、黄金に変わったような気がしたのは。

そして、気が付いたときには、

「粉雪と散れ」

老人の身体は、短剣が少年に届く直前、二つに分かれていた。傷口より、はらはらと舞い散る、白い光の粒。

それは、少年の言う通り、雪のようだった。

これが、彼の持つ魔剣 “細雪”^{ユキ}の真なる力。

触れた物体の分子結合を解き、文字通り抵抗を無にして、斬り裂く能力。

それは、この世に存在する“物”である限り、逃れることはできない。

「すまんな」

少年が、ゆっくりと剣を返す。

意図してなのか、そうではないのか。

この身を横半分にした少年は、今度は縦一文字に斬り裂こうというのだ。

多くの者を暗殺した人間には、十字は似合わないというのに。

「再び、お前に死を与える俺を、憎んでくれてもいいぞ……」

何を言うか。

たとえ死神であろうとも、もはや後悔も未練もない。

いや、むしろ

「ア……ウア、オオ……」

ただ最後にそう呟いて、老人は赤い光の中に消えていった。
終始変わることのなかった表情に、ほんの少しだけ喜びを表して。

一人残ったナタスが、呟いた。

「『ありがとう』、か…… まさか、自分が殺した相手に礼を言われるとは、思わなかったな……」

やれやれ、と溜め息を吐いて、少年は首元を擦こすった。

ああ、ちくつとした……

傷のないはずの首元は、いつまでも痛かった。

第二十一話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

最初のナタスvs老人の部分、二人でダンスを踊っているように描きたかったのですが…… そう見えましたがね？

さて、続きはまた明日に投稿したいと思います（量が量なので）。次回も、よろしく願います。

感想、評価もいただけると嬉しいです。最近、90日以上経過による信頼度の低下で、評価がガクンと下がってしまったもので……

ちよっと凹んでいる僕に、愛の手を……

図々しいですね、ごめんなさい。

第二十二話（前書き）

宣言通り、続きを投稿致します。今回も二本です。
もしよろしければ、感想・評価を下さい。お願い致します。

第二十二話

“紅玉「くまぎま」の台座”、その麓「ふもと」近くで、教団の僧兵たちが密かに動いていた。

「よし。予定通り、二名はこの封鎖を頼む。残りの者は教会と、その付近をくまなく調べよ」

ゼピュロスが号令をかける。

部下たちは一斉に礼の姿勢を取り、順次、自分の役割に走っていた。

その中で、

「ゼピュロス様は、いかがなさるのです？」

秘書が、尋ねてきた。

ゼピュロスの部下の中でも、一番の忠臣。おそらくは、この身を案じているのだろう。

正直に言えば、護衛についてくるに違いない。

「うむ、少し気になることがあってな。何、大したことではない。

気が済んだら、わしもすぐに合流する。それまで、部隊の指揮を頼むぞ」

その言葉に、秘書はわずか不満そうな顔を見せるも、

「わかりました。先に行つて、お待ちしております」

そう言つて、他の者達と同様、自分の役割に走つていった。

ふむ…… 勘付かれてしまったかの

苦笑い。

だが、結局は命令を聞いてくれた。

そのような者だからこそ、守らねばなるまい。

身を案じているのは、こちらと同じなのだから。

ゼピュロスは林の方を眺めた。

何なのじゃ、この違和感は……

巨大な火柱が見えて以降、林は静寂そのものである。

もし何らかの争いが起こっているのなら、もう少し予兆があってもいいはず。

だが、それがない。

それにこの、視界に陽炎かげろうがかかったような感覚は……？

それは、余程意識を集中しなければ見逃してしまいそうなくらいの、まどろみ。

現に、部下たちの誰もが、このことに気付いていなかった。

向こう側の気配が感じ取れぬ…… 結界、か？

夜霧よぎりが、もやもやと蠢く。

まるで、異世界にでも通じているかのようだ。

この先、何が起こるかわからない。何があるかわからない。そんな場所に、大事な部下を連れて行くわけにはいかない。

故に、

行くか……

ゼピュロスは、一人、闘いの場へと踏み込んだ。

『ありがとう』

そう呟いて、赤い光の中で老人は息を引き取った。

それを見送る、ナタス。

死者に礼を言われる、そんな奇異な事態に、やれやれ、と溜め息を吐いた。

茫ぼうと消えゆく、赤い光。

コトン、と何かが地面に落ちる。

「これは……魔法石？」

地面には、透明なビー玉のようになった魔法石。

魔法石は、魔力を籠めると赤く発光するが、それが尽きると光を失い、透き通るといふ性質を持っていた。

「何故、こんなものが？」

思考を巡らせる。

と、その答えには、簡単に思い当たった。

「そうか、魔法生物を動かしていたのは、魔法石コハクだったんだな……」
ナタスは一人呟く。

「脳に直接、魔法石を埋め込むことで、外部から操作されることもなく動いていた、というわけか」

考えたものだ。

これならば、ただの操り人形には留まるまい。

脳に作用すれば、生前のような動きもするかもしれない。

そう考えれば、あの老人が、かようなまでに精密な動きを見せたことも納得できる。

「オオカミたちが光っていたのも、そのためか……！？ いや、待て……」

ふと、思い出す。

“赤い光” “魔法石”。

確か。

「……」

ナタスは向こう、アリウムたちが闘っているだろう方角を見た。

「急いだ方が良さそうだな……」

苦戦、しているのだろう。

そうでなくては、これを聞くことはないのだから。

向こうから、“あの歌”が、流れてくる。

第二十二話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

第二章最大の盛り上がり、その一歩手前って感じなのですが……

だいぶ伏線を回収し始めていますが…… やっぱり下手ですね、

僕は。伏線を敷くのも、回収するのも……

未熟なのは常々痛感してますが、ここまで才能がないのかと思う

と……

やれやれ、ですね……

第二十三話（前書き）

長いです。ごめんなさい。

第二十三話

I left my memory somewhere .

(この歌を聴いたのは、いつのことだったか)

I remember Mummy used to sing
for me under a fragrant olive .

(まだ小さな頃に、母が歌ってくれたことを覚えている)

朗々^{朗々}と紡がれる、小さな声。

I left my dream somewhere .

(それを夢見たのは、いつのことだったろう)

I only remember that scene was
so very mellow and gentle .

(優しく暖かい貴女の温もりを、とてもよく覚えている)

一つは優しく、一つは柔らかく。

e .
I'm so sad because you're gone

(あの草原も虫の音も絶えて淋しくなつて)

Mother, the flower blooms
this year too .

(母よ 母よ それでも花は咲いています)

The sweet smell spreads .

(甘い香りが 咲いています)

しかしどちらにも、寂しげに。

Please cuddle me close, like
that days.

(今も見上げればあの日の空は変わらずに)

Mother, my mother, you can
hear me?

(母よ 母よ 貴女にもわかるでしょうか?)

The voices are carried to you?

(この香りが 届くでしょうか?)

Now, I'll sing. I believe you
catch me sometime.

(歌おう。いつの日か、貴女の下へ届くように)

紡がれる、想い出の歌^{じゅもん}

「さあ、セレス！」

「おっけー、ディアナ！」

二匹の猫が、共に叫んだ。

視界が揺らぐ。

これは……? ?

シルファはやはり表情は変えず、しかし肩の線を硬くした。
一体、どうしたというのか。

あるうことか夜の森に蝶^{ちょう}が飛び、小鳥^{こどり}が囀^{なみ}り、花の香りが届き、
暖かい風がそよいでいた。

あまりに唐突な変化に、シルファは戸惑いを隠せない。

魔法！？ でも、一体、どんな……

だが二匹の猫は、シルファに狼狽する暇さえ与えてはくれなかった。

「反撃開始！！」

再び声を上げる猫たち。なんてことはない、か細い猫の聲が、今は猛獣のそれにすら聞こえてくる。

本能が、「直視してはならない」と、しきりに発していた。

「く……」

シルファは半ば反射的に一步距離を取ると、

「一匹増えたくらいで、調子に乗るんじゃないやありません！」

誇りか虚勢か、声を荒げて両腕を広げる。

堰を切ったように雪崩れる、泥。

円を描いて回り込む。逃げる場所は与えない。

今度は滝を降らせるのではなく、両脇からの津波のように。

押し寄せる波頭は困い込みながら、それでいて迷うことなく真っ

直ぐに、二匹の猫を薙ぎ払った。

激突が響く間もわずか。

ぶつかり合った二つの波は、ちょうど二倍の高さまで吹き上がると、頭を垂れるように崩れていく。

その中に、猫の姿はない。

「はあ、はあ……」

思いもかけず、息は乱れていた。

それを振り払うように、ふん、と鼻を鳴らして呼吸を整えると、

シルファは崩れゆく波を眺めながら呟いた。

「邪魔をしなれば、見逃してあげても良かったのに……」

あの波に両側から挟まれては、一溜まりもあるまい。

ましてや猫。あの小さな身体は何の抵抗もなく、今頃は

「クス……」

その姿を想像すると、思わず笑みが深まった。

そして、シルファは歩を進める。
無論、その死体を見るために。

そのとき

「一矢^{いっし}」

不意に小さな声が木霊した。

「キヤアアア！」

突如、何者かによって射抜かれる。

右胸から赤い飛沫が上がった。

グ…… 新手？ どこ、から……

シルファは周囲を窺いつつ、矢を抜こうとして、止めた。
直撃した部位が悪い。無理に引き抜けば、多量の出血を伴うだろう。

故に、穂先を身体に残したまま、柄^えをぼきりと折り取る。

苦悶に表情を歪めながらも、声を張りあげる。

「何者です！？ 出てきなさい！！」

「出てこいも何も」

「先ほどから、ここにいますよ？」

暗く低い声に返されるは、明るく楽しげな声。

「つな！？」

シルファは声のした方を凝視する。

それは正面、すぐ近く。

その場所にいること、矢を扱えること、無傷であること。そんな、ありとあらゆる可能性が否定されるはずの敵が、そこに悠と立っていた。

「一体、どうしたんスか？ いきなり大声を上げるなんて」

「レディのすることではありませんわね。はしたない……」

白と黒、二匹の猫。泥に吞まれ、 たはずの、無事にいるはずのない者たち。

だが確かに、彼らはそこにいた。

シルファの問いが震える。

「何故……？ 貴方たちは、間違いなく……」

「泥に吞まれたはず、と仰りたいのかしら？」

黒猫は、何気なく問い返した。

「そうよ…… 確かに、貴方たちは」

「でも、オイラたちはこうしている。それも、間違いのないことッスよ」

白猫が、あっさり言葉を返す。

シルファの動揺は、困惑へと変わっていく。

わけが、わからない。

確かに泥に吞まれ、避けることもなく、彼らは、そのまま。

「いいんスカ、じっとしてて？」

「！？」

と、そのシルファの困惑を断ち切ったのは、白猫だった。

続くように、黒猫もその声を発する。

「貴女、癖なのかしら？ 攻撃の最中は距離を取ろうとするのに、

優位に立つと途端に無防備になって近づいてきますわよ。直したほ

うが良いのじゃなくて？」

「う、五月蠅い！」

シルファは腕を振り上げる。

今度は外さない。

怒らせた報いだ。

このやかましい猫どもを、死をもって黙らせてやる。

「死になさ」

「やれやれ…… だから、じっとしてはいけないと言っています

のに。セレス」

「二以、三翼、四切」

白猫の言葉が切れるや否や、ドッ、とシルファの身体を音が重なり駆け抜けた。

「っ！？」

シルファは焼けるような傷みに顔を歪めつつ、それでも頭は冷静に己の状態を確認する。

傷みの元 受けた傷は三つ。

一つは左手の甲を貫通し、一つは右足に刺さり、もう一つは右の頬を掠めた。

いずれも、矢は見えた。その直前で回避もしたはずなのに、シルファの身体には確かに傷が、痛みが残っている。

「何故…… 確かに、避けたのに…… 大体、どこから矢を？」
避けても喰らう、当たったのに外れている、という矛盾。

シルファは考える。

これはいかなる魔法か。

矛盾とは、この世の事象における“偽”である。それを“真”に変えることは、魔法であろうと不可能だ。

ならば、

もともとが真だったと考えるべき……？

“もともとが真” すなわち、初めから矢が刺さっていたという事。

矢が飛んでくる、という事象はその後。『矢が飛んできたから刺さった』のではなく、『矢が刺さっているから飛んできた』、という事か。

それとも、矢が刺さったという事実を別の世界から引き寄せてくる……？

確か、“多世界解釈”という理論があったな、とシルファは思い出す。

仮に一匹の猫を、仕掛けを施したガス発生器と共に箱に入れたとする。その仕掛けが作動し、ガスが発生すれば猫は死ぬが、作動しなければ死なない。

このとき、仕掛けが動作する確率が五十パーセントだったとした

場合、その猫がどうなっているかは箱を開けるまでわからない。

つまり、箱を開けるまでの間、猫は“生きている”のと“死んでいる”のが重なり合っている、と考えることができる。そして、それは箱を開けたときに、どちらか一方に定まるのだ。

しかし、猫の生死が箱の開放に依存するなど、奇妙な話である。

これに対して生まれたのが、“多世界解釈”という理論である。

“多世界解釈”では、猫が“死んでいる世界”と“生きている世界”に分かれる、と考える。

すなわち、猫が“生きている”と観測した人間は、“猫が生きている世界”に進んだと考えられ、猫が“死んだ”と観測した人間は、“猫が死んだ世界”に進んだ、と考えられるのだ。

これが“多世界解釈” “平行世界”の存在である。

それを基にすれば、確かに避けたはずでも矢が当たっている、という可能性は考えられなくはない。

“矢が当たった世界”を引き寄せてくればいいのだから、
が、それでも奇妙である。

仮に平行世界をつなぎ合わせるのだとしても、“矢が飛んでくる”という事象は存在しなければならない。猫をガス発生器とともに箱に入れねば、生きているだの死んでいるだのと議論することはできないからだ。

しかし、彼らは“猫”。

弓矢を扱える猫など、聞いたことがない。

どこかに、射手がいる……？

シルファは瞳だけで周囲を探る。

樹が生い茂っているのだ。どこかに弓を持った者がいるとしても、おかしくはない。ない、のだが。

気配がしない。私たちの他にいるのは、アリウムさんだけ……
っ！？

と、アリアムもまた困惑に瞳を見開いていることに、シルファは気付いた。

「セレスも、ディアナも、何もしていないのに……」
彼女は問い掛けるように、小さな声で呟いている。

「シルファさんが、いきなり、苦しみだした……？」

『何もしていない』……？ まさか

その言葉で、シルファは悟る。

闇に舞う蝶、小鳥の囀り、花の香り、暖かい風。そして、アリアムの言葉。それらをつなぎ合わせて得られるもの。

魔法の正体、それは

「催眠、暗示」

「あ、気付いたツスカ？ そう。これは言ってしまうえば、強力な催眠術ツス」

白猫が、あつけらかなとした声で言った。

「けれど、実際に傷を負うなんて……」

その当然とも言える疑問には、黒猫が応える。

「貴女も、夢は見たことがあるでしょう？ 夢の中で、貴女は何かに追いかけられている。逃げなくてはならない。だから走る。走って、走って、走って…… けれど逃げ切れず、貴女は ということころで目が覚める。」

すると、どうでしょう？ 実際に走ったわけでもないのに、心臓は猛烈に鼓動し、汗が衣服を濡らし、呼吸は乱れに乱れている。それは当然。“夢”とは、脳だけが見ている世界。脳にとっては現実と何ら変わりのないもの」

白猫も継ぐ。

「けれど、現実を現実として感知するのが脳の役目ツス。オイラたちは目や耳で得た情報を脳で処理し、知覚している。」

なら、その脳が、攻撃を“受けた”と思っただら？ “痛い”と感じたら？ 攻撃を当てたと思っただのに、実は見えているものがズレていたら？」

相手の攻撃はこちらに当たり、確かなダメージとなり、こちらの攻撃は当たらない。

なるほど、道理である。

「隠れ身と同じ、思い込みに作用させる魔法、というわけですか……
それなら、当たったと思い込まなければ良いだけじゃありませんか」

シルファが余裕の笑みを浮かべた。

確かに、これでは回避困難にして、攻撃も無力化されるだろう。
だが、原理さえわかればなんとすることは無い。

自分の“思い込み”を操作すればいい。決して簡単なことではないが、それでも知らないよりは、ずっと対応ができるというものだ。
「わざわざ説明して下さるなんて、優しいんですね。けれど、知ってます？ そういうのを、“語るに落ちる”というのですよ」

シルファは、嘲るように挑発する。

しかし、猫たちも余裕のまま返す。

「うん、知ってるツスよ。でも大丈夫。これは、脳に直接訴えかける魔法ツスから。自分で言ってたじゃないツスか。『隠れ身と同じ』だって」

「そう、これは“現実に作用する夢”…… 隠れ身と同じく、“無意識”に働きかけるもの。故に、意識を集中させることで逃れることはできなくてよ」

「クー！」

再び、矢が飛んでくる。

夢とは見たいと思って見れるものではないし、まして見たい夢を自由に見ることなどできはしない。そこに、意識だの何だのが入り込む余地はないのだ。

「五風、六是、七如」

連続して襲い来る、矢の数、三。

意味はわからないが、どうやら数えた分だけの矢が飛んでくるように催眠をかけられているようだ。数が累積していくのは、今まで

も矢を喰らっていた、ということを示すため。
つまりは、攻撃を受ければ受けるほど、その暗示が強まっていく
のではないか。

「う、かは……」

また、身体が射抜かれる。

私が、遅れを取る？ 猫如き小動物に……

臓腑から、液体が流れ出す。

おのれ、おのれ…… お前ら、如きが……

頭の中が、熱くなっていく。

私の…… 私の邪魔をするんじゃない!!

ピアスの光が体液を浴びて、その赤を強めた。

都合六本の矢が命中した。

右胸に当たったものも含め、ダメージは十分のはずである。

だが、優勢な状況とは裏腹に、暗示が“弱まっていく”ことに、
猫たちは心中で驚愕していた。

声ならぬ声で、やり取りする。

（セレス、一体どういうことですか？ さっさと決められないので

すか？)

(わからないけど、効き目が薄いんすよ。矢の数も増やせないし、ほとんど直撃してくれない。当たるとは場所が、イメージとズレるッス)

この魔法は、実のところディアナが防御的な催眠を、セレスが攻撃に関する暗示を、という完全な分業によるものだった。

加えて、攻撃に使える矢は、十本しかない。使い切れれば、また呪文の詠唱から始めなくてはならない。

それくらい、人の心に強制的に働きかける魔法は難しいのである。残りは三本。再度の詠唱の時間は得られないだろう。

優勢のように見えて、その実は背水の陣。

もはや猶予がない。

そのためディアナは、攻撃はセレスに一任するしかないのだが、そのセレスがどうにもものんびりやっているように見えて、もどかしく思っていたのである。

が、セレスもまた、同様にもどかしさを感じていた。

(ディアナこそ、ちゃんとアイツの攻撃を逸らしてくれッス。さっきから、結局近くに着弾してるじゃないッスか……)

(ちゃんとやっていますわよ！ けど、そうやって、しまっんです、もの……)

しょぼくれるように声を細めていく、ディアナ。

二人して、イメージとズレるという事実。

理由はわからない。

だが、一つ言えることがあった。

それは、“シルファには暗示が効きにくい”ということ。一体、どういうことなのか。

その理由を、猫たちは薄々ながら思い、しかし、否定“していたかった”。

鬪いの余波も届く、わずか向こう。

二つの影が、その瞳を輝かせていた。

「ふん、頑張ってるわねえ、アレ」

泥の渦巻く森の中、一人の女が呟く。

「思ったよりも、いいデキだったのネ」

女は鬪いを観察するように眺める。

蒼の法衣に包まれた瘦身^{そうしん}。端整^{たんせい}な顔立ちには、首までの金髪^{ブロンド}が月

明かりを反射して、その垣間に見える瞳にはアウインの光が宿っている。

「これなら、もうちょっと大事にすればよかったカシラ？」

「もはや今さらだ。何をか言おうと、状況は変わりませぬ」

その脇に、一人の老人。

彼女とは違う方向を眺めている。

しわがれた肌とは対照的に、その朱の瞳と同じく、声は凜として真っ直ぐ通っていた。

赤い法衣に身を包んだ彼は、アッシュブロンドの長い髪を無造作に垂らしているが、不衛生さは感じられない。髭^{ひげ}も、綺麗に剃られている。

「まもなく、アレの時間も切れよう。貴様がどうするつもりなのかは知らんが、」

一瞬、蒼の女と視線を同じくして、紅の老人は言う。

「処理に自らの手を下す気なら、余計な真似はするなよ。教団の者たちも近づいている。我らにも時間がない」

「わかっているワ、時間はかけない。でも、ちょっとくらいはいいでしょう？ だってあの娘、可愛いんですもの…… 他人の為に頑張つて、傷付いて…… あんな健気な姿を見せられたら……」

そうして、女は嗤わらった。

「ああ、苛いじめたくなっちゃウ……」
邪悪に、うっとり。

老人は小さく溜め息を吐いて、言った。

「貴様は遊びが過ぎる。戯れに姿を見せたりするから、このようなことに……」

「でも、そのおかげで、こんな楽しいものが見れるのじゃナイ？」

「それは結果論だ」

女の言動を、あっさり切り捨てる老人。

だが、口元には笑みが浮かんでいるように見える。

「まあ良い。我も、久方ぶりに“あの方”と話がしたいしな。くれぐれも、時間はかけるなよ…… 我が孫娘 “紺碧こんへきの賢者” ルフカロオ」

「わかりました、お爺様。いえ “紅くれなの王” イニア」

二人の魔導師は、それだけを交わして、また観察を始める。

己の興味の対象、そのみを。

そうして、“シルファ＝ムルルーム”だった者は、“モノ”になる。

私が、遅れを取る？ 猫如き小動物に……

否。もともと“ソレ”は、モノだった。

ただ、“ココロ”がそうあるように、“操られて”いただけ。
“シルファ＝ムルルーム”の知らぬ内に、知る間もなく。

だから彼女は疑わない。自分は自分だと、盲目してしまっ
しかし、それは。

おのれ、おのれ…… お前ら、如きが……

意識が、薄くなっっていく。

どうでもいい。今の自分に必要なのは、そんなものじゃない。
体の奥底から湧き上がる狂気の念。ココロを貪り始める。

どうでもいい。今の自分に必要なのは、あの子たちの、笑顔。
彼らの日々を取り返せるのならば、他には何もいらぬ。

それでいい。あの幸福が戻ってくるのなら、それだけでいい。
意識が薄れても構わない。

だから、

私の…… 私の邪魔をするんじゃない!!

そうして、“シルファ”ムルルーム”だった者は、“モノ”にな
る。

「ヴアアアア!!!」

今までにない叫び声を上げる、シルファ。

応じるように、ピアスが激しく赤く光を放ち、泥が凄まじいまで
に吹き荒れる。

「うわ、危ねーッス！」

「ち、ちよつと、お待ちなさいな！」

光を受けた、血流のような嵐の濁流は鎮まらない。どころか、そ
の勢いを増して、ついには周囲の木々を削り取り、引き倒すまでに
至っている。

さすがのディアナも、捌ききれない。徐々に、しかし着々と暴風圏が近づいてくる。

堪らず、ディアナはセレスに攻撃を指示する。

「セ、セレス！」

「八流、九星、十也！」

セレスが最後の三本を一斉に放った。

イメージを今までよりも鮮明に。

これまではアリアムの手前、抑えていたが、今度は“殺す”その像を描く。

三本が三本、全てシルファの左胸に刺さる

「ヴアアアアアア！！！」

が、その矢は、叫びの中に掻き消された。

いや、叫びというよりは、もはや獣の咆哮に近い。

まさか、理性をなくすことで、この魔法を打ち破ったというのか。それは在り得ない。理性のない動物とて、夢は見るのだ。夢を見る生物ならば、この魔法から逃れる術はない。

果たして本当に、この魔法を“意識すること”で、シルファは打ち破ったのだ。

「く、ディアナ！」

セレスが叫ぶ。

もう一度、と。

だが、

「できませんわ！ やり直すには、一度この魔法を解かなければ。

けれど、解いてしまえば、この嵐を避けることはできませんわよ

「で、でも……！」

「落ち着きなさい、男でしょ！ それに、」

ちらり、後ろを振り返るディアナ。その視線、彼女の背後には

「アリアムさんもいらっしやるのよ！？ アリアムさんの援護をするために私たちはここにいる……！」

そのくらいのごときは、セレスとてわかっている。

しかし、他に手が思い浮かばない。
嵐が迫る。

この轟風と濁流を潜り抜ける、その手段など一体どこにあるとい
うのか。

泥はもう、目の前に。
焦りばかりが前に出る。

「だけど、他に手段なんて……!? うわあああ!!」
「セレス!? つ、きゃあああ!!」

赤い嵐がディアナの防御を掻い潜り、セレスたちを大地ごと薙ぎ
払った。

全身を泥が、あるいは打ち付け、あるいは削り、引き裂いて、蹂
躪していく。

「く、は……」

地に叩きつけられる身体。

それでも、迫る嵐。

これを止めとしたか。

シルファは笑う。

「ふふ、あはは……あははは!! いかに暗示で攻撃点をずらさ
れようと、全てを薙ぎ払ってしまえば同じこと……死になさい、
邪魔者ども!!」

雪崩れる泥。

乱れる弾丸。

うねる津波。

降り注ぐ雨。

襲い来る滝。

風を巻く錐。

それまで見せた、ありとあらゆる攻撃法を持って、止めを刺しに
くる。

避ける術はない。

為す術がない。
できることが、ない。
絶望に覆われ、瞳を閉じる。

その直前、

猫は、
自分の前に、
庇うように立つ、
少女の姿を、
見た。

第二十三話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

呪文で使用した英文は、相変わらず間違いがあると思いますが、これも愛嬌、ということでご容赦ください。

呪文は最後まで出すかどうか迷ったんですが…… 次章以降の伏線、ということと結局やってしまいました。この際、章ごとに呪文を出そうかな……？

ちなみに矢の数え方、数字の後ろを繋げ合わせると、『矢以翼切風。是如流星也』と、漢文っぽくなります。これも愛嬌で……

第二十四話（前書き）

前話に対し、こちらはサクッと。

ハラハラとしていただければ良いのですが……

第二十四話

泥が、セレスたちを薙ぎ払った。地面に叩きつけられ、痛み悶えている。

あれでは、次の攻撃は躲かわせない。

シルファさん、セレスたちの魔法でも、止められないんだ……

アリアムは思う。

このままじゃ、ダメだ。

シルファを止められない、どころか、あの二人までも失ってしまった。

このままじゃ、ダメだ。

二人が危ない。

何とか 何とかしなくては。

カチリ。

奥歯が鳴った。

痛みが消える。

気付いたときには、足は動いていた。

震える膝が、自然と前に出る。

彼らを庇うように。

嵐を目前にして、とある記憶が脳裏に浮かぶ。

それは、先日の夜のこと。シルファが、水の魔法を使っていたこと。

そして、遠い昔 祖母とやった実験のこと。

直感だけを頼りに杖を手放し、アリウムは両手を前にかざした。

シルファさんは、水の使い手。この魔法も、泥ではなく、“水を操っている。だからあのとき、ナタスさんの炎を受けて乾いた泥は、操れなかった。”

現在の状況判断、自他の戦力分析、己の持てる能力の評価、その限界値の評定、それらを加味した応用の考察
思考が流れる。

わたしには“空気中の水蒸気の分解”、“体内物質の生成”、“摩擦熱による発火”、“引火”の四つの行程を順にやる炎の魔法なんて使えない。

でも、“水の分解”　それだけなら。

祖母との記憶を手繰る。

まだ小さな頃のことだったが、その映像は鮮明に覚えている。

水の分子式は“ H_2O ”。つまり、酸素と水素に分けるということ。

水の分解はやったことがある。たしか、電気を流していたっけ。あの棒は……鉛筆の芯だった。鉛筆は炭と同じようなものと聞いたから……炭素か。よかった。それなら、体の中にたくさんある。今朝、パンを食べたし……

自分の想像に、ほんの少しだけ笑ってしまった。

おかげで、肩の力は抜けた。
掌に、意識を集中する。

両手に炭素を集めて、泥が当たった瞬間に…… うっん、それじゃダメ。間に合わない。
そうだ、空気中にも水はあるんだ。なら、それを通じて、直接作用させれば……

掌の神経を流れる、微弱な電流。その電位を、一瞬だけ強める。
右手を正極に、左手を負極に。
右手から電気を発し、泥を通して、左手でそれを受ける。
活目。無心。瞑想。

できるかな……？ うっん、やらなくちゃいけない。やらなくちゃ、二人が……！

我は世界、世界は我。
我の見しものが我の世界。
我の思いしものが我の心。
我が心とともに世界は在り、世界は我が心で成立する。
我が心に応えよ、我が世界。

「分かって!!」

掌が輝き出す。
純白の光。
どこまでも透き通り、どこまでも清らかな、聖なる光。
そう、思えた。

純白の輝きが、赤い光を呑み込んでいく。
徐々に、徐々に、嵐が鎮まる。

「私の、魔法、が……」

次第に力を失っていく感覚を噛みしめながら、シルファはそれでも、力を込める。

ほんのわずかだけ、勢いが甦る。
しかし

「もう、終わりです。シルファさん……」

その全てを、アリアムの光は　アリアムは“受け入れた”。

嵐が晴れる。

そしてアリアムは、彼女を　友を止めるべく、力を振り絞って
地を蹴った。

「私は、倒れるわけにはいかない！　何を“犠牲”にしても、必ず
死を払い、あの子たちを甦らせる……それまでは、その日まで
！」

シルファが、叫ぶ。

力を使い果たし、支点の定まらない身体で、それでも、なお。

「だから、どうしてそれが　」

アリアムも叫ぶ。

ずっと思っていたこと。

『何を犠牲にしても』　得られるものは同じ。それを、自分は

この十年で思い知った。

祈って、願って、それでも神は救ってはくれなかった。

その気持ちは、痛いくらいによくわかる。

けれど、

「 どうしてそれが、矛盾しているということに気付かないの？」

死を払うために、他の何かに“死”を与える

死を無くそうとして、その結果に死を生み出している

自分の痛みを言い訳に、他人に傷を強いることを正当化している

大きな、とても大きな、矛盾。

それは、それだけは、絶対に間違っている。

「 もう、やめましょう…… シルファさん 」

嵐の晴れた闇に、小さな音が響いた。

第二十四話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ようやくバトルシーンも終わり、あとは大団円……となるんでしょうか？ 変なもの出してしまったし……

ところで自分で自分にツッコむことになりましたが、アリウム、“水の分解”以外にも、“体内物質の生成（炭素）”をやってますよね…… 全然不器用じゃないし……

にしても、盛り上げ方“も”下手ですね。もう全然ダメダメ…… もっと上手になりたいです。

愚痴が多くてごめんなさい。

図々しいのは百も承知ですが、どうぞ皆様の批評をお聞かせ下さい。

第二十五話（前書き）

ようやくの更新です。長らくお待たせいたしました、大変申し訳ありませんでした。

第二十五話

喩えるならば、それは色鮮やかな活動写真だった。

秋

あの子たちが、教会へとやってきた。皆、亡き家族に思いを馳せて、汚れた顔で泣きじゃくる。泥と涙と鼻水で、ぐちゃぐちゃだった。その涙を拭いたかった。皆の笑顔が見たかった。

冬

外は一面に純白の雪が積もっていた。凍えるような寒さを忘れ、皆で大きな雪だるまを作った。石の瞳に枝の口。小さな箒が腕代わり。皆一緒に、笑ってた。私もつられて、笑ってた。

春

私たちは、ピクニックに繰り出した。ランチバスケットにはサンドイッチと熱いハーブティー。あの子たちが、花の冠を贈ってくれた。それがとても嬉しかった。皆の心が嬉しかった。

夏

子供たちが海に行きたいとせがんだ。けれども私は、この教会から離れることができなかった。だから庭に、プールを作って楽しんだ。水の飛沫が眩しかった。皆の笑顔が眩しかった。

そして、季節が巡った。

あの夜、私たちが襲った突然の炎。

夕焼け空に似た炎の中へと、あの子たちは消えていった。
どんなに叫んでも応えは返ってこない。

だから、取り戻したかった。そして、抱き締めたかった。

あの日々を。

あの時間を。

あの幸福を。

あの笑顔を。

それだけが、私の望みだった。

「あー」

遠い記憶。

音を立てて崩れていく。

動かない　身体はもはや自分のものではないかのように、指一本として動かせない。

倒れる　倒れたくない。倒れれば、あの笑顔は、もう二度と戻ってこない。そんな気がする。

それでもやつぱり、身体は動いてくれなかった。

ああ……

魔力を使いすぎた。

魔力とは生命力　いわば血液と同じ。それを使い切ることは、人が生きる力を失くすことに等しい。過度の消耗には十分な食事と休養が必要となる。

身体は「休め」と訴える。いや、問答無用に“休む”ことを強行してくる。もはや地面に立つ、などという余分なことに力は割けないのだ。

故に

私は、

景色が流れる。

眼前の世界こそが動いているのではないか、と錯覚する。

日の沈むように地面は視界の外に消え、気が付けば頭上にあるはずの夜空が目の前に広がっていた。

負けた……？

そうしてようやく、シルファは己が地に伏したことを理解した。

「く……」

力が入らない。自由が利かない。景色も、身体も、感覚も、全てが裏返ったようだ。

それでも何とか立ち上がろうと、シルファは首を持ち上げる。

濃紺だった修道服が、血と泥で黒く変わっていた。

これではまるで、あとき見た像と同じではないか。“救い”と“幸福”を与えてくれると信じ、自分の全てを捧げる覚悟で祈り、しかしその果てに“不幸”と“絶望”しか齎もたらさなかった、醜い“神あくま”と。

結局は自分も、アレと何ら変わりはなかったのか。

「こんな、ところで……」

いや、そんなはずはない。そうであるはずがない。

あの子たちの笑顔を取り戻す　それは、欺瞞でもなければ、偽善でもない。それだけを望みとし、それだけを願って進んできたのだから。

だから、立ち上がらなければならないのに。だというのに、身体は動いてくれなかった。

「こんなところで、私は……」

吐き出すように声を上げる。

立ち止まるわけにはいかないのだ。立ち止まれば、それで何もかもが終わってしまう。

あの日々が。

あの時間が。

あの幸福が。

あの笑顔が。

全てが、水泡に帰ってしまう。

だから、立ち上がらなければ。立ち上がって、前へ

「もう、止めてください、シルファさん……」

そのとき、少し向こうで声がした。

見れば、“少女が”立ち上がっていた。

「どんなに願っても、どんなに祈っても、」

彼女は少しずつ、こちらへ近づいてくる。足を引き摺りながらも止まることなく、歩み続ける。

治癒魔法は使えなくなったのか、先の泥を破った魔法の影響で掌がボロボロになっているのに、それを治そうとはせず、体中も汚れきっていて、あちらこちらに傷がある。

その傷の痛み表情を歪めながらも、少女は一步一步を踏み締めていた。

「死んだ人は けほつ、甦ったりは、しないんですよ？ 悲しいけれど、それがこの世界の理。足掻いても、抗っても、どうすることもできない、悲しい運命……」

咳き込みながら紡ぐ声、臃な足取り　そこには確かに、強さを感じさせられた。

まるで自分にはできないことを見せ付けられているようで、胸の奥が熱くなる。

シルファは思わず、全身に力を籠めるように拳を堅く握り締めた。「そんなこと、とっくの昔にわかっている……祈りや願いだけでは救われないことなど、わかっている。それでも、私は、あの子たち

と共に生きる　あの子たちが幸せになつてくれる、その手助けとなれるならば、それだけで良かった。それだけが望みだった！」

動かぬ体で、それでも声を張り上げる。ただ空を見上げながら、何をすることもなく、仰向けのまま、遠くを見つめて。

動かぬからこそ、”己の想い”を、せめて声に紡ぐ。

「なのに、それを奪ったのは神の方ではないか！！　神は“平穏”と“安息”を与える存在。なのに、あの子たちの命は奪われた。“死”という絶対の苦しみを与えられた！」

あの子たちはずっと辛い目にあってきた……普通の子供が当たり前に得ている、当たり前前の幸福さえも、持つことが許されなかったのに　それなのに、どうしてあの子たちだけが、こつも苦しめられなければならないのか！　何故ささやかな平穏と安息が齎されないのか！

それが、神の定めし“運命”だというのならば、私はそれを変えてみせる！！　蘇生の法を　理を破る術を　神を超える技を、この手に……！！

「……」

それを、少女は黙って聞いていた。

その想いが何なのか、知っていたから。

知っていてなお、その歩みは止まらない。

目が霞む。

知っているからこそ、それが理解できる。

頬が濡れる。

その言葉が、いかに矛盾しているか、が、

胸が痛い。

「平穏と安息を、取り戻すために……！！」

聖女の叫び　それは確かに、“祈り”でも”願い”でもなく、己に課した”誓い”。決して破られることはなく、決して揺らぐこ

とのない、心からのもの。そう、信じてきたもの。

しかし、

「その“平穩”と“安息”は、誰のための、ですか？」

「っ!？」

傷だらけの少女はそれに　揺るがぬはずのその誓いに、たった

一つ、言の葉を投げた。

葉の舞い落ちた水面（うづま）が、わずかに揺らぐ。

「あなたの言う、“あの子たち”のですか？　それとも、“自分の

”ですか？」

「……………」

そして広がる、動揺の波紋。

聖女は答えない。答えられない。

「もし、自分のだというのなら、それはただの“わがまま”です。

自分の幸福を、不条理に奪われてしまったと、八つ当たりをしているだけ。他に同じことを強いているだけ」

「違う……………」

その言葉はさらに波を広げ、やがて聖女の全体を揺さ振り始める。

「シルファさんの気持ちはわかります。何かを憎みたくなる思いもわかります。でも、でも……………」

一息、詰まらせるように飲み込んで、今度は少女が声を荒げた。

瞳は憂いに滲んでいた。

「でも　少なくともあなたが“犠牲”にした命は、本来死にゆくべきものじゃなかった！　あなたのただの八つ当たりで、あなたの言う“絶対の苦しみ”を強いられたんですよ!？」

「違う！　私は、私は　あの子たちのために……………」

「だったらどうして　こんな、無意味なことを……………」

「無、意味……………」

「そう、ですよ……………だって　たとえ死にゆく運命だったとしても、その子たちはあなたから貰っていたはずです。“平穩”も、“安息”も、“幸福”も……………笑っていられたはず……………」

「あ……」
「シルファさんは、『何を犠牲にしても、あの子たちを生き返らせる』と言いました。それが望みだと……
でも、それは“あなたの”望み。子どもたちがそんなことを本当に望んでいると思いますか？ “何かを犠牲にして”生き返らせてもらって、それで喜ぶような子たちなんですか？ それであなたは、幸福なんですか？
それは違うでしょう、シルファさん。子供たちの本当の望みは、あなたの本当の願いは、違うでしょう……」

「……」
シルファは思う。
心を揺らす波が、身体までも揺さ振っているのは、何故だろう。
胸の痛みが、増しているような気がするの、どうしてだろう。
ぼたりと一つ、雫が落ちた。
とても温かった。
これは、何だっただろう。

「見えませんか？ 子供たちの顔が」
皆の、顔。
忘れるはずがない。自分に喜びを覚えてくれた、あの子たちの顔。
必死に脳裏に彼らを描く。けれど浮かんできたその顔は、自分の求めてきた笑顔ではなく、辛そうな、泣いている顔だった。

見える……

「聞こえませんか？ 子供たちの声が」
皆の、声。
今でもよく覚えている。頬を綻ばせてはしゃぐ、あの子たちの声。
耳の奥で繰り返す。けれど聞こえてきたその声は、自分の求めて

いた楽しかった日々のもではなく、悲痛な叫び声だった。

聞こえる……

彼らは、涙を湛えながら呟くように叫ぶ。

『お願いだから、もうやめて』

『私たちのために、これ以上罪を重ねないで』

『シルファ姉ちゃんが悪い人になっちゃうなんて、そんなの嫌だ』

『何かを犠牲にしなきゃいけない幸福なんて、そんなのいらない』

『そんなことで生き返せてもらっても、嬉しくなんがない』
そう 皆、泣いていた。泣きながら、訴えていた。

「ああ、ああ……みんな、な 皆……」

それで、やっとわかった。

ずっと拭ってあげたかった涙は、その実、自分のせいで流れていたのだ。

ずっと拭えなかったと思っていた涙は、その実、この手が拭ってやれていたのだ。

でなければ、自分の求めた笑顔が あの幸福そうな顔が、嘘になっってしまう。

幸福であつたが故の笑顔だったからこそ、自分はそれを、もう一度と望んだのではないか。

「ああ、そうか……」

そう悟ったとき、この胸を締め上げていた傷みの意味も理解できた。

「私は、あの子たちの死を口実に、己の不幸を釈明に、してはならない罪を重ねていたんですね。間違っていたのですね……」

それは、悔恨。初めは『守ってあげられなかった』という、

自責からの悔い。次に『何故あの子らが死ななければならぬのか』という、自責を逃れるための恨み。

それらを理解してなお、わざと感^じぬよう心を殺し、見て見ぬ振りをし、自分は正しいと信じて考えることもしなかった。

その驕りこそが、この胸を締め付けていた傷みだったのだ。

『もう、いいから』

『僕たちは大丈夫だから』

『お願いだから、苦しまないで』

『私たちは、本当に幸せだったから』

『だから　お願いだから、泣かないで』

ただ、一つだけ。

彼らが真に望んだものは、この世での転生などではなく、遺^りされた者の、幸福。

ただ、それだけ。

たとえ死にゆく宿命^{さだめ}でも、一つでも多くの幸福を、その短き“生”の中に。

ただ、それだけ。

何の枷も重荷もなく、己の為に生きる、そのわずかな時を、大切にしたい。

ただ、それだけだったのに。

『何を犠牲にしても』　そんなことをしなくたって、あの子たちはいつだって傍に居てくれたというのに。

どうして、それを見ようとはしなかったのだろう

「皆、ごめんなさい……私は、決して赦されないことをしてしまっただ……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

『ううん、いいよ』

『僕たちのためだったんだもんね』

『だから、僕たちはあなたを赦します』

『私たちも、あなたを苦しませてしまった』

『それをあなたは 赦してくれますか？』

「ええ、もちろん、もちろんよ……私は貴方たちを、赦します……」

頬を流れる、光の筋。

とても、温かい。

何故こんな大切なものを、忘れてしまっていたのだろうか。

涙を拭いたくて、手を伸ばした。

その後に見せてくれた笑顔が嬉しくて、

もつと、もつと、と手を伸ばした。

けれど、

それが届かないところへ逝ってしまったと、

勝手に目を瞑ってしまった。

自分の涙を言い訳にしたくせに、

涙の意味が何なのかにも、気付かずに。

でも、

もう、忘れないから。

この温もりを。

ずっと、覚えているから。

そうしてシルファは、涙を あの日に失くした温もりを、取り

戻した。

第二十五話（後書き）

いかがだったでしょうか？

ここしばらく忙しくて、まったく手を付けられない日が続いていたため、なんか納得のいかない感じになってしまったのですが……ともあれ、楽しんでいただけたなら幸いです。

第二章、もう少し続きます。続きはまとめて投稿、という形にしようと思うので、また今しばらくお待ちください。

第二十六話（前書き）

相変わらずの遅筆でごめんなさい。ようやくの二十六話です。

第二十六話

「シルファ、さん……?」

そつと、アリアムは自分の腕の中で蹲る友に呼びかけた。言葉にはせず、ただ、その名に思いを込める。

大丈夫か、と。

「アリアムさん」

シルファも、同じように名を呼ぶことで応えた。

大丈夫だ、と。

それを示すために、ゆつくりと立ち上がってみせる。

「貴女のおかげで、やっと気付きました。あの子たちのことを、あの子たちの望みを。そして、己の愚かさを、己の罪を……」

瞳からは大粒の涙を零していた。隠そうともしないで、どころか、まるでそれが誇らしいことであるかのように、柔らかく微笑みながら。

「ありがとう、アリアムさん……本当に、ありがとう……こんなバカな私に、気付かせてくれて」

「いいえ、わたしは何も。気付いたのはシルファさん自身ですし、気付かせてくれたのは“子供たち”ですよ」

アリアムは柔和に笑みながら、意図せずして謙遜した。

この可愛らしくて優しい少女は、その凄さがわかっていないのか。シルファは苦笑を微笑みに混ぜ、改めて親愛と尊敬の念を抱く。

「シルファさん、犯した罪は消えることはありません。でも、贖^{あがな}うことはできるはずですよ。だから、これから一緒に探しましょう。少しずつ、一つずつ、償^{つぐな}っていきましょう」

「ええ……多くの生命を蔑^{ないがし}ろにした私は、本当ならば死をもって贖^{あがな}うべきなのでしょうが……それもできませんからね。あの子たちに、望まれてしまいましたから。この命が、少しでも長くあるように、と……」

どこか冗談のように、けれども、はつきりと、シルファはその言葉に決意を籠めた。

罪を償っていくこと、そして、生きていくことを。もう二度と、決して、生命を蔑ろにするようなことはしない。

そんな決意と、それに気付かせてくれたことへの感謝と、傷つけてしまったことへの謝罪と、その他、色んな気持ち全てを一言で表す言葉が見つからなくて、シルファはただ微笑むことにした。

アリアムもそれを感じ取って、応えるように笑みを返す。そうと
した、そのとき。

不意に、手を打つ音が聞こえてきた。

シルファが、鮮血と共に膝を折った。

パチ、パチ、パチ。

聞こえた音は、三回。

軽く、小気味よく、快い音が、三回。それだけ。

それだけで、シルファは全身を激しく揺さ振られ、気付いたときには、口内が血で満たされていた。

肉体という肉体は痙攣を起し、血液という血液は逆流し、神経という神経は切断され、血管という血管がぼろぼろに引き裂かれていた。

もはや、痛みすら感じない。どこにいるのか、どうなっているのかもわからない。痛覚どころか、触覚そのものが死んでしまったようだ。

だがそれでも、口の中の血液だけは無理矢理に押し戻した。
汚したくなかった。

自分を救ってくれた、大切な人を。

一緒に罪を償おうとまで言ってくれた、友を。

この穢れた人間の血液などで、汚したくなかった。

だから、飲み込んだ。

味がなく、匂いもしなかった。目は、とうに見えなくなっている。
どうやら、五感のうち、四つを失ってしまったようだ。

「シ アさん、 ルファ ン！」

ただ一つ、未だ何とか機能している耳に、自分を呼ぶ声が聞こえる。

不安そうに、悲しそうに、泣いている。

「ア、アム、さ……」

手を、伸ばした。

その頬に、触れた。

涙を、拭ってあげた。

泣かないで。

もういいから。

もう大丈夫だから。

そんな、悲しそうな顔はしないで。

あの、可愛らしい顔で、笑っていて。

ね、お願い。

涙を、拭った。

その頬が、離れた。

手が、落ちた。

これが、最期か。

あっけない。

せつかく、わかりあえたのに。
せつかく、気付いたのに。

本当に、あつけない。

あの子たちにも怒られてしまう。

でも、仕方ないよね。

放っておけないもの。

皆、ごめんなさい。

皆の願いを無駄にしてしまうけど、

あの人は、大切な友達だから。

だから、この命を賭けても、守りたい。

「ア、リアムさ、ん……逃、げて……」

シルファは、最後の力を己の鏡に向けた。

後ろで、音が鳴った。

なんてことはない、軽快な乾いた音が、踊りの拍子を取るように、
ゆっくりと三回、パン、パン、パン、と。

正面で、友が揺れた。

三度の拍手に、反応するように身体を痙攣させて血を流し、天を
仰ぎながら膝を付いて　そして、倒れた。

地に伏す姿はまるで、畏怖する神に礼を拝する敬虔な教徒のよう。
見る間に赤い水溜りが領域を広げていく。

「シルファ、さん……？」

一瞬、何が起きたのか、アリアムにはわからなかった。否、今も
理解が追いつかない。解を得ようと今一度、頭の中で起きた事象を

再生する。

闘いを終えて、ようやく自分の言を、涙と共に受け入れてくれたシルファ。

傷付いて、ただ胸の中で蹲るだけだったその人が、力強く立ち上がって見せた。

呼びかけに応えるように、優しい声で、柔らかな笑みで、自分の名を呼んでくれた。

そうして、立ち上がったところに鳴った、わずか三度の柏手かしわでに全身を揺らした。

そして今、さらに血を流しながら地面に倒れ、立ち上がる様子を見せない。

そう。血を流しながら倒れ、立ち上がらない。

「シルファさん!?!」

咄嗟とつぜんにしゃがみ込んで、呼びかける。

応えはない。

その代わりのように、後ろから声がした。

「ああ、なんて良いお話なのカシラ……感動しちゃった」

そう言って、もう一度音が鳴る。

パチ、パチ、パチ。

茶化すような、嘲りあざわらのような、軽い声。その不快極まりない音に、アリアムは怒りを隠しもしない表情のまま後ろを振り返り、そして、驚愕に目を見開いた。

「っ な!?!」

「素敵な人形劇だったワア、お嬢さん」

そこには一人の女が立っていた。

古の文字を想起させる銀の刺繡ししゅうをあしらった、鮮やかな蒼の法衣。瘦身を包んで風に舞うその衣は、清涼な空気を思わせる。

いや、

「あ、あなた、は……?」

衣服など、どうでも良かった。

「あら、ごめんなさい。自己紹介がまだだったわネ」

アリアムはただ、目の前の女を茫然ぼうぜんと見つめる。

幼げながら大人の女性を思わせる、端正な顔立ち。

輝かんばかりの金の髪。

空そのものの蒼の瞳。

そう、それは

「はい、はじめまして。アタシはコロラーレ幹部の一人、“紺碧の賢者”ルフカロオ。これからよろしくネ」

それは、自分の脇に横たわる、シルファームルルームと“全く同じもの”だった。

いつしか森は静まり返っていた。

先程までの濁流のような轟音も、地割れのような振動も、今はもう聞こえてこない。

ざわざわと木々を揺らす風はわずかに湿り気を帯び始め、大地を照らしていた月明かりも雲に翳かげりだしている。

もうすぐ、雨が降ってくるだろう。

そう予見しながら、ナタスは走っていた。向かう先は無論、アリアムの下である。

「チ……」

苛立たしげに舌を打って、足元を見やる。

低木と落ち葉に大部分が隠れながらも、わずかな光沢を帯びた黒

い土と、ところどころ穴を開けたような水溜りが、見える限り広がっている。

まさしく、悪路と呼ぶに相応しい地面。いつもならば何も考えずに駆け抜けられるものを、今は一步一步、感触を確かめながら進まなければならぬ。

静けさゆえか、一步を踏む度に鳴る粘着質な音がいやに耳障りだった。

「アリアムは無事だろうか」

ぼそりと、念じるように呟く。

「セレスたちもいるから大丈夫だとは思うが」

ナタスは遠くを見通すように、視線を前へと向けた。視界は木々に遮られ、月明かりも失せた今、その先はよく見えなくなっている。まさに一寸先は闇。常に予測困難にして予知不可能な事象が発生する“未来”を象徴しているようだ。

そして、その闇の中に、なお“黒い”とわかる、一つの影。

「……急がなければな」

不穏な影が横切ったのは、魔法生物との戦闘を終えた後のことだった。始めはなんてことはない、ただふと浮かんだ疑問に過ぎなかった。しかし、それは今、考えたくもないような万が一の事態へと変貌している。

全ては仮定の上に立てた仮定の話。直感と言ってもいい、推論の域を出ない、“もしも”のこと。

しかし、予感寒気がするほど鮮明に浮かんでくる。

てがかり
灯火は、五つ。

赤い光を放つ魔法石。

それを体内に持って、半自律の魔法生物となっていた老人。

“ニンギョウ”という俗称。

魔法石の光とよく似たものを身に付けていた女。

そして、以前港町で見た、人体を改造する術。

もし、この予感が正しいとするならば、アリアムの相對している人物は。

「ええい……！」

「ばしゃん、とまた飛沫しぶきが上がった。コートの裾すそが斑まだひに染まる。靴くつは重く、足が冷たい。

「いっそ魔法を使ってどうにかしてやろうか　そう思ったとき。

正面に一つ、炎が灯った。

「何だ？」

揺らめく明かりは横に鏡を並べたように、両の脇に一つずつその数を増やし、気が付けばナタスはその炎の玉に取り囲まれていた。

まるで夜の海に浮かぶ漁火いさりびか、獲物を追いつめた狩人の焚たく松明である。だが周囲に人の気配はなく、無論、船が浮かんでいるはずもない。

「！」

と、突然、正面を塞いでいた炎の一群が宙に打ち上がった。それは緩やかな曲線を描くと向きを変え、さらにその身を分けて無数の炎の弾丸となってナタスへと降り注ぐ。

「くそ！」

ナタスはぬかるむ地面に力を込めて、後ろに跳ねる。すると、扇状に広がりながら飛んできた炎の一群は全て地面に着弾した。ジュっという音と白い蒸気を上げて、水溜りがいくつか、その姿を消す。炎の着弾に遅れること四半秒、ナタスも地面へと舞い降りる。空中でくるりと一回転。体勢を整えながら、重心を低くするために腰を落として前かがみに。左足はやや広げて着地に備えて伸ばし、右足は万一のフォローに動かせるよう、力を抜いておく。

「そうして、爪先が地面に着いた瞬間

「ぐッ……！」

ナタスは足に激しい傷みを感じ、倒れ込んだ。見れば、左足は何

本もの針に貫かれたかのように、そこだけスタスタに引き裂かれ、
焼け焦げ、その下の皮膚は爛れていた。

一体どういうことか。

炎は確かに躲したはず。炎という攻撃に対して“紙一重”という
無謀な回避手段も取ってはいない。実際、水溜りが蒸気となったの
も見た。

ならば、左足だけは避けきれなかったとでもいうのだろうか。

いや、それはあり得ない。仮にそうであったとしても、松明のよ
うな炎弾で残る傷は、このような裂傷ではなく、火傷であるはずで
ある。衣服を、しかも狙いを澄まして貫くような傷跡が生じるはず
はない。

「いかなな、そのようなことでは……」

と、そんなナタスの戸惑いを助長するように、声が聞こえてくる。
そして、炎の明滅を背に、一人の人間が姿を現した。

な、んだと？

あまりにも細い（シルエット）は、木の枝のようで見搾らしい。

低木が燃えて裸になったものが、照らし出されているのかとさえ思
えた。

だが直後に襲ってくる、身を竦ませる猛風のような圧倒的な威圧
感。

その姿は威風堂々　まさに業火の顕現である。

仁王立ちの全身を包み込む、紅蓮の法衣。そこに散りばめられた
金の刺繍が、舞う火の粉のように煌めいている。風に流れる灰色の
長髪は、まるで煙霧。瞳は日輪の如く、炎に身を包んでなお輝き、
吊り上がった目尻と太い眉は、鬼のそれを思わせる。

気配など、どこにも……

本当に、炎が人の形をとったのではないかと錯覚する。

揺らめく炎邪は落ち着きを保ったまま、ゆっくりと言葉を紡いだ。
「貴公は、もつと威を振るった姿勢でいてもらわなくては。それが、
地に這いつくばって泥に塗れているとは……」

腹の底から響かせるような、深い老人の声。その声はゼピュロスとは違う、しかし同様に老輩ゆえの重さと威厳を伴っていた。ある者には力強さからの頼もしさを、またある者には威圧感からの畏れを抱かせる、雷の遠鳴りのようでもある。

「なんと無様なことか」

男はそう言っただけで、トーンを下げると、応じたように背後の炎が翳り出し、次第に炎邪の影が露わになっていく。

それは倒れ伏し、汚れた少年を儂げに見下ろす、老人だった。だが決して、少年を“見下し”ているのではない。老人は背筋を伸ばして姿勢を直し、あくまでも地に伏した少年の姿を憂えるような瞳で見つめている。

「……随分と久しいな、我が友　ナタス「アインシース」

「お前、は……まさか」

老人の相貌を眼に捉え、ナタスは驚きに声を震わせた。

「イニア　!!!」

紅蓮の衣を翻し、老人　“紅の王”イニアが、小さく笑んだ。

第二十七話

この世界には、“三大勢力”と呼ばれる三つの組織がある。

その一つは言う。

『“魔法”は神に与えられし崇高な力。“科学”は人の生み出し偉大な力。前者を冒瀆ぼうとくすることは神を冒瀆することであり、後者を否定することは人を否定することである。“魔法”を与えて下さった神に感謝し、“科学”を生み出す人を受け容れて、故に両者を立てて一いちと為し、合わせて新たな道を開かん』、と。

また一つは言う。

『“科学”をもつてすれば、自然さえもコントロールすることができる。またそれらを示す数式とその解は、この世界の構成を示す記述、つまりは“神の記述”そのものであると言える。それは即ち“神の力”を“人の力”が上回ったということである。この力を使いこなし、存分に用いることこそが、世界を安寧あんねいへと導く鍵となるのである』、と。

そして一つは言う。

『“魔法”とは、世界の彩りさえも改変させることが可能なほど、強大なものである。だが、それは人が内に秘めていた 元来、備わっていた大いなる力。かつて一匹の猿がその知能を進化させて人間となったように、我ら人間も秘めたる魔法を引き出すことで、今“神”にも等しき存在となったのである。ならば描くべし。この世界ニバスに、新たな彩りを』、と。

“ 真実を伝える聖堂会 ” 教団。

“ 理を回す歯車 ” ギア。

“世界を彩る絵筆” コロラーレ。

彼ら 特にギアとコロラーレは、互いの主張を激しくぶつけ合い、やがて火種は炎となつて世界中に燃え広がった。“大焰災”
俗に言う、大戦である。

一応は、双方の特徴を併せ持つ“教団”の勝利、という形で幕を閉じたこの戦乱だが、各々の主張はエゴとなつて残った者たちの中さらに奥深くに根を張り巡らせ、今も水面下で互いを卑下し合う状態が続いている。

“紅の王”^{くれない} イニア 世に広く名を轟かせる世界三大勢力の一、
コロラーレ “世界を彩る絵筆”の指導者と目される男 は、穏やかな声で、
目前の少年の名を呼んだ。

「随分と久しいな、我が友 ナタス「アインシース」

「イニア……本当に、お前、なのか……？」

かつての友 とある理由から、袂を分かつて以来、二度と会う
ことのなかった、また会おうともしなかった親友。

同じ道を歩みながら、自分は去ることを、彼は残ることを選んだ、
懐かしい同志。

その彼が、少しだけ年老いた姿で 彼らが分かれてから実際は
かなりの年月が経っているが、ナタスにはそう思えた 、目の前
に現れたのだった。

イニアは、ナタスの問いを満足そうに受け止めて、喜びに笑んだ。
すつと手を差し伸べる。

「うむ。コロラーレが幹部、“紅の王”イニアである」
ナタスは差し出された腕を伝うように、古い友人の全身を見やつ
た。

先程見えた炎邪は、一体何だったのだろう。

その姿は、まるで朽ちた“老木”だった。

肌は深い皺の目立つ、乾いた土のようで、白みの強いアッシュユブ

ロンドの長髪は独特の色彩と無造作なスタイルゆえに、どこか儂さを感じさせる。服に着られている、とても表現すべき細すぎる体軀はまさに朽木くぼくそのもので、そこに枝の如く生える手足は、余分どころに必要な肉さえも擦り減らしてしまったのではないかとすら思える。

そして何より目立つ、大きく穴を抉ったように彫られた、瘦こけた類。

己の時間と過去を、長い年月の中に置いてきたナタスにとって、それはとても寂しく、同時に切なく見えるものだった。

だがそれでも、朱の瞳は今なお変わらず爛らんと輝いて、紅蓮の法衣とともに闇夜の森の中でもはつきりと映っている。身体は衰えても決して弱くはならない、イニアの意志の表れである。

「疑うのも無理はない。が、貴公は相変わらずのようだな」

「……」

戸惑いながらも手を取って立ち上がったナタスは、しかしその後どうしていいのかわからずに、ただ無言のまま視線を交わした。

気遣ってか、イニアは自虐のような台詞で静寂を埋める。

「この通り、老いぼれてしまったわ。が、腕はまだ衰えてはおらん。先程の魔法、貴公も驚いたであろう？」

「ああ。そう言えば、昔からお前は炎の魔法を得意としていたな。衰えるどころか、さらに腕を上げたんじゃないか？」

「ふむ、“年の功”といったところか。伊達で年を重ねずに済んで安心したわ」

言い合うと二人、フンと鼻を鳴らす。そこに、時を経ても変わらぬものがあることを感じ取り、ナタスは知らず肩の線を緩めていた。だが同時に、一つだけ引っ掛かりを覚えた。

「“火”、か。イニア、知っているか？ この森の向こうにある教会のことを」

「……我を疑っているのか？」

「お前が、ここにいるということは……」

全ては語らず、視線だけで肯定する。

イニアはそれを沈黙で受け取ると、やはり静かな声で言った。

「さすがだな、相変わらず鋭い洞察力よ」

「ならばやはり、最近起きているというテロは、コロラーレが……？」

わずかに語気を強めるナタス。嘯くさやくことはもちろん、曖昧あいまいに濁すことも許さないと、気配で圧する。

対してイニアは、どこ吹く風。謎かけのように答える。

「ふむ、どう答えたものか……“我”ではないが、“我ら”である、とでも言えば良いか」

「どういう意味だ？」

「我が直接起こしたわけではないが、コロラーレが関与している、ということだ。」

近頃、末端の者の中に指針を無視してテロ行為に走る愚か者がいてな。全く、無駄な争いの火種となるというのに……」

小さく首を振りながら、指で鼻の根元を摘まむイニア。その指もまた、何の塗りも飾りもない、無味乾燥な木製の箸はしのようだった。

「最近の末端の人間はバカばかり。しかしそれは、組織が大きくなりすぎてしまったがために、末端の人間にまで目が行き届かなくなってしまった我らの責任でもある。」

故に我がここに来たのは、バカどもの愚行を止め、裁くため。決して争いを望んでいるわけではない、ということだけは理解してもらいたい」

「お前がその“責任”を果たしに来た、というわけか。いずれにしても、テロはコロラーレの仕業だったわけだな」

「うむ。それを言い逃れるつもりはない」

「……」

背後にあるものを捉えるように、ナタスは焦点のずれた眼でぼんやりとイニアを見る。

彼ははつきりと言い切った。責任を果たす、と。言い逃れをするつもりはない、と。

犯人はわかった。それをどこに追求するべきなのかも。だが、それだけのことだ。

ナタスがゼピュロスに依頼されたのは、『教会で起きた事件がテロなのかどうか』、その“調査”のみ。あくまでも情報収集役なのである。得た情報を元に、どう対応するかはゼピュロスが、あるいは教団が決めること。

加えて、この調査は“極秘”扱いとなっている。依頼された以上のことを行うのは、自分はもちろん、ゼピュロスにとっても非常にまずい。

とすると、ここは一刻も早くアリアムたちと合流し、街に戻ってこの調査結果をゼピュロスに報告するべきだろう。もたもたしていれば、折角見つけた犯人をみすみす取り逃がすことになる。

ならば、どうすれば

「もっとも、我が姿を見せたのは、別の理由があったからなのだが

……」
と、思索を巡らせていると、不意にイニアが不可解なことを口にした。

「別の、理由？」

思わず問い返す。

すると、イニアはおもむろに一步退いて姿勢を正し、

「イニア！？」

まるで皇帝に謁見するように、

「ナタス！アインシース……貴公に、」

膝を地に付けて、深々と頭を垂れ、

「我らコロラーレの最高指導者、“白の帝”を名乗っていただきました

……」
恭しく、平伏の意を表した。

「はあい、はじめまして。アタシはコロラーレ幹部の一人、“紺碧こんへきの賢者”ルフカロオ」

ルフカロオと名乗った女性は、飄々とした態度で、これからよろしくネ〜と言って片目を瞬またたかせて見せた。

そんな軽い雰囲気　状況が状況ならば、フレンドリーとすら捉えられるかもしれない空気に、しかしアリウムは驚愕に震えるのみだった。

大抵のことならば、驚きつつも受け入れられるつもりでいる。

この世界は、“不可能”こそ無いような世界だ。人が望めば望むだけ、力を注げば注ぐだけ、世界はそれに応えて奇跡のような姿を見せる。信じられないような光景も、現象も、それは自分が無知であるが故に、思いも付かなかったことを他人が実現しているだけなのだ。

だが、この状況は受け入れることはおろか、受け流すことすらできない。

服が同じ物、というのならば理解は容易。そういうこともあり得るだろう。

髪型が同じ、というのもわかる。嗜好が似通っているだけのことであろう。

容姿がそっくりである、というのもあり得ないことではない。一卵性双生児などが、端からは見分けがつかないほど瓜二つであることは、珍しくはないのだ。

特殊な技術による変装、疲労による幻覚、単なる思い込み、あるいは勘違い　こじつける理由など、いくらでもある。

それでも、彼女たちは明らかにそういったものとは違っていた。
“そっくり”などというレベルではない。瓜二つどころの話ではない。

シルファとルフカロオは、“まったく同じ”なのである。

ドッペルゲンガー……？

ふと、アリアムの頭を過ぎった名称。

“ドッペルゲンガー現象” 己の死期が近いときに見られるという、自分と同じ姿の誰か。

状況はよく似ている。考えたくはないが、もはやシルファの死期は近く、故に現れた同じ姿の者。

一番納得ができそうな解である。

しかし、だとすると、ドッペルゲンガー現象の特徴の一つとも言える、“ドッペルゲンガーの人物は、周囲の人間と会話しない”という法則に反することになる。今、拍手をしながら目の前に現れた人間は、明らかに言葉を交わし、あまつさえ“ルフカロオ”と名乗ったのである。

だとするならば、アレは

「あ、あなた、は……？」

アリアムは声を震わせたまま、問いを繰り返した。

あなたは“何だ”、と。

「聞こえなかったのかしら？ 私は」

「違う、そうじゃない！」

声を荒げるアリアム。

そうでもして虚勢を張り上げなければ、何か得体の知れないものに飲み込まれてしまいそうな気がした。

そんな焦燥に駆られた少女を見てルフカロオは、あア、と頷いて見せる。

「そういうコト……でも、そんなこと訊かれても困っちゃうワ。というより、それを私に尋ねるノ？」

にやり、と曲る口元。

ルフカロオは倒れ伏すシルファを指差す。

「相手が違うと思うケド……まあいいワ、教えてあ・げ・ル。まず貴女が考えているのとは、たぶん順番が逆。私がソレの“何か”なのではなくて、ソレが私の“何か”なのヨ」

心底楽しそうに浮かぶ笑みは、まさしく歪んでいた。

これから話す事実には、この少女がどのような表情を浮かべるのかそれが楽しみで仕方がないというように。

そして、その表情が苦悶くもんや絶望といった、あらゆる負の感情に歪むことが、嬉しくてたまらないというように。

「ソレは、私の“人形”……私と全く同じ性能を持つ人工の肉体に、“シルファ”“ムルルーム”という人間の記憶のうみそと感情をくっつけタ、魔法生物。
おニギヨウさん

そうネ、だから貴女の問いに答えるのなら 私は人間オリジナル。で、ソレが人形オモチャ」

アハハハハ。

胸を大きく反らしながら声を張り上げ、ルフカロオは笑った。

言も拳も無邪気な子供のよう 否。邪気を孕はらみすぎて、何が邪で何がそうでないのかわからない。

「でも上手くいったワ！ 記憶メモリーのないただの器に、後天的に脳メモリーを引き継がせる、という実験がネ！ 見事にソレは、ルフカロオの身体で“シルファ”“ムルルーム”になってくれタ……」

これで私はまた一歩、あの方に 不老不死に近づいたのヨ！！
「そ、ん、な……」

アリアムの顔面が見る間に蒼白になっていく。

身体が震える。歯の根が合わない。生きていること疑ってしまうくらい、体温が下がっているのがわかる。

ルフカロオは、人の“精神”にこそ、その人の存在があるとして、

それを永遠のものにすることで不老不死を得ようとしているのである。そのために、人の身体を“肉体”と“精神”とに分け、精神を映す鏡である“脳”を存続させる方法を実験していたのだ。

そして、彼女の言う通り、それは成功した。ルフカロオの肉体を持ったシルファの精神は、自らを“シルファ”“ムルルーム”という存在として、生きていたのだから。

だが、この実験には、やはり前提となるものがある。

それは、他者の精神を、どこからか持ってくる必要がある、ということ。人体を構成する組織、とりわけ内臓は、生命活動を停止しからの損壊が激しく、それは時々刻々と進む。移し変える作業はできる限り迅速に行われるべきである。

ならば、シルファの精神をどのようにして手に入れたのか。

答えは明白だ。

このルフカロオこそが、教会で起きた“テロ”の犯人だったのである。

己の欲望の為に、他者を殺そうと いや、もしかしたら、“殺す前に脳だけを取り出して”、それが明るみに出ないように遺体を焼くため、教会に火を放ったのかもしれない。

明らかに人道を欠いた、外道の業である。

「あ、あ……」

アリアムは両の手で、自分の身体を抱き締めた。

震えが止まらない。

苦悶や絶望からではなかった。

何からかと問われれば、答えは憎悪と恐怖。

目の前にいる女ルフカロオに対して、ではない。

その女が高らかに語って見せたその理論を、「そういう考え方もあるのか」と“受け入れてしまった”自分に対して、である。

「シルファ、さん……」

人を殺し、利用する。
それは、人間のすることではない。
たとえ神様であっても、許されることではないだろう。
この世にあつてはならない非道の行為。

そうであるのに　　そう思うのに。
認めてしまった。
受け入れてしまった。

そんなのは、嫌だ。

「シルファさん、シルファさん……」
認めたくない。認めてしまう自分が、嫌だ。
受け入れたくない。受け入れてしまった自分が、嫌だ。
嫌だ。嫌だ、嫌だ、嫌だ嫌だいやだいやだいやだいやだ
。

「シルファさん！　シルファさん！！　シルファさん！！！！」
まるで“自分を否定する”かのように、アリアムは必死にシル
ファの名を叫び続けた。
それは、自分の感情の揺らぎに対処できず、どうしたらいいかわ
からない、泣きじゃくる子供だった。

「ア、アム、さ……」
そんな子供に、シルファ聖女はゆっくりと手を伸ばした。
温かな指が、頬に触れる。
涙を、そっと拭ってくれた。

「シ　アさ」
力なく、その手が落ちる、その間際。

「ア、リアムさ、ん……逃、げて……」

シルファは、最後の力を己の鏡ルッカロオに向けた。

第二十七話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

もう少し、と言ってから大分経ってしまいましたが、本当に後も
うちよっとなので、どうぞ、お付き合いください。

第二十八話（前書き）

お待たせしました、二十八話です。

なんとも味気の少ない感じになってしまいましたが、楽しんでもらえたら幸いです。

第二十八話

「貴公に、我らコロラーレの最高指導者、“白の帝”を名乗っていただきたい」

イニアはナタスにそう言い、泥に座して深々と礼をする。

「白の、帝……俺、が？」

様々な魔導師で構成されるコロラーレは、組織でありながら“個人主義”を基本理念としている。

そもそも、“魔導師”という人種が、そういう生き物なのである。己を高め、その魔法 すなわち研究成果を内外に訴えて知らしめる。そこには、他者が介入する余地などない。同じ思想、似たような研究を行う者同士ならいざ知らず、全く違う理念の者とは、意見を交わすことさえないのである。

「うむ」

だがしかし、それが大多数、大規模な組織であれば話は変わってくる。

例えばここに、A、B、Cの三人がいるとする。AとBの研究は互いに類するものであり、BとCの意見はよく似ているとする。すると、AとCの間には交流がなくとも、Bを中心とした関係性が出来るようになる。

それがさらに、D、E、F と連なっていけば、全く関わりのない者同士が、同じ組織に属することも有り得るのである。

「何を馬鹿なことを……余所者の俺がいきなり組織に現れて、幹部になりましたなどと、誰が認めるものか」

「それができるのがコロラーレ。我らは来る者は拒まない。それが、強大な力を持つ者ならば、尚更のこと」

“実力主義” それは、“個人主義”を主体とした彼らのため

にあるような思想だ。

力が有り、有益な成果を示す者は、どんな若輩であろうとも評価され、上席に徴用しゅうようされる。個人の力を突き詰めていく人間だからこそ他の者の優れた力を認め、ならば自分もと、その思考、理念、成果を吸収、改善、発展させて更なる高みを目指す。

圧倒的な横の繋がりのおかげに生まれる、ほんのわずかな上下関係。それこそが、コロラーレが短い期間で急速に力をつけ、強大な組織となった最さいたる理由なのである。

その中、コロラーレにおける力の象徴 自らの魔法になぞらえた“色”を冠かんする“称号”を持つ者の一人、“紅くれないの王”イニアは、座礼ざらいを解かぬまま語る。

「そも、“白の帝”は幹部ではない。最高指導者 コロラーレの全ての人間を率い、また導く者だ」

「ならば尚のこと、いきなりやってきた余所者が認められるはずがない」

「元来“白の帝”とは、誰もが認める“究極いちの一”を手にした者のみを得られる称号。故に貴公にそれを得られぬ理由はない」

その言葉を耳にして、ナタスは更なる憤りを覚える。

“究極の一” “不老不死”のことを喩たとえているのだろうか。だとするならば、甚だしい思い違いと言わざるを得ない。自分も得て初めて理解したことだが、知っているからこそ、ナタスははつきりと言ったことができた。

それは“過ち”である、と。
知らずに、語気が強められていく。

「究極だと？ 俺はそんなものは手にしていない！」

「今さら嘘は吐ついてくれるなよ。その出逢った頃と変わらぬ姿……

貴公が“永遠”を手にした証拠ではないか」

「永遠など、どこにでも転がっている！ “記憶”、“血縁”

それ以外にも、そこら中になー！」

「それはあくまで“連鎖”、“継承”の話。一個人で“永遠”を得た者は古今東西全てを洗っても、どこにも存在しない」

「ぐ……」

思わず言葉に詰まる。怒りが先行して、説き返すだけの言葉が思いつかない。

だがそれでも、ナクスは認める気にはなれなかった。イニアの言う、“究極”で得た物は決して、断じて、“究極”などではなかったから。

長い年月の中で、自分が本当に得たものを振り返る。それは、対価として支払ったものと等価だった。

“不老不死”の代償　ありとあらゆる哀しみと、数え切れぬ苦しみ。

親しい友人が衰えていく。病に伏せて喘いでいる。そして、いつか別れ逝く。それでも、“あの世”で会うことも叶わない。

沈められても、焼かれても、殴られても斬られても、抉られても潰されても千切られても裂かれても、楽になることは許されない。

悲しみも苦しみも傷みも、全て背負わされた上でお生きていなければならぬ。

これが、“究極”などであるものか。

「ふざけるなよ、イニア。お前も、結局は“不老不死”が欲しいだけだろう!？」

「確かに、欲しくないとは言えぬ。我もまだ、やりたいことが沢山あるからな。このまま死ぬば、間違いなく“悔い”となろう。だが貴公に来て欲しいのは、それ故ではない」

言うといニアは、さらに深く頭を下げた。地に付けた拳が強く握り締められる。

「先程言ったように、愚行に走る輩が増えている。このままでは本当に、かつてのような大戦となろう。そうならないためにも、誰かが絶対的な力を以って、時には畏怖を、時には尊崇を、また時には羨望を、与えしめて導かねばならん……」

絶対的な牽引者 誰もが認める圧倒的な力とカリスマ性を持つ者が、我らには必要なのだ」

口調は変わらずとも、表情は見えなくても、その言葉がいかに切実なものであるか、想像は容易だった。

まるで津波のように、イニアは言葉を溢れさせる。

「この、私の古ぼけた記憶を深く掘り返しても、貴公ほどの適役はおらぬ。今日、その姿を見て、改めて実感した 否、確信した。

頼む、我が古き友よ。我らを導いてくれ。全ての色の根源にして、全てに影響を与える“白”の名を、その身に継いで高らかな宣布を

……さすれば我ら皆、貴公について行こうぞ。それこそ、永遠に……」

戦争を未然に防ぎたい それは、平和を望む者、戦争の悲惨さを知る者ならば、当然の希望だろう。

“生きる”ために人が人を“殺す”、そんな矛盾が正義となるのが戦争。その矛盾はやがて、強者が弱者を勝るなぶためだけの、嗜虐しやくの渦に変わっていく。

少なくとも、“大焔災”だいえんさいと呼ばれた戦争では、そうだった。

そもその始まりが、己の主張を押し通し、相手の思想を根絶しようとする風から起こったものだったのだから、えてして当然である。

存続 貧困に瀕した国に利益を齎すためならば、あるいは独立独裁を敷く権力者に抗うためのものならば、多少なりとも正義

がある。

だが、大焔災だいえんさいには正義など一切ありはしなかった。ただ自分たちの考えを、力で真理にしようとしただけの、愚かとしか言いようのない争いだったのだ。

犠牲になった者は数知れず、得られたものはほとんどない。それを“過ち”と呼ばずして何と呼ぼう。“過ち”と知って何故歩みを進めよう。

“過ち”を繰り返す道を遮る手段があるならば、全てを講じる。

泥に汚れるくらい、どうということはない。

イニアは己の意志が届くよう、腹の底から搾って声を発した。

「ナタスよ、この通りだ」

「……」

対してナタスは、

「断る」

一言、それだけを返した。

イニアが驚きに眼を見開き、顔を上げる。

「何、だと？」

「断ると、そう言った」

「バカな、戦争が起こっても良いと言うのか、貴公は」

「そうだ」

「な……」

その言葉に、今度はイニアが憤る。

確かにナタスという男は、弱きのために強きを挫くような人間ではない。だがさりとて、助けを求める者をむざむざ見殺しにするような輩でもなければ、まして争いを求める人間でもなかった。

それが、言ったのである。戦争が起きてもかまわない、と。

ナタスは続ける。

「戦争とは、人が人を殺す場。殺した分だけ評価される。ならば、絶対的な死を与える術が生まれる可能性は高い。」

俺は、俺の望みはな、イニア。他ならぬ自分自身の死なんだ。お前の言う“永遠”に、苦しみだけの“生”に終止符を打つ。そのためならば、俺はどんなことでもしてみせる」

小さく身体を震わせるイニア。それを、ナタスは無表情で見つめていた。

否、必死にそうあるように努めていた。仮初にでも情を捨てなければ、こんな暴言を吐くことなどできなかったのだ。

戦争が起これば、自分を殺せる人間が現れるかもしれない。そう考えたのは確か。

だがそのために、関係のない人間を代償とするのは、ナタスとて望むところではない。戦争など起こらない方が良いに決まっている。ならば何故、ナタスはイニアの申し出を頑なにまでに断るのか。強いて言うのなら、それは“わがまま”だった。

「わかつたのなら去れ、イニア。俺はお前たちとは相容れない」
たとえ“自分の”であつたとしても、“死”を望む人間が組織の頂点に立つことは許されない。指導者の思想は、間違いなく組織に浸透し、影響を及ぼす。“死を望む”思想が組織に広まれば、結果は同じ。争いに進む道を模索するだけ。

そして何より、組織の頂点に立つには、その構成する人員全てを把握する必要がある。そうなれば、親しみを覚える人間も現れるだろう。自分が死を手にするまで一体いくつの、それらの死を見ていかなければならないのか。

数えたくもない。

だから、嘘を貫いても拒む。

「去れ。世界がどうなろうと、俺の知ったことではない」

そう言った瞬間、再びイニアの炎が燃え上がった。

“怒”の感情を具現化するように、地獄の劫火が天上を焦がす。形相は、鬼のそれに変わっていた。

「……危険だ。貴公は危険過ぎる……戦争が起きても良いだと？
世界がどうなろうと構わないだと？ バカなことを。世界があつてこそ我ら人間であり、人間があつてこそ世界だぞ！ それを、知ったことではない、とは……」

そこまで言うと、イニアは荒ぶる呼吸を束ねて空気を深く吸い込み、怒りに固まった全身の無駄な力を抜きながら呼吸を吐き出す。武道の達人などが見せる、呼吸法。自らの身体に争いの起こることを伝え、心をシフトするスイッチ。

「貴公のことはよくわかつた。貴公はその力に溺れただけの、ただのうつけ。もはや害意すら感じるわ。頼った我^{われ}が愚かであつたわ……だがそれでも、愚かと知りつつ貴公に頼らねばならぬのだ。その

力を、示してもらわねば、未来みらいがない」

撃鉄は起こされた。

後は、打ち下ろされるのみ。

「ならば、我が全てを以って、貴公を屈服させてやる。それで貴公の命が失われるのであれば、それもまた良し。我にとっては己の力量の証明となり、貴公にとっては悲願の成就となる」

「そうか……」

ナタスは小さく呟く。

こっちは、なつて欲しくなかった。

できることならば、話し合いだけで終わって欲しかった。

だが、彼らは“魔法使い”。

ただひたすらに望みを目指す者。

だから、これも、

「仕方がない、のだらうな……」

交わす言葉は、それきりに、

イニアは静かに片腕を伸ばし、

ナタスは己が愛剣を正眼に構え、

互いの再会を喜び合う間も持たず、

共有する過去を懐かしむこともせず、

ただ静かに自分の意志を輝きに乗せる。

色は “紅”と“白”。

奇しくも、対決を運命付けられた色だった。

争いを示す光が暗夜の森に閃き出す。

第二十八話（後書き）

続きます。

第二十九話

赤い輝きがシルファとルファカロオを照らし出す。
ふたりのおんな

出逢った頃は鮮やかなルビーのようだったシルファの左耳のピアスは、今やわずかに赤とわかる光を茫と放つのみ。

儂い輝き。力無い腕の動き。それでも応えて、ようやく泥は再びの流れを持ち始める。

「あ、あああ！」

だが、少し前まで滝とも見紛うたそれは、もはや雨のそれにも敵わなかった。押し流すことはおろか、服を濡らす程度が関の山だろう。

それでも　それでもと、シルファは最期の力を燃やす。

どのみち、もう長くはない。文字通り、風前の灯火ともしび。息を吹きかけなくとも、もう消える。そんな命だ。

ならばせめて、この最期の一瞬を、誰よりも輝かせてみせよう。そうすることで、大切な友達の未来が繋がるならば、ここで燃え尽きることに後悔はない。

仮初の身体。偽者の意識。失われていたはずの、命。

それで、代償となるのなら、惜しくはない。

だから。

もっと、もっと、もっと、

この身の破滅と引き換えに、

もっと、もっと、もっと、もっと、

燃える。輝け。光を放て。

「アリウムさんから……私の、友達から離れなさい!!」

光が弾ける。

左耳のピアスに付けた、赤い宝石　現在のシルファームルルムをシルファームルルムたらしめた魔法石が、その最期の光を鮮烈に輝かせる。

周囲を照らす赤色の濃度は増し、雪崩れる泥が勢いを取り戻す。泥の波は、二つ。一つは、アリアムの正面に盾として。そしてもう一点は、ルフカロオの心臓目掛け、彗星の如き刺突となって繰り出された。

「チ……！」

ただまっすぐに、一直線。小細工を弄する暇はなく、また余力もないが故の、真つ正直な攻撃。

しかし、とにかく“当てる”ことだけに、文字通り残る命を賭けたその攻撃は、回避することすら許さない。

「永遠に消えなさい、醜い、私……！」

「……！！！」

ドッ　重く鈍い音が響き渡った。

その音を最後に、刹那の喧騒は再びの静寂へと帰っていく。

風に揺れる枝葉の音が、やけに響いているように聞こえた。雲の切れ間からは、柔らかなカーテンのような月光が舞台を撫でている。照明を受ける二人の女は動かない。

シルファは極度の疲労と苦痛に膝を折り、ルフカロオは胸に受けた一撃に悶えるように蹲る。

その姿勢は両者同じ。

まるで鏡に映し出された幻想を見ているようだ、とアリアムは思った。

「あ、」

思わず、息を呑む。

幻想的な光景に、ではない。現実的な光景に、である。月光の優しさがそれを幻想に見せていただけのことだと悟るのに、時間はさしてかからなかった。

漏らした吐息の代わりに返る空気には、鉄臭い香りが染み付いていた。

吹き出た赤い液体は霞かすみのように広がって、ほつれた糸くずのように肌に絡んでくる。

アリアムはその光景が意味するところを理解して、それでもやはり認めたくなくて、ただ小さく首を振りながら子供のようおえに喘いでいた。

「う、」

これが夢ならば、どれほど良かったことだろう。これが幻ならば、どれほど嬉しかったことだろう。

しかし、現実はどこまでも過酷で、そして残酷だった。

そう思った瞬間、月明かりの優しい微笑みはその実、そんな現実を見せつけるだけの無慈悲な冷笑であったことに気付かされる。

「あ、う……」

シルファの付けていた、宝石をあしらったピアス。　あらかじ

め魔力を籠めておくことで、電池のように使える魔法石。

シルファが魔法を使うたびに輝いた、光。　魔力の籠もった魔法石の放つ、光。

どれも、赤い色をしていた。

そして、その赤が消え去った。

月の光だけを残して。

その月も翳かげりを見せ始め、やがて闇に戻る。

シルファは動かない。

のようだった。見るものに生理的な恐怖と嫌悪を与え、心を締め上げることで動きを封じる、そんな瞳。

アリアムは思わず身を竦めた。

いや、竦んだのは心だ。身体は睨まれた蛙の如く、動かすことはおろか、目を逸らすこともできない。

自分で比喻したように、アリアムの心はあの蛇に締め上げられたのだ。

もう、できることはない。ただ、真っ直ぐに見つめること以外には。

「貴女の守ろうとしたこのコも、殺しちゃうワよ!？」

ゆらりと伸ばされる毒蛇の牙。死に誘うように、掌が開かれる。

それを、ただ眺める。時が止まったと錯覚するほど、動きはゆっくりとしていた。いや、『ゆったり』と言う方が正しいかもしれない。

まるで、一秒一秒を切り取った連続写真。それが、少しずつめくられていく。そんな感じた。

だが、その一枚一枚の間に別の絵が挿入されていることに、アリアムは気が付いた。

かつての日々　　脳裏に焼き付いた昔の記憶が、そこには写っていた。

人は死ぬ直前に過去を見ると言うが、本当のことなんだなと、ふと思った。

楽しかった日々。家族皆で笑っている。

それが終わった日。自分とあの子が泣いている。

祖母の差し伸べてくれた手。とても温かかったのを覚えている。

それが冷たくなってしまった日。やっぱり自分は、泣いていた。

何かと目をかけてくれた、神父さん。今も元気だろうか。

あの子と二人、過ごした日々。大変だったけど、頑張った。

そして、あの子さえも失ってしまった、あの日。

“生きることは素晴らしいこと”　　そう信じて、今までがむしやらに生きてきた。

なのに、他人の命を利用する技術を目の当たりにして、感じてしまった。“すごい”、と受け入れてしまった。あんなに嫌った“死”を、認めてしまった。

嫌だ　。

それは、裏切りだ。

色んなことを教えてくれた祖母への。影で支えてくれた神父への。何より、あの子への。

それなのに　無意味な“死”が嫌だったはずなのに、受け入れってしまった。それも、できたばかりの友達の死を。

なんて勝手なんだろう。絶対的に信じているものが違うのに、簡単に許容してしまう自分は。自分の望みを叶えるのに、利用できるかもしれないと打算する自分は。

何もできないくせに、嫌なことには嫌だ嫌だと一丁前に足掻く振りをして、実は何もかもを認めて受け入れる。矛盾も甚だしい。

自分には、“自分”というものが何一つとして存在していないのではないか。空っぽなのではないだろうか。そうとさえ思えてくる。だから、何もかもを受け入れることができるのではないか。

だとするのなら、本当の意味での“人形”とは、まさしく自分のことだ。

そんな人形が望みを掲げる、それを思い上がりと言わずしてなんと言おう。

なぜならば、その“望み”さえも自分のものなのかどうか、わからないのだから。

本当に、嫌になる。

もう、いいや……

心の中で呟いた。
すると不思議と、身体が弛緩しかんした。
もはや動こうとは思わない。
正直もう、どうでもよかった。
だって、何も変わらない、変えられないのだから。
どうせ動けたって、どうにもならない。どうにもできない。どうしようもない。

自分は結局、どこまでも無力だから。
ならば、足掻いたって意味はない。
このまま自分も消えてしまう方が、きっと楽だろう。
もとより、自分は自分のないニンギョウ。
たいした苦痛もなく、すぐに終わりにしてくれるはず。
なら、足掻くのは、もう止めよう。

友人の死を受け入れられたのだ。自分が死ぬのも受け入れられるはず。
ただ、待ってればいい。そうすれば、あの腕がこの命を攫さらってくれるだろう。
受け入れればいい。この空っぽのココロに。

そう思って、改めて腕を見つめたとき、

『それは困るわ』

頭の中で、声がした。

誰？

『皆、そればかり訊たずねるのね。どうせ教えられはしないのに』

呆れたような声は、溜め息を吐くように言う。

何を言ってるの？

訊ねてみるも、答えは返らない。ただ淡々と話し掛けてくる。
どこか不思議な艶やかさを滲ませながら。

『もういい、というなら瞳を閉じなさい。少しの間、私が代わるわ。そうすれば……』

その声を、アリウムはどこかで聞き覚えがある、そう思った。
どこで聞いたかは思い出せないけれど。

『そうすれば、私が全てを“拒絶”してあげられる。貴女を苦しめる、全てを』

そうか。

瞳を閉じれば、それでいいのか。
それも、いいかもしれない。
でも、怖い気もする。
どうしようかな。

迷いながら、
死を見つめながら、
ただぼんやりと、
アリウムは、
瞳を

「ぐあああ……！」

だが、そんな躊躇いを払うように、伸びる腕を分かっように、何
かが凄まじい勢いで飛び込んできた。

影は二つ　少年と、紅の老人^{おに}だった。

第三十話

アリアムの瞳に、不意に飛び込む影二つ。泥を巻き上げながら、歪な静謐を掻き乱す。

泥を浴びつつ、アリアムは他人事のようにその光景を、やはりぼんやりと眺めていた。

演劇でいうならば、起承転結の“結”部。“転” 激しい殺陣と照明演出の後の、収縮に向かう静かな一コマ。誰もが固唾を飲んで行く末を“見守る”べきシーンだというのに、二つの影は唐突に袖から、あるいは観客席から、舞台上へと飛び出してきた。

一つは、全身を炎に燻らせながら、雪のように光る白妙の剣を握る少年。吹き飛ばされた衝撃を抑えきれず、地面を転がる。

一方は、全身に炎を宿らせながら、轟々と燃える炎塊を背後に引き連れる老人。吹き飛ばした少年を、鬼の形相で睥睨する。

その二人の内の一入、少年の姿を見て、アリアムは我に返る。

「ナタス、さん……？」

「イニア、お爺様……？」

期せずして、アリアムとルフカロオは同時に声を出していた。

「アリアム!？」

「チ、熱くなりすぎたか……」

二人の声に答え、二つの影も期せず同時に声を出す。

「ナタスさん……」

やはりその声は、アリアムのよく知るものだった。彼の声は、この空っぽの心に鳴り響いて、空虚さが埋められたような気がした。

思わず、アリアムはその人のところへ駆け寄りたいた衝動に駆られた。

無力な自分とは全く違う、憧れるくらい力のある魔法使い。才能に溢れ、けれど決して努力は欠かさず、色んな知識を持っていて、

それを応用するだけの技術のある、ちよつと“いじわる”な、けどとても優しい魔法使い。

あの人なら、こんな状況でも何とかしてくれるかもしれない。いや、きつと力になってくれる。助けてくれる。そう思った。

それが希望的観測であることくらい、わかっている。わかっている。でも、それでも、すがりたかった。今の自分には、すぎるしかなかった。

アリアムは足に力を込める。

「ナタス、さん……ナタスさん！」

動かなかった。

「アリアム！」

それを察してか、ナタスは位置を視認すると受身をとってイニアの正対、アリアムへと向きを変えた。

牽制の意を兼ねて剣を大きく振りかぶる。その勢いも利用してアリアムの下に一足、返す刃でルフカロオへと突き掛かる。

「く、こノ！」

それに対し、ルフカロオも身体の向きを変えて反撃を試みる。

だが、その刹那、

「避けい！！！」

炎が、頭上から雨のように降り注いだ。

「ちよつと、本気！？」

ルフカロオは咄嗟に、ナタスとは全くの逆方向、イニアの方へと避ける。

「ちっ！」

ナタスは、アリアムを自らの背に隠し、庇いながら雨の領域を走り抜けようと試みる。

だが、いかにナタスでも、隙間なく降る炎雨を躲し切ることにはできない。肩に、背に、腕に、頬に、容赦なく炎が叩き付けられる。

やがて、そのうちの一つがナタスの足を焦がした。

「ぐっ！」

足を焼かれたナタスはバランスを崩し、アリアムを抱えたまま再び地面を転がった。

それでも炎は止まない。追い討ちのように彼の上に次々と降り注いでくる。

「う、ぐああ！」

「っ！！！」

身を焼かれていく傷みに苦悶くもんの表情を浮かべるナタスを、アリアムは見ていられなかった。ナタスの胸の中で、思わず目を逸らす。

自分は、何をしているのだろう。

ナタスの叫びを聞きながら、思った。

絶望するのは自分の勝手だ。彼も 今自分を助けてくれた人も、そう言うだろう。死ぬのも自分の勝手だ。死ねば、こんな苦しさから逃げられる。自分でもそう思った。

だけど何故、こうもあっさりと“死”を受け入れようとしてしまったのだろう。あんなにも 死という概念を嫌っていたというのに、左腕を見る。幼い頃に残された、火傷の跡。それを隠す刺青

“apology”あしげんまがこいの文字。それは戒めだったはず。二度と、あんなことが起こらないようにと。二度と、誰もがこんな思いをしなくて済むようにと。

そうして、あの日立てた誓い。あらゆる命を愛で、慈しみ、大切にすること。死に“抗う”こと。その術を見つけ出し、この世界の定め “死に別れる” という絶対の哀しみを、“緩和する”。

それが、自分、“アリアム”スクリッド”の望み。

世を騒がす“不老不死”とは違う。

悲しいことだが、人の“死”は世界が世界であるための仕組みだからあくまで、“死なない”のではなく、死の瞬間 生命の間を延ばす。たとえ死に逝く運命でも、たとえ短き命でも、一分一

秒でも永らえることができるなら、きつと一つでも多くの幸福と安らぎを得られるはずだから。

一つ一つが心残りのないように、最後のその瞬間が安らかであるように。

逝く者も、遺される者も。

そう、墓前に誓ったはずなのに。

今、自分は死のうとしていた。

ワタシノ　ココロツテ、何？　ソレハ、ドコニアルノ？

『あまり考えすぎないで。今は、私に変わりなさい。さあ、瞳を閉じて』

また、声が聞こえた。

「ちょっとお爺様、どういっつもりなのカシラ？　邪魔をしないで。

邪魔するなら、お爺様でも許さなイ……」

イニアのすぐ傍に降り立ったルフカロオが、声を尖らせた。

それにイニアは、逆に咎めるように答える。

「何をしている？　戯れは止せと言っておいたはずだ。ここまで来てしまったのは私の失策だが、貴様とて用件を済ませておらんではないか」

言って、ルフカロオの脇に転がるシルファを顎で指した。

「処理するのなら早くしろと言ったはず。いつまで遊んでいるつもりだ？」

「い、今やろうと思っていたところヨ……」

「ならば早くしろ。もう、本当に時間がない。いや、もう遅いか…

…」

イニアは視線を切つて、身を燻らせて横たわる少年、さらにその向こうを睨む。いつの間にか暗い森の中に、白い衣服と緑色の光がぼんやりと浮かび上がっていた。

「そこまでじゃ。大人しくせい」

イニアが鋭く睨みつける視線の先　そこには、ゼピュロスが立っていた。

「久しぶりだな、教団司祭“四蒼季穹”^{しそくきゆう}首席、ゼピュロスよ」

「ホ、“紅の王”と“紺碧の賢者”とは……随分な顔ぶれじゃのう。で、どうするつもりじゃ？　このまま暴れ続けるつもりなら、わしも黙つてはいられんが……大人しく引き下がるといふのなら、昔のよしみじゃ。見逃してやるう」

ゼピュロスの口調は普段通りだが、そこにははつきり、怒気と戦意が籠められていた。彼は緑色に光る本を静かに開く。

その動作に、イニアは一層表情を険しくし、そのまま視線だけをルフカロオに向けた。ルフカロオも不満を顔に浮かべつつも、頷いてみせる。

「五分だ。不老不死に加え、ヤツも加わるとなると、それ以上は稼げん。いいな？」

「あゝあ、もう少し遊びたかったの……」

言われたルフカロオはゆっくりと一歩、シルファの前へ。

シルファはそれを、光のない瞳でぼんやりと見上げていた。

ルフカロオは溜め息を吐きながら言う。

「なんだかもつたいたい気もするけど。まあ壊れちゃったし、しょうがない力」

シルファの左耳　ピアスに足を掛ける。

そして、全くの無造作に、その魔法石を

「それじゃ、バイバイ。“お人形さん”……」

シルファの生命を、踏み砕いた。

第三十一話

ぱりん

皿が割れたような音だった。

でも本当は、もっともっと大きなものが壊れた音。

誰かの心が壊れた音。

友達が、いなくなった音。

また、駄目だった。

せつかく、助けられたと思ったのに。

結局、駄目だった。

何より、一番最初に思うことが、これなのか。

『また、駄目だった』 この言葉はつまり、友人が死んでしまったことを、もう受け入れている証拠ではないか。

どうして、否定できないのか。

たとえば、どんなに駄々だだをこねたって、叶わないとしても。

どうして、認めてしまうのか。

こんなにも、受け入れ難いことであっても、あっさりと。

心が、無いからなのか。

ワタシノ　ココロツテ、何？　ソレハ、ドコニアルノ？

その問いかけには、頭の中の声が答えた。

『今は考えないで。瞳を閉じなさい。“なかつたこと”にはできなけれど、せめて憂うれいは晴らしてあげる』

憂うれイ？

『何もかもを受け入れるだけでは、辛いでしょう?』

ウン……

『だから、私が代わってあげる。今はまだ、貴女にはできないかもしれないけれど、私がいるから。貴女が“否定”^{わたし}の意志を外に示す、そのときまで』

本当二、代ワツテケレル?

『大丈夫よ。ほんのちよつとの間、入れ替わるだけだから。さあ、瞳を閉じなさい』

ワカッタ

『心配しなくていい。私は貴女だから。だから、今は休んでいなさい』

声に導かれ、アリアムはルビーの瞳を閉じた。

「終わったわヨ」

ルフカロオは、いかにも不満ですという顔で、イニアに告げた。

「そうか。では、帰るぞ」

ゼピュロスと睨み^{むに}合いを続けたまま、一步退く。

それを追おうとはせず、ゼピュロスは疑問だけを口にする。

「今日までのテロは、お前たちが?」

「否。ナタスには言ったが、テロ行為は末端の人間の仕業だ。すでに犯人は見つけ出し、厳罰に処している。また、二度とこのようなことがないようにすることも誓おう」

「ホ、期待はせずにおるわい。コロラーレは、そうそう簡単に^{しっけ}賤^しが^が行き届く組織だとは思えんからの」

「フ……それは、裏切らせてもらおうぞ」

イニアがさらに一步下がり、そして踵^{かかと}を返す。

ルフカロオも、振り返りながらこちらに目を向け、

「また一緒に遊びましょうね、お嬢さん。それまで、壊れちゃイヤ・ヨ？」

言って、法衣を翻す。

だが、

「待ちなさい。貴女は逃がさないわ……」

黒い穴　自らの魔法で、それを阻んだ。

「っ!？」

穴は桜色の粒子を放ちながら周囲の物を吸い込み、ルフカロオに迫る。躲そうと身を翻すが、周囲のものと共に穴に引っ張られる体は、満足に動かすことができなかった。

そして黒穴は最後に、まるで狙い澄ましたかのようにルフカロオの左耳を呑み込んだ。

「キヤアアアア!！」

“左耳があつた場所”を抑えながら、ルフカロオが叫んだ。

それを嘲るように、静かな抑揚のない声で語りかける。

「これで、ようやくわかり易くなったわ。私の友達を殺した人が」

「く、アンタ」

ルフカロオが、向き直る。

と、表情が変わった。大部分は怒りに駆られたままだったが、ごく一部に疑惑の線が見える。

案の定、あの問いが投げられた。

「……？　アンタ、誰？」

ルフカロオの疑問も当然である。なにしろ今、彼女の目の前には先程までの少女　と同じ姿の別人としか言いようのない人物が立っているのだから。

容姿、格好は全く同じ。ただ、瞳の色がくすんだガーネットに変わっていて、纏う雰囲気も全く異なっていた。

身に付けている黒の着衣が、その静謐さと相まって異様なまでに

不気味に見える。

そう

今、ルフカロオが目にしてしている人物こそ、アリウムⅡスクリッドの中に在る“否定”の感情を司る、“もう一人のアリウム”。

彼女は、全てを受け入れる“許容”の裏人格^{アンチテーゼ}。

すなわち、“拒絶を体現する者”なのである。

「さあ？」

もう一人のアリウムは、口元だけを曲げた作り笑いを浮かべながら小首を傾げて、冷たい瞳を向けた。

問いかけに対し、答えを与えることはできない。“教える”ことは、自らの存在意義に含まれていないから。

自分は“拒絶”の存在。故に問いを“受け入れる”ことはできない。それが自分だ。

本当は教えられないまでも言いようはあるのだが、そんなことをしてやるつもりはなかった。

魔導師とは、知的探究心の塊のような存在。そういった意味では、使い方こそ違えども科学の研究者と同じ。疑問があれば、それを突き詰め解明することは、自らの力量を示す材料であり、至福の瞬間でもある。

だから必要最低限、いや、それ以下の言葉だけで返し、その神経を逆撫でするように挑発する。簡単には教えない、知りたければ自分で何とかしてみろ、と。

「いい度胸じゃない？ それに左耳なんて、なんて皮肉カシラね！」

「本当、皮肉なものね。でもいいじゃない。右が残っているんだから」

実際、探究心が強いということは、この“消滅”の魔法を解明されてしまう恐れがあるということでもある。この魔法とて、理論に

基づいて展開されているもの。そこに辿り着かれれば、打ち破られる可能性もないとは言えない。あくまでも、万が一の話ではあるが。だが可能性がある以上、それは排除すべきである。

だから、時間はかけない。一瞬で終わらせる。

「実を言うと、その顔を消してやるうと思っていたのよ」
挑発を繰り返す。

逆上しろ。冷静さを失った者ほど制しやさいものはないのだから。
「貴女みたいな下衆げすが、私の友達と同じ顔をしているなんて、耐えられないもの……」

嘲あざわらりをたつぷりと含ませた口調と、感情を“表せない”作り物の表情が効果的だったらしい。見る間にルフカロオに額に青筋が立っていく。

事実、その視線と言葉に、ルフカロオの怒りは頂点に達していた。震える声が、オクターブ下がる。

「ハ、言ってくれるわネ……」
乗ってきた。

アリアムも、姿勢を全く変えずに反撃 “消滅”の魔法を用意する。

これでいい。ルフカロオの繰り出す全てを消し去って、あいつにも“アリアム”の味わった無力さを思い知らせてやる。

その上で、自分を呼び覚ましたことを、“アリアム”を悲しませたこと悔いる。

そして 消える。

「殺ス！」

ルフカロオが再び腕を振り上げた。

様子を見ていたゼピュロスが、それに反応する。

アリアムは動かさず、しかし小さな黒い穴を正面に発生させる。

逆巻く蒼い水飛沫。

輝きを増す緑の本。

光をも呑む黒い穴。

それらが、同時に次の動きを見せようとしたまさにそのとき、白銀の剣が間に入り、紅蓮の炎が、全てを焼き払った。

「二人ともやめろ。大人しく退くと言っているのだから、放っておけばいいだろう」

剣を掲げるナタスはボロボロになりながらも、しかしいつの間にか傷は消えていた。衣服だけがそれを示すようにあちらこちらに穴を開け、肌を露出させている。

ナタスの姿を見たゼピュロスは、溜め息を吐きつつ本を閉じる。
「ナタス……」

アリアムもどこか寂しそうに呟くと、瞳を伏せて黒穴を消した。
「やっぱり、そうなんだ。」

自分の胸の中で、自分の胸に、そう呟いた。

「お爺様、邪魔しないで言ったでしょウ！？ 邪魔をするなら、お爺様でも許さなイと！！」

「止さんか、馬鹿者が！ 戯れが過ぎるから、そういうことになるのだ。いい加減、自らを律することを覚えい！」

「く……」

ルフカロオもイニアに制され水を鎮めたが、息は荒げたままだった。大きく息を一呑みし、ルフカロオは少女への言葉に殺意を乗せる。

「イイ？ アンタは、私が殺す。必ず私が、斬って、叩いて、裂いて千切って潰して、粉々のバラバラにしてあげル！！」

「……」

アリアムは俯いたままの沈黙で答えた。

「っ！！ 絶対に、殺してやる……覚えておきなさい！！」

霧が集まる。

絶叫を残響に、イニアとルフカロオの姿が霧の中に霞んで消えた。そうして、“紅の王”と“紺碧の賢者”は嘘のように、あまりに

もあつさりと去っていった。

ぽつり、ぽつり 雨が降り始めた。

幕の下りるように、帳とばしが広がっていく。

空気は冷たく、息が色付いていた。

ここは、小高い丘陵。平地よりも、季節は一足早い。

深夜には、雪になるかもしれない。

そうすれば、全てが覆われるのだろう。

真っ白に染め上げられるのだろう。

まるで、何事もなかったかのように、何事も。

ざあ、ざあ、ざあ。

全身が濡れる。

足も、腕も、胸も、髪も、頬も。

とても、冷たい。

でも、もう少し濡れていたい。

だって、

一箇所だけ、温かいところがあったから。

それが、本当に温かいものだど、わかるから。

だから、もう少しだけ傍にいらさせてください。

友達のわがままだと思って、許してください。

誰も、何も言わない。

ただ、それぞれの場所に立ち尽くしている。

中央に横たわる、一人の女性の姿を、見つめながら。

その心の行く先を、思いながら。

ざあ、ざあ、ざあ。

雨だけが大声で泣いていた。

第三十二話（前書き）

よつやくの第二章最終話です。

第三十二話

「……」

朝。

ゼピュロス邸の自室で、アリウムは支度を整えていた。

今回の事件が一応の決着を見てから五日。ころころと気まぐれに変わる天候の日々だったが、今日はよく晴れていた。

姿見すがたみに自分を映す。いつもと同じながら、洗い立ての黒のワンピースと帽子。本当は正式な物を用意しても良かったのだが、これでも十分だろう、下手に服を変えたら彼女に見分けてもらえなくなるぞ、とナタスにからかわれたので、普段通りの格好で行くことに決めた。こんなときくらい、もう少し気を遣ってくれてもいいのではないかとも思ったが、これはこれで気を遣われているみたいなので、やっぱり申し訳ないなと思う。

汚れたりしている部分がないかを確認すると、次は寝癖のチエツク。櫛くしを手にとって視線を上げる。

「！」

そこで、少しだけ息を呑んでしまった。

紅い、“ルビーの色をした”自分の瞳。それはまるで、彼女の身に付けていたピアスのようだった。

自己嫌悪は多々あるが、こんなのは初めてだ。否が応でも、あのことが浮かんでくる。

「あ、でも……」

これなら絶対に忘れることはないな、とアリウムは思った。

自分の身体の中に、想い出となるものがあるのだ。彼女が自分の中にある、という言い方でもいいかもしれない。

少しの間、自分とにらめっこをしながら、その向こうの違う人を

見る。

この街に来たとき、迷子になった自分を導いてくれた人。その直後に友達になった。

夜の河原で共に騒動に遭い、それが原因で怒られてしまった
本当は、騒動の原因はその人だったけれど。

紅玉の台座と呼ばれる丘陵の森で、期せずして闘った。死んだ者を操る、という許し難い行為を止めるため。

けれど、その人もまた、操られる側の人間だった。それも彼女の知らないうちに、彼女の意に反するところで。

そして、まるで壊れた玩具を捨てるように、その命を一方的に絶たれてしまった。

それに対し、自分は。

「何も、できなかつた……」

どころか、死ぬことまでも考えてしまった。

手にした櫛を握り締め、もう一度自分の瞳を覗き込む。少しだけ潤んでいた。

そう、これは想い出だ。愚かな裏切りを考えた自分への。

ずっと、これを持っていくのだ。決して消えないものだから、簡単に捨てられないものだから、ちょうどいい。そういうものだからこそ、自分として残しておける。

「すーっ……はあ」

大きく一つ、深呼吸。喉の奥の変な感じを飲み込んで、滲んだ視界を元に戻した。

「よし！」

と、意味もなく声を出す。

そこにドアを叩く音がした。

「はい」

「アリアム、俺だ。入るぞ」

ナタスだった。言うなり、扉が開けられる。

「おはよう、アリアム」

「おっつはようツス、アリアム！」

「おはようございますですわ、アリアムさん」

ナタスも今日はいつもと少し違う格好をしていた。というのも、彼の普段の格好は今日の場には相応しくないからなのだろう。ゼピュロスから借りた、教団のマークが刺繡ししゅうされた装飾の少ない黒の法衣を着ていた。これはこれで、なかなか似合っている。

その両肩には、彼の使い魔ファミリアのセレスとディアナ。

皆、戦闘の後は意識を失っていて大変だったが、もう傷はいいらしい。

彼らは三者三様の挨拶をして、許可も得ずに室内に入ってくる。

「どうぞ、って言う前に入ってこないでくださいよ。着替えてるところだったら、どうするつもりなんですか？」

「別にどうもしないが？」

「……」

なんとという科白せしふ。心外。

そりゃあ彼からしてみれば、自分はまだ子供みたいなものかもしれないし、もの知らずなバカだし、発育だって、いいとは言えないけれど、でもそれは、まだ途上にあるということなのであって、だから少しくらい、どこか思うところがあっても損はないだろうし、別にいいんじゃないだろうか。

いや、本当に何かあっても、それはそれで、嫌、というか、困ってしまふ、というか。

「着替えは済ませてますけど、まだ身だしなみを整えているところなんですからね！」

知らないうちに何度か表情を変えた後、誤魔化しのように膨れっ面になって釘を刺す。実際、身だしなみを整えているところを見られるのだって恥ずかしい。

だが、身から出た錆さびであったことを、アリアムは黒猫に思い知らされた。

「いえ、『よし！』という声が聞こえたので、準備ができたのかと

思ったのですけれど？」

「うあ……」

自分へのおまじないが聞こえてしまっていたらしい。思わず赤面してしまう。

「そうか。まだ身だしなみを整えているところなのか。それは良かった」

「へ？ 良かった、ってどういう意味ですか？」

準備が済んだと思ったから、入ってきたのではないのか。ナタスが妙なことを言うので、問い返す。

すると、彼は目を逸らし、

「いや、一瞬、それで行くのかと、思ったのでな」
よくわからない。

代わりに白猫の方を見て答えを求めると、

「頭。寝癖」

とても簡潔かつ、わかりやすく答えてくれた。

慌てて鏡を見る。

「あ、あ……み、」

そこには雑草生い茂る、荒れ果てた空き地のような光景が広がっていた。

「見ないでくださいー！！」

羞恥はにかみの絶叫も透明に聞こえる、澄んだ空気と高い空。秋晴れの一日。

今日は、シルファ＝ムルルームの葬儀が執り行われる。

集団墓地。

その一角に、六つの棺が並べられていた。

事件の後、調査に来たゼピュロスの一団によって発見されたものがあつた。

それは、大戦の残響とでも言うべき避難用の壕^{ほり}として利用されていた洞穴で見つかった、五つの子供の骨体。どれも皆、首に口ザリ才を下げていた。

調べてみたところ、街外れの教会で火事の犠牲になつた子供たちのものだということがわかつた。

彼らの葬儀は有志によつて行われていたのだが、どうやらその“有志”というのが、近頃のテロと関わりのある者だつたらしく、テロリストがそれを何かに利用するために持ち去つたのではないか、というのが公式の発表となつた。

無論、シルファの遺体も、持ち去られたものとして扱われている。公式には。

真相を知るものは、この場においてわずか。

だが、不満はない。少し見方が違うだけ。本質的に間違つてはいないのだ。シルファは間違いなく、テロと関わりのある者によつて利用されていたのだから。

棺に改めて、土が掛けられていく。

掛けているのは、教団の人間。

今日の葬儀の主催者は、教団。

テロの犠牲者としてシルファ「ムルルームと五人の子供たちは、教団が責任を持つて埋葬、鎮魂することが決められたのである。

埋葬を終え、黙祷を捧げると、一人ずつ、花を手向^{たむ}けていく。

一人、二人、三人　次は、アリアムの番だ。

アリアムは一步、シルファの墓前に近寄ると、大きな白百合^{じゆめい}をそつと添えた。

そして、静かな声で語りかける。

「あのときの質問を、もう一度します」

言い聞かせるような優しい声で、それでいて、悲しみに震える声で。

一つだけ、どうしても聞きたかったことを。

「貴女は今、幸せですか？ 子供たちと、一緒にいられて……」
ゆっくりと風が吹いた。ざわざわと木の葉が騒ぎ、揺らめく。

不意に、頭に手が。

ナタスだった。

彼は何も言わず、ただ頷く。

アリアムも無言で立ち上がり、その場を後にした。

息が、苦しい。

吸い込んでばかりで、ちっとも吐き出せない。

鼻は、ぐしゅぐしゅ。

ナタスが乗せてくれた手が、温かい。帽子を深くかぶせてくれたのが、ありがたい。

足並みを揃えてゆっくり、それでも少しだけ、足早に。

金木犀きんもくせいのざわめく木陰に連れてきてくれた。

ここなら、いいだろう。

ごめんなさい。

いいさ。

それだけを交わし、彼は距離を置く。

溢れる。零れる。止まらない。

それは、とても痛くて、しょっぱかった。

金木犀の香りが、甘かった。

この傷みを、味を、香りを、

絶対に、忘れない、

アリアムはそう、心に深く思った。

そうすることが、自分の心であるように。
せめてそれは、自分のものであるように。

今日も空は蒼くて、けれど夕暮れには赤い光を放つのだろう。
明日も、明後日も、ずっと。
自分の中の、友達のように。

これは、夢なのだろうか。

何も見えず、何も聞こえず、何も感じられなくなっていたはずの
身体。

それが、確かに見ている、聞いている、感じている。
きっと、夢なのだろう。

でも、それでも構わない。

自分は、この場所に辿り着くことを目指したのだから。

柔らかな風吹き抜ける、秋の教会。

夕日に染まる教会に、あの子たちが待っていた。

それに、急ぎ足で駆け寄っていく。

でも決して、走ってはいけない。

自分は、“聖職者”。

態度と心に、余裕を持っていなければ。

皆で作った、あの大きなゆきだるまにも、笑われている。
心が逸る。

気を引き締める。

顔がにやけてしまう。
でも、あの頃の凜りんとした自分でいなければ。

あの春の草原には、ランチバスケットとハーブティーが。
胸が熱い。

目尻が熱い。

膝が、身体が震えてしょうがない。

しゃんとしていないと、いけないのに。

いつか庭に作ったプールが、太陽の光を弾いて、眩しかった。
やっぱりだめだ。

顔も、頬も、涙腺も、緩んでしまう。

でも、いいか。

泣いてしまおう。そして、その後で、いっぱい笑おう。

そうして、聖女はようやく辿り着いた。

この、大切な場所に。

自分の在るべき、場所に。

……皆、ただいま！

第三十二話（後書き）

『Moon at Tomb』第二章、いかがだったでしょうか？第二章第一話の初投稿が 06/12/08 であることを考えると、実に一年近くやってきたことに……遅筆もいいトコですね、自分は……

さて、続く第三章ですが、申し訳ありませんが連載をしばらく休止させていただきたいと考えています。

リアルが忙しい、ということと、第二章での失敗（詳しくは省略しますが）を省みて、第三章は骨組みが完成してからそれに肉付けして……という風に進めていきたい、つまりは第三章がある程度完成してから投稿、ということにしたいと考えたからです。

見に来て下さっている方々、申し訳ありませんが、ご了承をお願い致します。

また、お目にかかれるよう、そのときはより良いものを届けられるよう、努力いたします。

長文、乱文、失礼致しました。また、ここまで読んで下さって、真にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840a/>

Moon at Tomb【第三章鋭意製作中】

2010年10月17日02時18分発行